

森安通信

これは主に世界史や東洋学に関わる情報を中心に、森安孝夫の個人的な趣味や近況報告も含めて、不定期に発信しているものです。送り先は私がメアドを把握している次のようなグループです。どのグループに一斉送信するかは、その時々の内容によって変えています。

- 1) 阪大 21 世紀 COE 及びそれ以後の高大連携プログラムに参加された全国高校社会科教員および教育出版関係者
- 2) 中央アジア学フォーラム参加者
- 3) 阪大東洋史教員・OB・現役
- 4) 東大バドミントン部 OB の一部（同期とそれに近い先輩・後輩）
- 5) 東大駒場 42 L III 6D クラスメートの一部
- 6) 福井県立藤島高校同期生の一部
- 7) その他の個人的友人および報道関係者

なお、当初はこのように内輪だけの配信だったのですが、いつのまにか私の知らないところでインターネットに出るようになってしまいましたので、それからは阪大東洋史のホームページ（名誉教授の欄）を活用して、自主的に公開しております。過去の分は、そちらを御覧ください。但し担当がいなくなるため、公開は 2020 年 8 月分までで終了します。

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/toyosi/members/moriyasu/index-j.html>

=====

本ファイルは、御要望に応じてこれまでの森安通信を一括したものですが、新しいものが上に来ていますから、日付順に読む場合は下からお読み下さい。

◆=====◆

2020年 8 月 16 日配信分

森安通信 読者各位

前回のメールを出してから3ヶ月近くなりましたが、新型コロナウイルスの災禍は、とどまるどころを知りません。皆様、無事にお過ごしでしょうか。私の方は、大阪大学の体育館も閉鎖になって半年近くなり、バドミントンは全くやれず、仕方なく時々ジョギングを心がけてきましたが、この酷暑ではもうそれさえできません。馴染みのカラオケ倶楽部に行くこともままならず、自宅で一人になる時をみはからって、YouTubeで大きな声を出して歌っています。当然ながら、昭和の歌謡曲が中心です。

新型コロナウイルスは、過去の黒死病（ペスト）やハンセン病、そしてつい先ごろのSARSやエボラ出血熱よりもやっかいです。歴史的に見れば、戦争と疫病が時々の人口爆発を抑えてきたという恐るべき事実があります。疫病は人知では避けようがなく、東京オリンピックで桃田選手がバドミントン男子シングルスで金メダルをとり、女子シングルの山口茜ちゃんもメダルをとってくれ、ことを夢見ていた私も、来夏の開催を早くも諦め気味です。奇跡が起こってくれば、よいのですが・・・。

一方、戦争は人間が起こすものであり、人知を集めれば、避けることができるはず。国家体制の違いにかかわらず、二一世紀の地球規模の課題は環境問題と人口問題であり、戦争こそは最大の環境破壊です。現在の中東情勢は心が痛みますが、世界規模で眺めれば、国際紛争から戦争が勃発する恐れのある場所は至る所に見られます。平和憲法を持つ日本の政治家が、国際舞台で活躍してくれることが理想ですが、現状でそんなことを望むのは無理です。せめて日本が再び戦争の災禍をこうむることのないように、知恵を出し合ってください。知恵は何もないところからは生まれず、教養という蓄えがあってはじめて生み出せるものです。その教養の中核が歴史的教養です。歴史という教養を持たない政治家など全く不要です。

私は歴史学者ですが、歴史小説というフィクションでも、質の高いものはおおいに評価しています。井上靖はもちろん、浅田次郎とか辻原登とか杉本苑子などもかなり読みました。広島・長崎への原爆投下の日から昨日の終戦（敗戦）記念日まで、新聞・テレビで様々な報道がありましたが、日清・日露戦争から五一五事件、二二六事件を経て太平洋戦争に至るまでの戦争責任について、浅田次郎の『天切り松闇がたり』全5巻は、鼠小僧ならぬ昭和の怪盗物語でありながら、ずいぶん考えさせられました。

さて、最近のテレビ番組では、面白いものが多いですね。コロナ災禍で、良質な番組の再放送もしくは組み換え放送が増えたことだけはありがたいです。NHKテレビの1980年の古い方の「シルクロード」シリーズはもちろんですが、「空旅中国」というのも、いつも感心させられます。また民放では、改造したトラックに乗り、トルコから中国までを100日かけて踏破する「激走！シルクロード」とか、フィクションですが16世紀のオスマン帝国がヨーロッパ世界を凌駕した時代の対外発展や宮廷での愛憎劇を描いた「オスマン帝国外伝～愛と欲望のハレム」や、中国史ではもっとも分かりにくい南北朝時代のうち西魏・北周から隋・唐へ連なる拓跋国家の権力者の推移を描いた「独孤伽羅」もややこしい人間関係を覚えさせてくれました。私のメモでは、放送局は書き忘れていますが、明日の17日に夕方6時から「もう一つのシルクロード」があり、明後日の18日は「激走！シルクロード」でキルギスを取り上げるはずです。

以下はかなり専門的になりますが、『東方学』という学術誌の母体である東方学会の主宰で、昨年秋に私が企画・司会を務め、大阪大学で行なわれた座談会「先学を語る 山田信夫先生」の記録が、2週間程前に出たばかりの『東方学』最新号に掲載されました。山田信夫先生は、大阪大学・東洋史・アジア諸民族史講座での私の先任教授です。物凄くスマートな先生で、特に女性には抜群の人気がありました。座談会は、山田先生を主題としつつ（写真もあり）、大阪大学の東洋史の歴史、及び日本の東洋学や私の専門のウイグル学の背景などが分かる内容です。そこで私の果たした役割も、幾分かは分かるようになっていますが、私は聞き役に徹しました。東方学会の会員以外で興味をお持ちいただけそうな方には連絡して、適宜抜刷を郵送致しましたが、まだ数部の余裕があります。

不具

2020年8月16日

森安孝夫

～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～

2020年5月26日配信分

森安通信 読者各位

世界中が新型コロナウイルス騒動で振り回されていますが、14世紀のペスト（黒死病）による欧州の人口激減や、スペイン人が新大陸に持ち込んだ病原菌

により原住民があつという間に絶滅近くなった様子が、手に取るように実感されていることと思います。ジャレド・ダイヤモンド『銃・病原菌・鉄——一万三〇〇〇年にわたる人類史の謎』（上下2冊，倉骨彰訳，草思社，2000年）がまた見直されるでしょう。ただし本書には，着眼点だけは凄いが，文章に繰り返しが多い水増し本だという批判もあります。一方，ウィリアム・H・マクニール『疫病と世界史』（上下2冊，佐々木昭夫訳，中公文庫，2007年）の方は，なんだか哲学書のように，私には余り面白くなく，途中で読むのを放棄しました。

私はこのコロナ禍で，もう三ヶ月以上カラオケ倶楽部に行けてないだけでなく，三月からは阪大の体育館も封鎖でバドミントンもできなくなりました。ただし直近の一ヶ月間には二度もギックリ腰をやってしまいましたから，どうせバドミントンはできなかったのです。椅子に坐ってパソコンにむかうのさえ辛く，昼間はもっぱら莫菴を敷いて寝っ転がっていました。普段なら小説を読むところですが，ギックリ腰発症前に近所の図書館も閉鎖されていたからそれもできず，仕方なく学術論文のコピーや文庫本など，重量の軽いものを選んで読んでいました。また『東方学』の企画「先学を語る 山田信夫先生」の校正ゲラもあがってききましたので，それも暇にまかせて繰り返し見直しました。

そういう状態の中で読んだ最新刊を一つ紹介します。それは，東京大学教養学部歴史学部会（編）『歴史学の思考法（東大連続講義）』（岩波書店，2020年4月刊，2000円）です。これは12人の東大教養学部の教授・准教授が，それぞれ1章を担当し，日東西の専門を離れ，歴史学一般を学部一・二年生向けに解説するというスタイルです。著者一同の「はじめに」で明言されている通り，本書はあくまで歴史学のテキストであり，歴史のテキストではありません。それゆえ，はじめて知ってわくわくするような歴史記述に出会えるわけではなく，「事実は小説より奇なり」の面白さも味わえません。目指すところは，学部生が社会人になった後，きっと生きてくるに違いない，あるいはきっと活かして欲しい「歴史学的思考法」を身につけてもらうことです。

実は私が丸一年をかけて執筆してきた講談社選書メチエ用の『シルクロード世界史』の原稿も，ギックリ腰になる直前の4月下旬に脱稿しました。編集担当者と何度もやりとりして書き直してきた後，最後に査読された編集長から，「たいへん内容も濃く、メッセージも明確で、主張にも同意できるものでした。」という高評価をいただきました。ただしそこに，序章「世界史を学ぶ理由」は

当初の原稿よりは相当に縮小したはずなのに、まだかなり暑苦しすぎるので、もっと刈り込んではいかがかという注文も付いていました。そこで、またその刈り込み作業をしました。

それゆえ序章全体は当初の原稿からは随分短くなってしまったのですが、その私が熱く論じたかった序章の内容を、なんと一冊の本にしてしまったのが、ここに紹介している『歴史学の思考法』なのです。特にその第 I 部「過去から／過去を思考する」にある 3 章分が拙著の序章に対応します。その序章でさえ編集長にまだ「暑かしい」と言わしめたのに、「歴史学とはなんぞや」について全 12 章に亘って論じる本書が、本当に一般の人に売れるのかしらとやや心配になります。帯には「歴史学は社会を生きぬく最強のスキルになる！」と書いてあって、私は正直「やられた！」と思いました。私の序章で強調したのも、そういうことですから。

東大の先生だからといって皆が皆、19 世紀に西欧で発達した学問の潮流、いわば西洋中心主義から完全に抜け出しているとは限りませんが、12 章のうち、私が特に印象に残ったのは、第 2 章「過去の痕跡をどうとらえるのか——歴史学と史料」（渡辺美季執筆）、および第 4 章「人びとの「まとまり」をとらえなおす——歴史の中の国家と地域」（杉山清彦執筆）でした。

高校の教員や大学で教養課程を担当される方々には是非お薦めです。なお、拙著『シルクロード世界史』の方は、もう初校ゲラが出ましたので、たぶん 9 月には出版されるようです。

この一ヶ月間でとても嬉しかったのは、帝京大学の中山誠二先生から、アクベシム遺跡（唐代のスィアブ碎葉城）の発掘品の中に西瓜（スイカ）の種が見つかったという情報をいただいたことです。しかも、同一層位から得られた炭化物の放射性炭素年代では、7～10 世紀の値が確認されるそうです。ラウファーが『シノ・イラニカ』で明らかにした通り、南アフリカ原産のスイカは西アジアから中央アジア経由で遼（契丹）に入り、そこから中国全土に伝わりました。遼（契丹）へは西ウイグル王国から伝来していることが分かっているのですが、では東部天山地方の西ウイグル王国にはどこから入ってきたか。それはきっと西部天山地方からに違いないと予想していたのですが、それが当たっていたわけです。アクベシム遺跡は西部天山北麓のチュー河盆地にあり、今はキ

ルギス共和国の領域ですが、8～10世紀はカルルク国ないしカラハン朝の領域でした。

西瓜は夏の風物詩ですが、中国から日本に入ってきたのは江戸時代のようにです。私の実家では砂地の畑で西瓜を生産・出荷していましたから、子供の頃によく畑に出て手伝いをしました。夏の砂地の畑は、昼には沙漠並みの高温になりますから、収穫は早朝です。

私が阪大に赴任した三十数年前から、大阪は亜熱帯だと感じていましたが、今年は北海道以外の日本中が亜熱帯になるという長期予報が出ています。古稀を超えた同級生はもちろん、皆さん、くれぐれもお身体にお気を付け下さい。

不具

2020年5月26日

森安孝夫

～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～

2020年4月3日配信分

森安通信 読者各位

普段ならどの学校も新学期で新しい人を迎え、また世間は桜の花見でウキウキする時期だというのに、今年はなんとも重苦しい空気が日本中を覆っていますね。皆様いかがお過ごしでしょうか。本通信の読者の半数以上を占める大学・高校の先生方は、異常な御苦勞をされていることと拝察し、心よりお見舞い申し上げます。つい先日までテレビで見ていた志村けんが、新型コロナウイルスによりあっという間に逝去されたのは、本当に大きな衝撃でした。その衝撃度は、もしかしたらオリンピックが一年延びたこと以上だったのではないのでしょうか。

私個人としては、3月中には関係学会が4つ中止となっただけでなく、昨日から予定していた淡路島の古代遺跡訪問をとりやめました。1月から始まった大阪中之島にあるフェスティバル・タワーでの朝日カルチャーセンターの講義は、途中の延期を挟みながら、なんとか6回分を無事にやり終えましたが、帰路に寄るのを楽しみにしていたカラオケ倶楽部には2月以降一度も行けなかっただけでなく、もう一つの趣味のバドミントンも阪大の体育館が閉鎖されていて、もう一ヶ月以上やれていません。

時間が有り余っているなら、こういうときこそ勉強すればいいと思われるかも知れませんが、そうはいきません。遊ぶ楽しみがないと、勉強にも集中できないのです。私が40年以上研究を続け、1年に1本は論文を発表するよという師匠たちの言葉を現役時代はほぼ忠実に守ってこられたのは、ひとえにバドミントンがあったからです。カラオケは還暦以後に覚えた趣味です。今は仕方ないので、大嫌いなジョギングを週一回のペースでやっています。これをやっておかないと、バドミントンを再開した時、若い人について行けなくなるからです。

さて、この3月末をもって、吉田豊・京都大学教授（言語学）と荒川正晴・大阪大学教授（東洋史）が退職されました。お二人は、私より6～7歳年下ですが、史料読解や中国・モンゴルでの現地調査や欧州各地の博物館・研究機関での中央アジア出土文書調査などで常に協力してきた研究仲間です。今後は時々、阪大に集まって、ささやかな勉強会をしたいと思っています。吉田教授は、これからは山梨県石和にある帝京大学文化財研究所の特任教授となられ、東京にある帝京大学にも出講されますので、これまで御縁の薄かった関東方面の方々は積極的にお声をかけられたら宜しいかと思えます。荒川教授は奥方の関係で島根県松江に引っ越されますが、時々は大阪大学にいらっしゃいます。

つい数日前に届いた訃報ですが、敦煌学に長年貢献されてきた土肥義和先生がお亡くなりになりました。私が東京にいた頃は、東洋文庫でよくお姿をお見かけし、東京を離れてからは何度か敦煌文書のことで情報交換したことがありました。一度だけですがお酒を御一緒したことがあり、あまりのお酒の強さに驚いたことがありました。心から御冥福をお祈り致します。

最後に新刊書を3点紹介します。まずは右島和夫（監修）、青柳泰介ほか（編）『馬の考古学』（東京、雄山閣、2019年11月、7600円）です。いささか高額ですが、じゅうぶん価値のある本です。2017年11月5日の森安通信で、高崎市の群馬県立歴史博物館で開催された「海を渡って来た馬文化」展を見てきた成果として、4世紀末～5世紀に大陸から朝鮮半島を通して日本列島に入って来た馬や騎馬文化が、20世紀には出土した馬具によってしか研究できなかったのに、21世紀になって馬の遺体まるごとや歯や骨格がどんどん発掘されるようになったことを報告しました。そしてそのカタログが非常に優れていて、5世紀前半に日本中に馬が広がり、5世紀後半に馬の生産が盛んとなった様子が伺えることなどを紹介しました。この度の『馬の考古学』は、「日本のポンペイ」と言

われる群馬県榛名山東麓の火山灰の下に埋もれていた馬に関わる諸遺跡を発掘した成果だけでなく、東アジアの馬文化から畿内の馬文化、さらに東国の馬文化にまで視野を拡大して専門家を網羅し、先のカatalogの内容を一層深化させる多数の論文によって構成されているのです。

次に紹介するのは、岩波新書の「シリーズ中国の歴史」全5巻からの2冊です。丸橋充拓『江南の発展 南宋まで』（岩波新書、新赤版1805、シリーズ中国の歴史2、東京、岩波書店、2020年1月、820円）。古松崇志『草原の制覇 大モンゴルまで』（岩波新書、新赤版1806、シリーズ中国の歴史3、東京、岩波書店、2020年3月、840円）。

ここ30年ほどの間に「中央ユーラシア史」と「海域史」と呼ばれる新しい分野の歴史研究が進展したことは、歴史学の研究・教育関係者ならよく御存知のことと思います。そして、これらの分野の専門家により中華主義的中国史を書き換える試みがなされてきました。今度の「シリーズ中国の歴史」はそうした学界動向に呼応して、中国史の専門家が中国史と中央ユーラシア史及び海域史を合体させようと試みたものだそうです。

古松崇志・京大准教授の担当した『草原の制覇』は、具体的には北魏からモンゴル帝国・元朝までを扱っていて、そこに「ユーラシア東方史」という枠組みを設定しているのは、かつて岡山大学で担当した概説の講義を下敷きにしてからです。私が中央ユーラシアから中国史を見ているのとは逆に、中国史の立場から中央ユーラシア東部の草原地帯に雄飛した騎馬遊牧民の動向を積極的に組み込んだものと言えるでしょう。私の立場からすれば、真にありがたい概説書の出現です。ただどんなに優れた本でも、誤りは避けられないもので、本書にも一点だけ見つけました。それは57頁で、安史の乱鎮圧において唐朝を助けた東ウイグル帝国の可汗は2代目の磨延啜と3代目の牟羽の二人であるのに、それを磨延啜一人としていました。

一方、丸橋充拓・島根大教授の『江南の発展』は、私にはとても論評する資格はありませんが、中国史の本でこれほど読みやすく感じたものではなく、中国史を北方の中原からではなく南方の江南から見直しているのが、新鮮に感じました。やはり島根大学での長年の講義の経験を踏まえているから読みやすいのであり、新しい情報もたくさん盛り込まれており、とても勉強になりました。また南宋の経済成長について、「都市化の進み具合からいっても、同時代の欧州をはるかに凌駕していた。そのことは、一三世紀末に杭州に滞在したとされ

るマルコ・ポーロが、この都市の繁栄に寄せた驚嘆からも明白である。」(141～142頁)と書かれているのには、我が意を得たりの思いでした。ただ一点だけ、南海ルートでやってくるイスラム教徒商人の動向を早くも7世紀から重視している点には注意すべきで、私の見解ではそれは9世紀からです。7世紀の波斯商人なら、それはまだゾロアスター教徒でしょう。唐代の三夷教に回教は含まれていません。

とはいえ以上の2冊は、独創性があるだけでなく、高校・大学での歴史教育のあり方とか、今後の我が国の東洋史学の行く末まで目配りされている点、同じようなことを考え、かつて大阪大学で桃木至朗教授や秋田茂教授らと共に高大連携を推進してきた私の立場から見ましても、心強い限りです。中国史は奥が深く、門外漢はどの本を選んで読んだらよいか迷うと思いますが、以上の2冊は推奨に値するものです。

不具

2020年4月3日

森安孝夫

～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～

2020年2月9日配信分

森安通信 読者各位

2020年1月10日(金)にNHK BS1で放映された天安門事件を30年後の今になって検証した番組は、本当に見応えがありました。この頃は国内では何かと批判のあるNHKですが、この番組は世界中に散らばっている当時の関係者にインタビューし、これまでまったく知られていなかった資料も掘り出しています。学生の民主化運動に理解を示していた趙紫陽総書記が、最高権力者の鄧小平とその下に就く李鵬によって失脚させられた経緯や、それまで人民には決して銃を向けなかった人民解放軍が、初めて人民に発砲し、戦車で学生たちをひき殺していった様子もうかがえ、穏やかな口調ながら権力者というものの恐ろしさを、浮かび上がらせてくれました。きっと再放送があるでしょうから、その時は是非御覧下さい。

次いで1月13日に放映されたNHKスペシャル「アイアンロード～知られざる古代文明の興亡」の方は、シルクロードの「草原の道」の重要性を再認識しながら、その厳しい自然環境と景観を知ってもらうにはとてもいい番組でした。も

もちろんその重要性を際立たせるために鉄に注目したわけで、鉄の専門家として世界で活躍している愛媛大学の村上恭通教授と笹田朋孝准教授、そして長年トルコに定着してヒッタイトやそれ以前の鉄を発掘した大村幸弘・中近東文化センター研究員の活動の一端が紹介されたのも有意義でした。ただ、些か残念だったのは、恐らく番組ディレクターの独断か勉強不足により、シルクロード以外にアイアンロードなるものが新発見されたかのような誤解を視聴者に与えたことです。画面に映し出された地図上のシルクロードは、最初に西欧の研究者が「シルクロード」と言い出したときの古い概念である「沙漠オアシスの道」だけを指していました。確かにスウェーデンのヘディン、イギリスのスタイン、ドイツのルコック、フランスのペリオ、日本の大谷探検隊などが遺跡や古代文書を掘り出したのはこの地帯だったのですが、主に戦後になって日本の東洋史学がおおいに発展した結果、北方の「草原の道」と南方の「海の道」も合わせてシルクロードと呼ぶようになったのです。ですから1980年からNHKが放映して大評判を取った特別番組「シルクロード」でも、「沙漠オアシスの道」だけでなく「草原の道」も含めて取材しています。

今回の放送ではナビゲーターの江口洋介さんに「アイアンロードはシルクロードの北側」にあると説明させていましたが、そうではなく「アイアンロードはシルクロードの草原の道に相当する」と言えばよかったです。シルクロード（絹の道）という実際の道があるわけではなく、あくまで概念上の交通網ですから、着目するものによっていくらかでも言い換えることが可能であり、実際にこれまでも「銀の道」「玉の道」「ガラスの道」「琥珀の道」「毛皮の道」、あるいは文化面では「仏教の道」、海の場合なら「香料の道」などという使われ方をしてきました。私の定義するシルクロードは、「近代以前においてユーラシアの東西南北を結んだ高級商品流通と文化交流の幹線道路網」であり、同じことをやや抽象的に言えば、「前近代のユーラシア世界史という有機体を物心両面で支えた大動脈の雅称」です。それゆえ、鉄が貴重品であった時代において、「アイアンロード（鉄の道）」と言っても何ら差し支えありません。ただ注意したいのは、「鉄の道」とか「仏教の道」とかいう場合は一回性の伝播経路であるのに対して、「絹の道」とか「銀の道」「玉の道」「ガラスの道」「香料の道」などという場合は、そうした奢侈品が何万回、何十万回と繰り返し運ばれたことを意味します。

シルクロードはネットワークですから、草原の道も一本だけではありません。1月1月25～26日（日）に石和温泉にある帝京大学・文化財研究所で開催されたシルクロード学研究会は、草原の道の枢要な部分を占める現キルギスのチュー河流域に点在する遺跡、特にアクベシム遺跡（スイアブ＝碎葉）に関わる考古学的報告が中心で、とても充実した内容でした。スイアブはソグド人によって作られた都市で、唐代には安西都護府の支配下に入った時期があり、その後はトルコ系のトゥルギシュ（突騎施）やカルルク（葛邏祿）が支配し、さらにカラハン朝・カラキタイ・モンゴル帝国へと続いていきます。当研究会では吉田豊・京大教授の「シルクロードを東へ向かったキリスト教」、高橋英海・東大教授の「中央アジアのキリスト教：シリア語研究の観点から」、そして私の「トルコ民族とキリスト教」という文献学的な発表もありました。私の発表では、昨年末に出版されたばかりの T. Moriyasu, *Corpus of the Old Uighur Letters from the Eastern Silk Road*. (Berliner Turfantexte 46, Turnhout: Brepols, 2019) に含まれるキリスト教徒の手紙も引用しました。この拙著は私のライフワークの一つである「古ウイグル手紙文書集成」の英語版ですが、40年以上かかりました。もうとても日本語版を出す気にはなれませんので、学問的に興味をもたれた方はこれを見ていただきますよう、よろしく御願ひ致します。

2月24日（祝日）には池袋の古代オリエント博物館で「西アジア考古学 トップランナーズセミナー」が開催されます。学習指導要領の改訂により高校の歴史教育がまもなく「歴史総合」という近現代史中心となりますが、それに連動して古代史への関心が薄らぐ懸念があります。それへの対策として古代オリエント博物館でもあれこれ啓蒙活動をされている一環であり、当日の参加者には『高校世界史 試験を楽しむキーワード100』という小冊子が全員に配られるそうです。また現在、東京駒込の（公財）東洋文庫では「大清帝国展」が開かれています。5月中旬までです。以上二つのイベントの案内チラシをここに貼り付けます。

不具

2020年2月9日

森安孝夫

～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～∞～

2020年元旦配信分

森安通信 読者各位

明けましておめでとうございます。本年が皆様にとりまして、旧年より少しでも幸多き年になりますよう、心よりお祈り申し上げます。

いよいよ東京オリンピックの年です。バドミントンはメダルを大きく期待されています。専門家筋によりますと、「中国と韓国の女子ダブルスが必死で巻き返しており金メダルは難しい、女子シングルスも山口（茜ちゃん）・奥原と同じか、より強い選手が世界に6／7人いるのでこれも厳しい。男子シングルの桃田だけは期待していると思うが、オリンピックは生易しくはない」とのことです。ただしその一方で、地元開催の波に乗れば金メダル・ラッシュもありえる、という見方もあります。スポーツ弱小県の福井では期待の星である茜ちゃんには、是非ともメダルを取って欲しいものです。年末の全日本選手権とワールド・ツアー・ファイナルではいずれも準決勝で敗退しましたが、ファイナル戦ではリオ五輪の銀メダリストであり、これまで日本人が苦手としてきた大柄のプサルラには勝ちましたから、メダルの可能性は全日本選手権優勝の奥原より上だと思っています。

高校教員の中には、オリンピックなどエリートだけのものであり、部活にはむしろ有害だから廃止してしまえという人もいますようです。その背景には、中学・高校教員の負担が大きい部活などやめて民間委託せよという主張があり、それは教育とは無縁の金儲け主義と表裏一体だからと考えておられるからのようです。しかし、去年の秋は、ラグビーで日本中があんなに熱く燃えたではないですか。かつて日韓共催でサッカーのワールドカップをやった時、日韓の仲が最高によかったではないですか。スポーツには、偏狭なナショナリズムとは違うレベルの感動を呼び起こす力があると思います。学問は「知の地平」を広げるためにありますが、スポーツは「身体能力の極致」を見せてくれるのです。

以下は森安通信本来の内容ですので、世界史に興味のない方はスルーして下さい。

阪大 21 世紀 COE 及びそれ以後の高大連携プログラムに参加された全国高校社会科教員および大学関係者を対象に始めた本通信もいよいよ 12 年目に入ります。近年は回数が減っており、それにはいろいろな理由があるのですが、なんとか続けていければと思っています。最大のエネルギーは「読みました」という一言の返信メールですので、宜しく御願い申し上げます。

2018年から2019年にかけてBS日テレで放映され、つい最近も再放送された「オスマン帝国外伝〜愛と欲望のハレム」という長編番組は、美女とイケメンばかりが大量に登場するとはいえ、オスマン宮廷での愛憎劇が繰り広げられ、時々背筋が寒くなるほどの衝撃的な内容でした。しかし、さすがにトルコで制作されただけあって、フィクションの部分を差し引いても、イスラム教徒であるスレイマン一世が率いる一六世紀のオスマン帝国が当時の西洋キリスト教世界を圧倒していた事実がよく分かり、西洋中心主義の歴史しか知らない人には是非見てもらいたく思いました。そのうち再々放送があるでしょう。オスマン帝国は西アジアから北アフリカ・東ヨーロッパにまたがり、一四世紀から二〇世紀まで六〇〇年以上続いた世界史上比類なき大帝国であり、その中核にいたのはオスマン=トルコ族というトルコ民族の一派です。そしてそのトルコ民族の故郷はなんと現在のモンゴル国だったのです。実はモンゴルから中央アジアを経て西アジア・東欧にまで至った「トルコ民族の大移動」は、高校世界史の教科書にも出てきた「ゲルマン民族大移動」より遙かに大規模であって、その最後を飾るオスマン帝国の歴史と共にもっとよく知られるべき事柄なのですが、高校社会科の教員にさえその認識が行き渡っているようには見えません。

私は、今月から大阪中之島の朝日カルチャーセンターに出講しますが、そこではこの点にも論及するつもりです。それに関連して、先月の号外で朝日新聞に掲載された記事を一部の方に配信しましたが、ファイルの容量が大きすぎて読めなかったという返信がいくつもありましたので、本メールの末尾に容量を小さくしたものを添付します。

ところで東大バドミントン部の先輩で朝日新聞に長年勤務された碓井晃さんから、カルチャーセンターの経営は財政的に苦しいのだという内情を伺いました。その原因は、受講者が少ないからではなく、センターが借りている「ビル賃貸料金」の高騰なのだそうです。昔はビルに「教養」の雰囲気付き、顧客の呼び込みにメリットがあったのでビルのオーナーも歓迎してくれましたが、最近世界中に蔓延する反知性主義の風潮により、「教養」が軽視されるようになり、オーナーによっては追い出したがっているケースもあるようです。確かに講師料が予想以上に安いのに驚きましたが、それは受講料のかなりの部分がビルのテナント料に回されるためなのです。碓井先輩からは、「日本から「教養」を絶やさないためのボランティアの覚悟(?)でお付き合いをよろしくお願いします。日本人が「トランプ」みたいなリーダーを喝采し、首相に選ぶよ

うなことのない教養レベルに保つために」という激励の御言葉をいただきましたので、それにお応えするよう頑張ります。なお私は、団塊の世代が現役を引退したら、カルチャーセンターはきっと受講者が増えるものと思っていたのですが、実は老後の心配もあって、そうはならなかったようです。逆に私立大学や公的機関がやる無料の市民講座には、わんさか人が集まるようです。いかにも日本の現状を反映していますね。

11月3日の本通信で、吉田豊・京大教授との共著である「カラバルガスン碑文 漢文版の新校訂と訳註」（『内陸アジア言語の研究』34号、2019年9月、1～59頁）のPDF配布は1年後になると言いましたが、現在の編集長である松井太・阪大教授から、次のURLでPDFをダウンロードできるという案内がありました。

<http://hdl.handle.net/11094/73676>

人類史を大きく動かした要素として注目されるのは時代順に農業（牧畜を含む）、車輜、馬、馬車戦車、鉄、騎馬技術、銃火器、蒸気機関、電気です。目下、私は『シルクロード世界史』（講談社選書メチエ）でもそれに着目して執筆していますが、鉄の歴史の研究で世界的に有名な愛媛大学・アジア古代産業考古学研究センターの村上恭通教授より、嬉しいお知らせをいただきましたので、皆さんにもお知らせします（下に添付）。村上教授のチームは、日本国内や中国だけでなく、匈奴の故地であるモンゴル、スキタイの故地であるウクライナ、その中間のカザフスタンなどで製鉄炉の調査を実施してきました。その成果が十分うかがえるテレビ番組が、NHKで新年早々に放映されるということで、とても楽しみです。

不具

2020年元旦

森安孝夫

●村上恭通教授よりのお知らせ

今年4月からNHKのクルーが我々の調査活動に同行し、取材・撮影を続けて参りましたが、先週、大学での撮影をもってほぼ取材も完了しました。そして放映は早速以下のように、年明け早々開始されるという連絡を受けました。

○NHKスペシャル「アイアンロード～知られざる古代文明の興亡～」(仮)

<放送日時> 2020年1月13日(月祝) 21:00-21:50 総合

<主な舞台> ヒッタイト、スキタイ、匈奴、漢、(日本)

<ナビゲーター> 江口洋介さん

○歴史秘話ヒストリア「弥生ニッポン鉄物語」(仮)

〈放送日時〉 2020年2月12日(水) 22:30-23:20 総合
〈主な舞台〉 愛媛、鳥取、壱岐、小松、近畿、韓国
〈ナビゲーター〉 渡邊佐和子アナウンサー

○BS4Kスペシャル「アイアンロード~知られざる古代文明の興亡-」(仮)

—前編—

〈放送日時〉 2020年2月7日(金) 22:00-23:14 BS4K
〈主な舞台〉 ヒッタイト、スキタイ

—後編—

〈放送日時〉 2020年2月14日(金) 22:00-23:14 BS4K
〈主な舞台〉 匈奴、漢、朝鮮半島、日本列島

*このBS4K版(前編・後編)は、Eテレなど地上波で3月以降の放送が予定されています。

~~~~~

2019年11月3日配信分

森安通信 読者各位

久しぶりに森安通信を出します。こここのところスポーツのビッグイベントが立て続けにあったので、皆さんそれぞれに楽しまれたことと思いますが、今日は文化の日ですので、近況報告も含めややかたい内容の報告をします。

先月下旬には三泊四日で対馬・福岡に、古代遺跡や由緒ある神社の立地と景観を肌で感じ取りながら、出土品を見学する旅行に行ってきましたが、予想以上に対馬はすごいところだと実感しました。日本古代史における対馬は、敦煌が中国古代史において西域文明の流入する玄関口であったのと同様に、大陸文明の流入する玄関口であったのです。敦煌では駱駝と馬のキャラヴァンや騎馬軍団が行き交いましたが、対馬では福岡や佐賀に繋がる海路に船を操る海民集団が行き交ったのです。福岡の宗像大社を造営した宗形氏の活動や、魏志倭人伝の末盧国・伊都国・奴国などの情報は、対馬の存在抜きには考えられません。今回、対馬は曇り時々晴れだったのに、飛行機で福岡に着いたら雨だったという経験をしましたが、対馬と福岡は約100km離れているのに、対馬と朝鮮半島とは50kmしか離れておらず、天気良ければ相互に目視できるのです。それな

のに、考古学的遺物から判断して対馬が古代から明らかに日本文化圏であり、朝鮮文化圏ではなかったのは、永留久恵『対馬国志』によれば、対馬の東南にある広い対馬海峡（東水道）よりも、西北にある狭い朝鮮海峡（西水道）の方がはるかに潮の流れが速くて、古代の木造船では交通が困難だったからであるという。鯨でさえ北上する時は西水道を通り、南下する時は東水道を通るという。

魏志倭人伝によれば、朝鮮半島南端から対馬までの距離は一千里あるというが、それは450～500kmに相当するから、不正確きわまりない大袈裟な数字である。しかるに同じ魏志倭人伝が、倭国の中では対馬についてもっとも多く字数を費やし、「所居絶島，方可四百余里（一周は四百里ばかり），土地山陰，多深林，道路如禽鹿経（けもの道のような）」と述べているのは、いかにも正確である。対馬島は、南北が約80kmあるのに対して東西は最大でも約15kmしかない細長い形状をしており、南北の軸線がやや右（＝東）に傾いているため、東海岸が日本列島の九州を向き、西海岸が朝鮮半島に向いている。一周すればおよそ200kmあるが、それは四百余里にほぼ相当する。対馬は全島がリアス式海岸の入り組んだ絶島＝山島であり、湾やその中の入江が多数あり、各入江の奥には港がある。岩山の表面が土になった所に樹木が生えたため全島が広葉樹林で覆われており（針葉樹があるのは戦後の植林による）、海側から見れば切り立った崖の上に森があるため、いかにも絶島とか山島という表現がふさわしい。そのため古代に海辺にできた集落を結んだのは主に海路であり、内陸の道はほぼ「けもの道」に近かったらしい。それゆえ近代になって作られた道路も、細かいカーブの連続であり、近年になって作られた国道には多数のトンネルが掘られたため少しは状況が改善されたが、それでもなお遺跡を巡るには曲折の多い道路を利用するしかない。これはかなり胃にこたえた。

古代から外国が見えていた日本の領土は対馬だけである（北海道東端の状況はごく最近の例外的事象）。近年は韓国人観光客が激増して、あれこれ困った事態も生じていたが、今年の日韓関係が急激に悪化したため、韓国人観光客の姿はほとんど見えず、どこも閑散としていた。観光に頼る商店やホテルやバス会社は、逆の意味でとても困っていた。

対馬ではたくさんの遺跡や神社を巡ったが、一つだけ挙げるとすれば、それはやはり金田城である。金田城とは、飛鳥時代の白村江の戦いでの敗戦後、唐・新羅連合軍の追撃を恐れたヤマト政権（中大兄皇子称制）が辺境防衛のために

667年に建造させた石塁（＝城壁）のことである。標高275mの険峻な城山（じょうやま）を擁して浅茅（あそう）湾内に突き出る岬の山腹を石塁が四角く巡っている。一般に朝鮮式山城といわれるが、その構造は同じ目的で665年に建造された筑紫の大野城や長門の長門城と同じであり、それらが百済から亡命していた貴族であり将軍の指導の下に建造されたことが『日本書紀』に明記されているから、金田城も正確に言えば百済式山城である。総延長は2.8km、現存する石垣の高さは2～7mである。金田城全体は海岸より高い山腹にあり、内部には掘立柱のあった建物跡が少なくとも五つ以上ある。その大きさは1間×3間ないし2間×3間と小さく、且つそのうちには炉跡が残るものもあるので、恐らく防人（さきもり）の屯所であろうと思われる。金田城の最上部で見晴らしの良い所までは上らず、全体の半分くらいを徒歩で見学しただけなのに、上り下りの激しい岩場の坂道の連続なので、2時間近くを要し、足が非常に疲れた。

対馬・福岡旅行の報告はキリがないので、ここでやめます。最近読んだ学術書で興味深かったのは、『唐代史研究』最新号で、石見清裕「唐王朝成立史の研究をふりかえって」が石見教授の足跡を知る上で実に味わい深かっただけでなく、他にいくつもある書評がどれも読み応えがあった。また草原考古研究会（編）『ユーラシアの大草原を掘る 草原考古学への道標』（アジア遊学、勉誠出版、2019年、3200円）も勉強になった。それから、古代ウイグル史を含む内陸アジア史学の著名な研究者であり、戦時期の京都帝国大学総長でもあった羽田亨の総長時代の日記が翻刻された。『羽田亨日記』（京都大学大学文書館資料叢書1）、京都大学大学文書館、2019年刊であり、PDFとしても出回っているようである。

一方、私自身の仕事としては、久方ぶりに論文を発表することができた。それは吉田豊・京大教授との共著の「カラバルガスン碑文漢文版の新校訂と訳註」（『内陸アジア言語の研究』34号、2019年9月、1～59頁）である。本誌は以前から抜刷を作成しておらず、各位に献呈はできないので、お許しいただきたい。ただし1年後にはPDFを配布できるようになります。カラバルガスン碑文は東ウイグル帝国（744～840年）の首邑に建立されたもので、漢文・ソグド語・ウイグル語の三言語併用である。ウイグル古代史のみならず、東方マニ教史にとっても根本史料で、私自身は卒論以来しばしば引用し活用してきた。

不具

2019年11月3日

森安孝夫

~~~~~  
2019年7月17日配信分

森安通信 読者各位

祇園祭の季節ですが、関東では梅雨寒が続いたとか。日本中の天気がこれからどうなるのか、心配です。

先日のプロ野球オールスター第2戦は、阪神ファンにとっては久々に溜飲の下がる思いだったことでしょう。一方、大相撲名古屋場所で、4人の大関が全員休場してしまったのは、残念です。ただ若手が育ってきているのが、嬉しいですね。バドミントンは昨日からインドネシア・オープンが始まり、東京オリンピックのメダル候補は全てシードされています。

以前の森安通信（2018年5月1日配信分）で妹尾達彦・中央大学教授の『グローバル・ヒストリー』（中央大学出版部、2018年4月、3000円）という本に一言ながら言及し、ウォーラーステインの世界システム論が色あせつつある現在、それに替わる論が希求されていると書きました。妹尾さん自身の言葉によれば、「東アジア、すなわちユーラシア大陸東部の歴史を一つの歴史モデルとして、ユーラシア大陸全体、さらには世界史を叙述した書物が、ほとんど存在しない」ので、「本書は、紀元前1000年紀に誕生する東アジア＝ユーラシア大陸東部の広域経済圏を、グローバル・ヒストリー叙述の一つの分析モデルとして抽出」して、「そのモデルにもとづき、前近代から近代にかけての約5000年間のユーラシア大陸の歴史や世界史を、系統的に描こうとするもの」でした。

これに対して、本日紹介するのは、私と同じく西洋中心史観を厳しく批判する岡本隆司・京都府立大学教授の『世界史序説——アジア史から一望する』（ちくま新書1342、2018年7月、筑摩書房、860円）です。目下、講談社の選書メチエで『シルクロード世界史（仮題）』なるものを執筆する約束を果たすべく、日夜苦慮している私にとって、とても勉強になりました。妹尾さんや私と、着目するところに共通点は多いのですが、視点や叙述の対象には大きな違いがあります。それがとても面白く、且つ文章が非常に読みやすいので、自信を持って一読をお勧めします。

ただ、拙著『シルクロードと唐帝国』で提示した「ソグド系ウイグル人」という概念を評価していただいたのはありがたいのですが、それについていささ

か誤解があることと、梅棹忠夫『文明の生態史観』を無批判に受け入れている
点に賛成できないことだけは指摘させていただきます。

不具

2019年7月17日

森安孝夫

~~~~~

2019年4月10日配信分

森安通信 読者各位

4月上旬にクアラルンプールで行われたバドミントンのマレーシア・オープンでは、男子シングルの桃田や女子ダブルスの高橋・松友ペア、福島・廣田ペア、永原・松本ペアなど東京オリンピックの金メダル候補選手が早々と敗退する中、女子シングルの山口茜と奥原希望がベスト4に残り、準決勝で茜ちゃんがライバル奥原を破ったものの、決勝では世界ランキング一位の台湾の選手に負けて、惜しくも準優勝でした。また男子ダブルスの嘉村・園田ペアも立派に準優勝でした。決して東京オリンピックのメダルが日本に約束されているわけではないので、気を抜かずに応援しましょう。

さて今や日本だけが維持する元号が、「平成」から「令和」へ切り替わる際の報道フィーバーによって、三十年前に「平成」という元号を考案したのが東洋史学者の山本達郎・東大名誉教授であった事実が初めて明らかになりました。先生はお亡くなりになるまで、その事実をお認めにならなかったようですが、いかにも本物のエリートの品格がしのばれます。私は直系の弟子ではありませんが、東大文学部東洋史学科に進学したときの主任教授であり、講筵に連なったこともある上に、大学院時代にはもう東大を定年退職されていた先生と敦煌トゥルファン学の研究会でお会いして意見交換することもありました。先生は東南アジア史の大家として有名でしたが、お若い頃の出世作は中央アジア史の論文（Dru-guに就いて）であり、晩年まで敦煌トゥルファン出土文書を扱う中国史や中央アジア史にもおおいに関心をもたれていました。

2022年度から実施される高校・社会科系のカリキュラム大改変により、古代から世界史を学ぶ生徒の数が極端に減少する（二割以下?!）ことが懸念されます。それもあって昨今は「なぜ歴史学を学ぶ必要があるのか」、「なぜ古代史からやる必要があるのか（近現代史だけではどうしていけないのか）」と問

われることが多いのですが、昭和から平成、そして平成から令和への二度の元号交替に参画したのが東洋史学・中国文学（漢文学）・中国思想史・国史・国文学などの専門家であり、実際に元号を使う日本国民もその由来を理解するには、長らく漢字を使ってきた日本を含む東アジア世界の歴史や古典を知っている必要があることが痛感されたはずです。平成までの元号はほぼ全て『四書・五経』などの漢籍に典拠があり、令和が初めて国書である『万葉集』に由来するものとなりましたが、日本に漢字が本格的に導入された4～5世紀から江戸時代までの約1500年間、漢文はまぎれもなく日本の公用語（文語）であり続けたのです。現在でも日本語から漢字の熟語を全て排除したら、日本語の文章を書くことはとうてい不可能です。漢字・漢文によって育まれてきた日本文化の源流は、その故郷である中国大陸と、その仲介者となった朝鮮半島にあるのであって、日本古代において渡来人・帰化人の果たした役割を少しでも学んでいさえすれば、偏狭な日本至上主義など生まれるはずはないのです。もちろん明治時代に作られた和製漢語がたくさん中国に逆輸入されて、今や普通の中国語として使われている事実も忘れて欲しくありません。

確かに『万葉集』の本体は倭語（やまと言葉）で詠まれた歌を、漢字を当て字として利用（万葉仮名）して採録したのですが、「令和」の典拠となった部分は漢文で書かれた序文であり、しかもそれは今朝の朝日新聞に掲載された小島毅・東大教授の記事にある通り、中国の『文選（もんぜん）』に由来すると指摘されています。安倍首相のはしゃぎっぷりはやや異常な感じでしたが、小島教授のおっしゃるように「中国古典の『文選』と国書『万葉集』のダブル典拠とすれば、東アジア友好のメッセージが伝わ」り、安倍首相の株も上がったはずなのに、真に惜しいことをしました。

なお、一部に元号を使うのはリベラルな人ではないという言説があるようですが、冗談じゃありません。西暦は元々キリスト紀元なので、そんな西欧中心主義の権化みたいなものに統一する必要はありません。とはいえ、今はキリスト紀元もCommon Eraすなわち「共通紀元」と言い換えられていますから、それを使うのが穏当でしょう。神武紀元では世界に通用しませんから。

最後にお知らせです。大阪の中心部にある藤田美術館は休館中なのですが、その所蔵名品が奈良国立博物館で「国宝の殿堂 藤田美術館展」と題して公開されることになりました。会期は今年の4月13日（土）～6月9日（日）です。一般には国宝「曜変天目茶碗」や「玄奘三蔵絵」「両部大経感得図」などの仏

教美術が注目されましようが、実はそこで初めてマニ教の始祖マニの肖像画（絹絵）も公開されるのです。このマニ像は、昭和12年に美術雑誌『国華』558号に地蔵菩薩像としてモノクロ写真で紹介されたものですが、21世紀に入ってから急激に進んだマニ教絵画研究により、マニ像と断定されたのです〔cf. 吉田 豊／古川撰一（編）『中国江南マニ教絵画研究』京都，臨川書店，2015年，図版21〕。現物は藤田美術館でも長らく行方不明になっていたのですが、それが今度、ついに日の目を見ることになったわけです。図録ではカラー写真も掲載されるそうで、世界中のマニ教研究者が瞠目することでしょう。ただ注意していただきたいのは、これが展示されるのは会期前半の4月13日～5月12日だけです。

不具

2019年4月10日

森安孝夫

~~~~~

2019年3月15日配信分

森安通信 読者各位

昨日は6年ぶりに大相撲春場所（三月場所，大阪場所）に行ってきました。研究仲間の吉田豊・京大教授と一緒に、十両の始まる直前から見られました。二年前の3月に、阪大相撲部の土俵開きに来て花を添えてくれた大阪出身力士の勢（いきおい）は足の怪我でまったく精彩がなく可哀想でしたが、同じく大阪出身の豪栄道が珍しく初日から全勝していますので、たいへんな盛り上がりようでした。兵庫県出身で大関取りをめざす貴景勝が二敗になったのは仕方ないですね。二年前に亡くなった母がファンだった石川県出身の遠藤はようやく初白星をあげました。いつもテレビ観戦していますが、やはり生で見るのは楽しかったです。

東京オリンピックに向けてバドミントン界では日本選手の活躍が続いていますが、つい先日の全英オープンでは、男子シングルスで桃田が優勝しました。日本人では初めての快挙です。女子シングルスでは、3年前の同大会で優勝した奥原希望と、直前の3月初頭にあったワールドツアーのドイツ・オープンで優勝した山口茜に期待がかけられていましたが、いずれも準決勝まで進んだものの、そこで敗退しベスト4止まり。男子ダブルスの嘉村・園田ペアもベスト4。女

子ダブルスの永原・松本ペアと混合ダブルスの渡辺・東野ペアはともに準優勝でした。女子ダブルスでは優勝は中国ペアに持って行かれましたが、準決勝に進んだ（＝ベスト4に残った）うち3組は日本人で、そこに福島・廣田ペア、米本・田中ペアが入っていますが、なんとリオ五輪金メダルの高橋・松友ペアは一回戦敗退でした。東京オリンピックは大いに楽しみなのですが、決して油断はできないということです。

以下は学問的な話です。21世紀になって私は「日本におけるシルクロード上のソグド人研究の回顧と近年の動向（増補版）」（森安孝夫編『ソグドからウイグルへ——シルクロード東部の民族と文化の交流——』汲古書院, 2011, pp. 3-46）という学界動向を発表し、その中で「日本の学界にとってショッキングな出来事は、2002年にドラヴェシエールÉtienne De la Vaissière『ソグド商人史』*Histoire des marchands sogdiens*がパリで出版され、しかもその執筆者がフランスの若手研究者だったことである。本来なら、このような単行本はソグド研究の長い伝統と分厚い蓄積がある日本で真っ先に出版されてしかるべきであるのに、完全に先を越されてしまった」と書きました。その本が、ついに日本語で読めるようになりました：影山悦子（訳）『ソグド商人の歴史』岩波書店、2019年2月。吉田豊教授の神戸市外大時代の教え子である影山さんの御苦勞には心より感謝します。ただし価格が18,500円と高額で、内容もプロ向けですので、大学の図書館や歴史研究室では是非とも備えていただきたいものですが、高校教員にはお薦めできません。

今年2月17日に、奈良の大和文華館で開催された遼代の墳墓出土品と平安文化をつなぐようなシンポジウムがあり、これまで飛鳥・奈良時代に中国から渡来してきた緯錦（よこにしき）の技術が、日本国内で独自に進化して倭錦と呼ばれるものになったと考えられてきたが（これもいわゆる国風文化）、実は新発見の10～11世紀の遼代墳墓から出土した染織品の中に同じ技術のものが多数存在することが判明したそうです。一方、アメリカでは藤原氏の建立した宇治平等院の建築や壁画が、チベット仏教（敦煌仏教）や遼仏教の強い影響を受けているという博士論文が出されているそうです。そうすると、従来は無視されがちであった遼帝国（契丹）と平安日本とを結ぶルートがあった事が予想されます。その場合、当然ながら、対馬・壱岐が浮かび上がってきます。近年は遼・高麗・日本を結ぶ仏教文化の交流が注目されていますが、上川通夫・愛知県立大学教授によれば、「遼・宋・高麗の混成商人団」が媒介した可能性もあるそう

です。誰でも知っている13世紀モンゴル時代の「元寇」に比べ、1019年の「刀伊（とい）の入寇」という事件の背景は分かりにくいのですが、「遼・宋・高麗の混成商人団」を裏返して考えてみれば、何かが見えてくるのかも知れません。

最後に、前回の森安通信（2019年2月3日配信分）で紹介した帝京大学主催のシンポジウム「シルクロードを掘る——いま蘇る、いにしえの道」に残念ながら参加されなかった方には朗報となるお知らせをします。妹尾達彦・中央大学教授が主宰される公開シンポジウム「ユーラシア考古学を楽しむ」の案内が届いたのですが、その趣旨は、「近年におけるユーラシア大陸の考古学の進展には、目を見張るものがあります。遺跡の発掘が続き、新たな事実が次々と明らかになってきています。本シンポジウムの目的は、ユーラシア大陸の各地域で発掘にあたってきた各分野を牽引する研究者に集っていただき、ユーラシア考古学の現在に迫ること」だそうです。

▼日時：3月30日(土) 12:30～18:30

▼会場：中央大学多摩キャンパス 2号館 4階 人文科学研究所会議室 1

〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1 多摩モノレール「中央大学・明星大学駅」下車徒歩5分

▼参加費無料

▼プログラム：

12:30-12:40 妹尾達彦（中央大学人文研研究員） 「趣旨説明」

12:40-13:40 林 俊雄（創価大学教授） 「ユーラシア考古学を楽しむ」

13:40-14:40 山内和也（帝京大学教授） 「スイヤブと碎葉鎮城」

14:50-15:50 岩本篤志（立正大学准教授）

「バクトリア北部の仏教遺跡と玄奘 —立正大学の発掘調査から—」

15:50-16:50 清水信行（青山学院大学名誉教授）

「沿海州渤海古城 クラスキノ城跡の調査成果と課題」

[討論]

17:00-17:20 松村公仁（アナトリア考古学研究所研究員） 「アナトリア考古学から」

17:20-17:40 佐川英治（東京大学教授） 「東洋史学から」

17:40-18:00 小林謙一（中央大学教授） 「日本考古学から」

18:00-18:30 総合討論

私はこれに参加することを決め、終了後の懇親会にも出ますので、もし会場でお会いできれば幸いです。遠慮なくお声をかけて下さい。

不具

2019年3月15日

森安孝夫

~~~~~  
2019年2月3日配信分

森安通信 読者各位

私はこれまで「シルクロード」を「前近代においてユーラシアの東西南北を結んだ高級商品流通と文化交流の幹線道路網」と定義して、この術語は古代・中世史のみに使うべきで、近現代史に使うのは適当でないと主張してきました。なぜなら近代以後、世界の物流の中心は海洋に移ってしまい、内陸のシルクロードは世界物流のメインルートからはずれてしまったからです。近代になっても露清間の貿易量は増大しているから、近代になって陸のシルクロードが衰えたという見方は誤りであるという反論もありましたが、絶対量が増えたといっても地球規模の物流の中に占めるパーセンテージが激減してしまったことこそが問題なのですから、そんな反論は的外れでした。ところが2010年代になって中国の習近平政権が「一帯一路」構想をぶち上げた結果、状況が変わりつつあります。つまり大西洋ルートを欧米に、太平洋ルートを日米に抑えられていると感じる中国が、かつてのラクダや馬に代わる鉄道によって中国と中央アジア諸国と東欧と西欧を結びつけ、陸路による物流を大幅に復活させようとしているのです。その現状が、本日の朝日新聞の附録であるGlobe（朝日新聞グローブ）に「喝采と警戒のシルクロード」として特集されていました。もちろん習近平の一帯一路構想の裏には、巨大な援助を投入して中央ユーラシアの弱小国を債務漬けにしておいて、いずれは意のままにしようという中国の覇権主義が隠されているわけであり、今度の特集ではその影の部分（国内では新疆のウイグル民族を弾圧）にも言及があります。とはいえどちらかといえば、そのうち日本まで巻き込む巨大物流ルートが中央ユーラシアに再生されるという明るい方向で紹介されています。それは事実であり、日本の財界・産業界も今後は目を向けざるをえないことになるでしょう。

ところで先月の23・24日、東京中野の帝京平成大学で、山内和也・帝京大学教授が率いる帝京大学文化財研究所が主宰し、二日連続で開催された国際シンポジウム「シルクロードを掘る——いま蘇る、いにしへの道」がありました。発表は日本・韓国・中国・キルギスからの参加者17名に及び、カラー写真満載の予稿集が配布され、同時通訳が付く本格的な国際研究会でした。山内和也教授は、かつて上野の国立文化財機構・東京文化財研究所に所属していた時期からキルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所と協力し、チュー河盆地にある都市遺跡群調査に従事しながら、ユネスコ世界遺産委員会の委員としてシルクロードを世界遺産として登録するための活動をしており、帝京大学移籍後は引き続きキルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所の協力のもと、チュー河盆地にある三つの最重要都市遺跡、すなわちアク=ベシム Ak-Beshim（スイアブ、碎葉）、クラスナヤ=レーチカ Krasnaya Rechka（ナヴェカット、新城）、ブラナ Burana（ベラサグン、グズオールド）の一つであるアク=ベシムを重点的に発掘しているのです。そのような背景があるため、今回のシンポジウムにおける発表はキルギス・カザフスタン・ウズベキスタン・タジキスタンの旧ソ連領中央アジア諸国に分布する遺跡に関わるものが大半を占めていました。これまで私は中国の新疆ウイグル自治区・甘肅省・内モンゴル自治区とモンゴル国での現地調査には相当の回数と日数で参加（大部分は主宰）しており、東部天山地区を含む東トルキスタンからモンゴル高原の状況には親しんできましたが、旧ソ連領の中央アジアすなわち西部天山地区～西トルキスタンの現地を踏査した経験はないので、今回たくさんのスライドや動画を見ることができたのは、まことに幸いでした。

トルキスタンとはペルシア語で「トルコ人の土地・国」という意味ですが、歴史の実態としてはソグド語・コータン語・トカラ語などの印欧語族が原住民であった土地に東方から漢民族が浸出し、さらに北方から突厥・トゥルギシュ（突騎施）・カルルク（葛邏祿）・ウイグル（回鶻）・オグズなどのトルコ系遊牧民族が次々に支配者として臨んできた結果、全体として「トルコ語を話す人々の土地・国」へと変化したのです。西部天山の北麓でイシク湖に発するチュー河を擁するチュー河盆地（キルギス共和国）、並びにその西南隣で西部天山に発するナリン河を擁するフェルガナ盆地（ウズベキスタン共和国）は農業にも牧畜にも適した農牧接壤地帯であり、古くから農耕都市民と騎馬遊牧民が共存していました。それゆえ現在、チュー河盆地にはアク=ベシム（スイアブ、

碎葉)をはじめとする多数の都市遺跡が散在し、フェルガナ盆地にもミンテパ Mingtepa, ダルヴェルジン Dalverzin, クヴァ Kuvaなどの遺跡が点在しているのです。とりわけアク=ベシム都市遺跡は西半分がスイアブ(碎葉)と呼ばれたソグド人の東方進出の橋頭堡の一つであり、東半分は漢人が唐代に築いた碎葉鎮城でありますから、イスラム化以前の中央ユーラシアにおいてソグド世界・トルコ世界・漢人世界が交叉する最重要拠点だったわけであり、その歴史的意義の重要性は計り知れません。今後もアク=ベシムで発掘を続ける帝京大学文化財研究所の活動はますます注目を浴びることになるでしょうが、発掘作業の進展と共に、突厥とりわけ西突厥、並びにトゥルギシュ(突騎施)がチュー河盆地を拠点にして、西のソグド本国や南のタリム盆地のオアシス都市国家を間接支配するに至った経緯についても、文献史料(漢籍・アラビア語など)に加えて遺物やコインなどに残された文字資料(ソグド語・漢文・ルーン文字トルコ語)も参照しながら考察を進めていく必要が生じてくるでしょう。中国の一带一路政策が、こういう学問研究に大金を注ぎ込んでくれるなら文句はありません。なおチュー河盆地とフェルガナ盆地の遺跡には、ゾロアスター教・仏教・ネストリウス派キリスト教・マニ教などの寺院・教会・墓地遺址やさまざまな遺物や岩壁銘文なども残されているため、宗教の道としての側面を持つシルクロードの研究にとっても、有用な材料を提供してくれるはずです。

昨年12月には、鉄の研究で世界的に有名な村上恭通教授を愛媛大学にお尋ねし、西アジアから中央ユーラシアを通して中国・朝鮮・日本まで伝播した鉄文化についていろいろとお話を伺いました。村上教授の御著書(『倭人と鉄の考古学』1998年、青木書店;『古代国家成立過程と鉄器生産』2007年、青木書店)を読んで一番驚いたのは、私も信じていた「弥生時代終末期までに鉄器の普及が全国におよび、生産力の拡大による安定した経済的基盤が古墳時代成立の前提となる」という従来の考え方が、完全に否定されたことです。弥生時代後期に農具が完全に鉄器化した地域は北部九州・中九州・山陰・西部瀬戸内のみで、それ以外ではまだまだ石器と併用しており、弥生時代は決して「初期鉄器」文化ではなく、いわば「原始鉄器」文化に過ぎなかったということです。

愛媛大学のある松山市は、斉明7年(661年)に百済救援軍を率いていった斉明天皇の船団が停泊し、道後温泉で休息した後、いよいよ出航しようとした時に額田王(ぬかたのおおきみ)が「熟田津に船乗りせむと月待てば 潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな」という有名な歌を詠んだ熟田津の港(現在の松山市西岸)

があったところですが、そこに出てくる地名を我々はふつう「にきたづ」と読んでいましたが、現地の松山では「にぎたつ」でした。村上教授によれば、関門海峡から瀬戸内海に船で入って来ると山口県側ではなく愛媛県側に自然に着くそうです。ですから逆に瀬戸内海から関門海峡を抜けて玄界灘に出るには、この熟田津の港が最適だったようです。一つ謎が解けたような気がしました。

不具

2019年2月3日

森安孝夫

~~~~~

2019年元旦配信分

森安通信 読者各位

明けましておめでとうございます。本年の皆様の御多幸を心よりお祈り申し上げます。大阪では初日の出が見られました。

本通信はどうしても長くなりがちで、時々いい加減にせよとのお叱りを受けますが、そもそもの由来が高大連携の事業で全国から大阪大学に参集してくださった高校の社会科教員、並びに大学での歴史研究者（友人・教え子を含む）を対象に情報提供を目的として始めたものですので、なにとぞ御容赦ください。それ以外の方々は、どうぞ最初のパラグラフだけお読みいただき、後は無視するなり、明日以降に回して下さい。今回は日本人のルーツに関わりますが、やはりかなり難しい内容ですから。

昨年最後の世界を相手にしたスポーツで、サッカーは惨敗でしたが、バドミントンと卓球とスケートは世界トップ水準を示してくれました。でもまさか桃田が世界ランキング二位の石宇奇（中国）に負けるとは思っていなかったもので、悔しい限りです。数ヶ月前の世界選手権では手玉にとっていたのですから。女子ダブルスの高橋・松友ペアは国内のライバル選手にはよく負けたのに、最後のワールドツアーファイナルで金メダルを獲って締めくくったのは流石でした。女子シングルス二枚看板の茜ちゃんと奥原は背が低く、いつもリオ五輪で金・銀メダルのスペインとインドの長身女子が壁になるのですが、どうしたらいいのでしょうかね。

昨年末の12月23日の夜11時半からNHKのEテレで放映されたサイエンスZEROの「DNAで迫る弥生人！」はいささか衝撃的でした。上野の国立科学博物

館で、全国各地から発掘された弥生人の骨の展示が始まったのに合わせた企画だったようです。出演者の解説によると、母系だけしか辿れないミトコンドリアDNAの解析から得られる遺伝子情報に比べ、母系も父系も辿れる核DNAの解析から得られる遺伝子情報は18万倍だそうです。従来はミトコンドリアDNAの研究から現生人類がホモ・サピエンス・サピエンスただ一種ということが判明していたわけですが、核DNAの研究が進めば、血液型のみならず髪や肌や目の色などの形質的諸特徴をはじめ様々なことが分かるようになるというのです。これまでは1万年以上前から日本列島に定着し、主に東日本（特に東北地方）に集住していた縄文人の後に、二千数百年（もしくは三千年）前から何波にも亘って西日本（特に九州）に渡来した弥生人が稲作や青銅器・鉄器などの金属文化をもたらし、縄文人と徐々に混血していったと考えられていました。しかるに東北地方の岩手で見つかった弥生人の核DNAの遺伝子はほとんど縄文人と一致したのに対して、西日本の長崎と福岡の弥生人、さらには現代日本人の遺伝子は縄文人と韓国人の中間に位置し、しかも現代日本人の遺伝子は縄文人よりも韓国人のそれに近いというのです。現代日本人及び日本文化の基層には、弥生時代よりも後の古墳時代から飛鳥時代に朝鮮半島からやって来た多数の渡来人・帰化人（代表的なのが百濟人や秦氏）の影響があり、また言語学の類型論的に言えば日本語と朝鮮語の類似性は特に著しいのですから、いまさら驚くべき結果ではないのかもしれませんが、まだまだ情報不足ですが、今後の考古学的発掘により古人骨の収集が進めば、倭人の起源、卑弥呼の邪馬台国があったのは近畿なのか北九州なのか、邪馬台国と後の大和王朝とは直接繋がるのか否か、もしくは北方系騎馬民族の大量渡来の有無、倭人と蝦夷・隼人・熊襲との関係など、様々な疑問について徐々にベールが剥がされていくことが期待されます。

ところで私の出身母体である東大・東洋史の大先輩である江上波夫氏が提唱されたいわゆる「騎馬民族征服王朝説」（4世紀前半に大陸から騎馬民族が日本列島に渡来して倭人を征服し王朝を建てたというもの）が、もはや学問的に成立しないことは、本通信でも何度か言及したところですが、特に一年前の2017年12月18日配信分では、「その壮大な騎馬民族説は、敗戦でふさぎ込んでいた大方の日本人に活力を与えたというだけでなく、日本の騎馬文化の受容には4世紀の五胡と呼ばれる遊牧騎馬民族の南下に由来する北中国での争乱、及びそれに連動する高句麗の南下と結び付け、日本史をユーラシア史的規模で捉えた

点で画期的であり、正当に評価されるべきものでした」と述べつつ、私も拙著や講義・講演などで「中央ユーラシアの遊牧騎馬民族が世界史を左右する原動力のひとつであったことを主張してきた関係から、中央ユーラシアの動向が日本古代史に具体的にどのように影響したのかが、気になり始めました」と書きました。そして去年一年の間に、日本古代史・考古学関係の論著を積極的に繙くようになって、ようやく、かつて江上批判の急先鋒であった佐原 真氏に替わり、江上説を再評価する動きが既に日本古代史家や考古学者の一部から出されていることを知り、とても嬉しく思いました。それが2010年出版の諫早直人『海を渡った騎馬文化—馬具からみた古代東北アジア』（東京、風響社、800円）と、「東アジアの古代文化を考える会」編集で2014年に出版された『今、騎馬民族説を見直す—東アジア騎馬文化の証言』という論文集です。前者は薄くて読みやすいので、多忙を極める高校教員にはうってつけであり、一読をお薦めできます。諫早氏は「江上氏の指摘するように古墳時代中期に入ってそれまで馬の存在しなかった日本列島に突然、馬と騎馬の風習が伝来したこと自体は否定しようなない事実である」としながらも、その背景に単一騎馬民族による征服活動のような民族移動を認める余地はないと断言しています。一方、後者は市販の出版物ではないので入手しにくいものですが、桃崎祐輔氏の「騎馬文化の拡散と農耕文明との融合—江上騎馬民族征服王朝説が描く文化融合モデルとその今日的意義」（pp. 35-72）は、実に遠大な世界史的視野のもとに書かれ、最後は「拙論を天上にいます江上波夫先生に献呈し、学恩に謝すとともに、冥福をお祈りしたい」という一文で締めくくられており、涙が出るほど感動しました。なぜなら江上説を真っ向から否定する佐原 真の『騎馬民族は来なかった』（NHKブックス、1993年）が出たときには、世間からそんなトンデモ学説を唱えた人が東大名誉教授で文化勲章まで受賞しているのかと揶揄された辛い記憶があったからです。なお本書には、田中史生「華北の争乱と列島の古代史—5世紀の東アジア史再考」、村上恭通「馬弩関と鉄—アジア北方金属文化の動態」、鈴木靖民「騎馬民族説の今日的意義」なども納められており、とても有意義であるばかりでなく、江上先生の名誉回復にもなっています。

東大東洋史の伝統としては戦前に活躍された白鳥庫吉・中山久四郎・池内 宏から、戦後には江上波夫のほかに石田幹之助・松田壽男・前田直典・榎 一雄・西嶋定生・護 雅夫・池田 温・岡田英弘など錚々たるメンバーが日本古代史・考古学に発言されています。しかし江上先生と仲の良かった恩師の護 雅夫先生

から突厥の可汗の即位儀礼と日本の天皇の即位儀礼を結びつけて、民俗学者などからこっぴどく批判された話を伺っていたので、とても自分はそういう方面には手を出すまいと決めていたのですが、どうやらそうもいなくなってきたようです。とはいえ下手に発言すると手痛いしっぺ返しを蒙ることは目に見えていますから、ゆっくり時間をかけていくつもりです。

さて日本人のルーツ問題ですが、古代日本人の源流というか主流である「倭人」は、そもそもどこから来たのでしょうか。倭人と弥生人はイコールではありませんが、弥生人の中に含まれるのでしょうか。言語学者の清瀬義三郎は、紀元前四～三世紀に稲作と金属文化を持ってきたのが倭人であり、彼らは渡来した当初から既に日本語（＝倭語）を話していたと考えています。彼らは文身（入れ墨）と潜水漁労の風習や高床式建築など呉越風の江南的風俗を持っており、日本にはいなかった虎や象を倭語のトラ・キサとして記憶しているように、その原郷は秦漢時代の漢民族が異民族・東夷の地とした中国本土の東海岸部である河北・山東から江南に至る地域であると推定します。そしてさらに、『後漢書』烏孫鮮卑列伝に君長の檀石槐が率いる鮮卑族が食糧難に陥ったとき、「倭人の善く（魚類を）網捕するを聞き、ここにおいて東のかた倭人国を撃ち、千余家を得て秦水の上（ほとり）に徙（うつ）し置き、魚を捕え以て糧食を助け令（し）む」とある倭人国とは、日本に到達したのとは別のグループが中国の東部海岸から旧満洲南部～北朝鮮方面に北上して建てたものであるというのです〔同氏「邪馬壹国の言語を論じ原日本語の故地に及ぶ」『語源探究』5, 1997, pp. 1-43 ; 同氏「倭人と和語の渡来」『姫路獨協大学外国学部紀要』14, 2001, pp. 133-148〕。これはいかにも驚くべき見解なのですが、実は私はこの清瀬説を知るより前に、ある本を読んで同じような衝撃を受けていたことを思い出しました。その本とは、私のもう一人の恩師・榎 一雄先生の親友であり百済語を含む古朝鮮語研究の大御所であった河野六郎が、国語学者の亀井 孝や歴史学者の松村 潤・武田幸男など当時の最強メンバーを率いて実施した共同研究の報告書『三国志に記された東アジアの言語および民族に関する基礎的研究』（平成2・3・4年度科学研究費補助金一般研究（B）研究成果報告書，平成5年，東洋文庫）です。その報告書では、旧満洲南部～北朝鮮東部にいて高句麗の支配下に入ったとされる濊族の濊（わい）と倭人の倭（わ）とが、中期朝鮮語の字音では同じieiであり、濊は「太古には中国の河北の地に原住したらしい」（p. 43）とか、「高句麗は濊の南下を追って南下を続けたのであろう」（p. 43）とか、

「古くは倭人は朝鮮半島に居住していたが、のち、日本列島に移住したと思われる。その際、半島の南にいくらか残留したのもいたかもしれない」（pp. 17-18）とか、「濊と倭は同系であることになり、濊の中国からの流転はそのまま倭の前史を反映するということになりそうである」（p. 44），などと述べていたのです。そうであれば「三・五・七・十」という数詞をはじめ地名に残された30個ほどの言葉が高句麗語と日本語で酷似しているという学界周知の現象も、ベックウイズの主張するように高句麗語と日本語が同系だからではなく[Ch. I. Beckwith, *Koguryo, the Language of Japan's Continental Relatives: An Introduction to the Historical-Comparative Study of the Japanese-Koguryoic Languages*. Leiden: Brill, Revised second edition, 2007]，濊人が旧高句麗領内にあって日本語すなわち倭語と類似の地名を残した結果とみなせることとなり、なんら不思議ではなくなるのです。かつて日本語はトルコ語・モンゴル語・ツングース語と共にアルタイ語族に属するという説が有力でしたが、基礎語彙に共通性が認められないことから、もはやそれは無理です。それでも清瀬義三郎は、トルコ語・モンゴル語・ツングース語が音韻的にも形態的にも一定の諸特徴を共有し、統語論的発想も多くの点で相等しいことから、「アルタイ型言語」というまとまりは認め、上の三言語に加えて、高句麗語と百濟語という夫余系の言語を第四のアルタイ型言語、新羅語に由来する朝鮮語を第五のアルタイ型言語、そして日本語を第六のアルタイ型言語としています。すなわち「漢族が大陸西方から東漸して紀元前1100年頃に陝西の渭水下流に周朝を建てた頃には、シナ大陸の東方には北から南にかけて種々のアルタイ型言語が存在したと考へられる」というのが、その大局観のようです。清瀬義三郎説と河野六郎グループの説とは、稲作をもたらした倭人集団が朝鮮半島を経由したか中国大陸から直接海を渡ってきたかという点で異なるものの、全体としてはどうやら通底するものであり、今後我々はそれを踏まえて日本人のルーツを考察していくべきではないでしょうか。

日本語の「うま」は、動物としての馬の日本伝来が4世紀以降なのですから、弥生時代の倭人語であるはずはありません。モンゴル語・ツングース語のmorinや朝鮮語のmarよりも漢語のmaに近いことは一目瞭然ですから、漢語をしゃべり、馬の飼育に習熟していた渡来人がもたらしたことを疑う必要はないでしょう。この点は既に岡田英弘も清瀬義三郎も認めています。4世紀に北方系の騎馬民

族が日本を征服したという江上説の核心部分が否定されたのは、当然と言えば当然だったのです。

不具

2019年元旦

森安孝夫

~~~~~

2018年10月26日配信分

森安通信 読者各位

昨日までの三日間、出雲見学旅行に行ってきました。出雲は初めてで、見るべき遺跡・古墳・神社・博物館などが多すぎて、とても三日では足りませんでした。初日のみ雨模様でしたが、あと二日は晴天に恵まれ、文献史学者も現地で立地・景観を確認するのが重要であると主張してきた私としては満足できる成果がありました。とはいえ私が日本古代史にいささかでも発言できるようになるのは三年から五年先のことと考えています。

実は出雲旅行の準備も兼ねて、松本直樹『神話で読みとく古代日本——古事記・日本書紀・風土記』（ちくま新書1192, 筑摩書房, 2016年, 950円）を読んでいたのですが、古事記と日本書紀はあくまで別物で同列に扱ってはいけないこと、一方で古事記にも日本書紀にもある有名な素戔鳴尊（スサノオ）のヤマタノオロチ退治伝説がなぜ出雲国風土記に採録されていないのかという疑問への回答など、発想が新鮮でとても役に立ちました。著者は早稲田大学教授で、専門は上代日本文学だそうです。

上代日本語史料をどう読み解くかという点では、最近読んだばかりの井上 亘「十七条憲法と聖徳太子」（『古代文化』64-4, 2013年, pp. 1-17）という論文にも感心しました。感心したなどという上から目線ですが、本当にすごいなと驚いたのです。これは聖徳太子実在・不在論争にも、大化の改新詔の評価を巡る問題にも直結しています。著者はなんと北京大学で教鞭を執った方だそうです。

以下に、奈良文化財研究所の影山悦子さんからの講演案内を転載します（今は削除）。また、もうすぐ始まる奈良国立博物館での正倉院展と併せて、「地下の正倉院展」を開催している奈良文化財研究所にも足を運んでいただきたいとのことです。

~~~~~

2018年10月7日配信分

森安通信 読者各位

今年もまた正倉院展の季節がやってきました（10月27日～11月12日）。三十数年前に大阪大学に赴任してから正倉院展に行くようになり、特に5年前に読売新聞に関連記事を書くより数年前から特別招待券をいただけるようになったため、一人で行く機会が増えただけでなく、高校・大学時代の友人・知己を案内するようにもなりました。藤島高校の同窓生は昨年度に古稀を迎え、私は一浪ですので東大のクラスメートの多数派は今年度がそれに当たります。それゆえ同窓会・クラス会のお誘いが増えたため、私も近場で2回参加しました。

そういう場を通じて初めて知ったのですが、広瀬すず主演で話題となった百人一首の映画「ちはやぶる」で國村隼が演じた人物（劇中では府中白波会—実際は府中白妙会—の会長）は藤島高校出身で、我々より5年後輩（昭和46年卒業、三年7組）の府中市で耳鼻咽喉科を開業している方だそうです。私の出身地である福井県三国町新保は北前船で栄えた三国湊の南半分ですから、百人一首の盛んな土地柄であり、愛知県在住の妹が今でも百人一首の大きな大会で読み手をしています。彼女が親しくしている愛知県カルタ協会会長も藤島高校で我々と同期（三年8組）の方だそうです。私自身は百人一首の遊びなど中学生の時で止まってしまいましたが、一度だけ東大駒場のクラスメートたちと千葉方面へドライブに行き、あの東大・検見川グランド（東大バドミントン部の夏合宿の地）の合宿所に泊まった時、誰かが持参した百人一首をやりました。その時、私のカルタ札の取り方が早くてあげつないと、皆さんの響きをかっことを思い出しました。でも、映画「ちはやぶる」を御覧になれば分かるように、実際はあの時の私など足下にも及ばないほどの凄いスピードなのです。

ところで正倉院展とも内容的に少しは関わる展覧会とそのカタログをお知らせします。展覧会名は「シルクロード新世紀展」で、会場は東京池袋の古代オリエント博物館です。実は岡山市立オリエント美術館でも今夏開催されていたのですが、それはもう既に終わっており、東京会場の会期は9月29日～12月2日

です。カタログのタイトルは、『シルクロード新世紀—ヒトが動き、モノが動く』（編集・発行：岡山市立オリエント美術館・古代オリエント博物館，2018年）であり，図版は綺麗で，内容解説は高校教育や大学の一般教養の資料として使えるほどよくまとまっています。その理由は，多数の専門家が参加して，得意分野を1～2頁ずつ分担執筆しているからです。それゆえ，会場に行かれない場合は，カタログだけ入手されても宜しいかと思えます。

この1/2年の森安通信で日本のバドミントン界のことを繰り返しお知らせしてきましたが，今やオリンピックでも確実にメダルが狙えるようになったことが広く知られるようになりましたので，もはやその必要はないと思えます。それゆえ2018年8月4日配信の号外は，福井出身者とバドミントンに関係のありそうな一部の方にしか送りませんでした。でもその時，学問的情報も付けたので，その部分のみ以下に繰り返します。

富谷 至・京大教授が執筆し，今年3月に出版された『漢倭奴国王から日本国天皇へ—国号「日本」と称号「天皇」の誕生』（京都，臨川書店，2018年，3000円）を，感心しながら読了しました。とても優れた研究であるにもかかわらず，一般読書人にも容易に読める内容です。富谷教授の専門は日本史ではなく中国史（特に漢代史など）ですので，日本史の専門家とは違う観点から日本という国号と天皇という称号の由来を解き明かしており，今後の必読書となること間違いありません。有名な石上神宮の七支刀の年代についても，従来の通説と違う見方を示しています。

不具 2018年10月7日 森安孝夫

~~~~~

森安通信・号外（2018年8月4日配信）

南京で行われているバドミントン世界選手権ですが，女子ダブルスはベスト4に勝ち残った3組が日本勢です。しかもその中にリオ五輪金メダルの高橋・松友ペアが入っていません。同じ日本のペアに負けてしまったのです。男子ダブルスでは園田・嘉村ペアが世界ランキング一位のインドネシア・ペアを破って準決勝に進出しました。

シングルスでは男子の桃田が順調に準決勝に進みましたが，女子では奥原が

去年の決勝で戦ったインド選手に敗退し、茜ちゃんだけが準決勝に残りました。本日の正午から夜中にかけて、それぞれの準決勝がBS朝日で放映されますから、お時間のある方は是非ともご覧ください。

ところで富谷 至・京大教授が執筆し、今年3月に出版された『漢倭奴国王から日本国天皇へ——国号「日本」と称号「天皇」の誕生』（京都、臨川書店、2018年、3000円）を、感心しながら読了しました。とても優れた研究であるにもかかわらず、一般読書人にも容易に読める内容です。富谷教授の専門は日本史ではなく中国史（特に漢代史など）ですので、日本史の専門家とは違う観点から日本という国号と天皇という称号の由来を解き明かしており、今後の必読書となること間違いありません。

不具

2018年8月4日

森安孝夫

~~~~~  
2018年7月16日配信分

森安通信 読者各位

先日の大阪北部地震に続いて西日本一円を襲った連続大雨は、予想を遙かに超える大災害になってしまいました。その上に連日の酷熱地獄ですから、本当に心が痛みます。災いを振り払う祇園祭もいよいよ本番ですが、無事にその役割が果たされるよう祈るばかりです。

国内ではオウム真理教の無差別テロ犯の死刑執行、国外ではタイのサッカー少年達が洞窟に閉じ込められた事件、スポーツ界ではサッカーのワールドカップ、テニスのウインブルドン大会と続き、そして国内では大相撲が始まっています。このように次から次へと大きなニュースがあったので、またもや陰に隠れてしまいましたが、バドミントンのインドネシア＝オープンでは男子シングルの桃田賢斗選手が世界ランク一位を破って優勝しました。テレビのニュースや新聞報道でも、大谷選手の復帰後初ホームランより小さくしか取り上げられなかったのは、誠に残念ですが、桃田が5月初旬のアジア選手権でリオ五輪の金メダリストを破って優勝し、下旬の中国相手のトマス杯決勝でも第一シングルスで勝ったのに続いて、今度の優勝は実に凄いことなのです。間違いなく

東京オリンピックでの金メダルに向かって突き進んでいます。 [これ以下は歴史学の話ですので興味のない方は遠慮なく無視してください]

さて今年3月18日に配信した森安通信で、993年に死去した遼王朝（=契丹帝国）の第6代皇帝・聖宗の王妃の墓から出土したガラス瓶やカップが、従来推測されてきたような西アジア産で海のシルクロードで運ばれ、宋王朝を経て輸入されたものではなく、中央アジアの西トルキスタン産で恐らく天山地方にあった西ウイグル王国経由の陸のシルクロードでもたらされたものであろうとする読売新聞の記事を紹介しました。その記事の元になった情報は牟田口章人・帝塚山大学教授によるものでしたが、この度、それに対応する正式な論文2本が、日本ガラス工芸学会の雑誌 *GLASS 62 (2018)* に掲載されましたので、お知らせします：牟田口章人ほか「中国内蒙古自治蕭氏貴妃墓出土ガラス器の調査と修復」 pp. 8-18；村串まどかほか「蕭氏貴妃墓および陳国公主墓から出土した遼代ガラス器の化学組成分析」 pp. 19-23. 例のガラス瓶は水差しなどではなく、超高価な香水である薔薇（バラ）水を入れた容器であるという艶っぽい結論が出ており、嬉しくなります。

ところで先日、帝塚山大学の市民大学講座の一環として山本孝文・日大教授による「古代韓半島と倭国を語る」という講演がありましたので、それを聴講しに行きました。山本教授は若くてハンサム、そして論文も緻密で、当然ながら講演も有意義な内容だったのですが、特に興味を引かれたのは朝鮮半島の三国時代では古墳・威信財・土器などの文化要素の違いが顕著であり、黄海側の百済では中国産陶磁器を威信財としたのに対し、日本海側の新羅では西アジアのガラス器が威信財となっているという指摘でした。朝鮮半島は中央を走る山脈を挟んで東西で気候風土が異なっており、日本海側は北方の草原ルートにつながり易い傾向にあるので、新羅でもてはやされたガラス器も、組成分析してみれば西アジアではなく中央アジア産と判明する可能性が高いように思われます。たとえ西アジア産であったとしても、海路での中国本土経由ではなく、中央ユーラシア経由の陸路で運ばれたと考えた方がいいと思います。

最後に注目したい新刊書を紹介します。高大連携の草分けとなった大阪大学歴史教育研究会のメンバーであり、2015年に発足した高大連携歴史教育研究会の呼びかけ人で、且つ歴史系用語精選案作成にも携わった矢部正明教諭より恵贈された長谷川修一・小澤実（編著）『歴史学者と読む高校世界史 教科書記述の舞台裏』（勁草書房、2018年6月、2500円）です。早速拝読しましたが、高

校世界史教科書の成立・検定・内容・誤解に関わる様々な問題点や裏話が平易な文章で綴られており、苦勞せずに面白く読めました。教科書に学問的な誤りがあってもなかなか訂正されない理由もよく分かります。山川出版社の『詳説世界史B』が50%以上の圧倒的シェアを誇る理由と背景も、矢部先生が担当した第12章だけでなく随所から浮かび上がってきます。本書は、今後世界史の教科書や概説書を執筆する予定の人には必読の文献です。全体から見えてくる私なりの結論は、忙しさにかまけて歴史学の最先端を学ぶ努力をしない高校教員に責任を押しつけるのではなく、入試問題を作成し、場合によっては教科書や概説書を執筆する大学教員の側にこそ、今後の高校世界史教育を少しずつでも改善していく義務があるということです。ましてや2022年からは高校の世界史が必修から外され、日本と世界の近代史を中心とする「歴史総合」のみが必修となります。古代史・中世史も含む「世界史探究」は選択科目になりますから、ますます履修者が減ることでしょう。高大連携歴史教育研究会に集った皆さんが中心になって作った世界史用語の大幅削減案がどれほど重要なのか、大学で外国の歴史を教えている方々にはしっかりと認識して欲しいものです。今のままではますます自分の首を絞めることになります。

もう一冊、新刊として小松久男・荒川正晴・岡 洋樹（編）『中央ユーラシア史研究入門』（山川出版社、2018年4月、3000円）がありますが、これはどちらかといえば専門家養成のためのハンドブックです。

不具 2018年7月16日 森安孝夫



2018年5月26日配信分

森安通信・号外

バドミントンのユーバー杯で日本が優勝しました！！これはテニスでいえばデビスカップ優勝に匹敵するとんでもない快挙なのですが、NHKのサタデースポーツではなんと数十秒の扱いで、何とも情けない次第です。

バドミントンの国別対抗団体戦は二年に一度あり、3シングルス・2ダブルスで争われ、先に3勝した方が勝ちです。女子がユーバー杯で、男子がトマス杯です。4年前の大会で女子は準優勝したのですが、優勝は37年ぶりです。た

だし37年前の大会には、後にバドミントン大国になる中国がまだ参加していませんでしたから、今回が実質的な世界一の優勝といっても過言ではありません。

実は今週、タイでユーバー杯とトマス杯が並行して行なわれていたのですが、男子も昨日（金曜）、前回優勝のデンマークとの準決勝に勝って、明日（日曜）に中国と決勝戦です。BS朝日で午後3時からずっと放映されますので、時間のある方は一目でも御覧下さい。バドミントンは世界最速のスポーツですから、初めて見た人はきっと仰天するでしょう。プロ野球は年間130試合もあり、大相撲だって6場所もあるのです。それに比べたら二年に一度の大会で決勝戦にまで進出した勇姿が見られるのは、まさに僥倖としか表現できません。

不具 2018年5月26日 森安孝夫

~~~~~

2018年5月1日配信分

森安通信 読者各位

中国の武漢で開かれていたバドミントンのアジア選手権で桃田賢斗選手がリオ五輪の金メダリストの諶竜（中国）を破って優勝しました。男子シングルスでは初の快挙です。賭博にかかわる不祥事で泣いた桃田が漸くに復活したわけで、日本バドミントン界にとってはこの上ない朗報です。一方、女子ダブルスでは、リオ五輪で金メダルに輝いた高橋・松友組（高松ペア）を福島・広田組が破りました。つまり日本選手が金・銀メダルを獲得したわけで、数年前までなら奇跡と言われたでしょうが、今やもう誰も驚きません。また先日は女子シングルの山口茜選手が、世界ランキング1位になりましたので、地元の福井ではおおはしゃぎです。今年は福井で国体が開かれます。

日本のバドミントンがこんなに強くなったのは、全てかつてのオグシオ・ブームを活用した（資金が増えた）日本バドミントン協会が、ジュニア強化策から取り組んだ成果であり、何事も長期的展望をもってやらねばならないという見本のようなものです。

それにひきかえ、日本の文化行政、特に大学行政はいったいどうしたことでしょう。最近ではノーベル賞学者やニュース解説の池上彰さん達が警鐘をならしているように、国立大学の予算が徐々に削減されており、基礎研究がやせ細

っていったって、将来の日本からはもうノーベル賞学者は出なくなる恐れがあります。超エリートと言われた高級官僚の劣化は、連日のマスコミ報道で皆さん御存知の通りですが、官僚の中ではエリート度の低い文部官僚がやってきたこの二十数年間の大学改革（法人化・大学院大学化など）はほぼ全て大学改悪でした。結果的には、彼らの天下り先が旧七帝大に増えただけです。私は東大の出身ですから、官僚になる人をたくさん見てきましたが、「こんな奴が官僚になって大丈夫か」と思うこともしばしばでした。確かに勉強だけは出来て、難関試験にも合格するのですが、視野が狭いだけでなく常識さえない人がいるのです。ただでさえ理系偏重の大学をさらに理系中心にしようなどという文部行政は、愚の骨頂です。

大阪大学には歴史も古典も必要ないと考えている理系の教授もいます。理系出身の企業人でも国際的に活躍している人にそういう馬鹿はいませんから、嘆かわしい限りです。そこで大阪大学文学部・文学研究科では、人文学の意義を改めて学内外にアピールするためもあって、昨秋に文化勲章と文化功労者の栄誉に浴された斯波義信・名誉教授（東洋史）と東野治之・名誉教授（日本史）をお招きして講演会と座談会「人文学の魅力を語る」を開きました。それが昨日でした。両先生とも今は日本学士院会員であります。かつて大阪大学で17年間教鞭を執られたのです。東洋史としてはこの3月に片山剛教授の最終講義とパーティーがあり、それと昨日とでたくさんの卒業生たちと懐かしい再会を果たすことができました。

懇親会では斯波先生の受業生代表として妹尾達彦・中央大学教授がスピーチされましたが、妹尾さんはつい先日、『グローバル・ヒストリー』（中央大学出版部、2018年4月、3000円）というとてつもない本を出されたばかりです。高校教育の現場で直ぐ使うのは無理ですが、高校社会科教員や大学で一般教養としての歴史を担当する皆さんにはおおいに参考にさせていただきたい内容です。ウォーラーステインの世界システム論が色あせつつある現在、それに替わる論が希求されていますが、それに応じるものです。斯波先生も妹尾先生も、歴史を大所高所から俯瞰する方向の優れた歴史家です。それに対して東野先生や私は、史料や遺物の細部にこだわり、**fact-finding**を積み重ねていく方法を好みます。もちろん重点がどちらにあるかの違いであって、両方とも兼ね備えなければ歴史学者にはなれません。

大は国家を動かす政党・官庁や大企業から、小は個人企業や町内会まで、あらゆる社会（会社も学校も警察や自衛隊も含む）のリーダーに求められるのは「教養」です。その教養の中核は、自国はもちろん外国も含めた人類遺産である「古典」と「歴史」なのです。日本で言えば、今はやりの語彙力とやらも当然その一部なのです。「古典」と「歴史」を結ぶのは決して近現代史ではありませんよ。古代・中世史なくして歴史学などありえないのです。

不具                      2018年5月1日                      森安孝夫

~~~~~

2018年3月18日配信分

森安通信 読者各位

3月1日の読売新聞に、中国の内蒙古自治区で発掘された遼帝国第6代皇帝・聖宗の王妃（993年没）墓より出土した複数のガラス器の成分が、ウズベキスタンで出土した9～10世紀の中央アジア産のガラスに近いことが判明したという記事が出ました。ガラスの専門家である中井 泉・東京理科大教授による広範な成分分析の比較検討を踏まえてのことです。一連の調査研究を指揮された牟田口章人・帝塚山大学教授によれば、「中央アジアのガラス器が草原の道を経て東に運ばれた」証拠になるということです。その記事の電子ファイルをこの通信メールに添付します。私もコメントを求められたので回答したのですが、その主旨は、（1）10世紀のサーマーン朝～カラハン朝支配下の西トルキスタンで生産されたガラス器が遼（契丹）帝国に達するには、当然ながら中間の東トルキスタンを支配していた西ウイグル王国を経由するはず、（2）西ウイグルから遼に到達するには、モンゴル高原の草原地帯を通過するゴビ（砂漠）北方ルートと、甘粛省北部にある河西回廊のオアシスの道から北中国を経由するゴビ南方ルートがあるが、当時の南方ルート地帯の複雑な政治情勢に鑑みれば、はるかに障害の少ない北方草原ルートが利用された可能性が大きい、というものでした。実際、私のライフワークである『古ウイグル手紙文書集成』に含まれる手紙には、商業目的で契丹へ行く者や「契丹へ（国家の）使者として行く者」が登場します。それらの手紙の文面からは、河西回廊の敦煌にあった王国や北中国の五代王朝などを経由するような雰囲気は全く読み取れず、やはりダ

イレクトに契丹へ向かったと思われるのです。とすればそれは現在のモンゴル国を経由する草原ルートしかありません。

ところで昨日は、帝塚山大学東生駒キャンパスで宇野隆夫教授によるソグドのカフィル・カラ遺跡の発掘報告会（副題：ゾロアスター教板絵の発見とシルクロード交流の十字路）に参加してきました。この浮彫板絵は、昨年11月3日の新聞各紙で報道されたもので、カフィル・カラ遺跡は8世紀初頭のサマルカンド王の離宮が焼失した跡ですが、板絵本体は6世紀くらいにまで遡るものようです。その板絵には箏篋（くご=ハープ）や琵琶や笛やタンバリンのような楽器がくっきりと浮き彫りされており、その形状が正倉院所藏品との比較で注目されました。その報告会も十分に有意義だったのですが、私にとって驚愕だったのは、牟田口教授からUSBメモリに入れていただいた大量の情報の方でした。

それを帰宅後に見たところ、3月1日の読売新聞に掲載された記事は、実は2月25日に奈良県の橿原考古学研究所で開催された「金の冠 銀のブーツ 遼代王妃墓の謎を探る」と題する学術成果報告会の内容の一部をごく簡単にまとめたものだったことが判明しました。その報告会は一般公開で誰でも参加できたようですが、どうやらPRは主に奈良県内に限定されたらしく、私は全く知りませんでした。2012年に大阪と東京で開催された「契丹」展にも、遼朝の王族・貴族の墓から出土した豪華な金銀器とか、贅沢な細工を施した巨大な木棺など中国の国宝級文物が展示されていて目を見張ったものですが、遼代考古学はその後もどんどん発展しているようです。先のガラス器を出土した聖宗の王妃墓の発掘が、2015～2016年に実施された内蒙古自治区の多倫県小王力溝にある遼代の遺跡発掘の一環ただだけでなく、これまでにいくつもの遼代墓から出土した染織品の比較研究によって、新たな知見が得られつつあるようです。染織品には金糸銀糸を織り込んだり刺繍したもの、「遼式緯錦（よこにしき）」の技法を用いたものが含まれ、最終的に金襴が誕生する謎に迫れるかもしれません。また染織に関する平安時代の日本と遼国との深い関連性も指摘されていますから、いずれ仏教文化における両国の結びつきも見直されることになるでしょう。

ところで前回の通信で短く言及した大阪市中之島の東洋陶磁美術館で3月25日までやっている「唐代胡人俑」展ですが、その展示物は甘粛省の慶城県で発掘された穆泰墓から出土したものです。東洋陶磁美術館の展示でも、またカタログでも一言もソグド人という言葉が出てきていないのは、恐らく元の

中文報告の執筆者に加え、日本語版カタログ編者の小林仁氏にもこの「胡人」は鮮卑人であるという思い込みが強く、ソグド人ではないかと疑ってみる余裕がなかったからでしょう。しかしながら吉田豊・京大教授と私の見方は、やはり墓主の穆泰は間違いなくソグド人であろうというものです。いわゆるソグド姓には穆氏も含まれます。我々にはもはやこれについて一文をものするつもりはありませんので、どなたか若い方がそういう視点で墓の出土品全体を見直しながら、墓誌本文の情報並びに関連史料を精査していただければ、北朝～唐代に東方に進出したソグド人について、また1つおもしろい論文が書けるのではないかと期待します。

不具 2018年3月18日 森安孝夫

~~~~~

2018年1月20日配信分

森安通信 読者各位

今年最初の通信ですが、3冊の本を紹介します。そのうち2冊は7～10世紀にマンチュリア（旧満洲）にあった渤海（ぼっかい）国の歴史研究に関わるものです。

まず荒野泰典／川越泰博／鈴木靖民／村井章介（編）『前近代の日本と東アジア 石井正敏の歴史学』（アジア遊学 214, 2017年9月, 勉誠出版, 2400円）ですが、これは渤海史・日渤関係史からスタートして、日本古代中世対外関係史の大家にまで成長し、多方面に数々の業績を残しながら、2015年に68歳で亡くなられた石井正敏・中央大学名誉教授を偲ぶ論文集です。広範な石井史学の到達点を知る絶好の道しるべになっているだけでなく、残された課題も指摘され、また随所で石井氏の人柄も語られる実にユニークな論文集であるゆえ、日本史・東洋史の専門家だけでなく高校社会科教員にとっても接しやすい内容になっています。

実は石井氏と私の間には浅からぬ因縁が有りました。同年代であり学界へのデビューもほぼ同時期だっただけでなく、満洲帝国が存在した第二次大戦の終戦までは盛んであったのに戦後は下火になった渤海研究を、戦後生まれの若手として再開したのが偶然にも我々2人だったからです。石井氏の渤海関係論文

が陸続と発表され始めるのは1973年からであり、拙稿「渤海から契丹へ——征服王朝の成立」（『東アジア世界における日本古代史講座7』学生社，pp. 71-96）が公刊されたのは1982年なのですが，実際に私が出版社に原稿を提出したのは1973年だったのです。様々な都合により9年間待たされたわけです。いつから我々の文通と論文抜刷の交換が始まったのか記憶は定かでないのですが，マルクス史学には親しまず実証史学を旨とするよく似た学風に互いに安心感があったことだけは確かです。

私が9年間待たされている間に，石井氏のほかに酒寄雅志・浜田耕策両氏が渤海史の専門家として登場し，1983年には後に渤海史の大家となる古畑徹氏の処女論文が発表されただけでなく，1980年代には日本史を含む他分野の専門家が渤海研究に参入するようになりましたので，私の渤海研究はストップしました。その後の1990年代には，渤海建国1300年というスローガンのもと渤海研究が一時的なブームになりましたが，拙稿「渤海から契丹へ」の存在は無視され，私はまったく蚊帳の外で寂しい思いをしたものです。

ところが昨年末になり，石井氏と共に我が国の渤海史研究のリーダーとなってきた古畑徹・金沢大学教授が，新著『渤海国とは何か』（吉川弘文館，歴史文化ライブラリー 458，奥付は2018年1月1日，1700円）を出版されました。私にも恵贈されましたので早速拝読したところ，1980年代以降に目覚ましい発展を遂げた渤海史の実証的研究の成果が存分に取り上げられているだけでなく，高句麗から渤海国（高句麗継承国家と自認）に至るマンチュリア（旧満洲）～朝鮮半島北部の約千年の歴史を中国・北朝鮮・韓国の三者が自己主張して奪い合い，現代の領土問題・民族問題に直結している点も踏まえ，渤海史を世界史の中でどう位置づけるかという著者の強い問題意識が披瀝された立派な概説書となっています。これまた高校社会科教員をはじめとする皆様に是非ともお薦めしたいものです。

私にとって嬉しかったのは，この古畑新著で拙稿「渤海から契丹へ」と拙著『シルクロードと唐帝国』（講談社，2007年；文庫版 2016年）が同時に取り上げられたことです。後者で私は，かつて中国史についてのみ使われた「征服王朝（遼金元清）」という見方をユーラシア史全体に及ぼして「中央ユーラシア型国家」という概念を提唱し，その源流は安史の乱勢力（後に半独立的な節度使の河朔三鎮から五代王朝へ）と東ウイグル帝国と渤海国の三者にあると主張したのですが，その萌芽は既に前者の概説論文「渤海から契丹へ」にあったの

です。この拙論は、私が20代の院生時代に西嶋定生（さだお）・東大教授より東アジアの中の日本を論じるシリーズの中で課題を与えられて執筆したもので、恐らく西嶋先生は御自身が提唱され当時の学界を風靡していた冊封体制論／東アジア世界論の中に渤海国がうまく位置付けられることを期待されたのでしょう。拙論は確かに西嶋説を補完しながらも、巨視的な結論としては全く別の方向に進んでしまったわけです。

もちろんこの拙稿には私自身の実証研究の成果は皆無であり、先行研究によってまとめたもの、すなわち他人の禪で相撲を取ったものであり、しかも厳しい枚数制限もありましたから、不十分なところだらけでした。それにひきかえ古畑新著は、その後の渤海研究の最新の成果をいかんなく採り入れたものであり、また西嶋の冊封体制論への評価と批判も十全になされています。そして私の説も批判的に継承してくれています。私は渤海の動向を考察する上で突厥・ウイグル・契丹・奚という内外モンゴリアに展開した遊牧民族との関係を重視してきたのですが、古畑氏の指摘した「唐が渤海を東夷ではなく北狄に分類していたという事実」にはこれまで気付いていませんでした。それだけでなく古畑氏の新著は、例えば「七五〇年代頃に渤海は、国家統合の原理を高句麗継承意識から、肅慎（しゅくしん）継承意識を核とする北方東夷統合意識へと明確にシフトさせた」とか「金は渤海を、高句麗の伝統の系譜ではなく、肅慎～靺鞨（まつかつ）の伝統の系譜に位置づけた」と述べたり、日本海は冬の季節風の時期以外は穏やかな「内海」で航海も決して難しくなかったと指摘するなど、全体として創見に満ちており、契丹・女真・満族史の専門家のみならず広く東洋史・日本史研究者にとって必読の文献となることでしょう。

紹介する3冊目の本は長野正孝『古代史の謎は「海路」で解ける 卑弥呼や「倭の五王」の海に漕ぎ出す』（PHP新書 968, 2015年, 880円）ですが、著者は船の専門家だそうで、歴史や考古学には素人ゆえおかしな誤解や単純ミスがたくさんあります。しかしながら古墳時代には潮流の激しい瀬戸内海がメインルートではなく、内海や潟湖を繋ぎ、随所で船を人力や馬力で陸上を曳く（いわゆる船曳の）日本海ルートこそがメインルートであったと主張している点は、実にユニークであり、それは古畑新著の最終章「海洋国家としての渤海国」の内容とも通底するものです。もしこの長野・古畑両氏の説が今後さらに検証されて確実になるならば、若狭や敦賀や越前三国の重要性も理解でき、ひいては

継体天皇出現の背景も理解されるようですので、故郷福井の英雄である継体天皇に興味を抱く私にはとても面白かったのです。

ところで拙著『シルクロードと唐帝国』の表紙を飾ったのはソグド人を表わす胡人俑の1つでした。目下、大阪市中之島にある東洋陶磁美術館で3月25日まで「唐代胡人俑」展をやっていますが、行って見たところガラガラでした。地味な展覧会ですので仕方ないと思いますが、逆に昨秋の京都国立博物館の国宝展では長蛇の列だった油滴天目茶碗が誰にも邪魔されずに一人でじっくり眺められるという利点もあります。

京都の東寺では毎月21日に弘法市が開かれ様々な骨董や商品が並べられますが、明日は初弘法です。普段でも東京の満員電車なみの混雑ですが、明日は21日と日曜が重なるため、大変な人出となることでしょう。

不具                      2018年1月20日                      森安孝夫

~~~~~

2017年12月18日配信分

森安通信 読者各位

今朝の新聞を見て驚喜しました。バドミントンの今年の世界一を決めるスーパーシリーズファイナル（ドバイ開催）で、またまた日本選手が大活躍したのです。女子シングルスでは、先日の全日本総合バドミントン選手権で長身の大堀選手と対決して逆転優勝したばかりの山口茜選手が、やはり長身で苦手とするリオ五輪銀メダリストのプサルラ選手（インド）を破って優勝しました。茜ちゃんは背が低いのです。女子ダブルスでは日本勢同士の決勝となり、先の全日本選手権で高橋・松友ペア（リオ五輪金メダリスト）を破って優勝した福島・平田ペアを、今度は全日本で決勝にさえ進めなかった米本・田中ペアが破りました。東京オリンピックに向けて女子の代表争いは大変なことになりそうですが、男子にも希望が見えてきました。かつて世界ランク2位になりながら例の不祥事でリオ五輪を棒に振った桃田が、先日の全日本選手権で優勝した武下に準々決勝で敗れたとはいえ、実績をかわれて全日本代表に復帰しました。全日本選手権は数日にわたってテレビ放映されただけでなく、先週には決勝戦すべてのハイライトが紹介されました。最近は大統領も卓球と並んでオリン

ピックで注目され、テレビで良く放映される御蔭でそのスピードが認識されるようになり、誰にも簡便なスポーツだなんて言わせなくなったと思います。やってみればどちらも野球やサッカー以上にハードなのです。

ところで本通信の前々号（11月5日配信）で、「今や江上波夫の騎馬民族征服王朝説（4世紀前半に渡来して倭人を征服）は否定されています」と書きましたが、その壮大な騎馬民族説は、敗戦でふさぎ込んでいた大方の日本人に活力を与えたというだけでなく、日本の騎馬文化の受容には4世紀の五胡と呼ばれる遊牧騎馬民族の南下に由来する北中国での争乱、及びそれに連動する高句麗の南下と結び付け、日本史をユーラシア史的規模で捉えた点で画期的であり、正当に評価されるべきものでした。文化勲章まで授与されたのは、それが認められたからだとも言えるでしょう。しかしながら江上説がもはや過去のものとなった現在において、我々には騎馬民族説に替わって「古代日本文明の源流と形成」を大所高所から再構築すべき課題がつけつけられているのではないのでしょうか。4世紀末～5世紀に大陸から朝鮮半島を通して相当数の馬が日本列島に入り、5世紀後半には騎馬文化が定着したことは確実です。私も拙著『シルクロードと唐帝国』などで、中央ユーラシアの遊牧騎馬民族が世界史を左右する原動力のひとつであったことを主張してきた関係から、中央ユーラシアの動向が日本古代史に具体的にどのように影響したのかが、気になり始めました。

そういうわけで、私の先月の金沢・能登・若狭調査旅行（2017年11月16日～19日）及び東京出張（同11月21日～22日）は、古墳時代後期から平安朝前半期までの日本古代史を考える上で、極めて有意義なものでした。金沢では日本の渤海史研究を牽引している古畑徹・小嶋芳孝両教授より渤海史研究の現状を伺い、能登へは小嶋教授の車で案内していただき、七尾市の能登国国府・国分寺跡、七尾市能登島の高句麗系の石室のある須曾蝦夷穴（すそえぞあな）古墳、並びに渤海使帰国の際の滞在地であった福良津（ふくらつ；旧羽咋郡富来町、現志賀町の福浦湊）に案内していただきました。そして若狭では、伽耶・百濟・新羅などからの渡来品、もしくはそこからの渡来人と深く関わる出土品、及びそれらを内包していた古墳（主に前方後円墳）を、若狭地方の考古学の第一人者である入江文敏氏に解説して頂きながら見て回りました。

小嶋芳孝教授に案内して頂いた福浦湊（福良津）は小さいながらも天然の良港で、しかも能登には巨木が豊富にあったでしょうから、渤海使一行を乗せるに十分な大きさの帆船を作る造船所にも適していたでしょう。私は福井県坂井

市三国町の出身ですから、京から帰国する渤海使は、越前敦賀から出港し、三国湊に立ち寄り、それから福良津に達し、そこで風待ちをして日本海を北上しながら渡ったものと思っていたのですが、小嶋教授は京から福良津までは、後の江戸時代の朝鮮通信使と同じように、国家の権威を人々に見せつけるために敢えて陸路を取ったのではないかとお考えのようです。いずれにせよ、かつて高句麗・渤海と日本を往来する船は、往路では旧満洲の東岸から朝鮮半島の東岸沿いに南下し、帰路では日本列島の日本海沿岸を北上したとみなされていたのに対して〔cf. 帝国書院編集部編『地歴高等地図——現代世界とその歴史的背景』平成21年版，14頁〕，日本海のだ真ん中を横断するルートを提唱されたのは、小嶋教授でした〔cf. 北陸電力株式会社地域総合研究所『越の海，波濤の道——古代国際交流の拠点・北陸』1994年，36頁〕。その大胆さにかつて私は度肝を抜かれたのですが、現実には北朝鮮からやって来た小型の木造船が大和堆で密漁し、一部が東北～北陸の日本海側に次々に漂流してきている事実は、皮肉にもその可能性を実証してくれているようです。

一方、東京では学習院大学東洋文化研究所において瀬間正之・上智大学教授の講演「高句麗・百済・伽耶の建国神話と日本」を拝聴したのですが、具体的にはまず「<百済=倭>漢字文化圏」を提唱した経緯を簡単に説明した後、旧満洲から朝鮮半島，更に日本列島にまで広がった日光感生神話と卵生神話の系譜，並びにその合体の様相を詳細に解説されました。私は先の若狭旅行で、日光感生神話の一種であるアメノヒボコ伝説（『記紀』ではその主人公の天日槍は新羅の王子とされる）に関わる若狭町の御方（みかた）神社と美浜町の須可麻神社を見学してきただけでなく、初対面の入江氏から、アメノヒボコの遍歴コースである播磨→近江→若狭→丹波→但馬の地域が、新羅から伝えられた須恵器の新器種である角杯（言うまでもなく中央ユーラシア由来）の分布地，並びに新羅系渡来人とされる秦氏の居住地ともオーバーラップしているという学説を伺ったばかりでしたので〔cf. 入江文敏『若狭・越古墳時代の研究』学生社，2011年，第II部第一章「角杯型土器考」；同「特殊須恵器の分布とその背景——若狭・越から出土する器種を中心にして」，『河上邦彦先生古稀記念論集』2015年，pp. 57-77〕，余りの偶然に驚きました。因みに、若狭で泊まった民宿は、渡来人・秦氏の後裔である秦家が経営するもので、ズワイガニとフグを食べきれないほど出していただきました。

本通信が今年最後のつもりです。3月に母が亡くなりましたので、恒例の元旦の森安通信での御挨拶は控えさせていただきます。良い年をお迎え下さい。

不具 2017年12月18日 森安孝夫

~~~~~  
2017年12月2日配信分

森安通信 読者各位

まず最初に御願いです。坂本龍馬などを高校の教科書から抹殺するのかという方向で新聞・テレビ・週刊誌にまで取り上げられる騒ぎになった高大連携歴史教育研究会の用語精選案に対し、その責任者の一人であり、かつての同僚である桃木至朗教授から次のような要請がありました。

「高大連携歴史教育研究会は世界史・日本史それぞれにおいて2000語以内に絞る用語リストの提案と並行して、高校世界史・日本史用語の精選の方向性や基準についてのアンケート（日本学術会議高校歴史教育分科会・日本歴史学協会の三者連名）を実施しており、

[http://www.kodairen.u-ryukyu.ac.jp/new/new\\_94\\_faq.html](http://www.kodairen.u-ryukyu.ac.jp/new/new_94_faq.html)

文科省がその集まり具合に注目しています。用語リスト案については、教員・専門家の意見や三者アンケートの結果を見て、今年度末に確定案をつくる計画です。上のウェブサイトからアンケートやその説明、用語リストなど全部ダウンロードでき、アンケートは紙媒体の郵送、添付ファイル、ウェブの直接入力のどれでも回答できます。個人で（やむをえない場合は匿名でも）回答できます。」

以上の通りですので、なにとぞ御協力の程、宜しく御願ひ申し上げます。世界史教科書の用語を現行の約半分の2000語にせよというアイデアは、私自身もかねてから主張してきたところです。アナログ人間の私もウェブサイトでアンケートに回答してみましたが、5分もかかりませんでした。

目下、全日本総合バドミントン選手権の最中であり、NHKのBS放送でも一昨日から放映され、昨日は準々決勝を4時間、今日は準決勝を3時間も見せてくれましたので、ずっとテレビにかじりついていました。以前はこんなに長時間放送してくれるなんて考えられなかったのに、オリンピックでメダルが取れる

ようになって変わりました。バドミントンをやっている者にとっては実にありがたいことです。明日はいよいよ決勝で、午前10時からの放送です。女子シングルスでは福井県の星・山口茜ちゃんが残っていますし、女子ダブルスでもリオ五輪金メダリストの高橋・松友ペアが残っています。ただ、男子シングルスの桃田選手が準々決勝で敗れてしまったのは、残念でした。

不具 2017年12月2日 森安孝夫

~~~~~

2017年11月5日配信分

森安通信 読者各位

一昨日の文化の日に、斯波義信・大阪大学名誉教授が皇居にて天皇陛下より文化勲章をお受けになられました。斯波先生は今は、創立以来現在に至るまで三菱グループと格別御縁のある東洋文庫の文庫長でいらっしゃいますから、大阪大学東洋史関係者にとっても三菱関係者にとっても、真におめでたいことあります。12月初旬には先ず東洋文庫で、榎原稔・東洋文庫理事長（元三菱商事社長）や池田知久・東方学会理事長らを発起人とする小規模な祝賀会（会場が狭いため）が予定されておりますが、今後諸方面にてお祝いの会が企画されるものと思われます。

さて、恒例の奈良国立博物館の正倉院展の会期もあとわずか（13日の月曜まで）となりましたが、今年は京都国立博物館の国宝展と重なっているため、例年ほどの酷い混雑ではありません。先日、私が訪れたのはたまたま台風の日の夕方遅くであったためガラガラの状態で、まるで陛下の行幸のような気分で見学できました。正倉院展とは長い付き合いですが、こんなことは初めての経験です。

今年は正倉院展の内容が報道陣に発表された日に、読売新聞社からコメントを求められましたので、箜篌（くご）に言及しました。これは豎琴すなわちハープの一種であり、新疆ウイグル自治区のトゥルファンにあった高昌故城の壁画やクチャ（亀茲・庫車）のクムトラ千仏洞の壁画に描かれていましたが、原物としては正倉院に破片が残っているだけでした。箜篌は日本漢字音で素直に読めば「くこう」ですが、それが訛って「くご」になりました。古代ウ

イグル語ではqungqau（クンカウ）と呼ばれていますが、それはまさに唐宋代の漢語の発音と合致します。980年代の宋朝の使者・王延徳が西ウイグル王国を訪れたときの旅行記にも箏篋が見え、元代の漢文史料ではウイグルの箏篋は「二十弦」であったと言われています。それゆえ、今度の正倉院展で本物の破片と並べて展示している推定復元品は、形状と弦の数などはほぼ正鵠を射ているものの、ウイグルの壁画と比較してみると全体的にはいささか大きすぎるような印象を受けました。シルクロード・ファンにとって今回の目玉は、なんと言っても生命の樹と雄羊の組み合わせモチーフの「羊木騰纈（ろうけち）屏風」とガラスの深い緑色の「緑瑠璃（るり）十二曲長杯」でしょう。やはり素晴らしいです。

一方、京都国立博物館の国宝展には二度行きましたが、いずれも油滴天目茶碗に長蛇の列ができていました。ところがシルクロード文化の花形である法隆寺蔵の「四騎獅子狩文錦」は実に簡単に見られました。巨大な織機で織られたに違いない広い織り幅と大きくて見事な連珠文、そして連珠文の中に納まっている獅子を狩る騎馬武者の精巧さは、とても織物とは思えず、まさに眼福でした。

今月の26日（日）まで高崎市の群馬県立歴史博物館で開催されている「海を渡って来た馬文化」展には、9月末に行ってきましたが、そのすごさにも圧倒されました。今や江上波夫の騎馬民族征服王朝説（4世紀前半に渡来して倭人を征服）は否定されていますが、4世紀末～5世紀に大陸から朝鮮半島を渡って相当数の馬が日本列島に入ってきたことだけは確実であります。しかし20世紀には出土した馬具によってしか研究できなかったのに、21世紀になって馬の遺体まるごとや歯や骨格がどんどん発掘されるようになったのです。「海を渡って来た馬文化」展は、「日本のポンペイ」と言われる群馬県榛名山東麓の火山灰の下に埋もれていた諸遺跡を発掘した成果を中心に、大和朝廷の官営牧場であった大阪の河内牧跡から出土した馬の遺体も展示し、更に馬の復元までしています。そのカタログは非常に優れたものであり、5世紀前半に日本中に馬が広がり、5世紀後半に馬の生産が盛んとなった様子が伺えます。余裕のある方には、是非とも見学に行かれることをお勧めします。

不具

2017年11月5日

森安孝夫

~~~~~

2017年8月4日配信分

森安通信 読者各位

私の恩師の一人であった榎一雄・東大教授も、先日亡くなられた大先輩の岡田英弘教授も、中央ユーラシア史の専門家でありながら日本史にも深い関心をお持ちで、お二人とも邪馬台国論争にさえ参加されました。私は高校時代から日本史はスケールが小さいと感じており、あまり好きにはなれず、お二人に比べれば日本史への関心度はきわめて低かったのですが、それでも日本人にとって日本史抜きの世界史などありえないわけで、近年では少しずつ日本古代史に関心を抱くようになりました。しかも阪大定年後に特任教授として3年間奉職した近畿大学では、日本古代文化史の授業も担当する必要に迫られました。そして去年、出身地の福井県坂井市三国町で講演会をやって欲しいと要請があったのを機に、故郷の英雄ともいえる継体天皇のことを皆さんにできるだけ学問的に紹介しようと思い定め、半年以上前から準備を始めました。

その最初の段階で、今の日本史学界では、継体天皇の即位前の本拠地は越前三国ではなく北近江であるという説の方が有力になっていると知っていささかショックを受けましたが、勉強していくうちに、どちらとも言えないぞという気持ちが強くなってきました。いずれにせよ、即位前の継体天皇を支えた越前ないし北近江の豪族は、大陸からの文物や情報を入手するために必ずしも中央の大和朝廷を通していた（瀬戸内海ルート）のではなく、独自に日本海ルートを利用して朝鮮半島と交流していたに違いないという確信を抱くに至りました。ところが既に似たような考えが日本古代史の田中史生（ふみお）氏によって出されていることを、つい最近になって知りました。それが田中史生『越境の古代史』（角川ソフィア文庫、2017年5月刊、800円）です。

実は本書は2009年に筑摩書房から新書として出版された『越境の古代史—倭と日本をめぐるアジアネットワーク』の改訂版だそうですから、私が講演準備をする過程で単に見落としていたのです。ただし本書では私が着目した「胡床（こしょう）」には論及がありませんでした。『日本書紀』でこの胡床が現われる最初は、巻17の継体天皇擁立に関わる場面なのです。先代の武烈天皇が崩御された時、継嗣がなかったので、大和政権中央の大臣（おおおみ）・大連（おおむらじ）たちが相談した結果、越前にいた男大迹王（おほどのおう＝後の継体天皇）に白羽の矢が立ち、使者が送られることとなります。原文の現代

語訳によれば、「臣・連らを遣わし、節を持ち乗輿を整えて王を三国にお迎えした。お使が兵備を固め威儀を整え、先払いを立てて突然に到着すると、男大迹天皇は平然と胡床に坐し、侍臣を整列させて、すでに帝王のようなお姿であった」（中公クラシックス『日本書紀 II』2003年、182-183頁）。即位前の継体が、越前（or 北近江）で中央からの使者を迎えたとき「胡床」に座っていたという記事は事実として疑う必要はありませんが、胡床とは折り畳み式で移動に便利な椅子のことです。そんなものは当時の日本にまだ普及していませんでした。「胡」という字が付いているこの「胡床」という椅子は、騎馬文化と同様に中央ユーラシアの遊牧民族が東アジアに伝えたものであり、大陸文化を体現するものなのです。そんな珍しい最先端の文物を即位前の継体が使っていたのは、きっと大陸と直結していたからに違いないと考えられるのです。私も田中氏と同様に、和歌山県隅田（すだ）八幡宮伝来の人物画像鏡銘文を根拠に、男大迹王と百済の武寧王とは個人的に密接な繋がりがあったと推測しました。男大迹王は一時期、朝鮮半島に滞在していた可能性さえあるのではないかと思います。そうであれば、彼自身が胡床を持ち帰ったとしてもなんら不思議はありません。なお『日本書紀』では胡床を「あぐら」とよんでいます。「あぐら」即ち現代の胡座は坐り方（坐法）であって坐具ではありませんから、当時は坐具である折り畳み椅子に、現代のように足を垂らして坐るのではなく、椅子の上であぐらをかいたようです。

田中史生『越境の古代史』の「はじめに」では「列島古代史に根深く、また越境的にからみつくアジアのネットワークを、積極的に拾い上げてみる」と宣言し、序章ではまず影響を受けた先行研究として西嶋定生（さだお）の東アジア世界論と石母田（いしもだ）正の国際的契機論を取り上げます。そしてその両論が日本史学界に果たした大きな功績を認めながらも、1990年代からはその問題点や限界性が次々と指摘されるようになったことに言及し、序章の最後で本書の視座が示されます。すなわち日本列島を含む東アジアの古代史を、民族史や一国史の相互関係史としてとらえるのではなく、国境を越えた多元的・多層的な結びつき（ネットワーク）のなかでとらえ直すというものです。空間は日本列島、琉球列島、朝鮮半島、中国大陸に及び、時間は3世紀から11世紀までをカバーしますから、本書の前半では言うまでもなく「渡来人」が大きく取り上げられます。西嶋の東アジア世界論の三本柱となっている漢字文化・漢文仏教・律令制のうちの前二者は、特に渡来人によって倭国にもたらされたもの

であり、主に百済経由の漢文仏教とはいえ、日本仏教の元祖的存在とされる聖徳太子の師匠は高句麗人だったのです。なお、我々が学生時代にはその存在を疑わなかった「任那（みまな）日本府」など今やまったく雲散霧消しています。またこの点については別に、高田貫太『海の向こうから見た倭国』（講談社現代新書、2017年2月刊、880円）をお薦めできます。

ところで聖徳太子など存在しなかったという議論は以前からあり、それは極端としても聖徳太子という呼称は後世のものだから正しくは厩戸王・厩戸皇子（うまやとのみこ）とすべきだという議論が最近また新聞紙上で話題になりましたが、まことにタイムリーな本が出ました。それが東野治之『聖徳太子——ほんとうの姿を求めて』（岩波ジュニア新書、2017年4月刊、880円）です。東野教授はかつて阪大で同僚だったこともあり、今や日本学士院会員ですが、「この本で書いたことのほとんどは、私がいままで研究してきたことをもとにして」と明言されている通り、学問的良心に基づいた概説書です。ジュニア向けというのは、賢い中高生なら読めるというレベルにまで分かりやすく丁寧に書いてあるというだけで、学問的水準が低いというわけではありません。結論だけ言えば、東野氏は聖徳太子は実在したとする説に与（くみ）していますが、その根拠は磐石とはいかないまでもじゅうぶん信頼できるものです。その一方で、聖徳太子にまつわる様々な伝説とか、法隆寺建立は聖徳太子の怨霊を鎮めるためなどという作り話などはばっさりと切り捨てています。そして太子が推古天皇の摂政として外交も主導し、小野妹子を遣隋使として派遣したというかつての通説も完全に否定しています。有名な「日出ずる処（ところ）の天子、書を日没する処の天子に致す。恙（つつが）無きや」で始まる国書を見た隋の煬帝（ようだい）が無礼千万として怒った理由も、全世界に一人しかいないはずの「天子」を東方の野蛮国である倭の君主が使った点にあったとします。「日出ずる処」とは単に東方、「日没する処」とは西方の意味であって、その典拠は仏典の『大智度論』にあるというのも、東野氏がかつて専門論文で主張したところです。とはいえ、実は別の観点から、ハンガリーの東洋学者エチェディも「日出ずる処＝東方」、「日没する処＝西方」という見方を1984年の論文で出していました。

高田貫太氏の本の内容にはほとんど触れられませんでした。以上で紹介した三冊の本には、現代の日本・韓国・北朝鮮・中国の国際関係をより良い方向に持っていくためのヒントが詰まっています。いずれも、中等学校の歴史教育

は近現代史だけでいい、という風潮に抵抗する私の姿勢を後押ししてくれるように感じます。酷暑の夏に、どれか1冊でも手にとって見られることをお勧め致します。ひとりよがりなナショナリズムやヘイト・スピーチをなくせる契機は、中学・高校の歴史教育、もしくは大学の一般教育でしか生み出せないのです。

不具                      2017年8月4日                      森安孝夫

~~~~~

2017年7月11日配信分（一部のみ対象）

森安通信・号外

今やバドミントン界だけでなく日本のスポーツ界全体でアイドル的存在となった高橋礼華・松友美佐紀ペアですが、その二人だけをテーマとする本が出ました。タイトルはずばり『タカマツ』（ベースボール・マガジン社、2017年7月発行、1200円）ですから驚きです。バドマガの特集号のようで写真がふんだんにあり、二人の幼少時から現在に至るまでの軌跡をそれこそ徹底的に追跡しています。御両親はもちろん、ジュニア時代・中高時代の恩師たち、日本ユニシスや全日本の指導者たちの話で二人の性格や足跡を振り返りつつ、オリンピックでの金メダルに至るペアが生み出された背景が浮かび上がるようです。森安楽人は79頁のコラムと、84～87頁の世界ランキング・システムの解説を担当しています。心強いのは、タカマツ・ペアが東京オリンピックでも金メダルを獲得することを目標に定めたと言っている点です。

~~~~~

2017年6月29日配信分

森安通信 読者各位

先日、高校世界史教育にも大きな影響を与えてこられた世界的モンゴル学者の岡田英弘教授がなくなられました。岡田教授は歴史学の根幹は文献史学であるという信念をお持ちでしたが、私もそれと同意見です。それに対して、文献

史料には往々にしてウソが混じっているから、ウソをつかない考古資料に基づく考古学を文献史学に引けを取らない地位にまで押し上げようという気鋭の考古学者がいます。それが岡田世代の次の次の世代の日本のモンゴル学を牽引する白石典之・新潟大学教授です。その彼が、長年にわたり公費を注いだモンゴル国での発掘作業と並行して、何冊もの専門書を単著や共著として出版した後、社会貢献の意味も込めて一般読書人に向けて書き下ろしたのが、最新刊の『モンゴル帝国誕生—チンギス・カンの都を掘る』（講談社選書メチエ 652, 2017年6月刊, 1650円）です。世界史を文字通りの意味で初めて成り立たせたのがモンゴル帝国であることは、岡田英弘・杉山正明両教授が主張してきた通りですが、そのモンゴル帝国の原型はほとんど全てチンギス時代に形成されていたのです。とはいえチンギス・カンの実像は東西の文献を駆使してもなお謎だらけでした。そこに考古学をハブとして、気候学・金属学・放射性炭素年代測定法をはじめとする自然科学や文献史学・地理学・文化人類学などの知見を結び付け、なにゆえにチンギス・カンが一代であるような偉業を成し遂げたかを追究し続けてきた成果が本書に凝縮されているのです。因みに彼が発掘の指揮を執ったアウラガ遺跡が、モンゴル帝国の最初の首都であったことは、今や学界では常識となりました。高校教科書にも載っており、世界遺産にもなって有名なカラコルムは二代目のウゲデイ（＝オゴタイ）以後の首都なのです。

彼は私より15歳年下であり、彼がモンゴルで現地調査を開始したばかりの若い頃に発表したモンゴル帝国前史の論文にコメントを求められたことがありました。おそらく、相当の自信があったのでしょうが、当時阪大助教授であった私は「張さんの期待を込めた喝！」ではありませんが、割と率直に辛口の意見を述べた覚えがあります。あれから20年以上経ちましたが、学問的な批判に対して自己弁護するのではなく、それを正面から受けとめて克服し、今や世界的に注目される学者になった彼の成長ぶりは、私の期待を遙かに上回る目覚ましいものです。とにかく、高校社会科教員はもちろん、皆さんにお勧めしたい本です。本書によって日本のモンゴル学、ひいては内陸アジア学が世界のトップレベルにあることも同時に分かりいただけることでしょう。

ところで私はこの6月13日に、東京の日本プレスセンタービルで「世界史上におけるトルコ民族—突厥と古代ウイグルを中心に」と題する講演を行ないました。その主宰者はイスラム経済研究会であり、日本にも忠実にラマダーンの断食を実行する敬虔なムスリムのいることを目の当たりにして、一種の感動を

覚えましたが、本講演ではモンゴル高原から中央アジアの東西トルキスタンにわたる一帯が、いかに世界史的意義を持っていたかを論じました。西アジアから中央アジアの乾燥地帯と、モンゴルの乾燥地帯は一続きであります。私の講演の主役はトルコ民族であり、白石本の主役はモンゴル民族です。しかしトルコ民族の故郷はモンゴル高原であり、トルコ民族とモンゴル民族は元来隣接して住んでいたアルタイ語族で遊牧騎馬民族でした。トルコ民族の世界史的発展を考える上でも、私は白石氏の専門研究書から多くを学んできましたが、最新本の最後で白石氏は歴史学・考古学のもつ現代的意義にまで言及しています。すなわち、現代では貧困と武力紛争に苦しむ乾燥地帯が、かつての四大文明からアケメネス朝ペルシア・ササン朝ペルシア・アッバース朝、そして匈奴・鮮卑・突厥・ウイグル・契丹・モンゴル帝国・オスマン帝国のように世界史をリードした時代の輝きを取り戻す智慧を、チンギス・カンの偉業を生み出した確固たるヴィジョン、戦略の的確さ、戦術の巧みさの中から読み取ることを提唱しているのです。

総体として白石本には随所に卓見が見られますが、ただ敢えて苦言を呈するとすれば、様々の面でモンゴル帝国の先駆者となった西ウイグル（天山ウイグル）王国への言及がほとんどないことです。この点は、もしかしたらウイグル古代史を専門とする私に下駄を預けられたのかもしれませんが。

話しは変わりますが、今年の5月14日に奈良の当麻寺で、年に一度の練り供養を見物してきました。当麻寺にはこれまで何度も行きましたが、練り供養を見られたのは初めてです。このお練りは、中将姫が現し身のまま成仏したという浄土信仰の伝承を再現する行事であり、阿弥陀如来の使者として観音・勢至・普賢の3菩薩をはじめとする28菩薩が中将姫を迎えに来る様子を、当麻曼荼羅のある本堂と、中将姫がいるとみなされるお堂との間に懸けられた長い板橋の上で、菩薩の金色のお面をすっぽりと被り、金襴の意匠を着た人々が演じるものです。晴天だとお面の中の温度が上昇し、暑さで熱中症になる人もいます。金堂・講堂にある国宝や重文の仏像もゆっくり見学した上に、住職による当麻曼荼羅の複製を使った絵解きも拝聴できました。なお、この絵解きは敦煌文書に頻出する「変文」と通じるものであり、その変文の「変」には「図像・塑像・絵画」という意味のある事が辛嶋静志・創価大教授の新論文によって明らかになりました。だから「地獄変」というのは人々を仏教に深く帰依させるための「地獄絵巻」なのですね。当麻曼荼羅の絵解きが為されるのも今では年

に一度のことだそうです。また京都・知恩院の奥の院という位置づけの当麻寺塔頭・奥院では法然像まで御開帳になっており、一目拝見できましたので、実に有意義な一日でした。

前回の通信でお伝えした東大寺二月堂の修二会の後、初めて能「井筒」も見せていただきましたし、今年の私には初体験が続いています。奈良で快慶展、大阪でクラナハ展、東京でブリューゲル展も見ました。

不具 2017年6月29日 森安孝夫

~~~~~

2017年3月18日配信分

森安通信 読者各位

前回配信から余り時間が経ってなくて恐縮なのですが、今回は「お水取り拝見記」を送信します。仏教文化に興味のある方のみお読み下されば幸甚です。ただ司馬遼太郎はお水取り行事全体を「日本を日本たらしめている文化」と評したそうですが、私の一夜限りの体験ではそのようには感じられませんでした。

お水取り拝見記

三月上旬の奈良を彩る風物詩として有名な「お水取り」の正しい名称は修二会（しゅにえ）です。修二会はもともと旧暦二月に行なうものであり、予備行事は今でも二月から始まりますが、主要行事は現在の暦では3月1日から14日間行なわれるのです。その14日間のなかでも、二月堂の下方にある井戸（若狭井わかさい・関伽井あかい）から水を汲んで二月堂にまで運ぶ本当の「お水取り」が行なわれるのは12日目だけです。その12日目に我々一行8人（男女4人ずつ）は二月堂の内部に入る特別待遇で見学する幸運に恵まれました。

世間で「お水取り」と言えば、二月堂の外側にテラス状に張り出す欄干（らんかん）を走る大松明（おおたいまつ）ばかりが有名ですが、あれは毎夜二月堂内に入る修行僧（練行衆）を、堂下の参籠（さんろう）宿所という合宿所から石の階段を登って二月堂入口にまで案内するための明かり取りの提灯（ちょうちん）のようなものであることを、今回初めて知りました。毎晩最初のこの行事を松明上堂というそうです。それでも、その松明上堂用の大松明＝籠松明

(かごたいまつ) できえ、籠の直径が12日目は他の日より大きいのだそうです。タクシーの運転手によれば、12日目は直径が80センチほどであるのに対して、他の日は60センチくらいだそうです。籠松明の下は一本の太い竹竿ですが、それを抱えて欄干を走るの一人ずつで、その役目は僧侶ではなく童子と呼ばれる俗人であり、それには寺院関係者ないしその縁者が毎年選ばれるそうです。私はあれも僧侶だと思い込んでいました。なお、12日目の大松明は11本あるため、欄干の真下に早くから陣取った人たち（千人くらいか？）は移動する必要がありませんが、その外側に待機する2万人弱の観衆は、機動隊の誘導でゆっくりと移動せねばならず、自分たちの順番が来ると前進していずれかの大松明が走る光景を歩きながらカメラに納めておりました。我々は防寒対策が万全であった上に、報道関係者が陣取る特等席に入れていただきましたので、11本全てを、1時間ほどかけてゆっくり見物できました。そこで気付いたことがあります。お水取り行事のハイライトとして、二月堂の外側の欄干を走り抜ける大松明の写真がよく新聞や雑誌に掲載されますが、その様子はいかにも火柱が横に繋がり、下に向けても瀧のように流れています。しかしあれはシャッタースピードを落としてゆっくり撮影した結果であって、実際の様子とは随分違っていました。写真は嘘をつくというのを実感した次第です。

以前からお水取りは「火」と深い関係があり、それゆえペルシアのゾロアスター教（拝火教）との関連まで取り沙汰されていたので、てっきりその火とは欄干を走る松明だと思い込んでいましたが、実際は全然違いました。お水取りで最も大事な「火」とは、12日目、13日目、14日目（最終日）の3回だけ毎夜の行事の最後の方で実施される「だったん」の火でした。「だったん」の漢字表記は「達陀」の2文字それぞれに口偏が付いたものですから、本来なら「だった」と発音する外来語（特にインドの梵語）を表わしていたはずですが。その「だったん」とは、二月堂の本尊である秘仏の十一面観音を安置する内陣に毎夜籠もる練行衆（れんぎょうしゅう）が、独特の形をした大きな松明を燃やして、内陣内部の狭い回廊を走り回り、内陣の正面にある礼堂の前に来ると立ち止まって、「だったん帽」という金襴（きんらん）製の防火帽のような不思議な物を被った火天役と水天役の練行衆が掛け合いで踊るような動きをして、大松明から大量の火の粉を散らすものなのです。その時、他の練行衆による鈴や法螺貝（ほらがい）の音が響き渡り、幻想的な雰囲気になります。この時以外のほとんどの時間は、練行衆の籠もる内陣と、練行衆以外の僧侶たち（高僧

も含む) 及びその左右で見物する一般拝観者のいる礼堂との間は、薄い麻布のような幕で仕切られていて、内陣の様子は影絵のようにしか見えないのですが、「だったん」の時だけは仕切りの幕が巻き上げられ、その真下で火の粉が撒き散らされるのです。東大寺が出している説明書によれば、「だったん(達陀の2文字それぞれに口偏)」の原語は、サンスクリット語で「焼き尽くされる」を意味するダグダの方言のダッタとみなす説が有力であり、人間の犯す様々な罪過や、その元となる煩惱(貪欲・嫉妬・怒り・無知蒙昧など)を全て焼き尽くすための行事であるようです。

なお、二月堂内に入ることを許される特別待遇の一般拝観者は、300~400名くらいでしょうか。どうやら東大寺を支える「講」のような団体があって、そこに属している人たちが大部分のようでした。それでも礼堂に居並ぶ僧侶たちの左右に侍ることができるのはせいぜい100人足らずであり、それ以外の人は内陣を取り巻く回廊や、さらにその外の東西南北の局(つぼね)で格子越しに見物・聴聞することになります。局には女性も入れますが、それより内側は女人禁制でした。とはいえ、「だったん」の時だけは礼堂の方が特等席になりますが、それ以外の長い時間は、内陣の外側の回廊部分や局にいる方が、格子越しに内陣の練行衆の様子がよく見えてかえってよい場所だと思います。

そもそも修二会の目的は、生きていてだけで我々が日常犯しているさまざまな罪過を本尊である十一面観音の前で懺悔する「十一面悔過(けか)」という奉仕にあるそうですから、私の専門とするマニ教の教義と似ていなくもありません。罪の最たるものは殺生ですが、それには漁業・狩猟だけでなく農業さえ生き物を殺す罪に含まれるので、生きるための労働をしている人々は全て悪人と見なされるのです。マニ教はゾロアスター教と深い関わりのある「光」の宗教であり、「光」と「火」は通じ合いますが、だからといって倉卒に修二会をマニ教と結び付けるわけにはいきません。なぜなら752年の東大寺大仏開眼の年に始まる「十一面悔過(けか)」は個人のためではなく、鎮護国家・五穀豊穰・万民快樂などを願うものだったからです。

12日目、13日目、14日目(最終日)の3回だけ行なわれる「だったん」ですが、12日目が一番遅い時間となり、始まりが午前3時で終わりが午前4時でした。なぜなら12日目には、松明上堂と「だったん」の間に本当の「お水取り」があるからです。二月堂の下方にある井戸(閼伽井)の水は、伝説では福井県の若狭から地下を通して送られてくることになっています。若狭の小浜市神宮

寺では3月2日に「お水送り」の行事があり、住職が送水文を読み上げ、お香水（おこうずい）を遠敷（おにゅう）川に流すと、そのお香水が10日後の3月12日に東大寺の「お水取り」で汲み上げられるというわけです。伝説にもいくらかの真実が含まれていることが多いですから、この場合は、大陸文化が奈良に入るルートとして日本海・若狭ルートが存在したことを強く示唆しています。若狭井で汲み上げたお香水は振り分け棒の両端に付いた2つの桶に入れて運ばれますが、それを担ぐ僧は御幣や小さい松明をもった人たちに先導されてしずしずと進むのです。その小さな行列を撮影するためには二月堂内より出て外の欄干部に移動する必要がありますが、そうすると次の「だったん」を見るためのベストスポットである礼堂に戻っても、もう居場所はなくなっています。お香水は十一面観音にお供えするためのものですが、金属製の長い柄杓（ひしゃく）で僧侶たちに配られた後、一般客もおこぼれを頂戴することが出来ます。身を清めるのに良いそうで、私も数滴を頂くことができました。

以上、順序が前後したところがありますので、我々8人の行動を再整理しますと、先ず午後7時頃から全員が外の報道陣席で松明上堂を見物し、それから9時前に二月堂裏に案内され、男性は内陣前の礼堂に入り、女性は東の局に入って、既に始まっている神名帳の読み上げを含む一連の作法を拝観・聴聞し、10時頃休憩となると、男性4人だけ堂下の参籠宿所に森本公誠長老（元東大寺別当）を訪問し、お薄をいただきながらお話しを伺いました。参籠宿所というのは修二会の期間中、練行衆をはじめとする関係者が寝泊まりする合宿所なので、当然ながら女人禁制です。同行の男性3人は女性陣と合流するためお薄を頂いた後、すぐに退席し、以後は別行動となりましたが、私1人だけ残ってあれこれお話しさせていただきました。中央アジア出土の古代ウイグル文書には仏教関係のものが相当数あり、その中には漢文をウイグル文字で音写したものもかなり多く残っています。それらを解説出版したのは言語学の故・庄垣内正弘・京大教授でしたが、森本長老はそこに修二会で読み上げる文言と同じ漢文があるのを発見して驚いたそうです。中国仏教の影響が、東の日本と西のウイグル（現在の新疆ウイグル自治区内）に及んだ証拠です。また松明上堂の前に、同行の女性から「東大寺に檀家はあるのですか」と尋ねられた時、答えられなかったのも、同じ質問を森本長老にお尋ねしたところ、「東大寺は国家鎮護を目的とするため、檀家は持たなかった（持てなかった）」ということでした。それならば東大寺は国家から経済的に厚く保護されていたのかということ、平安

時代になると決してそうではなく、藤原一族の氏寺である興福寺と比べればかなり冷遇されてきたそうです。もちろんそれは天皇家よりもむしろ天皇の外戚として摂政・関白を独占して政治の実権を掌握した藤原氏の意向によるものでしょう。

30分ほどで私も参籠宿所を辞し、一般休憩所で甘酒を一杯頂いてからまた二月堂に戻り、今度は内陣の回廊に入って、過去帳の読み上げや散華行道（さんげぎょうどう）・称名悔過（しょうみょうげか）・五体投地・走りなどの行法を見物・聴聞しました。その間、練行衆たちの素晴らしい声による声明（しょうみょう）が、鈴や法螺貝の音と共に唱えられています。まさに仏教音楽の極致です。そして午前1時頃から二月堂の外側でお水取り行事があり、午前3時頃から内側で展開される「だったん」へと連続して進行するわけです。

午前4時に全てが終わって外に出て、1人で暗い東大寺の境内、奈良公園を歩いて奈良ホテルに向かいましたが、得がたい体験をした満足感に包まれてまったく寒さを感じませんでした。実は3月9日に実母が92歳で亡くなり、実家のある福井県三国町で10日に通夜、11日に本葬を済ませたあと大阪に戻り、12日午後に奈良県文化会館での講演、その日の夕方から翌13日の早朝まで東大寺のお水取り拝観と息つく暇もない数日間でしたが、さほど心が乱れることもなく過ごせたのは、ひとえに神仏の御加護のあった御蔭と深く感謝する次第です。

合掌 2017年3月18日 森安孝夫

~~~~~

2017年3月2日配信分（一部のみ対象）

森安通信・号外

恐らく関西だけでしょうが、本日夕方の6時15分からの45分間、4チャンネルのMBSテレビで「VOICE最終章、土曜のない阪大相撲部、夢の土俵ついに完成！」という番組が放映されるそうです。

実は昨日午後、阪大の図書室に行った帰りに、私が毎週バドミントンをしている体育館の前を通ったら、人だかりがしており、報道関係者も来ていました。何事かと思ったら、「阪大相撲部土俵落成式」でした。そういえば、暫く前にさる筋から、通信販売で有名な「たかた」の社長だか会長だかが、若手スポー

ツ選手の有望株に積極的に資金援助しており、阪大にも学生相撲界の有望株が一人いるので土俵を寄贈するという噂を聞いていました。どうやら噂は本当だったようです。裸でまわし姿の部員が10人ほどいました。ほとんどがひよろひよろした体格ですが、確かにこれは立派でいかにも強そうなのが一人いました。大相撲に入って、関西学院大学出身の宇良（うら）のようになってくれればと、期待が膨らみます。

ところで先日（2月27日）の森安通信で、北一輝を「左翼思想家」と表現したのはいささか誤解を生んだようなので、「社会主義革命家」と修正しておきます。

以上 3月2日 森安孝夫

~~~~~

2017年2月27日配信分

森安通信 読者各位

昨日の2月26日（日）は、日本近代史上の一大事件である二・二六事件が起こった日でした。それを記念して昨日の午後、NHKテレビでNHKアーカイブスの「二・二六事件の実像！青年将校らの肉声発見」が放映されました。これは1979年に放映されたNHK特集「戒厳指令「交信ヲ傍受セヨ」二・二六事件秘録」の再放送を中心とする番組でした。昭和11年2月26日、安藤大尉や栗原中尉をはじめとする陸軍皇道派の青年将校に率いられた1400余名の部隊が蜂起して、首相官邸・陸軍大臣官邸・内務大臣官邸・陸軍省・警視庁などを襲撃・占拠し、多数の元老重臣を殺害した上で天皇親政による昭和維新を訴えましたが昭和天皇はこれを拒否、直ちに戒厳司令部が設置されました。その時点で蜂起部隊は反乱軍となり、戒厳司令部は反乱軍を2万4千の軍隊で包囲するとともに、反乱軍と外部との電話を全て傍受すなわち盗聴することを命じたというのです。その録音盤が偶然にも残っており、戦後あるルートを経てNHKにもたらされていたので、新しい技術で雑音などを消して電話の交信を蘇らせました。それを、1979年当時存命であった事件関係者自身やその親族たちに聴いてもらった上でのインタビューもあるのです。初めて知ることばかりで非常に衝撃的でしたが、1979

年といえば私はフランス留学中でしたから、こんな凄い内容の放送があったという噂ささえまったく聴いた覚えがないのも領けます。

二・二六事件の背景と全貌は余りに複雑すぎ、その後の戦前の昭和史に与えた影響も巨大でしたから、右翼・左翼いずれの勢力から見ても毀誉褒貶があるでしょう。皇道派の青年将校たちは右翼ですが、現在の日本の状況にも似たひどい貧富の格差拡大を憂いて、財閥・軍閥や特権階級打倒を目指したと言われます。しかし最大の標的となった岡田啓介首相は極めて清貧な暮らしをしており、利権とは無縁だったのです。青年将校たちは社会主義革命家として有名な北一輝（きた・いっき）や軍人ながら革新思想を持っていた西田 税（にしだ・みつぎ）らとも結びついている一方で、三井財閥は北一輝らに多額の資金援助をしていたのです。録音盤には、首相官邸を占拠した部隊のリーダー栗原中尉と西田税の妻との直接のやりとりや、北一輝から料亭幸楽に立てこもっている部隊のリーダー安藤大尉への通話も残っていました。反乱軍の指導者とされてしまった青年将校たちを単なる犯罪者とみなすのは単純すぎますが、この事件後、武器を持たない政党政治家たちが武力を持つ軍部を怖がるようになり、結果的には日本全体を無謀な戦争に追い込む軍部の独走を止められず、日本国民を塗炭の苦しみに陥らせたのです。襲撃を受けながらも奇跡的に命拾いをした岡田啓介首相は、我が母校である藤島高校（旧制福井中学）出身ですから以前から気になっていたのですが、事件直後に首相の座から退いたとはいえ、世捨て人になったわけではなく、太平洋戦争の敗色濃厚になった時点でもなかなか退陣しなかった東条内閣打倒に尽力してくれたのは大きな業績であり、後輩たちも誇りとしていいように思います。

ところで二・二六事件よりかなり遡りますが、やはり左翼思想家の大杉 栄（おおすぎ・さかえ）とその妻・伊藤野枝を取りあげた瀬戸内寂聴の評伝小説『美は乱調にあり』と『諧調は偽りなり』の2冊を読みました。そこには辻潤や神近市子ら多数の社会主義者に加えて、関東大震災直後のどさくさに紛れて夫妻を暗殺した甘粕憲兵大尉も登場します。共産主義の理想が完全に崩壊し、思想状況が混沌としている中、わずかながら女性解放の波は進行しつつあるように見える現在の時点で、『青鞥』出版に関わった伊藤野枝や、幸徳秋水の大逆事件後に反権力側の代表的存在であった大杉栄が活躍した明治末～大正時代の思想状況を振り返るきっかけになると思われまふ。難しいテーマが苦手な人でも、男女の自由恋愛とフリーセックスの様子には興味を引かれまふでしょう。

村上春樹の新本に行列する人たちの気持ちは私には分かりませんが、瀬戸内寂聴はもはや文豪の仲間入りをしたと言っているのではないのでしょうか。男女の性愛をメインテーマにし続けてきた点では、渡辺淳一と瀬戸内晴美（寂聴）は同じでしょうが、奥深さが全然違います。確かに稼ぐためにたくさん書いており、内容や表現に重複もありますが、時々、本当に鋭い発言が見えるのです。上記の2冊以外にお勧めしたいのは『愛死』（上下2冊、講談社文庫）です。冒頭部にはチトラールという、近年では私の専門論文にしか見えないような中央アジアの地名が出てきて驚くでしょうが、それはあくまでイントロです。本体は薬害エイズとホモと差別と不倫と純愛をテーマに、人間の生きる意味を深く考えさせられるものです。とはいえ、決して重苦しい読み物ではありません。重苦しかったら、私は途中で投げ出しています。

また瀬戸内寂聴『秘花』は世阿弥を扱った歴史小説ですが、前半（一・二章）と後半（三章）ではがらりと雰囲気が変わります。恋は秘めるが花と言いますが、前半では世阿弥が美少年だった時に将軍・足利義満に寵愛されたことやその後の絶頂期が描かれます。後半は一転して佐渡へ島流しになってからの境涯が描かれ、これがなかなか感動的でした。瀬戸内作品ですから、随所に色気がありますが、彼女が渾身の力を込めて描いた世阿弥像は、それまで私のイメージの中にあつた世阿弥像を打ち破るものでした。世阿弥の能は幽玄の世界で、私とは遠い世界のものと思っていたのに、瀬戸内寂聴はもっと派手で性的で俗世に近いものとして描き出してくれたところが、とても気に入りました。

不具 2017年2月27日 森安孝夫

~~~~~

2017年1月25日配信分

森安通信，至急号外

お笑いコンビの爆笑問題が出演するNHKテレビの番組「探検バクモン」が、今夜は東京文京区の六義園の近くにある東洋文庫を取り上げます。放送は夜8時15分からの30分です。この東洋文庫は日本が世界に誇る東洋学関係書籍の宝庫であると同時に、東洋学に従事する者にとっては、学生時代からお世話になる大事な場所です。

この東洋文庫は旧三菱財閥の岩崎久弥の寄附によって設立され、戦後も三菱グループの援助を受けていますが、研究部門のトップはほぼ常に東大・東洋史出身の教授が担ってきました。私が東京にいた時代は恩師の榎一雄・護雅夫両東大教授がツートップであっただけでなく、そこで色々なアルバイトをさせてもらい、職員たちと昼休みの卓球・テニス、半ドンだった木曜日のテニスや野球に興じたので、青春の思い出の場所でもあります。現在は、私を大阪大学に招請して下さった斯波義信先生が研究部門のトップで、たぶん今夜の番組にも顔を出されるのではないかと思います。因みに全体のトップである理事長は、現在は数代前の三菱商事会長が務めていらっしゃるので、去年の元旦に配信した通信に書いたような事情で、東大バドミントン部同期の小林健君もそのうち理事長になるのではないかと期待しています。

以上 2017年1月25日 森安孝夫

~~~~~

2017年正月元旦配信分

森安通信 読者各位

明けましておめでとうございます。本年が皆様にとりまして、旧年より少しでも幸多く良い年になりますよう、心よりお祈り申し上げます。

本通信はどうしても長くなりがちで、且つトランプほどではないにしても自分勝手な暴言も混じりますので、折に触れて自重しようとは思いますが、本日元旦に頂いた年賀状には通信を楽しみにしているという言葉も散見されましたので、いささか意を強くした次第です。

21世紀に入った2001年正月の皆さんの年賀状には、たくさんの希望と明るい未来像が描かれていましたが、同じ年の9月11日に、アメリカ合衆国で同時多発テロが起きました。それ以後あまりに多くの難題が地球規模で発生しているため、今では新年となっても、それほど大きな期待が持てなくなっているのではないのでしょうか。特に今年は、何が起るか先行きがとても不安です。トランプとプーチンのどちらがワルかという週刊誌の広告文句が有りましたが、はっきり言えばどっちもワルですし、それに金正恩やアサドやエルドアンや習近平も並ぶことでしょう。権力者が諜報機関と警察と軍隊を押さえていたら、

国民はなすすべがありません。せめて日本では、戦前に軍人が暴走して国民を塗炭の苦しみに陥れた轍を二度と踏まないよう、決して自衛隊幹部に権力がいかないようにしてもらいたいものです。文民統制こそ肝腎ですが、福井県出身の稲田防衛大臣のような中途半端な文民では、危なっかしくて見ていただけません。簡単にオスプレイの飛行再開を許すなど言語道断です。

昨年、テレビ朝日／朝日放送のザ・スクープ「緑十字機 決死の飛行～誰も知らない空白の7日間」という番組によって、我々は改めて1945年8月15日の玉音放送によって太平洋戦争が終わったのではなく、本当の終戦はその一週間後だったことを再認識させられました。「天皇ノ軍人ニハ絶対ニ降伏ナシ」とした厚木航空隊の小園司令に代表される軍人たちの間には徹底抗戦（天皇への反乱）の動きがあり、降伏軍使を乗せてマッカーサーの待つマニラへ向かう「平和の白い鳩」＝「緑十字機」がもし暴走した軍人によって撃墜されていたら戦争は継続し、既に南樺太を奪取していたソ連軍はさらに北海道にまで侵攻し、今頃北海道の北半分はロシア領だったのです。そうなっていたら北方四島どこの騒ぎではありません。太平洋戦争そのものが軍部の暴走によって始まったのですが、終わりにもこうしたゴタゴタがあったのです。しかしこうした事実にはGHQによっても日本政府によっても長らく伏せられていたのです。

ところで前回の11月11日に配信した通信で、私が出血性胃潰瘍で大量吐血したことを報告したところ、たくさんの方々からお見舞いのメールを頂きました。私の阪大退職時と近畿大退職時に一斉配信先メアドを整理して、今では二百数十人にお送りしているに過ぎません。それゆえ普段の通信に対しては数日かけてほぼ常連の10名ほどから応答があるだけなのに、前回に限っては丸1日もたたないうちに30余名から、最終的には約70名の方からメールが届きました。驚くと共に、真にありがたく感じた次第です。胃癌と違って胃潰瘍というのは外傷と同じですから、大袈裟に出血しても治癒するのは速く、今では完全に回復しています。結局、月曜のバドミントンは5週休んだだけで復帰しました。退院後1ヵ月でジョギングを始めたときは10分も続きませんでした。今では30～40分でも大丈夫です。

昨年元旦の通信では、「今年は一切何が楽しみかと言えば、私にとって第一は、リオ五輪でのバドミントンのメダル争いです」と書きました。「マイナースポーツであったバドミントンが、オグシオ人気でいささか注目されるようになり、ロンドン五輪で女子ダブルスの藤井・垣岩組が日本人初のメダル（銀メ

ダル)を取ったとはいえ、まだまだ世界の壁は厚くて頑丈でした。それがこの二年間であつという間に様変わりして、男子も女子ももはや世界のトップクラスであり、金メダルさえ期待できるのです」と書いて、福井県の星である山口茜選手と、一昨年12月に世界一になったばかりの男子の桃田選手にもエールを送っておきました。ところが御存知のようにその後、田児・桃田両選手らの賭博問題で日本バドミントン界は大きなショックを受けました。それでも夏のリオ・オリンピックでは女子が大活躍し、ダブルスでは高橋・松友ペアが金メダルを取ってくれました。そして年末のスーパーシリーズ・ファイナルでは、男女ペアが共に準優勝でした。女子の高橋・松友ペアが19歳の中国ペアに敗れたのは悔しい限りですが、きっとリベンジしてくれるものと信じています。一方、男子の園田・嘉村ペアはまだまだ伸びしろがあります。世界のトップクラスで戦える選手が男女ともに増えており、全体としては東京オリンピックに向けてさらなる飛躍が期待できそうです。皆さん、私の教え子が世界史教員をしている福井県立勝山高校出身の山口茜ちゃんを応援して下さいね。

昨日の紅白では五木ひろしが「九頭竜川」を歌ってくれたので、感激しました。今年の新曲とはいえ、五木には名曲が山ほどあるため、テレビでもなかなか歌ってくれないのです。3番の歌詞の最後に「大海めざして、流れゆけ！」とありますが、まさしく私の生まれ故郷である九頭竜川河口の雄大な風景です。

最後に最近届いた本を2冊紹介します。1つは、以前に紹介したMINERVA世界史叢書の総論『「世界史」の世界史』に続く第1巻『地域史と世界史』（羽田正 責任編集、ミネルヴァ書房、5500円）です。そこには村井章介「古琉球から世界史へ—琉球はどこまで「日本」か」や、私の教え子である杉山清彦・東大准教授の執筆になる「中央ユーラシア世界—方法から地域へ」など14本の論文が含まれます。もう1つは、池田嘉郎ほか編『名著で読む世界史120』（山川出版社、1800円）で、宣伝文句は「古代から現代まで世界の名著120作品を歴史的視点から解説し、新しい知の発見へと導く読書ガイド」となっています。古今東西にわたって高校世界史教科書に出て来るような書物はおおよそ尽くされていますが、例によって古代ギリシア・ローマが無駄に多いのが気になります。私に本書を寄贈して下さった執筆者の一人である宮紀子さんは、ラシード・アッディーン『集史』、『長春真人西遊記』、『マルコ・ポーロ』、『世界の記述』、『元曲』、『元朝秘史』、『十八史略』を担当しています。内容は2冊ともかなり高度であり、高校教員の皆さんに是非にとお勧めするものではありません。

各校に1冊ずつ備えていただき、必要に応じて事典を繙くように読んでいただくのが宜しいかと思えます。

不具 2017年1月1日 森安孝夫

~~~~~

2016年11月11日配信分

森安通信 読者各位

世界中のリベラリストの多くがトランプ・ショックに襲われて意気消沈していることと思えますが、今さら何を言っても仕方ありません。アメリカ合衆国ではディベートを採り入れた教育が日本より遙かに進んでいると言われてきましたが、あれはほとんど無意味だったのですね。しょせん歴史の浅いアメリカでの出来事と一蹴するわけにもいかず、歴史教育（古代からの世界史教育）の意義を根本から考え直すいい機会とすべきかもしれません。

ところで先週で奈良の正倉院展は終わりましたが、皆様はどれくらい御覧になられたでしょうか。実は私は一度下見をした後、二度目に友人を案内している最中に目眩で倒れ、救急医務室で休んだ後、予約してあった橿原市のホテルに宿泊し、真夜中に吐血しました。但しその段階でも意識ははっきりしておりましたので、かかりつけの医師に電話連絡し、その斡旋で奈良県立医大付属病院での受け入れを確認した上で救急車を呼びました。

胃カメラによる検査では、胃壁の粘膜の内側の筋肉部分がえぐられて血管が露出しており、その先端から血液が噴出していたので、その場で電気メスを使った止血手術を施されました。出血性胃潰瘍という診断でした。結局三度も胃カメラをのむ羽目になり、地獄の苦しみでしたが、入院は丸1週間で済みました。退院後もしばらくは、大量の吐血による貧血で目眩が続きましたが、退院後1週間以上たった今はようやく落ち着いてきて、バドミントンのために筋力を取り戻すりハビリを開始しました。

出血性胃潰瘍となった原因は特定できませんが、恐らく昨年2月出版の『東西ウイグルと中央ユーラシア』、及び今年3月出版の文庫版『シルクロードと唐帝国』の2つの本作りをした際に相当の無理をしたので、その時の疲労が蓄積していたのではないのでしょうか。既に数ヶ月前から胃袋が

コーヒーを受け付けなくなっていました。後で思えばあれが前兆だったのでしょう。

さて本日の通信の本当の目的は3つの案内です。まずは奈良の西大寺駅に近い平城京資料館で今月27日（日）まで開催中の「地下の正倉院展」です。主に木簡を中心とする展示ですが、高校教育にはとても参考になります。飛鳥時代までの渡来人は朝鮮半島と中国本土からの人だけでしたが、奈良時代になるとインド人・ソグド人・ペルシア人などのいわゆる西域人・胡人が来日するようになりました。10月5日の読売新聞で紹介されたペルシア人と推定される「破斯清通」の見える木簡や、正倉院所蔵の伎楽面「酔胡従」にそっくりの鼻の高い人物の横顔スケッチのある木簡も、期日限定ながら展示されるようです。

2つ目はもうすぐですが、11月18日（金）午後に龍谷大学大宮キャンパスで開催される国際シンポジウム「中央アジア出土資料のデジタルアーカイブ——その現状と課題」です。これは研究者向けですが、3つ目は一般の方にもじゅうぶん参加していただけるものです。それは12月3日（土）午後に京都大学文学部で開催される公開シンポジウム「近代日本における学術と芸術の邂逅——ヘディンのチベット探検と京都帝国大学訪問」です。これは日本近代史とも密接に関わります。

以上の3つに関するチラシのPDFをここに添付しますので、詳細はそちらを御覧下さい。

不具                      2016年11月11日                      森安孝夫

~~~~~  
2016年9月20日特別配信分（一部の方へのみ配信）

以前に森安通信でもお知らせしたように、21世紀になってから欧州では景教関係の出版が活気づいています。また次のような論文集が出ました。阪大東洋史では公費購入済みで、京大では吉田豊教授が個人的にお持ちです。

Li Tang / D. W. Winkler (eds.), *Winds of Jingjiao. Studies on Syriac Christianity in China and Central Asia, (orientalia - patristica - oecumenica, 9)*, Wien: LIT Verlag, 2016.

その中に次のような論文があります。

R. Todd Godwin, *Eunuchs for the Kingdom of God: Rethinking the Christian-Buddhist Imperial Translation Incident of 787*. pp. 267–281.

この論文は、唐にやってきたばかりの密教僧の般若と、以前から唐にいて活動していた景教僧の景浄とが協力して、密教経典である『大乘理趣六波羅蜜多経』を漢文に翻訳した歴史的背景を探ろうとするものです。当然ながら、般若と罽賓の同郷人で神策軍の幹部であった羅好心、景浄が撰述した「大秦景教流行中国碑」の背後にいる景教徒勢力、神策軍と仏教勢力の後ろ盾となっていた宦官たちとの関係にも言及がありますが、同じテーマを扱った中田美絵の労作「八世紀後半における中央ユーラシアの動向と長安仏教界—徳宗期『大乘理趣六波羅蜜多経』翻訳参加者の分析より—」（『東西学術研究所紀要』44, 2011年, pp. 153~189）の水準には遠く及びません。英語もメチャメチャでひどい論文なのですが、一点だけ注目すべき点があります。

それは中田美絵さんや私も含めて従来の方は全て『大乘理趣六波羅蜜多経』には「梵本」のほかに「胡本」が存在したと考えていました。漢文史料からはそう読み取るのが当然だからです。しかしその「胡本」が一体どういうものか見当がつかず、悩まされてきました。ところが、Godwinは、漢文がどの程度読めるのか怪しいのですが、はなから「胡本」の存在など想定しておらず、『大乘理趣六波羅蜜多経』の初訳は、まず漢語のできない般若が原典の「梵本」から「胡語」に訳し、それを景教僧の景浄が「胡語」から漢文に訳したと考えたのです。そうであればその「胡語」とは、般若と景浄の共通言語でなければならず、その候補はバクトリア語かソグドのどちらかであるというわけです。実にすっきりするのですが、それで本当によいのでしょうか。Godwin論文全体の論旨は全く不明瞭であり、中田さんの論文も2本引用していますが、本当に日本語を読んだか実に怪しいものです。

Godwinはロンドン大学のSOAS所属というわりには全くひどい英語ですので、お薦めするのは気が引けるのですが、興味のある方には目を通して頂きたいと思います。たまたまですが、最新の『唐代史研究』19号には、唐代の景教・マニ教・祆教・仏教関係の優れた論文がまとまって掲載されました。洛陽の景教経幢のような発見がまたあるかもしれません。則天武后時代の洛陽に建てられた「天枢」の実態と歴史的背景は、依然として謎のままです。イスラム勢力の勃興が、8世紀のパミール以西のソグディアナ・トハリスタン(旧バクトリア)・カピシ・ガンダーラ辺りから東トルキスタン~中国本土の宗教と政治の状況に

与えたインパクトは相当のものです。正倉院御物にも影響したかもしれません。いずれにせよ広い視野を持った若い方々による今後の研究の進展に期待する次第です。

不具

2016年9月20日

森安孝夫

~~~~~

2016年9月9日配信分

森安通信 読者各位

日本中がとんでもない猛暑か水害に見舞われ続けた今年の夏でしたが、本日はもう重陽の節句です。皆様、お元気でしょうか。前回通信から余り時間が経っていないのですが、明日発売予定の歴史学の本について報告致します。興味のない方は、それをスキップして最後の一節のみ御覧下さい。

いよいよMINERVA世界史叢書全16巻の刊行が始まりました。予告より僅か3ヵ月遅れただけですから、先ずは順調な滑り出しと思われれます。全体は五期に分かれ、各期はそれぞれ3巻ずつですが、その冒頭に総論が置かれています。その総論である『「世界史」の世界史』（秋田茂・永原陽子・羽田正・南塚信吾・三宅明正・桃木至朗 編著）の発売日が明日なのです。これに続くはずの第I期「世界史を組み立てる」の3巻は次の通りです：

第1巻：地域史と世界史（羽田正 責任編集）

第2巻：グローバル化の世界史（秋田茂 責任編集）

第3巻：国際関係史から世界史へ（南塚信吾 責任編集）

私は発売日より前に総論である『「世界史」の世界史』の献呈本を寄贈して頂きましたので、丸3日をかけて全体を通読しました。南塚信吾執筆の序論によれば、第I期のコンセプトは「ナショナル・ヒストリーにとらわれない、またヨーロッパ中心でもない世界史を組み立てるにはどういう方法がありうるのかを提示」することだそうです。もちろんそのコンセプトは総論全冊にも生きているようで、そこに収載されている17本の概説的論文と編集委員会による（主に桃木至朗の執筆に係る）「われわれが目指す世界史」はいずれも一読に値するものです。ただしそれは今後の日本の歴史学界を支えていくべき大学や研究所の教員・研究員（その予備役としての院生）、とりわけ実際に大学入試問題

を作成する立場にある大学教員にとっては必読ですが、高校・予備校の教育現場で多忙をきわめている教員には急いで読むことを推奨するものではありません。

この総論を通読して改めて思い知らされるのは、歴史学の領域におけるヨーロッパ中心主義がいかに根深いものであり、現行の高校世界史教科書を使っている限り、あるいは今後、高校教育を近代史中心にしようとする限りは、ヨーロッパ中心主義打倒などほぼ絶望的という現実です。しかし、それを改変する責任は高校教員ではなく大学人の方にあるのです。西洋史・東洋史・日本史という三層構造のなかにおいて、東洋史はおろか自分の狭い専門領域以外のことを知らない西洋史学者、「歴史イコール日本史」という発想の強い日本史学者、そして欧米製の理論や枠組みが自分の地域にあてはまらないことを言うだけで、オルターナティブな世界史像を示そうとしない東洋史学者のいずれもが責任を問われているのです（本書、p. 376）。「中世までのヨーロッパがアジアと比べて経済的に後進的だったことはもともと事実レベルでは常識だった」（本書、p. 404）にもかかわらず、暴力的な軍事力によって実現された「ヨーロッパの近代化が人類史の普遍モデルであるから」「それを準備した古代地中海や中世ヨーロッパの歴史も普遍的人類史の一部であるというロジック」（本書、p. 404）を我々はどのようにして打倒できなかったのでしょうか。

2006年にマスコミを騒がす社会問題となった「世界史未履修問題」は、高校における世界史必修が、「カリキュラムや入試の矛盾のなかで本来の意図とは正反対に、少数の生徒にしか体系的に世界史を学ぶことができない状況をつくり出してしまった」（本書、p. 373）結果なのです。それゆえ今や大学人にとっては、改めて広範な大学生を対象とする世界史教育の充実が求められているのです。とはいえ、西欧生まれの近代歴史学によって作り出された従来の歴史・世界史のような「ヨーロッパ型近代国家（国民国家）の主人公となるべき成人男子エリートのための教養としての歴史・世界史」（本書、p. 393）であってはならないのです。私は右翼ではありませんが愛国者ですから、いつまでも欧米からの輸入学問に血道を上げる人や、近代以前において西欧が世界史の中心であったと錯覚させるような入試問題を作り続ける勉強不足の人には我慢がなりません。

MINERVA世界史叢書全16巻の第1冊である総論『「世界史」の世界史』の突きつける問題はあまりに多岐にわたって重く、今後の各巻（特に第I期の3巻）

の担当者たちがいかにそれらを受けとめて論述していくのか、いずれにせよ全16巻という壮大な試みの今後を見守りたいと思います。

とはいえこんな難しいことばかり考えていても人生楽しくありませんから、それぞれに頭の切り替えを素早くやってください。私にはバドミントンがありますから、この夏も酷熱の体育館で練習試合をし、帰宅してはぶっ倒れるというのを繰り返しましたが、オリンピックでの日本選手の活躍には目を見張りました。ようやくマイナースポーツから脱皮できるかもしれません。また先日、生まれて初めて五木ひろしショーに行ってきました。そうしたらなんとそこで発表された新曲が「九頭竜川」でしたので喜びも倍増でした。私の生まれ故郷は九頭竜川が日本海に注ぐ河口の地であり、歌詞の最後が「ああ故郷（ふるさと）の九頭竜川よ、大海めざして流れゆけ」となっているのですから。これはもう十八番にするしかないと思って、CDを買って練習中です。

不具 2016年9月9日 森安孝夫

~~~~~

2016年8月16日配信分

森安通信 読者各位

日本中が酷暑のさ中、リオデジャネイロのオリンピックでは熱い戦いが繰り広げられています。バドミントンでも予想を越えた日本選手の活躍が見られます。女子ダブルスで世界ランク1位の高橋・松友組は順当に勝ち上がっており、男子ダブルスの早川・遠藤組は格上を2回も撃破しました。ただ残念ながら、早川選手の腰痛が悪化して決勝トーナメントでは敗退しました。女子シングルスでは今朝、福井県出身の山口茜ちゃんが世界ランク4位のタイの選手を破ってベスト8に入りましたが、皮肉なことに準々決勝の相手は同じく日本期待の奥原希望選手となってしまいました。たった8人の中で日本選手同士がつぶし合いになるのは真に惜しいことですが、仕方ありません。一方、卓球女子の団体戦では、オーストリアもドイツもシンガポールも、対戦相手の実態は中国人ばかり、逆にラグビーや陸上の日本代表にも外国人が増える傾向にあるなど、19世紀に出現した国民国家の枠組みが世界中で急速に消えつつある現実を目の当たりにする次第です。オリンピックで愛国心を爆発させるのは大いに結

構なことです。それが政治利用されては困ります。人種・民族のボーダーレス化が、よい方向に働き、戦争抑止力の増大に繋がるように願うばかりです。とはいえ、戦争は往々にして「経済行為」であることを忘れないで下さい。

ところで数日前、学問的オリンピックでメダル獲得に匹敵する本の2冊目が届きました。薮勇造（訳註）『エリュトラ海案内記』（東洋文庫870+874、全2巻、東京、平凡社、2016年）です。原本はギリシア語で、内外に多数の訳註書があり、日本では長らく村川堅太郎訳で親しまれてきましたが、今後はこの薮訳本が決定版となるに違いありません。村川氏は西洋史学者でしたが、薮（しとみ）君は東大・東洋史時代からの旧友で、東西交渉史の分野では共に榎（えのき）一雄門下になります。薮君の専門は、イスラム勃興以前のアラビア古代史です。

エリュトラ海は文字通りには「紅い海」ですが、現代の紅海のみならず、ペルシア湾、アラビア海、インド洋を個別に指すこともあり、『エリュトラ海案内記』の場合はその全体を含む広い海域を指しています。原本は薄いものですが、註釈部分と解題の充実度が抜群です。彼の到達した学問水準によれば、『エリュトラ海案内記』は単なる商業指南書ではなくエリュトラ海とその周辺地域の総合的ガイドブックであり、執筆の動機は「ヒッパルス（ヒッパロス）の風」と呼ばれた夏季の季節風（西風）を利用してアラビア半島南端部の港から、胡椒の原産地である南インドの西海岸（マラバル海岸）に至る最短航路の発見であろうと述べています。それを発見したのはエジプト船のギリシア人航海長であり、『エリュトラ海案内記』の著者はエジプト在住の無名のギリシア系商人でした。書かれた時期は、ローマ帝国の最盛期である紀元後1世紀で、最新の薮説では紀元後50～70年だそうです。つまりインドでクシャーナ朝が勃興する直前なのです。

本来は地中海を舞台に活躍していたはずのギリシアの船乗りや商人が、アレクサンダー東征後のプトレマイオス朝エジプトからローマ帝国によるエジプト併合までのヘレニズム時代、そしてローマ帝政時代へと、長い時代を経て紅海・ペルシア湾からアラビア海・インド洋にまで進出していった歴史的背景も十分に説明されています。早くも紀元前2世紀末に地中海世界と南インドとの間に交易関係が生まれていたことは、東地中海産の葡萄酒を運んだ壺（アンフォラ）の破片が南インドの遺跡から出土する状況から判明するとのこと。

ラクダ・馬・牛・ロバなどの家畜で運ぶ陸のシルクロードの商品は軽くて貴重な奢侈品が中心ですが、船を使う海のシルクロードではもう少し重い物でも商品となります。例えば葡萄酒（イタリア産・シリア産・アラビア産）・オリーブ油・ギー・胡麻油・麦・米・ナツメヤシ・白大理石・黒檀・チーク材などです。もちろん重くても自分で動く奴隷（特に音楽が出来る少年，後宮のための美しい少女）も主要商品です。とはいえやはり陸のシルクロードと同様に軽くて貴重な奢侈品が主流であり，その筆頭は香料薬品類（乳香・没薬・胡椒・甘蔗糖をはじめ実に多種多様），次いで宝石・真珠・珊瑚・象牙・亀甲，さらに毛織物・インド棉布・シナ産絹織物が続きます。

ところが当時の西方世界には，このように種々の高価な東方物産と交換に送り出すべきものが少なかったのです。そこで大幅な輸入超過を補うために，ローマ帝国の金貨・銀貨が大量に輸出されました。インド各地はもとより，インドシナ半島からもローマの金銀貨が出土するのは，その結果です。

ところで学問とスポーツの振興には経済的援助が不可欠です。私の内陸アジア現地調査にはお上の科学研究費と三菱財団の助成金が使われましたが，薮君が南アラビアで現地調査出来たのも科学研究費と三菱財団・鹿島学術振興財団の御陰だそうです。東京オリンピックに向けても国家からの継続的な援助が必要ですが，できるだけ無駄を少なく，奇妙な利権構造を廃して有効に使って欲しいものです。

そういえば私が3回目の三菱財団助成金を受けた時，理系の審査員には藤島高校同期の坂野仁・東大教授，そして文系の審査員には東洋史の後輩である鶴間和幸・学習院大教授がいました。今，大阪では秦の始皇帝の兵馬俑展が開催されていますが，鶴間君がその時代の専門家です。もし兵馬俑展を見に大阪にお出での折は，是非私に連絡して下さい。時間の許す限りお付き合い致します。

不具 2016年8月16日 森安孝夫

~~~~~

2016年7月2日配信分

森安通信 読者各位

18歳選挙権が実現し、参議院選挙と東京都知事選を目前に控えた今、高校社会科教員の皆様はおおいに頭を悩ませていらっしゃることでしょう。選挙は大事ですが、よく言われるようにヒトラー政権さえ選挙で生まれたのです。選挙は万能ではありません。かつて私は『シルクロードと唐帝国』のあとがきで、「本書では随所において民族とは何か、国家とは何か、本当の愛国心とはどうあるべきかを考え、歴史を人類史的視点から知ることの必要性を説いてきた。無知からは何も生まれない。無知な者にも選挙権のある民主主義は、必ずや衆愚政治の危機に瀕するであろう。」と書きました。その時の危惧は残念ながら今度のイギリスのEU離脱騒動で的中してしまい、アメリカのトランプ現象も予断を許しません。トランプのような人物が選挙で選ばれて権力を握ったら、どんなにおぞましいことが起こるか身毛がよだちます。高校の先生方は生徒に対し、世界史の素養が社会人としていかに必要であるかを自信を持って説いてください。ただしその結果として生徒たちがどのような思想・信条の持ち主に育っていても、そのことに責任を負う必要はありません。人は様々ですから。

民主国家であろうと独裁国家であろうと、「権力の本質は暴力」です。それは人間以外の哺乳類の場合、例えばゴリラのボスのあり方を見れば分かる通りです。ただし、「考える葦」である人間の場合は単純に暴力だけでなく、暴力（武力）プラス経済力（お金）となります。なぜなら経済力（お金）で暴力（武力）を買えるからです。国家が出来れば、「合法的」な暴力である警察と軍隊を動かせるのが権力者です。そもそも「国家は国民のためのもの」などというのはお為ごかしに過ぎません。そんな理想主義は長い人間の歴史の中ではつい最近芽生えたものであり、実際は常に国家は権力者・富裕層のものであり続けたし、今なおその側面が強く残っているのです。資本主義のグローバル化で経済格差が拡大しているのに、そんな公式データはないといって認めようとしない発言が自民党の幹部から出て来るのはその証左の1つです。確かに立憲主義や民主主義という社会的契約に基づく「縛り」があるはずの近現代国家では、権力者も表だって好き勝手は出来ませんし、平時であれば警察も軍隊（我が国では自衛隊）も国民に奉仕してくれます。これはとてもありがたいことです。だからと言って油断は禁物なのです。警察官や軍人・自衛官が個人的にどんなにいい人たちであっても、組織として動くときは別人格になるのです。特に非常時にはそれが危険なのです。特定秘密保護法とか緊急事態基本法などを安易

に通させてはいけない理由はそこにあります。「権力の本質は暴力」だということをお忘れなくください。

最近の日本のように反知性主義がはびこり立憲主義さえ踏みにじられるようになると、いかに「まともな」憲法学者でも弁護士でも歴史学者でも言論での抵抗は出来なくなってしまいます。人権は国によって基準が違うのだと平気で嘯く者や反知性主義の信奉者に「論理」は通じないわけですから。権力者がまだ脅威を感じない間は、ある程度自由にマスコミや学者に物を言わせておいてくれますが、本当に足下を揺さぶられると感じたら、「合法的」な暴力である警察（公安・秘密警察）と軍隊を使って抹殺してしまう今の中国・ロシア・北朝鮮や戦前の大日本帝国のような人権抑圧国家になっていくでしょう。それだけは絶対に避けたいものです。

つい最近、これまで誰よりも世界平和を祈り人権を重視してきたチベット仏教最高位のダライラマがあのだレディーガガと会談しましたが、それを異様に敵視してテレビでダライラマを罵る中国高官の姿は権力者の醜悪な側面を暴露しており、見ていて中国の古い友人たちが気の毒になりました。

不具 2016年7月2日 森安孝夫

~~~~~

2016年5月3日配信分

森安通信 読者各位

前回の3月の配信では、リオ五輪に向けて日本バドミントン界の明るい見通しを嬉々として語れたのに、たった一ヶ月のうちに天国から地獄へ突き落とされてしまいました。言うまでもなく男子の田児・桃田選手らが賭博にはまって、無期限の登録抹消ないし出場停止の処分を受けたことです。でも先週中国の武漢で開催されたアジア選手権では、女子の高橋・松友組が優勝し、オリンピックの金メダルが現実味を帯びてきました。ただし残念だったのは、決勝で対戦した再春館製薬所の福万（ふくまん）・与猶（よなお）組が敗退したことにより、オリンピック出場を逃したことです。福万・与猶組は、所属会社が熊本県益城町にあり、勝っていれば日本から二組が出場できただけでなく、熊本地震の被災者を元気付けられると頑張ったのですが、既にリオ五輪出場が確定し

ていた高橋・松友組が手抜きせず、全力で戦った結果ですから仕方ありません。中国人記者からは、なぜわざと負けて日本から二組出場出来るようにしなかったのかという質問を受けたそうです。

ところで今日は我が国の憲法記念日ですが、あの共産党独裁政権の中華人民共和国にも憲法はあります。文章だけ読むと真に立派ですが、現実には共産党政権がやってきた事との間には余りにギャップがありすぎて、嘔き出してしまいます。さすが建前と本音が全然違って当たり前の中国だと、変に納得する自分がいます。でも我が日本で現政権が目指しているのも、似たような方向です。つまり立憲主義とか法治国家という甘い言葉だけは残して、実際には日本国憲法を中国並みの「画に描いた餅」にしようとしているわけです。憲法を政権や権力を縛るものではなく、政権を牛耳る権力者が自分に都合のよいように解釈できるようにしたいのです。今度の参議院選挙で自民・公明連立政権側が勝利すれば、その傾向に拍車がかかることは目に見えています。政権交代が容易になるようにと小選挙区制が導入されたわけですが、現状は自民・公明連立政権が得票率を遙かに上回る議員数を獲得できる仕組みになってしまっています。それに立ち向かうにはとてつもないエネルギーが必要であり、容易なことではありません。

選挙権が18歳に引き下げられたのを受けて、心ある高校教師がなにか現代政治に関連するまともな授業をしようとするれば、自民党の地方議員がしゃしゃり出て、「それは偏向だ」と文句を付けてきます。そういう馬鹿議員は自分が偏っていることには気付きませんが、教育の現場を萎縮させる効果は絶大です。

戦後の自民党政権と高級官僚は外交面では自らの頭で考えることを放棄し、ほとんど何でもアメリカの言いなりになってきました。なのに日本国憲法はアメリカの押しつけであり、屈辱的なものだから変えるのだと主張するのは自己矛盾ではないですか。憲法改正は自民党結党以来の大方針だとはいえ、かなり多くの首相は護憲派でした。改憲派の大物は岸信介・中曽根康弘であり、安倍晋三はその流れの中にいます。田中角栄おろしの急先鋒だった改憲派の石原慎太郎が、今頃になって田中角栄を天才だったと持ち上げる本を書いて稼いでいますが、田中角栄も護憲派だったそうです。私は自衛隊は合法と認める立場ですが、文民統制は徹底すべきです。あの田母神のような人が権力を握ったら怖ろしいことになります。

これまで私は繰り返し「歴史学の使命は権力の監視である」と主張してきましたが、いくら憲法学者や弁護士会が現政権のやり方を違憲だと判断して止めようとしても無駄なのですから、もはや歴史学者など出る幕はありません。なにか起死回生のアイデアがあれば、是非教えてください。

引退後は日本古代史も少し勉強するようになりました。6月4日（土）には故郷の福井県坂井市三国町で講演しますが、そこでは継体天皇出現の背景にも言及すべく準備中です。ここにチラシを添付します。地元において時間的余裕があれば、参加してください。但し電話予約が必要です。目下構想中の講演内容は次の通りですが、画像もたくさん使って一般の方にも分かりやすい内容にすべく検討中です。

1. シルクロードとは
2. 中央ユーラシアの気候と風土
3. 人類史の幕開け—農業の発明から四大文明へ
4. 製鉄技術と騎馬技術の発明
5. 世界史における遊牧騎馬民族の活躍とトルコ民族大移動
6. 継体天皇即位以前の日本と福井の状況
7. 継体天皇の百濟寄り政策と欽明時代の仏教伝来
8. 三種類の日本漢字音とインド由来の漢語

（9. 時間があれば私的随想：平安時代の渤海と江戸時代の韃靼漂流記によせて）

不具 2016年5月3日

森安孝夫

~~~~~

2016年3月24日配信分

森安通信 読者各位

今月にイギリスで開催されたバドミントンの全英オープン（事実上の世界選手権）で、奥原希望が女子シングルスで金メダル、高橋礼華・松友美佐紀組が女子ダブルスで金メダル、早川賢一・遠藤大由組が男子ダブルスで銀メダルを獲得しました。これは2年前のバドミントンのトマス杯（男子団体のワールドカップ）で金メダル、ユーパー杯（女子団体のワールドカップ）で銀メダルを

取ったのに続く奇跡的快挙なのです。特に奥原と高橋・松友組の金メダルは、その難しさから言えばシドニーオリンピックのマラソンで高橋尚子が、そしてサッカーの女子ワールドカップでなでしこジャパンが獲得した金メダルに匹敵するものです。ただし前もっての国民全体からの期待度と、それに見合うマスコミでの騒がれ方が全く違うため、高橋尚子やなでしこジャパンのように国民栄誉賞とまではいきません。男子シングルの桃田賢斗も含めて、これからマスコミがもっと派手に取り上げてくれて、リオ・オリンピックで1人ないし1組でも金メダルを取ってくれたら、バドミントン人気は一挙に跳ね上がることでしょう。もう50年近くバドミントンをやってきた者としては、是非そうなって欲しいと思います。

実は我田引水も甚だしく恐縮なのですが、2年前に自分の初めての個人論文集『東西ウイグルと中央ユーラシア』の原稿を完成して出版社に渡した時に、日本バドミントン界史上初のトマス杯優勝とユーバー杯準優勝のニュースが届き、今月の全英オープンのニュースは拙著『シルクロードと唐帝国』の学術文庫版の出版と重なりました。あまりの偶然に喜びも三倍増でした。

さて、その『シルクロードと唐帝国』ですが、これは2006年執筆、2007年出版の原版（講談社、興亡の世界シリーズ、第5巻）に、部分的増補と新たなあとがきを加えたものです。本書執筆のそもそもの意図は、明治以後の日本人の間に深く根付いてしまっている歴史観や人種・民族意識に見直しを迫り、世界から信頼され尊敬される日本人（特に政財界・官界のリーダーたち）を生み出すためには、高校世界史教育の刷新から着手すべきであり、まずは高校社会科（地歴科のみに非ず）教員の再教育が必須であるから、そのための参考書を提供するというものでした。執筆からほぼ10年が経ち、その本来の意図がどこまで浸透したか甚だ心許ないところではありますが、学術文庫版の出版に当たって、講談社のPR誌である『本』の編集部から関連エッセイを投稿するように依頼されました。担当者の許可を得て、『本』2016 April号に掲載された全文を以下に引用します：

かつて文系の大学教授には、ゆったりと研究に専念できるやや浮世離れた存在というイメージがあったかもしれないが、もはやそんな悠長な身分ではない。現代の大学教員は研究者であると同時に教育者でもあり、一般学生向けの授業をこなしながら、専門の学生・大学院生の教育に当たらなければならない。

これは大きな負担であるが、発想を変えれば「教える権利」があるということである。

文科系の学問の場合、研究の基本はあくまで個人である。しかし一人で猛勉強をして膨大な量の知識や情報を蓄え、そこから従来誰も気付かなかった新事実を発見したとしても、それが確かに新発見であることを他人に的確に伝え、その新発見の意義まで説明するためには、論理構成力・文章表現力を含む高度な発表技術が要求される。実はそれを磨く絶好の機会が、大学での講義なのである。学生を眠らせず引きつけておき、最後にあっと驚かせる結末にもっていくような講義は、一年に何回もできるわけではないが、常にそれを目指して準備することが、結局は読みやすく中味も濃い論文が書ける能力を養うのである。研究者としてどんなに多忙でも、「教える」ことに手を抜いてはいけない。

さてこのたび講談社学術文庫として刊行された『シルクロードと唐帝国』は、私が二〇〇六年に執筆した初めての概説書である。概説書の執筆には講義をすることと同じ効果があることは分かっていたが、私自身はそれを現役引退まで実行するつもりはなかった。

ところが今世紀初頭に政府の方針で21世紀COEプログラムが始まり、大阪大学でも文系学部が合同して「インターフェイスの人文学」というテーマで資金を獲得したことによって、事態が一変した。そのプロジェクトの一環として二〇〇三年から、私は同僚の桃木至朗教授らと協力して、夏休みに阪大豊中キャンパスに全国の高校地歴科教諭を集め、阪大側からは東洋史・西洋史・日本史の教員が参加して行なう高大連携の研修会（後に研究会）を発足させた。高校教諭に歴史学の最先端に触れてもらうという趣旨で、教育学系ではなく文学部の歴史系が主体となった全国でも初めての試みであった。初年度は交通費・宿泊費さえ全額こちらもちだったにもかかわらず、なかなか参加者が集まらずに苦労した。でもその後は全国に同様の会が次々に生まれていくのだから、振り返ってみれば我々がファースト・ペンギンだったのである。

毎年夏に三日間連続で開催されたこの会合を通じて、私は全国の高校教諭と密接なコンタクトを持つようになった。その結果、歴史学の最先端と高校世界史教科書の内容との間にかなり大きな乖離があることを再認識するに至り、自分の概説書出版の時期を早める決心をした。その時に講談社から「興亡の世界史」シリーズの一冊として、本書の執筆依頼が来たのである。まさに渡りに船であった。

私には、世界史の基礎知識こそ、自己認識のためのみならず責任ある社会人として成長するためにも、教養中の教養であるという信念がある。その分量は今の高校世界史教科書の半分でよいが、前近代史と近現代史の割合はたとえ三対七でもいいから、前近代史を絶対に残さなくてはならない。そして前近代史では中央ユーラシアの遊牧騎馬民族とシルクロードが大きな世界史的意義を持っていたことを、わずか一・二回の授業でもいいから必ず概説してもらいたい。拙著執筆の第一の目的はそのための参考書の提供にあった。

ユーラシアの東西南北を網目状に繋ぐシルクロードにおける貿易は、あくまで軽くて高価な奢侈品が中心であるが、そこで扱われる高額商品の中に重くても自分で動くことができる「奴隷」の存在を付け加えたのが私独自の視点である。私は華やかなシルクロードの主役としてソグド人を取り上げ、ソグド商人の奴隷貿易にも言及した。前近代の奴隷は、近代の悲惨な黒人奴隷とは全く違う存在であることが、本書によって実感してもらえらるはずである。一方、遊牧騎馬民族の機動力が火砲の発達する近代以前において世界史を動かす原動力であったことは、私独自の見解ではないが、西欧中心史観の打破には極めて有効であるため丁寧に解説した。

二〇〇七年の初版には予想以上の反響があり、大学の入試問題や高校の定期試験でも活用された。この学術文庫版でさらに多くの高校教諭が刺激を受け、将来の我が国を担う生徒に歴史の重要さと面白さを伝えていただければと願っている。なお私は大阪大学東洋史学研究室のHPで「森安通信」なるものを公開している。時に個人情報やバドミントンなどの趣味的記事も混じるが、本来は高大連携の歴史教育研究会及び拙著のアフターケア的意義も込めて始めたものである。

以上の通りで、そのタイトルは「シルクロード史研究と世界史教育」です。私としてはファースト・ペンギンとなった時に受けた逆風にまで言及したかったのですが、それは我慢しました。

不具 2016年3月24日 森安孝夫

~~~~~

2016年2月24日配信分

森安通信 追伸（画像添付）

先週2月18日に出した森安通信で、朝日新聞夕刊に掲載された北齊時代のソグド人の寝台（石棺床 せっかんしょう）を紹介した記事を取り上げたところ、東京方面の読者の一人から、いくら探してもそんな記事は見当たらないという返信が来ました。驚いて、大阪の朝日新聞の関係者で通信の読者でもある方に問い合わせたところ、やはりその記事は朝日新聞大阪本社発行の夕刊文化面のみの掲載であり、東京紙面には載らなかったとのことでした。親切にもその記事のPDFを送信して頂きましたので、許可を得て、それをここに添付します。

通信の読者には読売新聞の方もいらっしゃるのですが、両方から伺ったところを総合すると、朝日新聞でも読売新聞でも、文化面の記事には大阪本社版と東京本社その他の版とは相当大きな違いがあるようです。全体的にもこの頃は文化記事に替わって娯楽記事が幅を利かすようになったようで、関西の方が遺跡や文化財の記事は充実しているのだそうです。そういえば、かつての通信で正倉院展のことを話題にしても、関西以外の方からはほとんど反応がなかったことを思い出しました。有り体に言えば、同じ新聞を購読していても、地域によって教養に差がつくということで、関西に住むメリットを感じつつもいささか残念な気持ちになりました。

不具 2016年2月24日 森安孝夫

~~~~~

2016年2月18日配信分

森安通信 読者各位

昨日（2月17日）の朝日新聞夕刊に、6世紀後半の北齊時代に中国で活動したソグド人の墓から出た石棺床（寝台）の記事がやや大きく掲載されていました。我々のよく知る関西大学の森部豊教授が関わっているプロジェクトの紹介であり、ソグド人が学界以外で話題になるのはとてもありがたいことです。因みに似たような石棺床は、滋賀県のMIHO美術館にも所蔵・展示されていますが、近年、西安や太原で同様の物が出土しており、これらについては日本語・中国語の報告書が幾つも出版されています。ところが、今度は英語で石棺床を比較

研究した次のような本が出ました。これにはソグド人の漢文墓誌のカラー写真も含め美しい図版が豊富に掲載されています。

P. Wertmann, *Sogdians in China*. Darmstadt: Verlag Philipp von Zabern, 2015.

17200円

石棺床を残したソグド人の大部分はゾロアスター教徒と思われませんが、マニ教徒も混じっていたと主張する研究者もいます。

一方、最近の欧米の東洋学界では、中央アジア～中国のキリスト教史研究が一種のブームになっていて、以下に列挙するような論文集や単行本が次々に刊行されています。その大きな理由は、モンゴル帝国～元朝以前の中国のキリスト教遺物として長らく唯一であった大秦景教流行中国碑（たいしんけいきょう・りゅうこうちゅうごくひ；唐代長安に建立）に加えて、21世紀に入ってから洛陽で新たに唐代の景教経幢（きょうどう）が出土したからでしょう。キリスト教徒が多数派である欧米人にとっては、モンゴル帝国以前のアジアにおいてキリスト教徒が活躍した痕跡を探るのはたいへん興味のあることらしく、大きな研究資金もどこかから出ているようです。かつて明代に、唐代以降ずっと土中に埋もれていた大秦景教流行中国碑が再発見された時は、ちょうどイエズス会士が中国に進出を開始していた時期と重なったため、その研究が欧州で一大ブームになったのですが、それと似たような状況が21世紀初頭にも出現したわけです。

景教経幢の経幢というのは、基本的には仏教のもので、「仏頂尊勝陀羅尼經」などの仏典（の一部）と建立の由来・寄進者名などを彫りつけた石柱のことです。幢（どう）の本来の意味は「はたぼこ」です。幢は幡（ばん＝はた）と合体して幢幡（どうばん）という熟語になります。幢幡は仏教寺院の本堂内部などに荘厳（しょうごん＝装飾）のために天井からぶら下がっている布製（多くは錦や金襴で豪華）または金銅製の六角形のはたぼこを指しますが、経幢というのは境内の地上に建てられる石柱で、多くは八角形をしています。

洛陽新出土景教経幢に彫り込まれていたのは「大秦景教宣元至本經」というもので、そのタイトルを見ただけでも驚きですが、関係者であるキリスト僧の本名が「米姓」と「康姓」であって、明らかにソグド人なのです。また漢字のほかに景教特有の末広りの十字架のレリーフがあり、その左右を囲むレリーフはなんと飛天（ひてん）でした。言うまでもなく飛天とは、中央アジア～中

国～日本の仏教壁画に典型的なモチーフです。この景教経幢は確かにキリスト教の物ですが、随所に仏教文化の影響が見られるようです。

なお、私は相変わらずネストリウス派キリスト教（景教）という言葉を使っていますが、最近の欧米学界では*Church of the East*「東方教会」という呼び方に変わってきてつつあります。でも、東方教会では日本語で「ギリシア正教会＋ロシア正教会」などを合わせて言う場合と混同され、誤解が生じる恐れが大です。

以下に近年の欧米の景教関係出版物を列挙しますが、これは主に東洋学の研究者や院生向けですので、興味のない方は無視して下さい。

R. Malek (ed.), *Jingjiao* 景教. *The Church of the East in China and Central Asia*. (Collectanea Serica), Sankt Augustin: Institut Monumenta Serica, 2006.

D. W. Winkler / Li Tang (eds.), *Hidden Treasures and Intercultural Encounters. Studies on East Syriac Christianity in China and Central Asia*, Zürich / Berlin: LIT Verlag, 2009.

Li Tang, *East Syriac Christianity in Mongol-Yuan China*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 2011.

Li, Tang / D. W. Winkler (eds.), *From the Oxus River to the Chinese Shores. Studies on East Syriac Christianity in China and Central Asia*. (orientalia - patristica - oecumenica, 5), Zürich / Berlin: LIT Verlag, 2013.

E. C. D. Hunter, / M. Dickens (eds.), *Syrische Handschriften, Teil 2: Texte der Berliner Turfansammlung (Syriac Texts from the Berlin Turfan Collection)*. Stuttgart: Franz Steiner, 2014.

P. G. Borbone / P. Marsone (eds.), *Le christianisme syriaque en Asie centrale et en Chine*, (Études Syriaques, 12), Paris: Geuthner, 2015.

P. Zieme, *Altuirische Texte der Kirche des Ostens aus Zentralasien*. (Gorgias Eastern Christian Studies, 41), Piscataway: Gorgias Press, 2015.

これらはほぼ全て阪大東洋史で購入済みです（最後のツィーメ先生の1冊だけ未購入）。興味のある方は、今春の4月2日（土）に阪大で開催される中央アジア学フォーラムの時に御覧下さい。前もって関係者に連絡していただければ、なお確実です。

不具      2016年2月18日      森安孝夫

~~~~~

2016年元旦配信分

森安通信 読者各位

明けましておめでとうございます。皆様にとりまして、本年が昨年より少しでも良い年になりますよう、衷心よりお祈り申し上げます。

はじめにお詫びとお断りを申し上げます。まず年賀状を大量に手書きする苦行から逃れるため、多くの方々には本通信にて代替させていただきますこと、お許し下さい。それから本通信のような性格のものは、ブログにする方がいいのでしょうか、アナログ人間のため、このように一方的に配信するやり方に終始しております。それゆえ、時々、一方的な意見を長々と読まされるのは迷惑だというお叱りを受けます。その感じは私にもよく分かりますので、すでに昨年3月の現役引退時のメールのやりとりにより、配信先を大幅に削減する措置を取りました。今後も内容により配信先には気を付けますが、皆様の方でも、興味のない内容であれば適当にスルーするなり、完全無視していただければ幸いです。もちろん、今後は配信不要と御一報いただければ、即刻メーリングリストから削除させていただきます。なお私は年賀状を辞退したわけではありませんが、本通信へ一言の返信をいただければ一層嬉しい次第です。

さて、今年は一切何が楽しみかと言えば、私にとって第一は、リオ五輪でのバドミントンのメダル争いです。マイナースポーツであったバドミントンが、オグシオ人気でいささか注目されるようになり、前回のロンドン五輪で女子ダブルスの藤井・垣岩組が日本人初のメダル（銀メダル）を取ったとはいえ、まだまだ世界の壁は厚くて頑丈でした。それがこの二年間であつという間に様変わりして、男子も女子ももはや世界のトップクラスであり、金メダルさえ期待できるのです。福井県の星である山口茜選手には、12月に世界一になったばかりの奥原選手と競って、ますます上を目指して欲しいと思います。一方、同じく12月に世界一になった男子の桃田選手は、年末に中居正広の主宰するNHKの番組に出ていました。ただ残念だったのは、野球その他に詳しい中居君ですが、バドミントンのことは何も分かっていないようでした。あの芸術的ネットプレーは限りなく時速ゼロに近く、一方で強烈なスマッシュは野球の剛速球ピッチャーのスピードを遙かに上回るのであり、その落差のもの凄さがバドミントンの魅力なのです。これまでは中国・韓国・インドネシアなど外国の男子選手にしか見られなかった姿が、遂に日本人にも見られるようになったのです。NHK

の番組で桃田は、まだまだフィジカル面で自分より強い選手が海外にいると謙虚に述べていましたが、まだ半年以上あります。桃田、頑張れ！

次に、駒羽会（東大バドミントン部OB会）の話題です。平松由紀夫氏の本は前回メールで紹介しましたが、一般読書界でも評判になりつつあるようですから、今回は目次のファイルを添付します。平松さんの見識にも瞠目させられましたが、さらに驚かされた快挙は金丸清昭会長が一昨年の全日本シニア選手権の75歳以上の部のダブルスで優勝したのに続き、昨年はなんとシングルスで優勝したことです。ダブルスでは優勝に届かなかったということですが、シングルスの方が体力的にきついのですから本当に脱帽です。それから同期である小林健・三菱商事社長が、この4月から三菱商事会長になるという報道がありました。私も研究員になっている駒込の東洋文庫は、旧三菱財閥の第3代当主・岩崎久弥の基金によって設立され、その後、東洋学の世界的センターに成長したのですが、どうもこれまでの流れを見ていると、小林健君が近い将来に東洋文庫の理事長になる可能性があるようです。そうなれば、これまた不思議な御縁ですが、東洋史関係者は彼の名前を覚えておいてください。

次に私個人と歴史教育に関する報告です。個人も共同体も民族も国家も、すべて歴史的所産です。個人的・社会的・国家的難問も、それが生じた由来を知ることによってしか解決の糸口は見つかりません。我が国ではこれから選挙権が18歳にまで引き下げられるのですから、高校・大学の歴史教育は益々大事になります。その際、日本史と西洋史だけでは駄目なのです。日本は朝鮮半島・極東ロシア・中国・東南アジアと緊密な関係にあるアジアの国なのですから。

私はこれまでずっと日本とアジアを結び付けるキーワードとして「シルクロード」を使って来ました。高校・大学生の留学希望が減退し、逆に中年層までも含めて嫌中・嫌韓意識が蔓延する中、今後もその態度は変わりません。2007年に『シルクロードと唐帝国』（興亡の世界史05、講談社）を出版した時、高校の先生方や著名な読書人からはすぐに反応がありましたが、一般の方々にまで広がるには時間がかかるだろうと予測していました。それがなんと去年はあの本をきっかけとした御縁がいくつも生まれました。特に11月には東京・狛江の日本シルクロード文化センター創立10周年記念行事に招かれて、講演をしてきました。実はその時はまだ公言できなかったのですが、既に絶版となった『シルクロードと唐帝国』が、この度、学術文庫化されることになり、目下、その校正中です。「学術文庫版あとがき」では、拙著に対する批判にも答えますが、

ただ西洋中心史観の打倒を声高に叫ぶ森安が西洋の学者が作り出したシルクロードという言葉を使用するのは実に奇妙なことだという批判には、答えていません。開いた口がふさがらないというのが正直な感想だからですが、皆さんはどのように判断されますでしょうか？

シルクロード関連で言えば、つい最近、白須浄眞（編）『シルクロードの来世観』（アジア遊学192、勉誠出版、2015年11月、2000円）が出版されました。本書は、我々日本人が信じている仏教的来世観が、本来のお釈迦様の仏教とは全く違い、伝播の過程で中央アジアや中国で作りに上げられたものであることを教えてくれます。そもそも釈迦は神の存在を否定し、一切は空であるとし、輪廻さえ否定したのですから、来世（地獄や極楽も）などないはずです。実は2015年4月28日の森安通信で、一神教であるユダヤ教・キリスト教・イスラム教に対するものとして仏教を多神教の側に分類したところ、ある優秀な仏教学者の方から、強く抗議されました。仏教は一神教でも多神教でもなく、敢えて言えば「無神教」だとおっしゃるのです。確かに緻密な原始仏教学者から見れば、釈迦は「輪廻の夢から覚めて解脱した」だけであり、神仏の如きものはなにとつ崇拝していなかったから無神教なのでしょう。しかし現実には、釈迦の死後、人々が手を合わせて拝む対象として不滅のブッダが仏教世界に誕生し、紀元後のアジア中に伝播した仏教では、歴史的現象として如来・菩薩・明王・天という多種多様の仏像が崇拝されました。それを私は多神教的と表現したのです。他の複数の仏教学者にも伺ったところ、確かに仏教を単純に多神教と言ってもらっては困るが、私のような理解でもあながち誤りではないとも言われました。つまり、我々の知っている仏教とは、偉大な哲学者とも言うべき釈迦本人の教えではなく、釈迦の弟子・孫弟子どころかもっと後世の仏教者たちが長い時間をかけて「作り変えて」いった宗教ということのようです。中国・朝鮮・日本の仏教におけるそのような側面が、『シルクロードの来世観』によってより明らかになるように思います。南北朝～唐代の中国仏教でも平安時代の日本仏教（阿弥陀来迎信仰）でも、どうやら救済されたのは金持ちだけだったようです。現代世界最大の危機ともいうべきイスラム国を生み出した元凶は、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教という一神教間の争いではありません。元凶は土地・食料・地下資源や暴力装置（武器・軍事力・警察力）や教育機関を持てる者と持たない者との格差、人種・民族・身分差別による「貧困」なのです。

なお、前回の森安通信のメインテーマに対して、現在はイギリスに滞在中の青木敦・青山学院大学教授（元は阪大東洋史の同僚）より、次のような素晴らしいコメントが届きましたので、最後に本人の許可を得てそれを転載します。

「ご無沙汰しています。いまケンブリッジにいますが、日本の国大の人文系学部廃止統合政策については、こちらでは非常に有名です。すでに、6人から、（私から話題を振ったのではないのに向こうから）それについて質問されました。いずれも、ディナーやランチの時の雑談です。あるフランス人生物学者からは「そんなことは、自国の将来を否定することではないのか」と言われました。11月のディナーのあと、法学者、サー某教授（理系）、アメリカ人政治哲学者との4人で大学運営について話したとき、その話を振られましたが、全員知っていました。先々週は、ランチの時に名誉フェローの歴史学者にその話題をされ、さらに同じ日の夜には国際法学者からも「日本では…」と聞かれました。一様に、みなさん、全く理解できないが、何故だ？という姿勢です。私は文科省の立場や意図などを客観的に説明しています。ともかく、世界の多くの研究者が、日本のこのニュースについてかなり正確に知っています。」

不具 2016年1月1日 森安孝夫

~~~~~

2015年12月29日配信分

森安通信 読者各位

年末のあるテレビ番組で、今年もとても腹が立ったニュースのベストテンをやっていましたが、私にとってそれは、6月に文部科学省から文学部ないし類似学部の廃統合・縮小を求めるような通達が出されて世間と大学人を唾然とさせたニュースでした。実学重視と思われがちな財界首脳からさえすぐに反論が出されて、文部科学省側は慌てて言い訳や火消しに追われましたが、今や、文学部の学問を虚学とか不要であるということ自体、その発言者に「教養がない」ことを如実に示しているのです。断っておきますが、理系出身者でも教養のある人は、こういう言い方はしません。ところが、これほどみっともない理系バカ的発想をする官僚が文部科学省あたりに巣くっているのかと思うと、実に情

けなくなります。ただ聞くところによると、あのような発想を主導したのは、旧文部省系ではなく旧科学技術庁系の官僚だったそうですが・・・

以前に私は、歴史学は実学だと主張しましたが、実学でなくても、文学部全体でやっている学問が、人間存在の意義（生まれてから死ぬまでどう生きるか、何の為に生きるか、なぜ生きていけるのか）を考察するものであり、人生を豊かにするものなのです。この世から歌謡・舞踊からオーケストラまでの音楽、詩歌や小説をはじめとする狭義の文学、絵画・彫刻・華道・書道などの美術、そして総合芸術としての映画、などなどがなくなったら、生きていて楽しいのですか？自分というものも含め、現在に存在するありとあらゆるものの由来を考察する手段（即ち歴史学）がなくなったら、地に足を着けて生きていけるのですか？いや、神や天地創造などの空想の領域さえ、文学部の学問の考察対象なのです。

こうした説明にはきりがありません。要するに、今後も文学部の学問を不要と見なす人がいるとしたら、それは単に「教養がない」だけのことです。このような「教養のない」エリートが存在する国は、この日本だけです。それを左翼愛国者である私は心から憂えています。そういう硬直した「バカ秀才」を生み出す元が、大学入試と高校教育の現場にあることを、高校・大学の教育現場にいる皆さんはくれぐれも自覚してください。

ところが今、やや大袈裟に言えば、高校の世界史と大学の東洋史の両方が、存亡の危機にさらされているようです。本通信の読者であり、私の信頼する私立高校の教員の方によるまとめを引用させていただきますと、次の通りです。

「高等学校の次期学習指導要領で世界史必修が外れ、歴史総合が必修化されることが公表され、高大ともに世界史関係者に危機感が募っています。文科省によると、歴史総合は日世融合で（日本史主体？）しかも近現代史のみ扱うとしています。これにより世界史は選択科目化され、世界史の前近代史を学ぶ高校生は本当に激減するでしょう。このままでは、世界史教育・そして日本の東洋学は衰退してしまいます。前近代史の学問は、全人文・社会科学の基礎研究ともいうべきものだとは私は思います。世界の基層となった社会の解明には歴史学が必要不可欠です。それが危機に瀕するというのは私は見過ごすことはできません。」

そこで油井大三郎・東京女子大教授や桃木至朗・阪大教授らが協力して高大連携歴史教育研究会を立ち上げました。現役を退いた私はもはや側面からの援

助しか出来ませんが、東大・京大で世界史の入試問題を作成する立場の方々には、深刻に受け止めてもらいたいものです。

全世界に戦火が広がり、各国で右翼的な民族主義・排外主義が台頭する中、戦争放棄を掲げ、個人の人権の徹底的尊重を謳った日本国憲法は理想主義過ぎるとたたかれ、特定秘密保護法も安全保障関連法も国会を通過してしまいました。沖縄の米軍基地の辺野古移転問題も日本政府は力づくで押し切ろうとしています。そして、どう見ても政権側に都合がいいような方向で、選挙権が18歳にまで引き下げられたのです。放任すれば権力者は必ず腐敗に向かうという世界史の基本原則を知ってもらうには、最低限の世界史教育が必須なのです。ところがもし、東大入試から世界史がなくなったら、全国の高校現場の世界史教育は崩壊するでしょう。おおまかでいいのですが世界史の知識は、エリートであれ社会的弱者であれ、右翼であれ左翼であれ、いかなる宗教を信じるものであれ無神論者であれ、自分とその仲間以外の考えを持つ人と対話する場合には、絶対に必要なのです。但しその世界史が近現代史だけになったら、今でさえ世界を覆っているユーロセントリズム（＝西洋中心主義，欧米中心主義）がさらに非道くなるだけで、百害あって一利なしとまでは言いませんが、やはり駄目なのです。

仲間誉めと思われると困るのですが、東大バドミントン部の先輩で、三菱商事に入社し、三菱製紙販売社長を退任された平松由紀夫氏が、この12月に『逆転の発想 人間が神を創りたもうた』（文藝春秋，1600円）という本を出版されました。それを拝読したところ、私が日本のエリートに求める理想像が既に実現されているのです。すなわち世界史の大まかな流れを把握した上で、世界情勢を見渡し、現代に起きているあらゆる社会現象や自然現象に冷静な判断を下せる人物像です。これだけの見識をそなえたエリートが、官僚や政治家の間にもう少し増えてくれば、日本の未来は明るくなるのです。その種を播くのは、あくまで高校と大学教養課程で、アジアをないがしろにしない世界史の基礎を教えられる歴史教員なのです。

ところで以前に私が、世界史教科書や歴史書からイスラム教という術語を追い払い、イスラームに一本化しようとする勢力を批判しましたが、もはや敢えて批判する必要はなくなったのではないのでしょうか。かつてタリバーンがアフガニスタンのバーミヤーン大仏を爆破したのに倣って、イスラム国がシリアのパルミラ遺跡やイラクのニムルド遺跡・ハトラ遺跡の破壊のみならず、モスル

の博物館の収蔵品までも破壊しているのは、偶像崇拝を禁止するイスラム教の狭義に則っているのです。テレビに出るコメンテーターが、しきりにイスラム国とイスラム教徒一般を同一視してはいけないと訴えているのは真にもっともですが、ならばなおさらイスラム国はイスラム教という宗教の狂信的過激派分子として差別化すべきです。神が宇宙や人間を創ったのではなく、人間が神を創ったと言う平松氏の発想を受け取れば、イスラム教もムハンマドという人間が作った一宗教に過ぎないのです。

イスラム国から逃れたイスラム教徒の多くが、どうして「十字軍」として敵視してきたキリスト教徒が圧倒的多数を占める欧州に難民として向かうのでしょうか。なぜ産油国の大富豪の住むイスラム教国に向かわないのでしょうか。少子化に悩む日本に、大量の難民が押し寄せたら、受け入れる覚悟はあるのでしょうか。平松氏は、少子化対策として移民を増やすことには反対で、専業主婦に働いてもらう方を提案していますが、私もそれに賛成です。

不具 2015年12月29日 森安孝夫

~~~~~

2015年12月7日特別配信分（一部の方へのみ）

森安通信・号外

実はバドミントン関係者という、ごく狭い範囲にだけ送る森安通信の号外ですが、バドミントンにいささかでも興味を持って頂ける方にも特別に送信します。

昨日の日曜は、BS1でバドミントンの全日本総合選手権をやってくれたので、決勝の5試合すべてを完全に見ることができました。私にとっては今や福井県の星である山口茜ちゃんが準決勝で負けてしまったことだけは残念でしたが、すべて素晴らしい試合で、日本のレベルがまた一段と上がってきているのを実感しました。特に男子ダブルスでは第1・第2シードが共に敗れて、若い力が台頭しているのに目を見張りました。

今週はドバイで、世界のトップ8だけが集まるスーパーシリーズファイナルがあるので、それも楽しみです。それにも関連してますが、今の全日本トップ

選手の紹介記事を5つほど森安楽人がJsportsに書いていますので、また御覧頂ければ幸いです。次のアドレスでアクセス出来ます。

<http://www.jsports.co.jp/press/column/writer/89/>

なお駒羽会の大先輩である平松由紀夫氏が、この度、『逆転の発想 人間が神を創りたもうた』（1600円）という御著書を文藝春秋社から出版されました。私は目下、2007年に出した拙著『シルクロードと唐帝国』（講談社）の学術文庫化に向けて、その初校ゲラに忙殺されているためまだ拝読しておりませんが、年内には拝読する所存です。

~~~~~

2015年11月3日特別配信分（一部の方へのみ）

森安通信・号外

あと30分ほどでABC朝日放送の「草原に目覚めた壁画を救え ～モンゴル地下墳墓の謎～」が放映されるので少しどきどきしていますが、この号外の目的は明日の水曜・午後3時15分よりNHK総合ローカルトピックスで全国放送される「東尋坊・玄達瀬」についてです。東尋坊は私の出身地の有名な観光スポットですが、近年はやや俗化していて、隣接の雄島と越前松島に人気が移っていました。ところが俳優の照英が案内役となったこの番組で、地元の人もなかなか見られない東尋坊と雄島の空からの感動的な映像が紹介され、観光地としてだけでなく学問的にも重要な場所であることが再認識されました。しかしそれ以上に驚いたのは、日本海のだ真ん中にある伝説的な漁場「玄達瀬（げんたつせ）」の映像です。海中に山が聳えていて、頂上部はわずか水深10メートルであるため、漁場としてその豊かさは際立っており、プロダイバーが案内して撮影された水中映像に、地元の漁師達さえ驚愕していました。そのプロダイバーが私の従兄弟の森安忠雄です。NHK福井の制作で今月初めに地域限定で放映されたものですが、素晴らしかったので全国放送になったそうです。是非、御覧下さい。

~~~~~

2015年10月27日配信分

森安通信 読者各位

安保法制にもTPPにも原発再稼働にも大企業の武器輸出と偽装工事にも問題は多すぎるほど多く、ひたすら平和と衣食住の安全と基本的人権だけを願う多くの庶民には悩みの種は尽きません。しかしその一方で、安保法制もTPPも原発再稼働も武器輸出も全てよしとする庶民の数も決して少なくはなく、もしかしたらもはや両者の数はほぼ拮抗しているかもしれないのです。そうすると、これまで前者の立場に立ってきた学者や教育者や文化人はどのような行動を取ればいいのでしょうか？従来の立場を維持し続けると、中央や地方の政権側（国会議員・地方議員）から攻撃を受け、財界からも煙たがられ、いつまでも平和憲法護持を唱えているのは利敵行為に等しいとして「売国奴」のレッテルさえ貼られかねないのです。

これまで私は繰り返し歴史学とマスコミの使命は「国家権力の監視」にあると言い続けてきました。しかし、それはあくまで立憲主義のもと権力者側も「憲法」は守るという前提においてでした。戦後70年間の日本は本当に幸せな国でした。戦争はなく、右翼的文化人の言論の自由もしっかりと守られてきました。しかしながら、権力者が憲法を無視し、違憲の法律を作れるようになってしまったこれからも、日本はいい国であり続けられるのでしょうか。まさか北朝鮮のような独裁国家になる恐れはないとしても、今の中国やロシアのように言論の自由はなくなり、政権批判をすればあつという間に監視される対象になる恐れは大いにあるのです。今後も歴史学が、戦前の皇国史観のように国家権力の意のままにならないためには言論の自由の確保しかないわけで、そのためには立憲主義の回復が必須です。次回の国政選挙が大きなターニングポイントになりそうです。

一昨日の日曜夜9時から放映されたNHKスペシャル「新・映像の世紀1：映像でたどる激動百年」は優れた番組でした。オスマン帝国を倒すためイギリスが仕掛けた三枚舌外交（アラブ人にもユダヤ人にも嘘をつき、フランスと結託）が現代まで続く中東の果てしない戦争の元凶であること、貧乏な庶民の味方であったはずのレーニンが、共産主義を標榜して恐怖政治を行なったソ連・中国・北朝鮮のお手本となったこと、天才的理系学者が毒ガスと原爆の生みの親となったこと、戦争と結びついた経済界が国際政治を動かしたことなど、実に高校

生にも分かりやすい内容でした。アラビアのロレンスは英雄でも何でもなく、政権に使い捨てされたスパイのようなもので、アラブ人を裏切った罪悪感で失意のうちに亡くなったのです。現代史の授業では数時間どころかもっと多くのコマ数を費やすところが、1時間15分で分かるのです。きっと再放送があるでしょうから、ビデオにとって高校・大学の授業に使うことをお勧めします。でも、これを見て、イギリスやフランスやアメリカも国益と称して実に非道いことをしてきたものだ、これなら戦前の日本の国策も別に悪くなかったじゃないかと思われると、困るのですが…。今日の新聞広告に「現実社会では、非道徳的な奴が成功している」というビートたけしの言葉が載っているのを見て、思わず頷いてしまいました。

今年も正倉院展の時期になりましたが、皆様、これまで何回ほど行かれたことがあるでしょうか？私はこの40年間でせいぜい十数回です。日本文化の源流の一つを求めて、正倉院御物を通じシルクロードに思いを馳せるのは貴重な機会です。最近、国際的に活躍した経験の豊富なある実業家から私に、海外で活躍する日本人に国際的感覚が欠けていて困る、シルクロード（ユーラシア）から見た日本古代史という視点で高校生向けの副読本を書いてくれるなら資金援助をしてもよいという申し出がありました。そして一昨日の日曜の朝日新聞に、二面ぶち抜きでシンポジウム「発見・検証 日本の古代史」の第3回「ここまでわかった日本の古代」の報告記事が掲載されていました。学界の錚々たるメンバーが揃ったようですが、子細に読んでも、結局は分からないことが多いということが分かったという程度で、大して参考にはなりません。記事をまとめた記者も良くないのでしょうか、発表者達の発言にも特に傾聴に値するものは見当たりませんでした。それに反して日本古代史・考古学関係の著作は陸続と書かれて増え続ける一方なので、もはや「先行研究の完全なる追体験から始める」という文献史学の鉄則は、この分野には当てはめられないように感じます。こうなったら、先行研究など無視してでも本質を見抜く（真実にたどり着く）天才に期待するしかないのでしょうか。しかしそれはもはや人文科学としての歴史学ではなく、文学（芸術）としての歴史学の範疇です。

最後になりますが、今度の文化の日（11月3日、火曜）の朝に私がテレビ出演することになりました。ただし午前9時58分から10時53分までの一時間番組のどこかで合計してもせいぜい2～3分だそうで、しかも大阪のABC朝日放送

の作成した報道特別番組ですので関西でしか見られないそうです。番組のタイトルは「草原に目覚めた壁画を救え ～モンゴル地下墳墓の謎～」というもので、日本の高松塚古墳に似たようなものがモンゴル草原でも出土したことを紹介しています。正倉院展と合わせて御覧頂ければと思います。

不具

2015年10月27日

森安孝夫

~~~~~

2015年7月5日配信分

森安通信 読者各位

歴史学とマスコミの使命は、「権力者の暴走の監視」という点では共通してはいたはずですが。しかし、私がいつも言うところの理科系的歴史学者でも文科系的歴史学者でもないいわゆる歴史家（小説家・漫画家・批評家など）の中には、権力者の暴走を止めるどころか、むしろ推進する立場の人も少なからず現われているのが現状です。どう判断したらいいのでしょうか。

そもそも言論の自由と言論弾圧とは両立しないはずである。ところが今の自民党タカ派の国会議員（それに連なる県会議員なども）とその精神的支柱となっている学者・評論家・作家たちの間では、それは両立しているらしい。自分たちの仲間の本音発言や失言がマスコミ報道や国民世論の批判を浴びると、それを言論の自由と称して擁護する。だからいわゆるヘイトスピーチにも寛容である。ところが自分たちの考えや政策に従わない者たちは「悪」とみなして、「懲らしめる」べきだという発想をする。江戸時代からの「お上」意識の継続である。自虐史観を廃し愛国心を育てるという建前の教科書検定、教育現場における国歌斉唱と国旗掲揚への介入、特別秘密保護法など、実はいずれも「お上」からの言論弾圧の一環である。日教組は懲らしめられたが、右翼の街宣車は放任されたままである。今の日本で合法的に武器使用できるのは警察と自衛隊だけであり、それを動かせるのは「お上」たる国家権力者、つまりほとんどが自民党の国会議員なのである。奇しくも石破茂・元自民党幹事長が指摘する通り、自民党がガタガタっとくるのは、政策からではなく「自民党って、なんか感じ悪いよね」という国民の意識が高まった時なのである。全共闘の時代以後、長らく政治に関心を示さなかった大学生や若者が、今の安倍政権のやり方

に反対する声を上げ始めたのは、論理よりむしろ直感的危機感、もしくは旧態依然の「お上」意識に生理的嫌悪感を覚え始めたからではないだろうか。

今の国会論戦の水準の低さや首相答弁は、まさにこの国に「反知性主義」がはびこっていることを象徴している。政権担当者が自分に都合のいい御用学者（憲法学者であれ歴史学者であれ）を本物の学者と持ち上げ、都合の悪い学者には曲学阿世の徒という揶揄を投げかけるのでは、話にならない。よりによって教養や知性の薄い国会議員を多数抱え込んでいる自民党という権力者集団を生み出したのは、戦後民主主義とアメリカの核の傘の下での平和主義の恩恵に浴し、自国の政治家にそれほど高い能力を要求してこなかった日本国民と戦後教育の責任なのだろうか。

もしそうであるならば、今後の高校・大学の歴史教育はどうあるべきか。それは今の政府・与党にはびこる反知性主義とか、野党の質問に下卑たヤジを飛ばすような品格のない政治家を今後は生み出さないように、生徒・学生に過去の史実は複眼的に見るべきであり、立場が違えば評価が逆転することさえあることを教え、自分で考える能力を身につけさせることである。歴史科目は暗記物でないことを強く意識させ、高校の中間・定期試験でも大学入試でも年代とか人名とか些末な事柄を問うような出題を即刻廃止すべきである。どうしてもやりたければ、年代・人名・事項を列挙して短いストーリーで解答させたらよかろう。歴史は大きな流れさえ分かれば誰にでも面白いのであり、歴史に興味を持てば、社会人になってからでも自分で読書して巨視的視野を獲得してくれることが期待できる。それでこそ日本社会の上から下まで、どこにでも真のオピニオン・リーダーが生まれてくるであろう。

そもそも学問というのは人類の「知の地平」を拡大するために発展してきたものなのであり、「知識」や「智慧」を評価しない「反知性主義」に凝り固まった政治家を選び続ける国は、いずれ衰亡するしかないのである。また、文学部に代表される人文科学系学部は、人類が獲得してきた「知の地平」を維持・発展させる「知の宝庫」なのであり、経済効率だけから文系学部を縮小し理系学部に振り替えようとするような一時代前の後進国的発想が、政府・与党や一部の官僚・経済人たちの間に見られるのに対しても、「馬鹿なことを言うな！」と一喝すべきである。文学部の学問は虚学どころか、いまや法学・経済学以上の実学である。西欧中心主義が世界を席卷している今、日本が世界中から尊敬

されるのは、理系・文系を問わずありとあらゆる分野の専門家が揃っているからなのである。

とはいえ、歴史学者は近未来の予言者ではなく、今日・明日の政策にすぐさま正否の判断を下せるものではありません。沖縄の現状を見れば分かる通り、もはや保守と革新の区別、右翼と左翼の区別などなくなりつつあります。このようなねじれ現象は世界中どこでも起きています。特定秘密保護法はすぐに廃止すべきですが、私はもはや単純な憲法護持論者ではありません。国際情勢は時々刻々と変化し、安全保障の最前線で実際に何が起きているのか、一般人にはほとんど詳細且つ正確な情報はもたらされていないのですから、平和憲法と自衛隊と安全保障の問題などはやはり政治家に任せるしかないというのが私の意見です。

但し、その肝腎の政治家に知性も教養もなければ、全面的委任などできっこありません。高校・大学の歴史系教員の皆さんには、18歳からの選挙権が実現した今、御自身の知性・教養が、周りの生徒・学生に多大の影響を及ぼすことを自覚していただき、日々の研究・教育に精進していただくことを切望するばかりです。余り目先にとらわれず、長期的展望のもとで、遊び心も失わずに頑張ってください。

不具

2015年7月5日

森安孝夫

~~~~~

2015年4月28日配信分

森安通信 読者各位

3月19日の通信への返信結果により、今回から配信先は大幅に縮小します。高校教員に関しましては配信継続希望の方と過去に一度は返信のあった方に限定した結果、従来の半数となりました。一方、それ以外の大学関係者／友人／知己に関しては、継続希望の返事を頂かなかった方のメアドを機械的に全て削除したわけではなく、適当に判断しております。結果的に、従来は400名以上に配信していたものが、今回からは270名程度になります。

さて4月23日の朝日新聞の文化・文芸欄に、チベット仏教の最高指導者であるダライラマ14世の単独会見記事がありました。周知の通り、ダライラマ14世は

ノーベル平和賞受賞者ですが、中国政府からは危険な「分裂主義者」として非難されている人物です。もちろんその非難は、60年ほど前の共産党軍によるチベット征服を正当化し、チベット民族を「中華民族」の中に吸収してしまおうという政治的なもので、実際のダライラマは稀に見る高潔な人格者です。決して仏教だけが唯一の真理という立場を取らず、地球上に存在した多数の宗教伝統の上にくつもの真理を認める立場を取り、「敵もまた神が創造したもので、同じ神の子ではないか」として過激派組織「イスラム国 (IS)」のテロリストとさえ対話の道を探るように求めています。全くその徹底した非暴力主義には圧倒される思いですが、その根底に「教育は、自分を取り巻く世界の全体像についての『知』を与えてくれる。それによって現実的な行動を取れるようになる」という信念があるのです。まさに最近とみに増えてきている「反知性主義」とやらを、見事にやっつけてくれる痛快な言葉であり、歴史学など「虚学」であると馬鹿な風潮に鉄槌を下すものです。歴史学徒や歴史を教えている教員は、もっと自分の仕事に自信を持って下さい。

因みにそのダライラマも推薦する岩波文庫本が、監訳者である友人の今枝由郎氏から送られてきました。ソナム・ギェルツェン著『チベット仏教王伝 ソンツェン・ガンポ物語』（青498-1, 2015年, 1020円）というものです。原著は14世紀に著された『王統明鏡史』の序章から第17章までで、ソンツェン・ガンポは7世紀の吐蕃帝国の建国者ですから、近代的な意味の歴史書ではありませんが、チベット人の歴史観や仏教観を理解するには役に立つと思われまます。さしずめ日本で言えば『古事記』に相当するでしょうか。

ところで昨年末と今年元旦の通信で、拙著『東西ウイグルと中央ユーラシア』について紹介しましたが、実は明日の読売新聞・朝刊文化面にそれに関する私へのインタビュー記事が掲載されるそうです。私は今年に入ってから本書以外にも、近畿大学への置き土産として『ウイグル=マニ教史関係史料集成』（『近畿大学国際人文科学研究所紀要』平成26年度版, 137頁, カラー図版16枚）を出版しましたが、これは拙著の姉妹編ともいえるべきものです。それに続いて先月には、吉田 豊／古川撰一（編）『中国江南マニ教絵画研究』京都, 臨川書店, 2015年3月, 310頁, 大判カラー図版21枚, 18000円）という大著が出ました。つまり今年になってマニ教に関わる本が立て続けに3冊も出たということで、これは我が国の出版界では稀に見る現象です。

現代世界で大きな影響力を持つ宗教は言うまでもなくキリスト教とイスラム教であり、それにヒンドゥー教・ユダヤ教・仏教・道教が続きます。しかし経済的な影響力を考慮すれば、キリスト教とイスラム教とユダヤ教が群を抜いているのではないのでしょうか。そしてその三者は出自を辿れば紛れもなく兄弟関係にあるとあってよいのです。一方、マニ教は、先行するゾロアスター教・仏教・ユダヤ教・キリスト教の始祖たちを自分に先行する預言者と認めながら、自分こそが最後で真の預言者とするマニが3世紀に創始した折衷宗教であり、一時はローマ帝国でキリスト教を凌駕する勢いを示しました。ピレンヌの「ムハンマドなくしてシュルルマーニュ（カール大帝）なし」という有名な言葉がありますが、私に言わせれば「マニ教なくしてキリスト教なし」です。でも皮肉なことに、「最後の預言者」を自認したマニの世界宗教史上の位置は、4世紀後にムハンマドに取って代わられてしまい、人類文明の発祥の地であり、文化的にも宗教的にも多様性を認めてきた西アジアは、イスラム教を筆頭にキリスト教・ユダヤ教という一神教ばかりが幅を利かす世界へと変貌していったのです。

それに対してパミール以東のアジアではまだ仏教・ヒンドゥー教・道教といった多神教が生き残っていますが、多神教とはいえ余りに平和主義的すぎたマニ教は、古代ウイグル（東ウイグル帝国～西ウイグル王国）では国教としての地位を200年ほど保ったものの、結局は仏教に取って代われ、最後は中国江南地方で道教と習合して細々と生き残ったに過ぎません。でも世界中の暦で日曜日が赤字になっているのはマニ教の文化遺産であり、書物の挿絵としてのミニアチュールや製本技術にもマニ教の影響が大きいのです。

創唱宗教の中で始祖自らが教義を聖典（経典）として書き残したのは、マニだけです。それがマニ教の特長です。しかもマニは優れた画家でもあったため、経典の内容を絵画にも描いて説明しました。でもマニ教の衰亡と共にマニ教絵画はほとんど地球上から姿を消しました。ところが20世紀初頭のドイツなどの中央アジア探検隊により、現在の新疆ウイグル自治区のトゥルファン盆地からマニ教絵画の断片が発見されて注目を集め、21世紀初頭になってなんとこの日本から完全なマニ教絵画が次々と発見されたことにより、特にキリスト教圏である欧米の東洋学者の度肝を抜いたのです。

その経緯について、これまでも森安通信で何度か紹介してきましたが（特に2011年5月31日と2012年5月31日）、今度の吉田 豊／古川撰一（編）『中国江

南マニ教絵画研究』にその全てが集大成されたのです。これは実に美しい本ですから、見るだけで高校生にも楽しんでもらえると思います。因みに森安通信の読者である神奈川県の松木謙一先生からは、かつての森安通信に関連して、「日本史にからむ一部の郷土史家の間では、中国渡来の仏画である場合、今後はマニ仏であるかどうかも念頭に置いて見るべきとの声が挙がっている」という内容のメールを頂きました。確かにその通りで、『中国江南マニ教絵画研究』はそのような広い視野を持つ郷土史家にも是非御覧いただきたく思います。

本書の文章で書かれた内容は専門性の高いものですが、一般知識人や大学生／高校生には第1部の前編のマニ教概説(pp. 8-24)だけでも読んでもらえれば、マニ教史やマニ教教義の中核をなす天地創造神話(宇宙生成神話, 宇宙論)について必要最小限の知識はインプットされると思います。あちこちの大学／高校の図書館や公共図書館に入れて頂ければと願う次第です。私が東洋史の卒論で「ウイグルのマニ教」をテーマに選んだ時、なんだか無意味なことをする変な奴と思われたようですが、私自身、マニ教学が今のような活況を呈するようになるとは夢想だにしませんでした。人生は本当に分からないものです。

不具

2015年4月28日

森安孝夫

~~~~~

2015年3月19日配信分

森安通信 読者各位

この3月で阪大定年後3年間勤めてきた近畿大学を退職し、阪大でも定年後に続けてきた非常勤講師をやめることになりましたので、これを機会に本通信の配信先整理の御願いをしたいと思います。

私は東大の学生時代に、「東大解体」を標榜した全共闘シンパだったこともあり、40歳を目前にして、出身母体である東大・文学部・東洋史学科に教員として戻ってくるように言われた時、それをお断りして阪大に留まる決心をしました。しかし世界に冠たる日本の東洋史学を支える後進の育成には常に責任を感じており、歴史学の裾野を広げるための高校・予備校での世界史(当然ながら日本史を含む)教育にも関心を抱き続けていました。そして50代になり、阪

大東洋史の5人の教員をまとめる立場にあった時、大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」が獲得した巨額資金の一部が、私にも配分されることになりました。ほとんど予期しておらずにいわば「お上」から降り注いできた資金でしたから、その有効利用をはかって2003年に開始したのが、夏休みに全国から高校教員を集め、阪大側からは東洋史・西洋史・日本史の教員が参加して行なう高大連携の研修会（後に研究会）でありました。初回は交通費・宿泊費さえこちらもちでしたが、それでも高校の校長たちに胡散臭い会だと疑われて参加教諭が集まらず苦労しました。

その後、同種の研修会・研究会は全国の大学にまで波及する一方、本家とも言うべき阪大の研究会は桃木至朗教授が主宰者となって今日まで継続しています。私が主宰したのは最初の2年間だけでしたが、2008年からは桃木教授の主宰する活動を側面から補佐できたという意味も込めて「森安通信」を配信し始めたわけです。阪大定年後に近畿大学に奉職した3年間も阪大では非常勤講師でしたので、研究会への参加も通信も以前と同様にやって来ました。然るに、この3月末をもって私は近畿大学を退職し、阪大の私の後任には、教え子である松井太・弘前大学教授が着任することになりました。

この7年間で高校教員側の異動も激しく、本通信もかなり大量に宛先不明で跳ね返されてきます。そこでこの際、配信先のメールアドレスを大幅に整理したいと思います。従来の通信の配信先は以下の通りです。

- 1) 阪大21世紀COE及びそれ以後の高大連携プログラムに参加された全国高校社会科教員および教育出版関係者
- 2) 中央アジア学フォーラム参加者
- 3) 阪大東洋史OB・現役
- 4) 東大バドミントン部OBの一部（同期とそれに近い先輩・後輩）
- 5) 東大駒場42L III 6Dクラスメートの一部
- 6) 福井県立藤島高校同期生の一部
- 7) その他の個人的友人および報道関係者

私は新聞・テレビでの発言を飯の種にする評論家でも言論人でもありませんから、本通信を見知らぬ人にまで広げようという意図は当初から毛頭ありませんでした。ただ、大阪大学での研修会・研究会を通じて御縁のあった方々に世界史教育の関わる情報提供を目指し、副次的に長らく年賀状を交換していた旧知の方々に近況報告をするという目的で配信してきてだけです。

かつてはオーソドックスの権化、つまり保守思想の体現者とみられたカトリック教会の司教たちが安倍政権の軍備優先姿勢を批判しただけで左翼と揶揄される昨今の状況です。ゴーマニズム宣言で有名な小林よしのり氏さえ今やエセ右翼と批判されているそうですね。そうすると左翼愛国主義者である私は小林よしのり氏の愛国心の方に、安倍首相のよりはるかにシンパシーを感じます。因みに今日の朝日新聞に掲載された小島毅・東大教授のオピニオン記事は素晴らしいですね。さすが本物の学者です。彼には大阪大学歴史教育研究会にも二度ほど来てもらったことがあります。専門の儒教研究者としての立場から、吉田松陰の思想さえ場合によってはテロに繋がる危険性のあることを指弾しており、安倍首相への頂門の一針になっています。今年の元旦に配信した森安通信で、「最近の高校の教科書や副読本などで、イスラム教は宗教ではないからイスラームと呼ぶべきという主張が受け入れられつつありますが、こんな馬鹿馬鹿しいことを言い出したのは一体だれですか？」と書きましたが、イスラム教が宗教でないなら儒教はどうなるのですか。儒学とも呼ばれる儒教こそ単なる宗教ではありませんよ。

いずれにせよ私の基盤はあくまで理科系的歴史学者ですから、今後はあまり現実政治に関わる発言は控えて、世界史教育と人生を楽しく生きるための趣味に重点を置く配信にしたいと考えます。因みに、以前の通信で私が「歴史認識」というのは歴史学者の領分ではなく政治家の領分だと述べたのは、現代史においてはという前提でありました。そもそも私は現代史などという学問分野が成立するとは思っていないのです。なぜなら現実の政治を動かしてきた政治家や軍人達が多数生存している間は、政治家や高級軍人達が歴史学者以上に真実を知っている可能性が高く、歴史学者の貢献できる範囲は限定されているからです。いい例が日米安保に関わる密約の存在の有無に関わる議論でありましょう。

いずれにせよ森安通信は、ブログのように一定の公開性のあるものではなく、自分の言いたいことだけを一方的に言っているだけのものですから、御迷惑と感じる方に無理に送信するものではありません。その点を御理解の上、今後も配信を希望される方のみ、一言の返信を御願ひする次第です。今月末で近畿大学での私のメールアドレス [uighur982@kindai.ac.jp](mailto:uighur982@kindai.ac.jp) は閉鎖されますので、返信先は阪大・名誉教授として使い続けられる [moriyasu@let.osaka-u.ac.jp](mailto:moriyasu@let.osaka-u.ac.jp) のみとなります。

不具

2015年3月19日

森安孝夫

~~~~~  
2015年元旦送付

森安通信 読者各位

新年明けましておめでとうございます。庶民の立場からすれば、これまで以上に重なるしい年明けではありますが、余り深刻に考えても状況がよくなることはありませんから、何事もプラス思考で人生を楽しむことを、皆様にお勧め申し上げます。もちろんこれは自分自身に対する励ましでもあります。私がパリ留学時代に教わったことですが、フランス人というかヨーロッパ人には「自己嫌悪」という感情がないとか。本当かどうか全く保証のかぎりではありませんが、確かに我々日本人の良識派は、自己嫌悪しすぎるのではないのでしょうか。ケセラセラ精神を映像で演じた植木等（古いですね！）を見習いましょう。

さて12月27日の通信についてですが、私が阪大に奉職した早い時期から強調し始め、2007年の概説書『シルクロードと唐帝国』で初めて公にした「理科系的歴史学・文科系的歴史学・歴史小説」という3分類を投影して現状批判したところ、2人の読者から分かりやすいとお褒めいただいた一方、どうやら誤解される向きもあったようですので、一言述べておきたいと思います。理科系的歴史学というのはあくまで一種の比喩表現であって、私が理系の学問と文系の学問が截然（せつぜん）と分かるとか、21世紀を救うのは理系の学問だと考えているわけではありません。むしろ、文学部の学問は役に立たないと本気で思っている理系バカの蔓延に警戒しているくらいです。小保方騒動でも明らかになったように、理系の新理論はすべて「追実験（ついじっけん）」で検証されるものであって、私の言う理科系的歴史学というのは、これだけの史料からここまでは確実に言えるという論証（実証）を、他のプロの歴史学者も「追認」してくれるレベルの歴史学の論著を比喩的に指しているのです。理系の学者が生み出した核融合理論や原発に善悪はありませんが、それをどう利用するかを決めるのは理系の専門家ではないのです。

高校世界史教科書は典型的な文科系的歴史学の所産です。著者に応じて右にも左にもぶれます。それを国家が管理するなど、真の民主主義国家のやることではありません。もちろん教科書の採択に地方自治体の権力が介入するのも筋違いです。要するに国家レベルでも地方自治体レベルでも、権力者に「教養」

があるかどうかで国民・市民の将来は決まるのです。だから選挙が大事なのに、棄権が多すぎます。香港の人が聞いたら呆れるでしょうね。

1月20日に出版予定の拙著『東西ウイグルと中央ユーラシア』（名古屋大学出版会）は800頁を越し、日本学術振興会から出版助成を受けたにもかかわらず16000円という高額なので、とても高校社会科の先生方に簡単に手に取っていただくわけにはいきません。せめて序文と「あとがき」だけでもお読みいただきたいのですが、それもなかなか難しいでしょうから、ここにもっとも高校世界史と関係のある拙著のエッセンスを抽出します。それは現今の高校世界史教科書において広く使われている「内陸アジア世界」という用語は、欧亜が一体であると認識させるには不適なので「中央ユーラシア世界」に替えるべきだという主張です。その理由は簡単です。内陸アジアだと黒海北岸のウクライナ草原（南ロシア草原）からハンガリーのカルパチア草原までが入らないからです。この東欧の大草原地帯は、内陸アジアに東から並ぶモンゴル大草原・ジュンガル草原・カザフ草原などに連続して大草原ベルトを構成するものであり、そこに紀元前にはスキタイが、そして紀元後はフン・アヴァール・マジヤール・ハザル（ハザール）・ブルガール・ペチェネーグなどの遊牧民族集団がアジア側から西進してきて世界史を動かした舞台であって、これ抜き西洋史などあり得ないからです。さらにいえば、ゲルマン民族大移動のきっかけを作った東ゴート・西ゴートの原住地もここだったのです。

漢民族からは北方の野蛮人と見なされてきたトルコ系・モンゴル系の騎馬遊牧民族の活動抜きでは、中国史も東洋史も正しく（＝因果関係を合理的に）記述できないのと同様に、ギリシア・ローマからは野蛮人とバカにされてきたゲルマン人、さらにもっと野蛮だとされてきたアジア系の騎馬遊牧民族の活動抜きでは真の西洋史にならないのです。いやそもそも東洋史と西洋史に分けること自体が不可能なほど、中央ユーラシア世界は前近代のユーラシア世界史と密着しているのです。今の欧州連合を牽引しているドイツもフランスも、かつての野蛮人であるゲルマン人・フランク人が中心となって作った国ですよ。

高校教員にフン・アヴァール・マジヤール・ハザル（ハザール）・ブルガール・ペチェネーグなどについて改めて勉強せよとか、これらの新情報を高校教科書に入れよとか要求しているではありません。御願いはただ一つ、私の教え子であり、今は大阪の高校教員をしている若手の田村健君が昨年書いた概説論文「ハザルから見たユーラシア史—専門研究と高校世界史をつなぐ」（『ふ

びと』65, 2014, pp. 47-67) を読んでいただきたいのです。1～2時間で読めます。ハザルというのは、私が長年研究してきた今回の新著でまとめた古代ウイグルと立場がとてもよく似ています。両者ともトルコ系民族ですが、ウイグルは中央ユーラシア東部で活躍し、唐帝国に大きな影響を与え、マニ教を国教としました。一方、ハザルは中央ユーラシア西部で活躍し、ビザンツ帝国とイスラム帝国に大きな影響を与え、ユダヤ教を国教としました。もちろん、マニ教徒の裏にはシルクロード貿易で活躍したソグド商人がおり、ユダヤ教徒の裏には地中海～黒海貿易で活躍したユダヤ商人がおります。そしてこのウイグルとハザルが、それぞれの地域で中央ユーラシア型国家（古い用語によれば征服王朝）の雛形となったのです。田村論文は専門論文ではなく概説論文ですが、東西南北に目配りがきいています。南方のビザンツ帝国・イスラム帝国との関係だけでなく、東のトルコ系諸民族、西方のハンガリー（マジヤール）、北方のキエフ＝ルーシ（後のロシア）や北欧との関係にも着目しているのです。ウイグルだけでは、高校世界史において「内陸アジア世界」という用語に替えて「中央ユーラシア世界」を使うべきだという主張は弱いのですが、ハザルを考慮に入ればその主張の正当性（論理性）を納得していただけるものと思います。

また今回も長くなってしまいましたので、拙著のあとがきで言及したシルクロード史観論争については、もうやめにしておきます。ただ私は世界史における西欧中心主義（ユーロセントリズム）と中華主義をかなり前から批判してきただけでなく、近年ではイスラム中心主義も批判しています。最近の高校の教科書や副読本などで、イスラム教は宗教ではないからイスラームと呼ぶべきという主張が受け入れられつつありますが、こんな馬鹿馬鹿しいことを言い出したのは一体だれですか？ 今の世界を見渡せば、イスラム国、アルカイダ、タリバーン、アフリカのボコ・ハラムというイスラム武装勢力のニュースが日々流れてきます。イスラム教への改宗を求め、従わない者は殺してもよいとする主義・思想が、どうして宗教ではないと言い張れるのでしょうか。私には到底理解できません。もちろんイスラム教といったところで、キリスト教・仏教・ヒンドゥー教などと並ぶだけで、決して悪い意味にはなりません。

不具

2015年元旦

森安孝夫

~~~~~

2014年12月27日送付

森安通信 読者各位

3ヵ月ぶりの通信です。元旦に配信するにはあまり相応しくない内容なので年内に出すことにしました。この間、バドミントン関係記事の号外を2度出したほかは、音沙汰無しに終始していました。その主な原因は、800頁を越す自分の初めての学術論文集の編集作業に忙殺されていたからですが、安倍政権のあまりに自分勝手なやり方とそれを支持する歴史修正主義的勢力の台頭に言葉を失っていたことも事実です。

歴史家と歴史学者は截然（せつぜん）と区別されねばなりません。私は年来、世の中の歴史物は理科系的歴史学・文科系的歴史学・歴史小説の3つに分類できること、そして文科系的歴史学なら誰でも参加できるのでいくらかでも自分勝手な歴史像が描けると注意喚起してきました。文科系的歴史学や歴史小説は小説家だけでなく、いわゆる歴史家や素人でも参加できますが、そこには学問としての責任がありません。歴史学者が責任を持てるのは理科系的歴史学（実証史学）だけですが、そのレベルで確実にできるのは点と点の歴史事実の再確認と新発見であって、それだけではストーリーになりません。それらの点と点を繋ぎ合わせて線に、さらには面にまで広げてストーリー化していくのが文科系的歴史学です。もちろん理科系的歴史学者もこれをやりますが、実はこちらには誰でも参加が可能ゆえに、自分に都合のよい「事実」だけを拾って繋ぎ合わせて再構成すれば十人十色の歴史が生まれます。安倍首相がよく使う「歴史認識」という言葉は、この文科系的歴史学及び歴史小説の範疇に属するものですから、本物の歴史学者には委ねられないのです。国会や外交やマスコミの場で追求されて言葉に窮すると、「歴史認識」の違いは歴史学者に任せたいと安倍首相が言うことがあります。それは全く不可能で無理な注文であり、要するに言い逃れに過ぎません。理科系的歴史学の大原則は、「史料がなくても事実がなかったことにはならない」ということと、史料にも記憶違いによる誤りや恣意的作為の恐れがあるから「孤証は証拠にあらず」ということです。ですから、南京大虐殺はなかったことが証明されたとか、従軍慰安婦に対する軍の関与や強制はなかったことが証明されたとかいう言説は、絶対に成り立たないのです。それを理解しない人とはまともな議論が出来ないのです。外交の場における「歴史認識」は、あくまで政治家が責任をとるべき問題です。

以上に関連して、1月に刊行される私の学術論文集『東西ウイグルと中央ユーラシア』（名古屋大学出版会）の「あとがき」から引用します。実はそこで、私自身が以前に冒した重大な誤りを告白していますので、なんらかの参考にしてください。

=====

自分も含めて人間の記憶というものがいかに曖昧であるかは、拙著『シルクロードと唐帝国』（講談社、2007年）の「あとがき」で冒した重大なミスにより、身を以て痛感した。この私の初めての概説書は、その大部分が私のオリジナルな研究成果に基づいており、いずれも史料的裏付けがあるが、「あとがき」は自分の記憶だけで簡単に執筆した。その時、私は今上天皇が日韓民族の祖先には強い繋がりのあることを表明されたのは、天皇訪韓の際であったと書いてしまった。実際には日韓共催のサッカー・ワールドカップを翌年に控えた2001年12月の記者会見での御発言であった。拙著の原稿は幾人かが査読したのであるが、誰もその誤りに気付かず、読者からの葉書で指摘されて愕然とした次第である。

家内には「よくそれで歴史学者をやっているわね」と呆れられるほど、私は普段からあまり記憶力のいい方ではないが、この誤りは二重の意味でショックであった。一つは、過去の間人が書き残した史料には記憶違いや思い込みが多々あるはずだから、文献史学に信頼を置くことはできないという言語論的転回論者の言い分を容認する結果になってしまったことである。そしてもう一つは、この自らのミスによって、拙著全体への信頼を落としてしまったことである。

言語論的転回論者の指摘を受けるまでもなく、歴史学界には古くから「孤証は証拠にあらず」という教訓がある。つまりある事件なり人物像なりを復元するには、複数の史料が必要ということであり、できれば視点の異なる立場から書かれた文献や文書がある方が望ましいということである。私は恩師の1人である榎一雄教授からこの言葉を教わって以来、それを肝に銘じ、可能な限り複数の言語からなる史料を組み合わせる努力を積み重ねてきた。本書はその成果を改めて世に問うものであり、上述した拙著『シルクロードと唐帝国』の典拠となった論文のほぼすべてがここに収載されている。

=====以上で引用終わり=====

長くなるので本日はここまでにしておきます。この後に、シルクロード史観論争への言及と、高校世界史の現場において広範に使われている「内陸アジア世界」は欧亜が一体であると認識させるには不適なので「中央ユーラシア世界」に替えるべきだという主張が続くのですが、それについては元旦にしたいと思います。

不具 2014年12月27日 森安孝夫

~~~~~

2014年12月25日送付 号外

駒羽会（東大バドミントン部OB会）の皆様

福井県立藤島高校同期生の皆様

ほかバドミントン関係者 各位

これは森安通信の号外です。『バドミントン・マガジン』1月号に廣瀬栄理子選手の引退会見記事が載ったという連絡が息子からあったので、早速書店に買いに行きました。公式記事はカラー1頁で、森安楽人の記事はモノクロの「惜別コラム」1頁でした。廣瀬さんはかつて私の所属した大阪のクラブにいたことがあるので、感慨一入でした。

本号はつい先日の全日本総合選手権の特集ですから、当然ながら高校2年で新女王（女子シングルス王者）になった福井県勝山高校の山口茜ちゃんが大きく取り上げられています。福井県出身の有名スポーツ選手はほとんどいませんから、福井県関係者はこれから東京オリンピックまで楽しみですね。

それはそうと『バドマガ』をついでながらぱらぱら見ていたら、なんと全日本シニア選手権で金丸清昭先輩が75歳以上の部で「優勝」という記事が目飛び込んできました。これは我が駒羽会にとっては、とてつもない快挙ではないでしょうか。本当にすごいことだと思います。心からお祝い申し上げます。稀にしか購入しない『バドマガ』で偶然このことを知ったのも何かの御縁と思い、お知らせする次第です。

2014年12月25日 森安孝夫

~~~~~

2014年9月27日送付 号外

森安通信 9月27日号外

これは本来ならバドミントンに興味のある人だけに配信すればよいのですが、アジア大会という大きなイベントで、しかも日韓関係にも関わることなので皆さんに送信します。

問題は新聞でも報道されたように、アジア大会のバドミントン会場である体育館で、先のトマス杯で世界一になったばかりの日本男子チームに韓国側が対抗するため、韓国選手に有利になるように風（空調）の操作をしたのではないかという疑惑です。たまたま共同通信社のスポーツ記者として現場で取材していた息子（森安楽人）が、客観的で且つ抑制的な記事を書いています。日本選手団の対応は実に立派だったと思いますので、次のアドレスにアクセスして頂き、あまり感情的にならず冷静に判断して頂ければと望む次第です。

[http://www.chugoku-np.co.jp/static/index\\_all.php?param=asiangames\\_index&sjag\\_page=column000084](http://www.chugoku-np.co.jp/static/index_all.php?param=asiangames_index&sjag_page=column000084)

~~~~~

2014年9月15日配信分

森安通信 読者各位

今夏は約1ヶ月間、ベルリンとサンクトペテルブルグに出張してきました。中央アジア出土の古代ウイグル語（トルコ語の一種）の手紙文書を巡る調査で、費用は科学研究費（要するに皆様の税金）であり、ウイグル語を読解する能力では名実共に世界一のペーター・ツィーメ教授を伴っての旅行ですから、学者冥利に尽きる贅沢です。ベルリンのアカデミーではウイグル・マニ教史に関する講演を英語で行なってプロの聴衆から好評を得ましたが、その時の講師紹介と司会をツィーメ教授が担当し、私の教え子で今はベルリンで研究職を得ている笠井幸代さんがドイツ語と英語による質疑応答を完璧にこなしてくれましたのですから、これ以上を望むことは不可能なほどありがたい出張でした。しかし、猛暑の日本から例外的に冷夏だったベルリンに入ったため体調を崩し、気管支炎で病院のお世話になるという苦しい旅でもありました。しかもその間、

ウクライナ危機とパレスチナ情勢の悪化があって、気持ちまで沈みこみがちでした。

欧州にいるとなおさら強く感じるのですが、今や全世界はキリスト教徒とイスラム教徒と中華教徒（多数派の漢民族だけでなくウイグル・チベット・モンゴル族に代表される少数民族まで取り込み共産主義＝マルクス教を押しつけた新たな中華民族、プラス台湾人・香港人・海外華僑などの儒教・道教徒を合わせて、こう呼ぶことにします）の3種類に大別されているようです。もちろん、その狭間にユダヤ教徒ユダヤ人と日本人（最近の左右ねじれ現象を包含し、天皇の存在に違和感を持たないという意味では日本教徒）も顔を覗かせるのですが、欧州から見れば日本の存在感は極めて薄いものです。私の欧州滞在は通算でも3年程度ですが、外国に住んだ日本人は誰でも愛国者になります。右翼も左翼も関係ありません。

本日の新聞で、山口淑子（中国名：李香蘭）さんの逝去が報じられましたが、日中戦争とその後の時代を2つの祖国で生きた彼女は、「本当にあの戦争は、バカな戦争でした」「私が仮に中国人だったとして同じことをされれば、日本を嫌いになったでしょう」という言葉を残しました。近年の中国・韓国・北朝鮮の反日動向と、慰安婦問題を巡る朝日新聞の大失策によって、今や日本人は右よりの愛国者ばかりが勢いづき、ナショナリズムという魔法のアイデンティティを持つ日本教徒になりつつありますが、左翼愛国者もいることをアピールしたいと思います。左翼愛国者の武器は、智慧と知識と論理だけです。今や愛国者を自認する右寄りの思想を持つ人々の間では反知性主義が横行し、「言語論的転回」を悪用して「歴史＝物語論」をでっちあげ、歴史に無知だけど好き勝手を言う時に便利使いされています。そして、歴史事実の誤りや無知を指摘されると、開き直って逆に、あいつらは「上から目線でものを言う」と反撃してきます。しかし、今のような状況だからこそ、本当の意味の世界史教育が求められるのです。

私の今度の欧州出張中、9月1日の朝日新聞・文化欄に、前通信で紹介した大阪大学歴史教育研究会（編）『市民のための世界史』（大阪大学出版会、2014年4月、1900円）を取り上げた記事が掲載されました。執筆陣は桃木至朗、秋田茂、荒川正晴、栗原麻子、坂尻彰宏です。今や評判の悪い朝日新聞ですが、その見出しには「歴史の見方養う世界史教科書」「アジア史を重視」「現代史も手厚く」とあるのは、まさに正鵠（せいこく）を射た表現であり、さすがと

思いました。私とは全く違う能力を持っているため、心から尊敬する歴史学者が日本には数人いますが、桃木さんはその1人です。その桃木さんが全体に目を光らせて完成したものですから、当然ながら期待通りの出来上がりになっています。大学の半期15回の講義回数に合わせて、全体が15章から構成されています。

大阪大学歴史教育研究会の前身は、私が中心となり桃木さんの全面的協力得て始めた21世紀COEによる高大連携の研究会です。それゆえ半ばは身内が執筆したものですから、過度の仲間誉めは控えねばなりません。それでも、日本も含め世界各国で出版された「世界史」のほとんど全てが「西欧中心主義」で貫かれているのに対して、初めてアジア中心で書かれた世界史なのですから、その斬新さは皆さんの想像を越えています。ギリシア・ローマはどこにあるのだという違和感を持たれる方は相当に多いと思います。とはいえ、決してギリシア・ローマの記述がないわけではありません。日本人にとって最低限必要な世界史理解の中で、ギリシア・ローマの記述はこの程度でいいという判断なのです。英独仏など西洋史の中心的存在についても同じような扱いです。今夏、私はベルリンにいましたが、その最古のニコライ教会でも12世紀の建造であり、10世紀のベルリンは沼地の中の環濠集落程度のものでしたのです。

ただ、古代史・中世史の部分には難しいというか、とても1回分としては盛りだくさんすぎて、高校社会科教員か史学科出身者以外には消化不良に陥ると危惧される箇所もあります。今後の工夫が必要でしょう。それに対して、近現代史は目から鱗で分かりやすい記述に満ちあふれています。

いずれにせよ、いきなり全部を通読するには相当骨が折れるでしょうから、まずは序章「なぜ世界史を学ぶのか」と終章「どのように世界史を学ぶか」から読むことをお勧めします。これなら、高校生でも賢い子なら半分以上は理解できるでしょう。大学の史学系の学生には全部理解してもらわねばなりません。

私は、経済学者が決して世界の金融市場の一寸先さえ読めない（リーマンショックを誰も予想できなかった）のと同じで、歴史学者が未来を予測できるなどとは思っていません。未来を切り開くのはやはり政治家の仕事です。しかし民主主義国家では政治家を選ぶのは国民です。その国民が歴史を学ばなくなったら、政治は人気投票による衆愚政治に陥ったり、偏狭な民族主義・国粋主義に走るでしょう。そうなったら、また戦争や民族紛争の繰り返しです。日本で

は幸か不幸か、選挙権は二十歳になったら自動的に誰にでも与えられるのですから、せめて世界史くらい全員が勉強して欲しいのです。

若手の論客である与那覇潤氏によれば、「法の支配とは本来、権力の暴走を法で縛るという意味」なのだそうです。「法の支配」とは決して権力者や支配者の好き勝手を許すものでなく、法律家の役割の一つが権力の暴走を食い止めることにあるのと同じく、実は歴史学の大きな役割も「権力の監視」にあるのです。自由と平等こそが、民主主義の根幹ですから、第二次大戦後、世界史上で最も幸せな国に育った我々は、右翼であれ左翼であれ、これだけは絶対に守らなければなりません。

『市民のための世界史』が反知性主義や言語論的転回への対抗手段として、広く江湖に迎えられることを切望する次第です。

不具 2014年9月15日 森安孝夫

~~~~~

2014年6月3日配信分

森安通信 読者各位

元旦以来、半年ぶりの通信です。この間、思考停止していたわけではなく、自分の初めての個人論文集を『東西ウイグルと中央ユーラシア』と題して出版する作業に没頭していました。日本学術振興会から公的な出版助成を頂けることが4月初めに決定し、それまで以上に忙しくなっていました。ようやく出版会に原稿を渡しましたので、ほっとしたところです。それと同時にバドミントンのトマス杯（男子団体のワールドカップ）で日本が優勝した！という朗報が届き、うれしさは倍増でした。バドミントンを長くやっている人には、これは奇跡的出来事なのです。

さて明日6月4日は、天安門事件25周年の日です。南京大虐殺はなかった、あっても死者はせいぜい数千人だったろうと主張している方々は、天安門事件などなかった、あっても死者はせいぜい数十～数百人と主張している中国政府側の言葉も信じるのでしょうか。歴史はいつも権力者が自分に都合よく捏造するか、都合の悪いことは隠すものです。そしてそれに異議を唱える者を、警察の武力か言論統制という手段で封殺します。警察で足りなければ軍隊が出てき

ます。日本はまだ民主国家ですから、福島原発事故の恐るべき実態も今頃になってではありますが、明るみに出てきました。しかし、一党独裁の中国では、天安門事件どころか、2008年の四川大地震による聚源中学校の校舎崩落で死亡した300人の生徒の遺族が、その背後にある業者と共産党地方幹部の癒着による手抜き工事を訴えることさえ許されないのです。今、日本では集団的自衛権をどうするかが問題になっていますが、それよりも既に通ってしまった秘密保護法のほうが、実はよっぽど恐ろしいのです。

シンガポールで開催されたアジア安全保障会議の席上で、王冠中・中国軍副総参謀長が「中国は武力でいかなる国を威嚇したこともない」とか、南シナ海は「二千年以上前の漢の時代から中国の管轄下にある」とか発言したのは余りに幼稚で笑止千万ですが、でもこれこそ「勝てば官軍」的発想なのです。漢代以降の中国史を振り返れば、半分以上の時代は漢民族ではなく異民族が支配者だったのですが、今は漢民族が支配者です。近代西洋が生み出した1民族1国家の国民国家という概念をあてはめれば、ウイグルもチベットも独立し、内モンゴルもモンゴル国と合体すればいいわけですが、その国民国家論を逆手に取って、漢民族を中心とする中国政府は「中華民族」というものを新たに捏造して、中国1国家1民族という主張を展開しようとしています。しかし現実には世界最大の多民族国家なのに、漢民族が権力も軍事力も経済も主要な地位も押さえているわけですから、いわゆる少数民族の不満が抑えられるはずはありません。

こんな発言をする私はもはや中国には入れませんが、だからといって中国を敵視しているわけではありません。個人的に付き合いのある学者たちは、皆、まともな善人なのです。誰でも言うことですが、民間の人的交流こそが、ますます大事になってきます。ただ日本でも中国でも、政府の「御用学者」だけは、我々庶民には不要です。また私は無政府主義者でもありません。庶民（選挙民）が国家というのは必要であると認め、国家主義の台頭を許している以上、右傾化の波に抵抗することは出来ません。治安維持のための警察も必要ですし、長い実績のある自衛隊も国軍として認めます。それでもなお、国民の生命・財産を守るという美辞麗句に惑わされて、最後はとんでもない方向に連れて行かれないように気をつけましょう、とだけは言いたいのです。

近畿大学でユーラシア世界史を教えるのも、今年が最後となりました。すでに前期も半分が終わりました。人類史上に大きな位置を占める四大文明を丁寧

にやった後、その四大文明の担い手には、後の世界史で重大な役割を果たす印欧語族（インド・ヨーロッパ語族）もアルタイ語族もいなかったと説明すると、驚嘆の声があがりました。授業毎に回収するミニレポートには、「世界史が西欧中心で書かれているのは高校生の時からおかしいと思っていた」とか、「ヨーロッパの時間軸の中にアジアを分割して挿入しているから流れが理解しにくかったのかも知れない」とか、「僕は高1の時に世界史を学んでとても好きだったのですが、それは西洋近代を基にしながら、アジアやアフリカその他を無視している世界史だったのだなあと改めて分かりました。少し騙されたなあと感じました」という意見がありました。なかなかのものです。

本通信の読者の約半分を占める高校の先生方の中からは、ここまで読んできて、メソポタミア文明にはヒッタイトやミタンニなどの印欧語族もいますよという反論がきっと出るでしょうが、彼らは外来のお客さんです。彼らの居住地は大草原である中央ユーラシア西部であって、そこから馬と車輻が合体した馬車戦車をもって西アジアに侵入してくるのです。その点は、地中海北岸に進出していったギリシア・ローマ民族も同様の存在です。そのような馬車戦車の時代（紀元前2000年紀）を過ぎ、人が馬にまたがって弓を射る騎馬軍団の時代に入ると（紀元前1000年紀）、中央ユーラシア西部出身の印欧語族と中央ユーラシア東部出身のアルタイ語族（トルコ系・モンゴル系・満洲ツングース系）が世界史の主役になっていくのです。こういう大きな流れを授業で説明しないから、ギリシア・ローマの古代から西洋近代まで、世界史の中心はヨーロッパだったなどというひどい誤解を生徒に植え付けるのです。

以前に予告した大阪大学歴史教育研究会（編）『市民のための世界史』（大阪大学出版会、2014年4月、1900円）が遂に出版されました。執筆陣は桃木至朗、秋田茂、荒川正晴、栗原麻子、坂尻彰宏です。冒頭に記したような多忙さゆえ、私は未だ読んでませんので、コメントはできません。今夏のベルリン出張中に読むつもりです。

不具 2014年6月3日 森安孝夫

~~~~~

2014年元旦配信分

森安通信 読者各位

新年明けましておめでとうございます。また新しい年を迎えましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。

本日もたくさんの年賀状をいただきました。深く感謝しますが、私の年賀状は多く手書きするため、その数に対応できていません。昨年もかなり数を減らしましたが、今年はそれ以上に減らしました。電子メールを使われない方々と、人生や仕事上で大変お世話になった方々、それから今暫く激励すべき遠方の愛弟子諸君を例外として、来年はもっと減らしますので、失礼の段はなにとぞお赦してください。

今年の年賀状では、「昨今の政治情勢に鑑みて、歴史学者の使命と真価は何かと自問しつつ（も）、もう他人と争い（論争し）たくないという気持ちがつのります」という文言を中核にしました。というのは、学校教育を終えて成人してしまった人の多くは、もう他人の意見を「聞く耳」は持たなくなるものだからです。もちろん、柔軟な頭の持ち主は新しい「理系的知識」はどんどん受け入れますが、それでも思想とか信念のような「文系的認識」はなかなか変えられないようです。右翼でも左翼でも、「あなたは極端ですね」とか「偏向してますね」と言われて素直に認めることはまずありません。皆、自分は「まとも」で「中庸」だと思っているからです。「正しい歴史認識」という言葉が安易に使われますが、そんなものはありません。あるとすればそれは「客観的な歴史認識」だけです。とはいえ史料がなければ「客観性」は保証されませんから、むしろ「自由な歴史認識」と言い換えた方がいいかもしれません。実は昨年元旦メールで次のように書きました。まさかその時は、こうも簡単に秘密保護法が国会を通過するとは思っていませんでした。

「私は、・・・、今以上に自衛隊や秘密警察が強くなれば、外国よりも、国内の権力者が早速に私のような者を弾圧もしくは迫害する恐れの方が、はるかに大きいと感じています。（中略）あくまで「自由」に最大の意義を認めている「リベラル且つラディカルな民主主義者」にとっては、中国の軍隊や北朝鮮の軍隊よりも、戦前の日本の憲兵や秘密警察のような存在の方が、ずっと不気味なのです。私は決して国家は不要などという無政府主義者ではありません。しかし歴史学の使命は、国家と権力者の暴走をチェックすることなのですから、警鐘は鳴らし続けます。合法的に暴力装置を持つ軍隊や警察のエリート幹部が何でも出来るようになった時、絶対に庶民の「自由」は阻害されるのです。平

和憲法を守り、戦前の日本がアジアの周辺諸国に与えた苦難に対して繰り返し謝罪しようとするのは我々の自由ではありませんか。ところが、そうする者が、いつのまにか売国奴と呼ばれる日が来ることを私は真に恐れるのです。」（引用ここまで）

愛国教育にせよ平和教育にせよ、それが「正しい」かどうかを判断するのは国家権力です。今、中国人・韓国人を嫌う日本人が増えています。逆に日本嫌いの中国人・韓国人も急激に増えているのです。その「客観的な理由」の相互理解なくして、東アジアの安定はありません。

去年読んだ多数の小説の中に、城山三郎の『落日燃ゆ』がありました。これは福岡県の平民出身で外務官僚となり、外相・首相をつとめた広田弘毅の生涯を描いたものです。外務官僚として一貫して軍部に反対し日中間の平和外交をめざしましたが、ことごとく軍部の妨害にあって挫折したばかりか、戦後の東京裁判では東条英機・板垣征四郎・土肥原賢二ら軍人のA級戦犯6人と共に死刑判決を受けました。城山は、天皇の統帥権独立を認めた「長州のつくった憲法」によって、軍部の独走を許し、第二次世界大戦への道をひた走ったという認識を示しています。また、広田が同期の吉田茂の世渡り上手と対比され、戦後日本政府のアメリカ追随主義の由来までがよく分かる内容でした。なお、東京裁判の政治性と不公平さはひどすぎたと指弾していますが（これには私も賛同）、南京大虐殺のことはまったく否定していません。

この『落日燃ゆ』をここで取り上げようと思ったのは、昨日の大晦日の朝、羽鳥アナと赤江アナが司会するモーニングバードで、日米関係を考えるという趣向のもとに、二人の外務官僚出身者を招いて議論するのを見たからです。一人は最近ブレイクした孫崎さんで対米批判派、もう一人は宮家さんで対米追随派です。勿論この分類は私見で、御本人の意識とは違うでしょう。私の立場は拙著『シルクロードと唐帝国』（2007年）の序章で表明したように孫崎さんに近いのですが（ただしなんら影響は受けていません）、コメンテーターの舞の海さんや石原さん（石原慎太郎氏の子息）は宮家さんに同調しているようでした。これを見ていて感じたのは、やはり議論というものは自分に都合のいい情報をいかに多く集めているか、それを直近の政治情勢といかに上手に組み合わせるかで決まるのであって、長いスパンの歴史的背景を知っているかないかではないということでした。今の私に、人前で宮家さんの様な考え方の人と議論して、勝てる自信はありません。でも決して心服はできないのです。

繰り返しますが、歴史学の大きな使命のひとつは「権力の監視」であり、もし我が国でも歴史学者が権力側から監視されるようになったら、それはかつてのソ連や今の中国・北朝鮮と同列になってしまいます。その時の日本を民主主義国家と言うのは笑止千万でしょう。いや、笑い事では済まされません。

グローバルな時代になって、逆にナショナリズム（民族主義・国家主義・排他主義）の台頭がみられる昨今です。他国の内政にまで干渉は出来ないので、我々は日本人のためのグローバル世界史を目指すしかありません。日本人のためというのは、言い換えれば日本の国益のためです。でも真の国益とはごく一部の支配層や富裕層の利益ではなく、国民全体の利益でなくてはなりません。

昨年10月21日の通信で、倉橋由美子の『交歓』を読んで、人が「神」を信じるのは認めるが、人が他人に「神」を強いる無礼は許せないとする彼女の信条には全く同感であると書きました。その場合の「神」とは宗教のことで、彼女自身「我が仇敵たる「神」とは、ユダヤ教・キリスト教・マルクス教の中に棲みついている「神」である」と言っていますが、私はそこに当然ながらイスラム教も加えるべきでしょう、と書きました。つまり、ここまでは全面的に彼女の見方に賛同していたのです。しかし、その後『シュンポシオン』を読んで、20世紀の終わり頃から21世紀初頭の日本には反核平和教なるものがあると言い、それを重要な登場人物である元首相の入江さんに批判させているのには、いささか驚きました。彼女はまた有名童話を独自にリライトした『大人のための残酷童話』という辛辣で面白いものを書いていて、一つ一つの末尾に「神様とはつまりお化けなのです」とか「正義は世論がつくる」とかの教訓を付加しているのですが、「愚かな人間が幸福になることはありません」という教訓を見た時は、もしかしたら彼女は反原発などという「愚かな」ことを主張する人間に幸福はないと言いたいのかという疑念が生じました。元首相の入江さんにはなんとなく小泉純一郎首相のイメージを重ねていたもので、二重の意味で驚いた次第です。

話を国益に戻せば、それは目前の国益だけではなく、将来の国益を見通す世界観・大局観に支えられたものでなくてはならず、それは右翼にも左翼にも必須のはずです。「権力の監視」は決して短期の情勢判断に基づいてやるのではなく、長いタイムスパン（場合によっては千年単位）の歴史の流れに立脚して行なわれるべきものです。その基礎を与えるのが世界史教育です。ですから、

いわゆる進学校・受験校で有名大学への進学率を上げるために世界史Bをとらないよう指導してきた高校の先生方や、大学で教養教育を軽んじてきた先生方には、反省を御願います。それは将来の日本の国益を損なう恐れが大きい行為なのです。「悪の凡庸さ」とかいう言葉が使われますが、ナチスのユダヤ人大量虐殺や広島・長崎への原爆投下を決定した人たちは、極悪人というわけではなく、普通の凡人だったそうです。南京事件も同じように起こったのでしょう。グローバルな大局観を見失い、ナショナルで偏狭な時代風潮に走った結果が、恐ろしい結果を生むというわけで、歴史の教訓として記憶すべきでしょう。

最後にお知らせです。一昨日に近畿ローカルの朝日放送で放映された「よみがえる天平の秘仏」は素晴らしい番組でした。プロデューサーの牟田口章人さんご本人からの案内に拠れば、2010年から2013年4月までの3年間に亙る国宝・東大寺法華堂の平成大修理の記録をまとめた番組として昨年4月に放送した分の大改訂版で、創建期の法華堂内の姿を4K（ハイビジョンの4倍の精細）で復元した映像が売り物だそうです。これを今度は全国放送として流すということです。

「よみがえる天平の秘仏」

BS朝日（衛星放送）、1月18日午後3時～3時55分

本尊である国宝・不空羂索観音像と、その背後を守護していた秘仏・執金剛神像がじっくり見られるだけでなく、執金剛神像の色彩復元は見事というか言葉を失います。金箔と紺丹緑紫による極彩色は、まさに昨秋の正倉院展で目玉として公開された漆金薄絵盤とそっくりでした。また、本来は本尊・不空羂索観音を取り囲んでいた四天王像は、現在法華堂にあるものではなく、実は今は戒壇院に移されている四天王像であったとか、現代の東大寺に関する最新知見満載です。なお、法華堂というのは、お水取りで有名な二月堂の隣にある三月堂のことです。二月堂のテラスから真西を眺めれば、大仏殿が見えますが、その真西が唐都・長安なのです。高校の修学旅行では、こういう所こそ案内してあげてください。

不具

2014年元旦

森安孝夫

~~~~~

2013年11月5日配信分

読者各位

つい先日、森安通信を出したばかりですから、続けて出すのはいささか気がひけるのですが、新聞記事はすぐに捨てられてしまいますので、今回はお許しください。

実は明日の読売新聞（全国版）朝刊に、私が正倉院展に寄せて書いた記事が掲載されますので、御覧頂ければ幸いです。ただ、新聞記事には字数制限がありますから、やむをえず削除した部分がありますので、それを以下に列挙します。その3だけは専門的すぎますので、高校・大学教員以外は無視してください。

その1：「正倉院展に入る時の昂揚感は、故郷に帰省する時のそれに似ている。かつて我が国でシルクロードがブームとなった時、学界の一部にはそれを浅薄と批判する向きもあったが、仏教が政治・社会・文化に深く根付いた日本人にとって、東アジア仏教の故郷とも言うべき西域と南海のシルクロード地帯がきわめて重要であったことを疑う必要はない。正倉院御物にはシルクロードを通して渡来した意匠や原材料が大量に含まれているのである。」

その2：「シルクロードについて、マスコミと一般の方々に認識を改めていただきたい点が二つある。一つは、近代の機械化時代になってからのユーラシアの交通網にこの言葉は使わないこと、もう一つは、ユーラシアの中核部を指す中央アジアに、中国の新疆ウイグル自治区を含めることである。そこが東トルキスタンであり、それとパミールの向こうの西トルキスタンを合わせた地域、さらには遠くイランから地中海周辺までが漢人世界から見た『西域』であったのである。」

その3：「西域の内でも東側の、すなわち現在の新疆維吾尔自治区のかつての原住民は決してイラン系ではない。確かに天山南路の西域南道のコータンからカシュガルまでにいたコータン語やトムシュク語を話した人々はイラン系であるが、西域北道の亀茲（きじ、クチャ）や焉耆（えんぎ、カラシャール）地方にいたのはトカラ系である。この点、多くの概説書だけでなく、時に専門書においてさえ誤解されているので、特に注意をしていただきたい。」

その4：「唐代の中国では、ウイグル・マナーとペルシア・マナーという外国資本が幅をきかせていたと聞けば、誰しも驚くのではなかろうか。これはかつて日野開三郎が明らかにしたことであるが、当時は完全に遊牧騎馬民であったモンゴル草原のウイグル人が、中国の金融界を席卷したはずはない。このウ

イグル・マネーというのは、実はウイグル帝国の後援を受けて当時のシルクロード貿易を牛耳っていたソグド人の資本、すなわちソグド・マネーのことだったのである。ネットワークが生命線である現代の商社と同じで、ソグド・ネットワークなくしてソグド・マネーなど機能するはずもないのである。」

もし読売の記事が御覧になりにくい方がいらっしゃいましたら、お知らせください。明日の夕方以降にカラーコピーの電子ファイルをお送りできると思います。

なお、前回の通信でお願いしたベルリン東洋学の危機を救うための請願書に対しては、多くの方々から「賛同！」メールを送っていただきました。ここに深く御礼申し上げます。

不具 2013年11月5日 森安孝夫

~~~~~

2013年10月21日配信分

森安通信 読者各位

つい一週間前まではまだ夏だったのに、急激に涼しくなり、なんだか日本も大陸性気候になったのかと錯覚します。一昨日の大阪大学歴史教育研究会は、桃木至朗・秋田茂両教授というツートップの報告で、高校教員や他大学教員の参加者も多く活発な議論がありました。いよいよ阪大発の大学教養課程用教科書の完成が目前に迫ったようで、喜ばしい限りです。高校世界史教科書Aの悪影響で、歴史は近現代史だけやればいいとするような風潮を排して、古代・中世史にも十分な配慮をしてくれています。中央ユーラシア史関係は、かつての同僚の荒川正晴教授と我々の教え子の坂尻彰宏准教授が執筆しています。全体はあくまで大学生用というコンセプトですが、専門用語は高校世界史教科書Bよりぐっと少なくしてあり、実は高校世界史教育界への殴り込みを目論んでいるのではないかと忖度しております。

本日の通信の目的は、以上の報告に加えて、ベルリンから届いた中央アジア学の危機を救う署名依頼に関し、後で書くように、皆様の御協力を仰ぐことなのですが、それだけでは色気がないので、先ずは小説の話をしします。

三島由紀夫の全作品の三分の二以上を読破した次には、女性作家が男女の性愛をどう描いているかについて、あれこれ読みあさってきました。たとえば、瀬戸内寂聴の『女徳』は、モデルとなった京都の祇王寺の庵主さんの芸者時代以来出家するまでの男性遍歴をモデルにしたらしく、セックスの奥深さや人間の業の深さの描写に舌を巻きました。でも決していやらしい描写ではなく、文学性も高いものだと思います。それに比べると、杉本彩『インモラル』とか村山由佳『ダブル・ファンタジー』は、やや高級なポルノ小説を読む感じでわくわくしました。森茉莉はやや軽い感じですね。一方、最新の岸恵子『わりなき恋』も、彼女のハンサムな生き方を反映していて、なんとも清々しいものでした。でも一番驚いたのは、倉橋由美子の『交歓』です。この人が、こんなにもすごい作家だとはまったく知りませんでした。とても私の力量では紹介しきれませんから、小島千加子氏の解説を引用しますが、何事にも一級をめざす人物たちの間では類は友を呼び、「同クラス、等価である者の間でこそ、意見、考え方の交換が成り立ち」、・・・「交換は、交感、交歓へと転じ、性の歓喜へと帰結する。頁を追うごとにその主題が次々と花開くが、精妙な言葉を積み重ねた歓喜の情景は、クリムトの細緻な絵を見るように美しい」ものです。漢詩の引用などやや難しい箇所をとばし読みしても、彼女の持つ美意識に触れ、文章の華麗さもじゅうぶん堪能できるでしょう。一読をお薦めします。

ところでその倉橋由美子が、人が「神」を信じるのは認めるが、人が他人に「神」を強いる無礼は許せないとする信条を吐露しています。全く同感です。彼女は、「我が仇敵たる「神」とは、ユダヤ教・キリスト教・マルクス教の中に棲みついている「神」である」と言っていますが、当然ながらここにイスラム教の「神」も加えるべきでしょう。つまり、これらは全て一神教の神々であり、現代世界を支配する一方で混乱にも落とし込んでいっているのは、これらの神々なのです。それに比べて東アジアの宗教は、どれも多神教であるゆえに結束力がない代わりに、強制力もありません。そこがいいところだったのに、中国や北朝鮮では20世紀になって導入されたマルクス教がいまだに猛威をふるっているのは、決して自然の理にかなっていないのです。これからの動向が注目されますが、それに関連して、東大バドミントン部先輩の平松由紀夫・三菱製紙販売会社相談役から推薦された二冊の新刊書も、興味深いものでした。それは、富坂聡『習近平と中国の終焉』（角川SSC新書167）と津上俊哉『中国台頭の終焉』（日経プレミアシリーズ184）です。私は左翼愛国主義者ですから、日韓

関係については安倍首相よりも首相夫人の言動の方にシンパシーを感じますが、かつて日本が侵略して多大の迷惑をかけた中国の近年の反日政策に眉をひそめつつも、過大な中国脅威論にも眉唾して臨むべきことを学びました。

最後に、今回の通信を出す最大の目的である電子署名依頼について、ベルリンの檜山智美さんからのメールを転載します。わずか2ヵ月ほど前に届いたサントペテルブルクのロシア科学アカデミー東洋文献研究所の閉鎖という悪いニュースに続き、ベルリンでも似たような事態が起きようとしているのです。私はさっそく署名しましたが、手続きは簡単ですので、皆様にもどうか宜しく御協力をお願いする次第です。

=====

森安 孝夫先生

ご無沙汰しております。ベルリン自由大学及びベルリン国立アジア美術館の檜山です。いつも「森安通信」を楽しみに拝見させて頂いております。このたび、私の所属するベルリン自由大学のインド美術史研究所の廃止への反対に関する請願書についてお知らせさせて頂きたく、ご連絡差し上げました。

ベルリン自由大学のインド美術史研究所は、世界でも有数のインド・中央アジアの美術コレクションを所蔵するベルリン国立アジア美術館に隣接しており、実物の美術作品を見ながら研究が出来るという素晴らしい環境で、実際に20世紀末から現在に至るまで、多くの研究業績を送り出してきました。しかし、ベルリン自由大学は現在、学生数の比較的少ない専攻を片端から廃止しつつあり、うちの専攻も来夏をもって廃止されることになってしまいました。しかし、当研究室には、私を含め、現在博士論文を執筆中の留学生や、修士・学部生が今なお数多く在籍しており、研究所の存続を願っています。

さらに、今ドイツ中でインド学及びインド美術史専攻が廃止されつつあり、殊にインド美術史専攻に関しては、ベルリン自由大学の当研究所が最後の砦となっておりますため、もし当研究所も廃止されてしまった場合、ドイツの大学におけるインド・中央アジア美術史の学問伝統が潰えてしまうことになります。そのため、現在、研究室の廃止の撤回を求める大学当局宛の請願書へのご署名を広く募っております。

もし日本の中央アジア史研究の第一人者でいらっしゃる森安先生からもご協力を賜ることが出来ましたら、大変心強く思うのですが、以下のリンクのインターネット上の請願書に、ご署名を頂くことは出来ないでしょうか？もし、インド美術史専攻の存続にご賛同頂けます場合は、以下の請願書ページへの右上部分に、お名前（出来ればローマ字）とメールアドレス、郵便番号をご記入頂きました上で、「賛同！」アイコンをクリック頂ければ幸いです。

<https://www.change.org/ja/キャンペーン>

[/an-das-präsidium-der-freien-universität-berlin-to-the-executive-committee-of-the-freie-universität-berlin-nein-zur-streichung-der-südasiatischen-kunstgeschichte-saying-no-to-the-planned-abolishment-of-the-subject-of-art-history-of-south-asia](https://www.change.org/ja/キャンペーン/an-das-präsidium-der-freien-universität-berlin-to-the-executive-committee-of-the-freie-universität-berlin-nein-zur-streichung-der-südasiatischen-kunstgeschichte-saying-no-to-the-planned-abolishment-of-the-subject-of-art-history-of-south-asia)

~~~~~

2013年8月11日配信分

森安通信 読者各位

いよいよお盆休みですね。ところで、お盆は正式には「盂蘭盆（うらぼん）」と言うのですが、皆さんは盂蘭盆の本当の意味は何か、なぜお盆には休むのかと疑問を持たれたことはありませんか。私はずっとこれが気になっていて、語源については以前にあれこれ調べたことがあるのですが、いろんな説があって收拾がつかない状態でした。また一般的な仏教事典類に載っている梵語（サンスクリットを含むインド語）のウランバナ、その意味は「倒懸（とうけん）」＝「逆さ吊り」に遡るといふ説明も、地獄に落ちた先祖が逆さ吊りの苦しみに遭っているのかと想像させるものの、さっぱり納得がいきませんでした。ところが今年になってついに、謎が解けたのです。それを解いたのは、創価大学の辛嶋静志教授です。

コロンブスの卵ではありませんが、難問は解けてみれば、正解は案外単純なものです。辛嶋説によれば、盂蘭盆は僧侶を供養するための「御飯をのせる椀」すなわち「飯椀」という意味です。梵語のオダナ **odana**「飯、御飯」がオラナ **olana** > オラン **olan** と発音されて、それを漢字で「盂蘭」と音写したということです。ディー (d, D) 音がエル (l, L) 音に変化するの、一世を風靡した棋図（うめず）かずおの漫画で、まことちゃんが自分のことを「まことちゃんなのラー！」

と叫んで走り回っていたのを思い出してもらえれば、よく分かるでしょう。「ダ」が「ラ」に変化したのです。従って「飯」を意味するオダナがオラナに、そして語末の a 母音が脱落してオランになり、それを盛る「お盆」が「オラン盆」と呼ばれ、それが漢字で「盂蘭盆」と音写されたというのは、真に明快な論理です。実は、盂蘭盆が「逆さ吊り」のような奇っ怪な意味ではなく、食器の「お盆」であるという点までは、既に龍谷大学の入澤崇教授が解いていたのです。

でも、文科系の学問の悲しいところは、理科系と違って「追実験」できませんから、すぐには誰も証明できず、従って学者の間でも信頼に値する説かどうか確定するまでに、何年もしくは十何年もかかるということです。私が、これは大発見だと思って知り合いの複数のマスコミ関係者に知らせて記事にすることを薦めたところ、それが本当に正解かどうか調べようがないから、慎重にならざるを得ないと言われました。マスコミ側としては、確かにそれは正しい判断でしょう。結局、文科系の学問というのは、新説を唱えた人だけでなく、それに即座に高い評価を与えた人も含めて、語学能力・識見・歴史観から人格までが丸ごと問われるものだということです。怖いともいえますが、そこに醍醐味もあります。

私はこれまで、自分の門下生に限らず、学外者も含めていろいろな若手を育ててきたと自負していますが、こんな事が幾度かありました。それは、私が学術論文に投稿を薦めたり、投稿論文を査読して高い評価を与えたのに、最終的には編集委員会で不合格なってしまったのです。でも、その後、紆余曲折を経て別の学術誌に採用されたところ、それが学界で高い評価を得て、今や新進の若手・中堅に成長しているのです。そのうちの一人は、今や東大にいます。すでに学界では世界的な名声を得ている辛嶋教授に対して、こういうことを言うのはまったく僭越あるいは失礼な話なのですが、盂蘭盆に関する辛嶋説は、そういう経験を持つ私が、両手を挙げて支持するという水準のものなのです。

漢文の『盂蘭盆経』にはインド語（サンスクリット語、パーリ語、ガンダーラ語など）の原典が見つかっておらず、しかも『盂蘭盆経』に基づく「お盆」の行事には、間違いなく先祖崇拝と親孝行を重要視する中国の強い影響があります。輪廻を本当に信じているなら、死んだ先祖や父母はどこかに生まれ変わっているわけですから、お墓や位牌を守って崇拝する必要はありません。日本の各家庭にあるお仏壇の位牌は、儒教の国である中国で生まれたものです。

そういう次第で、『盂蘭盆経』はインド起源ではなく、儒教的な中国で作られた「偽経」「疑経」であるという説が広く受け入れられてきたのです。だからこそ逆に、「盂蘭盆」の原語が不明であり、古代から現代にいたるまでになされた「盂蘭盆」の語源についてのさまざまな解釈は全て牽強附会に過ぎないだろうと思われてきたのです。

盂蘭盆行事の根拠をなす竺法護（じくほうご）（訳）『盂蘭盆経』の趣旨は、辛嶋教授よれば「人々が現世の父母と過去七回の生存における父母に親孝行をして、彼らを救済しようと思うなら、七月十五日、美味しい飲食物をお盆にのせて、自恣（じし）の行事に参加するために十方からきた僧侶たちに施しなさい」ということです。ここに「自恣（じし）」とあるのは「安居（あんご）」のことで、インドで雨期の間仏僧たちが外出を避け、ひたすら修行に励んだ期間を指し、その行事開けが陰暦の七月十五日だったのです。今度の辛嶋論文では、『盂蘭盆経』は中国で作られた「偽経・疑経」ではなく、確かにインドで作られたものであることまで解明されました。これまでは飲食物を載せた容器や舟を使ってお盆の行事をしてきた浄土宗などのお坊さんに、なんとなく後ろめたさがあったそうですが、今後それは完全に払拭されることになるでしょう。

不具                      2013年8月11日                      森安孝夫

~~~~~

2013年6月29日配信分

森安通信 読者各位

あまりに学問的になることを恐れて、前回の通信では話題にしなかったのですが、実は2ヶ月ほど前に、西安（もとの長安）で発見された漢文の墓誌銘が、8世紀末にモンゴル高原から唐帝国に亡命していたウイグル王子のものであり、しかもそこにわずか30数語ながら突厥文字（ルーン文字）でウイグル語（古代トルコ語の1方言）が書かれていたことが中国やトルコのテレビで報道されて、世界のトルコ学界で大騒ぎになりました。墓誌の大きさは縦横40センチ程度の小さいものです。やはり西安で出土し、数年前に日本でも展覧された8世紀の日本人留学生・井真成の墓誌銘も似たような大きさでした。日本史にとっては貴重な史料ですから、マスコミが取り上げ、いくつもシンポジウムが開かれま

したが、世界史的にはこの漢文トルコ語バイリンガル墓誌銘の方が遙かに大きい価値があります。目下、いろんな学者が競争で解説案を出しつつありますが、まだ完全に読めた人はいません。私も独自の解決案を持っているので、そのうちに発表しようと思っています。

ところが、数日前に届いたニュースは、そのウイグル王子の墓誌銘など全くかすんでしまうような桁外れの大発見で、仰天しました。モンゴルで、突厥ルーン文字トルコ語の巨大碑文が、複数発見されたというのです。しかもその発見者が、私の教え子の一人である大澤孝・大阪大学外国語学部教授であり、モンゴルで記者会見してテレビニュースにもなり、むこうでは大きく報道されているというのです。

数千年前まで遡る印欧語族の故郷が中央ユーラシア西部であったのに対して、千五百年前のトルコ諸民族の故郷は中央ユーラシア東部のモンゴルです。しかし、世界史の動向を左右した中央ユーラシアの遊牧民族のうち、最も古くに独自の文字と言語で文献史料を残したのは、8世紀前半の突厥なのです。具体的には、突厥第二帝国（7世紀末～8世紀中葉）の突厥碑文（オルホン碑文）です。

突厥碑文（オルホン碑文）は、主要な三大碑文（キョルテギン碑文、ビルゲ可汗碑文、トニクク碑文）が19世紀末にヨーロッパ人によってモンゴルで発見されて以来、20世紀には小さいものは少しずつ発見されましたが、もう百年以上に亘って三大碑文級の発見はありませんでした。今回はそれに匹敵する大発見だというのです。突厥碑文は、史上に燦然と輝く文献史料として、欧米・日本・中国・モンゴル・トルコの学者が多数の研究を発表してきており、世界遺産級の文物です。かつてはどの高校教科書にさえ載っていたのですが、最近では載せない教科書が増えました。しかし、それは絶対におかしいことですので、高校の先生方は教科書に載ってなくても、存在だけは教えてください。高校では、アジアの文化遺産をもっと紹介しないと、いつまでたっても西欧中心主義が打破されませんから。因みに、今月になって森部豊『安祿山』（世界史リブレット、「人」018、山川出版社）が出版されました。突厥とも深く関わる安祿山の事績についての最新の研究を平易に解説したものですので、高校教員と歴史ファンは是非とも御覧ください。

突厥三大碑文の中でも最重要なキョルテギン碑文は、当然、突厥文字トルコ語の文章がメインですが、その一面には、当時、名実ともに世界一の権力者で大富豪であった唐帝国の玄宗皇帝が贈った御製の漢文銘文が刻されています。

唐帝国にとって突厥はそれほどまでに外交的に重要な存在であったのであり、当時の日本とは桁違いの扱いを受けたのです。突厥碑文は、当時の世界情勢を読み解くだけでなく、遊牧国家の構造や制度を解明する上でも第一級の貴重な史料になっています。この度の大澤孝教授による百数十年ぶりの大発見は、トルコ文献学界のみならず、世界史学界にとっても大いに慶賀すべきものなのです。

本通信の読者の大方には、このあたりまでお読みいただければ十分ですので、今回の通信の主旨を先に述べますと、新発見の複数の巨大碑文と、それを含む遺跡の発掘・保存のため、モンゴル側は日本に財政的支援を期待しているので、皆様のお知恵を拝借し、マスコミ報道や資金獲得のために御協力をお願いしたいということです。

大澤孝教授は、彼はこの半年間、阪大のサバティカルで、モンゴル国考古学研究所の客員教授という形で、資料調査にあたっていました。以下は、本人からの報告ですが、読みやすくするための微修正をしてあります。

「5月末に考古研の研究者と東部モンゴリアのヘンテイ県からスフバートル県で共同調査を行ないましたが、スフバートル県のトゥブシンオール・ソムのデレゲルハーン山の近郊の草原上で、巨大な突厥文字碑文の存在を確認しました。土に埋もれていてその全貌は不明でしたが、露出し、落剥している表面には確かに大きな字体で突厥ルーン文字が読み取れました。但し遺跡は荒らされ、石槨が打ち割られたり、土の中に突き刺さった状態でした。あとで聞くと、ここは鉦山会社の所有で、近くからウラン鉦が出るとのことで、多くの盗掘者がここを訪れて、破壊したのを目撃したという現地の牧民からの情報がありました。」

「これは大変だということで、急遽、ウランバートルに戻り、考古研を通してモンゴル文科省、文化財庁に緊急調査の許可を得、3日後に再度、現地のソムの郡長からも許可をもらい、文字のありそうな面の拓本・写真を取ろうとしましたが、天候が悪く、雨や強風のために、うまく行きませんでした、我々が使用する通常の厚さの和紙では、面が荒すぎて、穴が開いて、どうしようもありませんでした。最後の2日間は、ウランバートルから応援隊を呼んで、韓国隊が以前に用いた超丈夫な紙で、何とか一部を採拓しただけです。現時点では、碑文は切断された長い断片でも3メートル、そして4メートルの長さの碑文が2

つ、またタムガばかりの円柱碑文が1つ確認されています。ただ、天候の悪化と資材不足、人員不足で、どれも一部分しか拓本はとれず、まだまだ地下には碑文断片が折り重なる様になっているのが見えました。今は、遺跡・碑文の上には土がかぶせられ、また拓本は考古研管轄下にあります。」

「その後、4日間ほどで、考古研の研究者で、我々ビチェース隊のメンバーであるムンフトルガと缶詰状態で、拓本を読みました。6月19日にはその結果を、考古研所長立ち会いの下で発表しました。そこでは、今後の調査の方向性として、モンゴル考古研が主導して来期から発掘を開始することが話し合われました。そして翌日、モンゴル国営テレビ局で考古研所長以下の関係者4名と私が共同記者発表会を行い、その日のうちに全国ニュースとして何度も流れ、また翌日の新聞でも各社が記事として取り上げてくれました。」

ここから森安の文章に戻りますが、かつてモンゴル国を衛星国として支配していたソ連は、モンゴルで遺跡や碑文の新発見があっても、遺跡を荒らしたり発見物を持ち去るなどひどい調査をしました。また最近ではトルコ共和国やカザフスタンが自分たちの故郷としてのモンゴルに興味を持ち、あれこれの共同事業をしていますが、やはり自分勝手さが目につくようです。それに比べて、ソ連崩壊後の1990年代から私が代表となって率いた阪大関係者（松田孝一・大阪国際大学名誉教授、松川節・大谷大学教授、大澤孝・阪大教授らを含む）を中心メンバーとする日本隊は、モンゴル側には厚い信頼を受けています。その証しが、森安孝夫/A. オチル（共編）『モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告』（豊中、大阪大学文学研究科内、中央ユーラシア学研究会、1999年；電子検索可能 <http://hdl.handle.net/11094/20780>；拓本も以下の「データセット」からJPEG画像で閲覧可能 <http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/handle/11094/14>）です。それゆえ、今度の大発見にあたっては、是非とも日本側と手を組みたいというのが、モンゴル側の強い意向だそうです。しかしながら、もはや私は大阪大学を退職していますし、政財界にも太いパイプはありませんので、予備的発掘と遺跡保存費用として数千万円を即座に捻出することはできません。それ故に、皆様方の御協力をお願いしたいのです。まずは、マスコミ関係者に、このニュースを大きく取り上げていただきたいのです。既に、7月16日（火）午後3時から大阪大学・中之島センターで、大澤孝教授が中心となって記者報告会をす

ることに決定しましたので、そこに一人でも多くの記者に集まっただけ
よう、後押しをお願いする次第です。

以下には大澤教授から得たさらに専門的な情報と、松田孝一教授のコメント
をお伝えして、本日の通信を終わります。

不具

2013年6月29日

森安孝夫

「今回は気象条件も悪く、人員不足や道具類の不足など、極めて制限された
中で、破壊された碑文の正面と思われるタムガのある箇所のみを採拓し、読ん
だにすぎません。それでもまるまる4日間はかかりました。今回の調査で、2つ
の碑文をあわせて読めた行は20行、文字は2832文字、646の単語、そして3つ
の碑文上のタムガの総数は30個です。」

「今回の発見が、これまで突厥関係遺跡・碑文が存在しないとされてきたモ
ンゴル東部であったことには、大きな意義があります。しかもその規模は、ビ
ルゲ可汗、キョルテギン、宰相トニユククの遺跡・碑文と比べても遜色ない最
大級のもので、3メートルと4メートルの碑文が2点あり、突厥の王族アシナ
氏の組み合わせタムガが複数、確認されます。またこれ以外にもタムガを多数
含む3メートル以上の碑文1点が確認され、花柄文様の並ぶ大規模な石槨断片
や遺跡の東面には1点のバルバル石が横倒しになっています、さらにはわずか2
片ですが、煉瓦の破片が、地面から出ていました。」

「こうした状況から、私は本遺跡が、突厥第二可汗国のものであり、おそら
くはビルゲ可汗からその後の東面（東部領域）を支配すべくゆだねられた、い
わゆるテリス・シャドの墓廟遺跡ではないかと考えています。但し、ここでの
アシナ氏のタムガはビルゲ可汗碑文、キョルテギン碑文にみられる雄山羊のみ
のタムガではなく、オンギ碑文やムハル碑文の亀趺などにみられる組み合わせ
のタムガですので、これは王族アシナ氏の傍系に関わるものでしょう。」

「制作年代は、ビルゲ可汗死亡後の735～740年頃に当たるのではないかと考
えています。」

「おそらく石槨の前にはビルゲ可汗、キョルテギン、トニユククなどの大規
模墓廟にみられる中国式の墓廟があったものと思われますが、現在では破壊が
ひどく、他の遺構とともに破壊されて、持ち去られたか、あるいは埋められた
可能性があると思います。」

松田孝一教授からのコメント：

森安先生が先鞭をつけられた 20 世紀のモンゴルでの碑文調査がついにまったくこれまで未知であった突厥碑文の発見という世界的な快挙に結実したという意味でも、また阪大の力を結集してここまで来たという意味でも、この世紀の大発見を世の中に大々的に広報して、内陸アジア史への関心を一般の人に起こし、さらには内陸アジア史を目指す生徒がでてくる一助にすべきではと考えます。

~~~~~

2013年5月17日配信分

森安通信 読者各位

この通信は情報発信が第一目的ですが、個人的な近況報告も含めて、不定期に発信しているものです。送り先は私が個人的にメアドを把握している次のようなグループです。（中略）

最近読んだばかりなのですが、メリメの『カルメン』がこんなに面白い小説だとは知りませんでした。訳者が堀口大學であることも関係あるのでしょうか。新潮文庫本で1冊に入っている『タマンゴ』、『マテオ・ファルコネ』、『エトリュスクの壺』、『オーバン神父』など、どれも秀逸でした。おそらく背景に「歴史性」が強くあるので、なおさらそう感じたのでしょうか。言うまでもなく『カルメン』にはジプシーの歴史と 19 世紀のスペインの様子が反映されていますが、『タマンゴ』は黒人奴隷貿易の実態に肉薄し、『マテオ・ファルコネ』ではシチリア島からマフィアが出てくる背景が浮かんできます。しかもメリメはパリ生まれで、パリ社交界でも相当の浮き名を流し、愛人にも恵まれた学者（美術史家で考古学者）だったので、その経験があちこちに伺えて、読んでいて実に愉快でした。愉快というと、お前は黒人奴隷とか民族差別を認めるのかなどと詰問されそうですが、そういうのとは違います。誰でも今は海賊は悪いこと（違法行為）と知りながら、映画「パイレーツ・オブ・カリビアン」を見

てやっぱり愉快と感じるのと似た心の動きです。歴史書も歴史小説も、程度の差こそあれ「歴史性」すなわちリアリティが生命なのではないでしょうか。

私は女性の美しさは大好きですが、川端康成の『眠れる美女』には辟易しました。睡眠薬で眠らされた若い美少女に、性欲の衰えた老人（60代がそこに分類される！？）が添い寝して、その美しさを微に入り細にいつて描写するのですが、それが7人分も続くのです。私は最初の2人くらいでもう十分という気になりました。ところが、その「解説」を三島由紀夫が担当していて、熟れすぎた果実の腐臭に似た芳香を放つデカダンス文学の逸品であると絶賛しているのです。そういえば三島にも、妻と娘を理想の美女に育てようと努力する『女神』という耽美的中編小説がありました。この程度なら許容範囲ですが、『眠れる美女』はこりごりでした。やはり川端康成では『雪国』と『古都』くらいリアリティで十分です。ところで皆さんは、水原弘に「雪国」という歌があるのは御存知でしたか？私は川端の『雪国』を読んだ後で初めて気付いたのですが、平尾昌晃の作曲です。目下、カラオケで猛練習中ですが、練習すればするほど水原弘のうまさが身に沁みてきます。でも、その水原弘とちあきなおみの「黄昏のビギン」を聴き比べると、ちあきなおみの方がすごいですから、美空ひばりが恐れた女性歌手はちあきなおみだけだったという噂話も頷けます。

この1年間、私が三島由紀夫に「はまって」きたことは、以前の通信でもお伝えした通りですが、ほぼ長編が終わって最近では中編や短編にも手を伸ばしています。そのうちの短編『憂国』は二・二六事件を題材にしたもので、最後はやはり自決する場面が描写されているので、相当に右翼っぽい内容だろうと思っていたら、全くそうではなく、一種の純愛小説のようで、意外な感じに打たれました。ところが逆に、同じ文庫本に収載されていたもっと短い『牡丹』になにげなく目を通した時は、仰天しました。なんと、あの三島が、南京虐殺を認めているばかりか、その首謀者の××大佐が戦犯裁判から逃げ通して、戦後、牡丹園を経営したという話なのです。南京事件の虐殺者は数万人に及ぶが、そのうち、彼が手ずから念入りに殺したのは女性ばかり580人で、彼の牡丹園の580本の牡丹はそれを象徴しているというのです。まさか三島にこのような作品があるなどとは夢にも思いませんでした。

村上春樹の最新作によれば、人間の80パーセント以上は自分の頭で考えて行動することをしないいわば指示待ち人間だそうですが、上からの指示・命令を

ひたすら待っている人間と、お上や主君への忠誠心を持つ人間とは表裏一体なのではないでしょうか。三島由紀夫『豊饒の海』では天皇陛下への忠誠、プガチョーフの乱に題材をとったプーシキン『大尉の娘』ではエカテリーナ2世への忠誠、そして無頼派小説である『水滸伝』でさえ宋の徽宗皇帝への忠誠が、地下のマグマのように埋め込まれ、それが時に噴き出すのが感じられます。人は自分の「神」なしでは生きられず、ある人々にとってはそれが「主君」となるのでしょうか。

ところで今日は、明日のテレビ番組についてのお知らせを致します。東大寺の法華堂（三月堂）の仏像（天平時代）に関する興味深いものです。以下に担当者である朝日放送の牟田口章人さんからのメールを転載します。

冠省 ご承知のように、奈良・東大寺の国宝法華堂の平成大修理が2010年5月から2013年3月末にかけて行われました。堂内にある天平時代の仏像と須弥壇を本格的に修理したのは、鎌倉時代以来、とか。天平彫刻の殿堂である法華堂のこれほどの修理はあと数世紀はないだろう、ということで、当方はお寺から特別許可をいただき最初から撮影を続け、ようやく番組放送にこぎつけることができました。その間取材した総日数は230回あまりにのぼります。美術史だけでなく、日本の古代史に関わるような大発見も相次いでおり、当方はこれを2回に分けて放送いたします。お時間がございましたなら是非ともご高覧を賜りたく、ご案内をさせて頂きました。

また、視聴のご感想等もお寄せ頂きましたなら幸いに存じます。 草々

### 天平の美をまもれ！～東大寺法華堂・修理の記録～

BS朝日 放送日時（衛星放送 全国）5月18日（土）午後4時から55分間

実は、先の4月29日（月）にも朝日放送で近畿ローカルとして同じ番組が放送されており、私はそれを見てから皆さんにお勧めしようと思っていたのですが、私が放送時間の9時58分からというのをてっきり午後と思い込んでいた（実は午前だった）ために、それができません。こういうミスは、フランス留学試験

の日を間違えて一年後に再受験した私には、それほど珍しいことではありません。

なお、Li, Tang / D. W. Winkler (eds.), *From the Oxus River to the Chinese Shores. Studies on East Syriac Christianity in China and Central Asia.* (Zürich / Berlin: Lit Verlag, 2013)という新刊書が届きました。中央アジアから中国に伝播した東方キリスト教（ネストリウス派，景教）関係の英語の論文集ですが，ウイグル・沙陀・オングート・タタル・モンゴルや，唐代～元代の中国のキリスト教史に関心のある方は見逃さないでください。

不具            2013年5月17日            森安孝夫

~~~~~

2013年3月18日配信分

森安通信 読者各位

昨日の日曜に、本当に久しぶりに大相撲を見に行きました。親戚の方の招待なのですが、栈敷席で飲み食いしながら、三段目から横綱戦まで、たっぷり満喫しました。大阪の春場所はいつも荒れるのですが、日馬富士が3敗目を喫した時は、そんな予感がしました。彼は名大関でよかったのに、横綱になってプレッシャーが大きいのではないのでしょうか。夜は帰宅してテレビでスケートを見ましたが、今度は完全に予想が覆りました。キムヨナが完璧な演技をして優勝したのです。世界のトップレベルで2年間もブランクを空けていきなり復帰できるなんて、あるはずないと思っていたのに、軽々とそれをやってのけました。彼女は、これまでのアスリートの常識を破ったと言えるのではないのでしょうか。

さて、中央アジア古代のソグド錦がシルクロードを通過して西方遠くヨーロッパ大陸西端のベルギーにまで届いていたという話は、NHKスペシャルでも有名になったところですが、実はそれは嘘だという事が最近判明しました。ベルギーのユイの教会に保存される帷子の裏面にソグド文字の銘文があり、そこにザンダニジというソグド錦の特産地の名前が見えるというのが根拠でしたが、その銘文の読みが間違っていたのです。それを読んだのは、碩学中の碩学であ

ったヘニングなので、我々もほとんど疑わなかったのですが、あれは単なるアラビア文字の銘文だったのです。そのことが、次の論文で証明されました。N. Sims-Williams / G. Khan, Zandanjī Misidentified. *Bulletin of the Asia Institute* 22 (2008), 2012, pp. 207-213.

以下は世界史教育に関わる話題ですが、学術雑誌の『西洋史学』246号(2012年, pp. 55-66)に中村武司・伊藤一馬・後藤敦史・中尾恭三・秋田茂「『新しい世界史の運動』と歴史学研究」というフォーラム報告が掲載されました。具体的には羽田正『新しい世界史へ——地球市民のための構想』(岩波新書, 2011年)の合評会の報告です。本通信の読者の多くを占めるのは、桃木至朗・秋田茂両教授と私とが中心となってやって来た阪大の高大連携プロジェクトに参加された高校社会科教員の方々ですが、羽田氏の新書が出たときは正直言ってやや違和感がありました。皆さんはいかが思われたでしょうか。でも、今度の報告で、秋田教授がそのあたりをうまくフォローされており、安堵しました。若手4人の文章も的を射たもので一読をお薦めしますが、特に秋田教授が、東洋史・日本史のみならず西洋史の研究者こそがこの日本の世界史教育に積極的に取り組まねばならないと訴えているのは、まさにその通りで、高校教員をされている西洋史出身の方々から、逆に危機感の薄い西洋史研究者を突き上げていただきたいと願う次第です。

ところで、私のライフワークの1つは、古代ウイグル語で書かれた手紙文書の研究ですので、ユーラシア世界史上の手紙の歴史にも大きな興味を抱いてきました。それゆえ、つい最近、紀元前4世紀のアラム語の手紙がまとまった出版され、その1つにはあのアレクサンドロス(大王)の治世の7年、即ち西暦紀元前324年という紀年まであるのですから、本当に驚きました。古代ウイグル語の手紙はせいぜい9~14世紀ぐらいのものですから日本の平安・鎌倉時代にしか遡りませんが、アラム語の手紙は弥生時代より古いのです。材料は羊皮紙で、かなりきれいに残っているのです。その新本のタイトルは以下の通りですが、大判でカラー写真も多数ある豪華本なのに、信じられない安さです。

Naveh, J. / Sh. Shaked, *Aramaic Documents from Ancient Bactria (Fourth Century BCE.) from the Khalili Collections*. London: The Khalili Family Trust, 2012. (約300ページ, 一誠堂で6500円)

なぜこれほど学術的価値の高いものがこんなに安いのかと思いましたが、序文を読んだところ、コレクションのオーナーで出版の援助者がペルシア系ユダ

ヤ人の富豪だからのようです。こういう形で社会還元してくれる金持ちなら、ありがたいですね。

本書に収められたアラム語の文書類（羊皮紙が30件で、木簡が18件）は、アフガニスタン北部の旧バクトリア地方で発見されたもので、内容的に手紙をはじめとする世俗文書群を含みます。しかもそれらの文書の時代は、アケメネス朝ペルシアの末期からアレキサンダー支配時代にまで及ぶのです。さらに驚くべき事に、手紙の多くは、恐らくソグド地方も含むバクトリア地区全体のサトラップであった人物から、所領の一部を差配している部下に宛てられたものなのです。これらの手紙からは、後に中央ユーラシア全体に広がる手紙書式の雛形が判明するだけでなく、文書全体からは多くのソグドの地名や商品名などが回収され、興味は尽きません。

不具 2013年3月18日 森安孝夫

~~~~~

2013年2月2日配信分

元旦の通信からはや1ヶ月が過ぎました。先日テレビを見ていたら、歌謡曲の曲名に地名のあるものを調べたところ、トップは銀座でも横浜でもなく、大阪だったそうです。確かに大阪を舞台にした歌謡曲はよく耳にしますし、はからずも大阪人になった私にも嬉しいことです。この頃はカラオケでときどきフランク永井の「大阪ぐらし」とか青江三奈の「大阪ブルース」を歌います。偶々ある古美術商の出している通信に、「大阪ラブソディー」はいろんな人が歌ったが、漫才姉妹の海原千里・万里のが名唱だと思う、しかしあの姉妹がいつのまにか消えてしまったので寂しいと思っていたら、実はその一人が上沼恵美子だといつ最近知って驚いた、と書いてありました。

一般に大阪は人情に厚いと言われますが、最近読んだ谷崎潤一郎の描く大阪人の意地悪さ加減にはいささかショックを受けました。『蓼食う虫』はまだいいとして、『春琴抄』に描かれた大阪人の意地悪さ加減にまず驚きましたが、『卍』に至っては、前半はともかく、後半はそのねちっこい心理描写に辟易しました。解説によれば、『卍』は『細雪』『蓼食う虫』と並ぶ谷崎の傑作で、

後半はサディズムとマゾヒズムの極致なんだそうですが、私のような人間にはついていけませんでした。前半のエロチシズムだけで十分です。

一方、西洋文学では、またまたバルザックに目がいきましました。長編『谷間の百合』は恋が成就しなかった話でしたが、『毬打つ猫の店』は短編ながら、それと対をなす作品だと感じました。恋が成就して目もくらむような結婚をするのですが、幸せは短期間で、破綻するのです。恋愛と結婚はまったく別だということを強調しているらしいのですが、本心はどちらなのでしょう。バルザックはまた『ゴプセック』でユダヤ系高利貸しの主人公に、世の中は「金と権力が全てだ」と言わせておきながら、主人公が莫大な財産を残して死ぬ土壇場で、賄賂や贈答品としてもらっていくつもの部屋に詰め込んでおいた大量の品々の内、高級食料品からウジが湧いていた情景を描いています。彼は、百八十度違う価値観の両方を敢えて描いて見せて、読者に考えさせるタイプなのでしょう。それとももっと深い意図が隠されているのでしょうか。因みに「がめつい奴」とか「難波金融道」で名高い大阪と、『ゴプセック』の舞台となったパリの人情は、元来田舎ものの私の目には「よう似ている」ように見えました。冷たくてドライでとても計算高い面と暖かい人情味が同居しているというのは、要するに古くからの「都会」なのでしょう。だからこそ、演歌の舞台やタイトルになるのでしょうかね。

でも「金と権力が全てだ」というのは今でも一面の真理であり、大多数の金も権力もない人々に、それ以外にも人生にはさまざまな喜びや楽しみ方があることを教えるために、次から次へと小説が産み出されています。時に私はそういう小市民的な小説に違和感を覚えます。三島由紀夫が面白いのは、バルザックと同じようなレトリックを駆使しているからかもしれません。

以下は、昨年、大阪に契丹展がやって来た時に通信で紹介した契丹（遼帝国）に関わる話題ですが、かなり学問的な内容ですので興味のない方はここまでで終わってください。

チンギス汗（＝ジンギスカン）のお墓が見つかったら、歴史が変わるだろうと言われていますが、それはひた隠しに隠したのですから、まだまだ見つからないでしょう。それに対して、遼（契丹）の耶律阿保機の墓は所在が分かっています。現在の内モンゴル自治区東部の赤峰市の北で、大興安嶺の南端にある祖陵です。今週の水曜、そこを発掘している調査隊の責任者である董新林教授

の講演会が京都府立大であったのですが、たくさんの貴重な写真を見せていただき、感激しました。U字型の山稜に囲まれた溪谷全体が陵墓域であり、一方だけ開いている側の前方にも山があつて、遠方からは見えないような場所に、いろんな建物の遺跡が点在しているのです。いかにも聖域にふさわしい場所で、まだ門とか陪葬墓とか付属施設の発掘だけしか済んでいないのですが、耶律阿保機の墓の本体が発掘されれば、きつものすごい発見があると期待されます。次いで、そこから20kmほどしか離れていない遼の首都・上京の都市遺跡の発掘状況の写真もを見せていただきました。私は、遊牧民の契丹皇帝がすぐに「漢化」して石やレンガで作った宮殿になど住むはずがないと考えていますから、上京の遺跡内にテントを設置した跡はありますかと質問したところ、なにも建築址のない広い空間はあるとの回答でした。さらに、講演オルガナイザーの武田和哉・大谷大学准教授から、1008年に北宋から遼への使者となった路振の「乗輶録」に、上京ではなく中京（事実上の遼後期の首都）についてですが、「中京の内城（恐らく宮城）の中には殿院は二つしかなく、後ろにある宮室はただフェルトの天幕（穹廬毳幕）のみ」という記事のあることを教えてもらいました。やはり契丹皇帝は上京滞在中も、漢民族の臣下や外国使節なども出席する儀式の時以外はテント生活をしていたのでしょう。そのテントも、城内だけでなく、城外にもあつたはずです。しかも遊牧国家では君主は季節移動します。たくさんのテント群が移動すれば、首都も移動するということです。テントといっても、1平方メートル百万円以上もするような豪華な絹織物で覆われていれば、億単位の立派な宮殿になるのです。

同じことは、契丹に先行するウイグル帝国の首都オルドゥバリクの遺跡であるカラバルガスンでも言えることです。モンゴル帝国の首都カラコルムの近くにあるこの遺跡は、数年前からドイツ・モンゴル合同隊が発掘中ですが、つい最近、発掘に参加しているオーストラリアのArden-Wong氏が、英語で論文を発表しました。

Arden-Wong, Lyndon A.

The Architectural Relationship between Tang and Eastern Uighur Imperial Cities. In: Zs. Rajkai / I. Bellér-Hann (eds.), *Frontiers and Boundaries: Encounters on China's Margins*, (Asiatische Forschungen, 156), Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 2012, pp. 11-47.

この論文では、唐の長安の都市プランなどとの比較・検討をしていますが、日本人なら藤原京・平城京・平安京のみならず新羅や渤海の都城とも比較していくべきでしょう。言うまでもなく、東アジア全体の都市を比較研究している妹尾達彦・中央大学教授らのグループは既に大いに注目しています。Arden-Wong氏が「オールドゥバリク（カラバルガスン遺跡）は第3代牟羽可汗のヤグラカル朝時代はまだ帳幕（テント）中心で、第7代懐信可汗以降のエディズ朝時代になって初めて城郭都市になったのだらう」と推定しているのには従えませんが、草原都市のありかたとして、遊牧テント群との複合を見据えている点は高く評価できます。カラバルガスンには外城がないことも、遊牧民との一体化を強く印象づけます。従来、農耕国家の都市に比べて、遊牧ウイグル帝国に巨大都市があった事実などほとんど無視されていましたが、これからはそうはいかなくなるでしょう。これは後の契丹の上京・中京やモンゴル帝国の大都（北京）やティムール帝国のサマルカンドなどと同じく、泥土で作られた建築群と遊牧テント群とが複合した都市なのです。ユーラシア世界史は、決して中華主義や西欧中心主義だけでは成立しないのです。

そのほかにも実は Arden-Wong 氏は、とんでもない発見をしているのですが、その成果は今度の論文にはまだ発表されていません。具体的には、唐がキルギスに贈った玉製の冊書（南シベリアで発見された玉冊）と同様のものが、ごく小さい断片ながら、カラバルガスンの宮城跡から出土したのです。唐はウイグルの歴代可汗に正式の使者を送って冊立していますから、当然といえば当然なのですが、やはり原物が出たというのはたいへんなことです。

なお、上の耶律阿保機の祖陵の発掘報告も含む本が、折よく勉誠出版のアジア遊学シリーズの一冊（160）として出版されました：『契丹〔遼〕と10～12世紀の東部ユーラシア』（東京、2013年1月、2800円）。本書は、若手の錚々たるメンバーたちが作り上げたもので、高校教員に最適です。例えば、毛利英介氏が1004年の契丹と北宋間に結ばれた「澶淵の盟」の原文すべてを和訳して紹介したり、「澶淵体制」という言葉を編み出した古松崇志氏が「十～十二世紀における契丹の興亡とユーラシア東方の国際情勢」という有益な文章を書いています。論文ではないので、研究者以外にも分かりやすくなっています。さらに武田和哉「契丹国（遼朝）の北面官制とその歴史的変質」、藤原崇人「草原の仏教王国」があり、私の教え子ですから宣伝は控えますが松川節（大谷大学教授）・松井太（弘前大学教授）両君も寄稿しています。全体として日本史

と関係ないと思ったら大間違いで、国家と仏教、即ち権力と権威の結びつき方などは日本史研究者にも参考になります。

高校の先生方は、中国が遊牧民族の支配を受けても、結局は遊牧民族が固有の言語を失って漢語化＝漢化するのには、漢民族が優秀だからという言説に騙されないでください。漢語（漢文）は現代の英語、中華民族は現代のアメリカ民族（想像上の産物）のようなものと思ってください。現代に英語が広く使われているのは、最も便利な言語だからです。IT 業界をはじめ英語を採用するのは、現代においてイギリス人が最も優れているからだとは誰も思わないでしょう。中国を支配した少数の遊牧民族系支配者も、文書行政をするのに最も便利な（広く流布している）漢語を使うのは、効率を考えれば当たり前のことです。しかも表意文字なので方言が無視できるだけでなく、ベトナム語や朝鮮語や日本語のようにまったく言語体系が違う人にも理解してもらえます。漢化というのは漢民族が優れているからではなく、漢語が便利だったから生じた現象です。文化的優位ではなく効率の問題なのです。世界最初の帝国ともいべきアケメネス朝ペルシアで、アラム語が広く使われたのも同じ理由です。アラム語は遊牧民族系支配者であるペルシア人の言語ではありませんでした。

不具 2013年2月2日 森安孝夫

~~~~~  
2013年元旦配信分

森安通信 読者各位

また新しい年を迎えましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。私の年賀状は手書きゆえ、年々出す数を減らしていますので、失礼の段はお赦してください。

昨夜は第63回の紅白歌合戦をみながら、あれこれ考えました。芸歴60年を越す美輪明宏は実力があるだけでなく、ヨイトマケの歌の歌詞もNHK好みのはずなのに初出場だったのは、ニューハーフゆえに忌避されていたのがようやく市民権を得た証しだろうとか、MISIAが歌ったナミブ沙漠の風紋の美しさは敦煌にもあるとか、Rising Sunという言葉はいい響きだなあ、若い女の子よりプリンセスプリンセスの方がやっぱり色っぽいなあ、などなどです。それにして

も、私がカラオケで歌えそうな歌は、竹下景子が司会する裏番組にはけっこうありましたが、紅白ではかろうじて「冬のリビエラ」くらいでした。

昨年8月14日発の森安通信で三島由紀夫を取り上げましたが、その後も引き続き彼の作品を読んでいます。やはり彼は天才だとつくづく感じ入っています。ただ一つだけ疑問が出てきました。彼が自刃する前に書き残した『豊饒の海』では、「神風連史話」を題材として取り上げ、神国日本や天皇崇拝を前面に押し出してはいますが、本当に彼自身は右翼的な「国士」だったのでしょうか。大和魂にこだわる国士が毛嫌いする仏教に、興味があるだけでなくやたら詳しいのです。彼にとっては、「若さ」と「純粹さ」に代表される「美」こそが芸術の本質として最重要であり、政治的に右翼であるとか左翼であるとかは問題ではなかったのではないのでしょうか。若者と共に乗り込んだ自衛隊の駐屯地で割腹自殺するというものすごいパフォーマンスは、右翼・民族主義者の背中を押したように思っていました。本人にとっては、そんなことはどうでもよかったのではないかという疑問なのです。

ところで今年が、近未来の日本の運命を左右する大きな分岐点になることは、間違いありません。先の総選挙では、原発事故処理と消費税値上げという負の課題を民主党に押しつける形になったお陰で、自民党は大勝しましたが、自民党が真に国民のために政治をしてくれるのかどうか、これからじっと見守っていかなければなりません。

昨年9月の中国での反日暴動は、中国側に視点を据えれば、1990年前後からの中国政府（江沢民派）の学校教育での猛烈な反日教育が若者に浸透し、反政府デモをいつでもボタン一つで反日デモに切り替えるシステムを作ってきた「成果」でもあります。長大な『水滸伝』を読めば否応なく分かるとおり、中国は古くから根っからの賄賂社会であり、薄熙来に象徴される中国の中央・地方高官の日常的汚職（赤い貴族）体質から、いつでも反政府デモは起こります。それに対して20～30年前から備え始めていたということです。あの反日教育をやめさせない限り、日本企業の中国進出リスクは低くなりません。

しかし、だからといってすぐに憲法改正して自衛隊を国防軍に改編すべきだというふうに短絡するのは、浅はかです。政治家や官僚があらん限りの智慧を絞って、外交的に解決していくべきです。それをサポートするのは、企業人・学者・一般観光客を含む民間の交流です。

私は、左翼的愛国者であると自認していますが、今以上に自衛隊や秘密警察が強くなれば、外国よりも、国内の権力者が早速に私のような者を弾圧もしくは迫害する恐れの方が、はるかに大きいと感じています。それはあの安田講堂に象徴される「東大紛争」の時に、肌で感じた恐怖なのです。あくまで「自由」に最大の意義を認めている「リベラル且つラディカルな民主主義者」にとっては、中国の軍隊や北朝鮮の軍隊よりも、戦前の日本の憲兵や秘密警察のような存在の方が、ずっと不気味なのです。私は決して国家は不要などという無政府主義者ではありません。しかし歴史学の使命は、国家と権力者の暴走をチェックすることなので、警鐘は鳴らし続けます。合法的に暴力装置を持つ軍隊や警察のエリート幹部が何でも出来るようになった時、絶対に庶民の「自由」は阻害されるのです。平和憲法を守り、戦前の日本がアジアの周辺諸国に与えた苦難に対して繰り返し謝罪しようとするのは我々の自由ではありませんか。ところが、そうする者が、いつのまにか売国奴と呼ばれる日が来ることを私は真に恐れるのです。

悪法も法なりと言って毒杯を仰いで死んだソクラテス流に言えば、現在ある平和憲法を守らない者を国家反逆罪に処することも出来るのです。しかし、戦後の日本の政権はそんなことは決してしませんでした。でも、新たな政権が憲法を自分たちに都合よく変更したとき、これまでの憲法護持派があつという間に反逆者のレッテルを貼られる恐れは小さくないのです。憲法改正は「両刃の剣」であることを、くれぐれもお忘れなきようお願い致します。

平和憲法では日本の国防に不適であるという議論があることは十分認識しており、尊重します。私は大学の講義でも、自分の政治的な考えを学生に押しつけるようなことは決してしていません。自分で考えてくださいと言っています。ただし歴史的無知は駄目ですよ、と念を押しながらです。

とはいえ、世界史認識とか歴史観というものは、決して一朝一夕ではできあがりません。その基礎はあくまで高校世界史です。ここからは高校及び大学の歴史教員を主な対象とする内容ですので、関係のない方は無視してください。ただし末尾の引用文中に、三菱グループへの言及があります。

つい先日、駿台文庫から渡辺幹雄・茂木誠（共著）『24 年徹底分析 テーマ別 東大世界史論述問題集』という本が出ました。渡辺幹雄氏の手になるその序文に、次のようにあります。

「2011年に岩波新書から、東大教授・羽田正著の『新しい世界史へ 地球市民のための構想』が出版されました。この著書で私が感銘を受けたのは、ヨーロッパ中心の歴史観に立ってヨーロッパと他地域（辺境）の二項対立で近代世界史を捉える手法を明快に否定した点です。世界史から「中心」を排除し、異なる地域間の相互連関、相互の影響を重視する新しい世界史を構築すべきだという斬新な考え方は、ウォーラーステインの理論とも対立するものです。」

この御意見にまったく異論はありません。ただ、羽田氏の見方そのものは、我々が以前から主張し、大阪大学の出題でも実践してきたところと通底し、そんなに斬新なものではありません。問題は、東洋文化研究所長を経て今も東大の中核にいる羽田氏の意見が、実際の東大入試に反映されてきているか、あるいはこれから反映されるかどうかです。残念ながら今度の駿台の新本『東大世界史論述問題集』に、西洋史と東洋史の出題の割合などのデータは掲載されていませんが、ぱらぱらと見たところでは、やはり西洋史偏重は否めません。だいたい高校の教科書がそうなっているのだから仕方ないという見方も出来るでしょう。しかし、私が以前から主張してきたのは、西洋史偏重の日本の世界史教育を根本的に変えるには、まずは東大がその出題傾向をドラスティックに変える必要があるということです。それなくしては、いかに阪大で努力しても、影響力は小さいのです。

羽田氏の新書での総論には賛成ですが、各論というか方法論には必ずしも賛成できません。国民国家別の歴史ではなく、グローバルな歴史を構想するのは当然ですが、世界共通の世界史などありえないと思います。私は、各国民がそれぞれの世界史を作ればよいのであって、我々は日本人のためのグローバル世界史を目指せばよいと考えています。

因みにこの議論とも少し関わるメールが群馬県立桐生高校の安達淳教諭から届いていますので、以下に紹介します。羽田本に対する高校教員の反応の一端が窺えると思います。それに加えて、本メールには安達教諭が拙稿「日本に現存するマニ教絵画の発見とその歴史的背景」と関連づけて、クローヴィスのアタナシウス派改宗問題に関するレポートを送っていただきましたので、そのファイルも添付致します。宗教伝道と商業との普遍的関係に思いを致してください。

不具

2013年元旦

森安孝夫

=====

森安孝夫先生

(前略)

さて、クローヴィスのアタナシウス派改宗をめぐる愚見をレポートにまとめました。御高論「日本に現存するマニ教絵画の発見とその歴史的背景」の読後感になっている部分があります。また、まとめる過程で先生にお伺いしたいところが出て参りました。日本はシルクロードに含まれるか否かという疑問です。相変わらず粗雑な形で恐縮ですが、レポートを添付致します。このたびも引用部分にはブルーのフォントを用いています。

(中略)

去る9月22日に、六本木で帝国書院の主催で羽田正先生の講演会があり、拝聴することが出来ました。講演会では、小林克則先生、早川英昭先生にもお会いし、御指導を賜ることもできました。

羽田先生の御講演は「地球市民」の世界史に関する研究活動の紹介が中心でした。講演後、小林先生が、〇〇県民・日本国民・地球市民の間の整合性について質問なさいましたが、質疑応答の時間の過半は、東大の社会学科出身という都立高校の公民専門の先生からの、東大秋入学はどうなるのか、東大の入試問題を変えてほしい、などの質問・意見に対する応答に費やされていました。「地球市民」の世界史に関しては、わたくし自身は、もしも世界の国々の中で、日本人のみが「地球市民」の歴史観に拠るならば日本の国益が損なわれかねないのではと漠然と思うところです。

また、10月初めには、先生が7月16日付の「通信」で御紹介になった駒込の東洋文庫ミュージアムの企画展「ア！教科書で見たゾ」を参観致しました。企画展以外の展示にも感銘を受けました。例えば、高句麗好太王碑の拓本です。石碑のサイズを実感できました。また、清代の圧巻の科举答案も貴重と思いますが、この答案の入手経路にも興味を覚えます。

東洋文庫に足を踏み入れるのはこれが最初でした。設備も非常に立派で、国の援助もあるかと想像致しますが、三菱グループの見識に感服致しました。

(後略)

群馬県立桐生高校教諭 安達 淳

~~~~~  
2012年11月30日配信分

森安通信号外  
一部の読者 各位

明日から師走ですが、今日は4半世紀に亘ってお付き合いのあった焼き肉屋さんの店じまいに行ってきました。実は、そのお店はあの大石内蔵助で有名な京都の祇園の「一力」と同じ名前です。阪大坂下の石橋で40年以上続いてきたのですが、私もその半分以上に関わり、たくさんの東洋史の学生に牛タン刺しのおいしさを教え込んだお店でした。牛タン刺しをはじめとする生肉といえば、祇園の安参（やっさん）といおうお店が有名でしたが、超人気店であり、しかもお安くありませんでしたから我々には高嶺の花だったのですが、阪大に赴任したら、その安参に負けないおいしさの三田牛で、しかも手頃なお値段で提供しているのが気に入って、それ以来の長い付き合いとなりました。そのお店の親父さんが、今月、90歳を越える高齢でお亡くなりになったのです。そこで、80歳代の女将さんが、店じまいをされる決断をされたというわけです。でも最後の日まで、お客さんがいっぱいでしたし、この頃は肉食の量が減った私も、久しぶりにお肉を堪能しました。

おいしいものは活力の源です。親父さんの追悼会を兼ねた今日の食事会に参加したのは6人ですが、私以外の教え子が全て阪大東洋史で博士号を取った者ばかりだったのも、偶然ではないという気持ちでした。なお、ここの牛タン刺しは絶品だったのですが、例のユッケ騒ぎのあおりで、しばらく前からそれは味わえなくなっていました。鯨もそうですが、とんでもなく不条理な外からの圧力で日本の食文化が破壊されていくのは寂しいことです。

でも、関西にはおいしい食べ物がまだまだあります。なんといっても、夏のハモ料理に、冬のフグ、それに関東炊きというおでんは東京よりもおいしいと思います。特にコロとかサエズリなんていうのは、東京のおでんには入っていませんから。もちろん、それらは高級品ですが、つい最近近畿大学の近くで、普通の値段でおいしいお店を見つけました。まだまだ飽くなき探求を続けますから、皆さんも頑張ってください。

本当は、今の総選挙を控えた政治状況について、私なりの意見を述べるつもりだったのですが、この一週間の政治家の動きを見ていたらちょっと興ざめしてしまいましたので、ここらでやめにします。歴史的に見れば権力者・支配者というのは多数の民衆から税金を取り上げる者を言うはずなのですが、今の日本では政治家をそうした類いの権力者と言えるでしょうか？むしろ、恒常的に税金を自分たちに都合よく使っているのは、いわゆる高級官僚層ではないでしょうか。しかし、官僚は選挙で選ばれるわけではありません。多くの高校教員が送り込むことを至上目的とする東大の卒業生が多数を占めるのです。とすれば、選挙で選ばれる国会議員には、官僚以上の学識と見識が求められるのです。本当に難しいですね。

不具      2012年11月30日      森安孝夫

~~~~~

2012年10月22日配信分

森安通信 読者各位

先週、世界的なソグド文献学者のW. ズンダーマン教授がベルリンの病院で亡くなりました。一般の方々にはなんの馴染みもない方ですが、イラン学と敦煌トゥルフアン学分野では偉大な功績を残されました。私もベルリン滞在中には何度もお世話になりましたが、日本でもっとも親交の深かったのは故百濟康義・龍谷大学教授と吉田豊・京都大学教授でした。百濟さんは既にお亡くなりになられているので、吉田さんに追悼録を来年の『内陸アジア言語の研究』に書いていただきたいとお願いしています。

ところで、かつてズンダーマン・百濟両氏が共同研究していた龍谷大学の宮キャンパスで、来る11月3～5日（土・日・月曜）に、「シルクロードの仏教文化—ガンダーラ・クチャ・トルファン—」と題するシンポジウムが開かれます。世界で活躍する研究者たちが発表しますが、対象は広く一般の方々をも念頭に置いており、しかも申し込み不要の先着順250名定員ですので、高校社会科学の先生方や大学で東洋史・仏教美術に興味をもっている学生諸君には、お勧めしたいと思います。詳しくは電話075-343-3311（内線5908）か、

gandhaara@gmail.comに問い合わせるかしてください。11月4日（日）には、ズンダーマン教授の後を継いでベルリン・ブランデンブルグ科学アカデミーのトゥルフアン研究チームを率いたP. ツィーメ教授も発表されます。ツィーメ先生はもう引退の身ですが、再婚相手の奥方が牧師として東京に赴任されたので、今後数年間は一緒に日本に滞在されるのです。ツィーメ先生は世界屈指の古代ウイグル文献学者です。

かつて私が東大駒場の学生であった四十数年前は、中国では毛沢東の文化大革命が進行し、日本では学生運動が最後の高揚期を迎えていた時代でした。その頃は、文科系の大学生はマルクス・エンゲルスの著書をかじるのが当たり前でしたから、私もその流行に乗って勉強しました。どうやら同級生たちは分かっている風なのですが、私にはあまりよく分かりませんでした。駒場から本郷の東洋史に進学後も、マルクスの唯物史観が分からなくてはとても一流の歴史学者にはなれまいと思って勉強したのですが、駄目でした。それ以来、長らく劣等感を抱いていたのですが、50歳になって在外研究で7ヶ月間ベルリンに滞在していた時、ズンダーマン・ツィーメ両博士とたまたまマルクス・エンゲルスの話になりました。両博士は、共産主義を奉じた旧東ドイツでも極めつきの国家的秀才でしたが、彼らがフンボルト大学の学生であった時にマルクス・エンゲルスを読んだけれど、やはり分からなかった、あの時間は無駄であったと回顧して言うのです。ソ連崩壊、東西ドイツ統合を経て、そのように自由にものが言えるようになった訳ですが、その言葉を聞いた時、私は目から鱗が落ちました。ドイツきっての秀才がドイツ語原文で読んで分からなかったものを、どうして日本人が日本語訳を読んで理解できるのでしょうか。

一昨日は大阪大学歴史教育研究会の定例日であり、かつての同僚の桃木至朗教授が「（高校世界史）教科書にも反映されている新しい文化史の諸視角」と「宗教史を理解する3つのポイント」という二つの発表をされました。文化(史)は決して政治・経済(史)と切り離されるものではないことを強調されたほか、いずれも含蓄あるもので、皆さんに聞いていただけなかったのが残念でした。ただ、マルクスの唯物史観さえひっくり返る現代において、翻訳やマスコミ経由で次々と紹介される欧米発の歴史学や経済学の新理論に飛びついたり、新潮流に乗っかるのは危険なだけでなく、馬鹿馬鹿しい結果になる恐れも大きいことを我々は自覚すべきです。例えば、今や多くの教科書では「イスラム教」とは言わずに「イスラーム」として「教」をはずすように仕向けられ、宗教では

ないかの如く扱われていますが、そんなの誤魔化しです。「イスラム教」に偏見を持ってはいけませんが、かつてバーミヤーンの大仏を爆破し、今は教育を受ける権利を訴える少女を殺そうとしているタリバーンは、明らかにイスラム教を奉じている集団なのです。イスラム教とキリスト教は、どちらも長らく人間社会の規範となってきたプラスの側面が大きいと同時に、どちらにも排他的・狂信的な負の側面があるのです。イスラム教は宗教ではないかの如くに言い出したのは一体誰なのでしょう？ラマ教という宗教は存在しませんが、イスラム教は厳然として存在するのです。長母音にするかどうかなど些末な問題です。

最近亡くなった映画監督の若松孝二は、かつてピンク映画の旗手であり、それを通じて反権力の姿勢を明らかにした人物でした。人類史においてはつい最近まで、権力者と有産階級が独占していた享乐的セックスを、庶民にまで開放したのは、ピンク映画とその後のビデオ、インターネットの普及なのです。

昨日の朝日新聞書評欄には、ウラジーミル・ソローキン『青い脂』（河出書房新社、2012、3675円）が紹介されていましたが、書評者の山形浩生によれば、「昔の人は、小説のヤワなエッチ描写ごときで発禁だ裁判だと大騒ぎしたもんだが、モロ出し動画がネットでいくらでも見られる現在、もう小説ごときで、下品だエロだ低俗だと騒ぐ時代ではありませんわオホホホホホと置いていたところに降って湧いた衝撃作」なのだそうです。一方、若松監督は、かつて「戦争は自分が死ぬだけでなく、相手も死ぬ；戦争は権力者のためにやるもの」だと明言していました。

目下、尖閣問題で日中が一触即発の危機にあるわけですが、私は日本が戦争をできるようにするための憲法改正には反対の立場です。先月の中国での反日暴動を目の当たりにした日本人の多くは、憲法改正もやむなしと考え始めているのかもしれませんが、若松監督が言っていた通り「戦争は権力者のためにやるもの」であって、決して庶民の利益にはならないのです。ましてや大多数の女性・子供のためにはなりません。戦争をするくらいならむしろ、女性や子供にピストルを持たせたらどうでしょう。そうすれば強姦やイジメはなくなるかもしれません。でも、自分の身は自分で守るという移民国家の伝統から、銃の所有が公認されている銃社会のアメリカでは、今でも年間3万人が銃の犠牲になるそうですから、どちらがいいのでしょうか。

国家が国民を守るというのは虚構です。それは権力者側の論理であり、国家は国民のうち本当の庶民まで守ってはくれないのです。その点は、今の北朝鮮や中国のウイグル・チベットの少数民族の現状、そして東日本大震災後の現地の状況や、否応なしに徴収された税金による復興予算の横流し、東電の値上げ、さらに沖縄での米兵による強姦事件などを見れば理解していただけるでしょう。今朝のテレビで東電は、原発で働く作業員の被曝線量が限度を超えれば解雇するという下請け会社の現状を、あずかり知らないことと発言していましたが、ここにも弱者切り捨ての構図が見られ、社会的公正の視点はありません。原発大国フランスを牽引するアレバ社の前COEロベルジョン女史が、「国益を背負うエリート層は金銭や地位という私欲を超え、重い責任を引き受ける勇気を求められます」と言っていました。実際にはほとんどそうはなりません。予算のぶんどり合戦をする官僚に見られる如く、エリートは先ずは自己保身をするものなのです。企業エリートが利益を追求するのは資本主義社会では当然ですが、要は限度や節度の問題です。IT企業の成金のように儲けた者勝ちというのではなく、社会還元などを通じて、社会的公正をはかるかどうかです。

尖閣問題と反日暴動の後、本通信を出すのは本当に難しいと感じています。その問題について意見を表明するのは、また後日にしたいと思います。

不具 2012年10月22日 森安孝夫

~~~~~

2012年8月14日配信分

森安通信 読者 各位

皆さんそれぞれに夏休み、もしくはお盆休みを過ごされていると思いますが、私の方は今夏は珍しくお盆の帰省も海外調査もなし（阪大時代の教え子の若手研究者たちは新疆ウイグル自治区の天山山脈中で現地調査中）で、ひたすら仕事をしています。もちろん昨日までは、オリンピックでの日本人選手の活躍も時々楽しんで見ていましたが、最後にあった「独島は我が領土」事件は残念でした。確かにどこの国においても学校での歴史教育は、国家（現政権）のイデオロギーを擦り込む装置であるわけですが、オリンピックに政治を持ち込まないよう指導するくらいは国際社会の最低の礼儀としてわきまえてもらいたい

ものです。政権が危うくなると、そういうタガが外れやすくなりますが、逆にそれ見たことかと日本政府の弱腰を指弾する勢力が威張った顔をするのも困ったものです。

先日の8月10日には、大阪ロータリークラブで卓話（ミニ講演）をしてきました。リーガロイヤルホテルが会場で、いかにも名士の集まりという感じでした。私も入会してはと誘われましたが、定年退職を機に会費を節約するため、10ほど入っていた学会を4つに減らした私の財力では、とても無理なことです。でもこのクラブからは、かつて私の教え子で博士の学位を取った留学生在が奨学金をいただいております。人はそれぞれの立ち位置で社会貢献していけばいいと思います。

近畿大学に通うようになった途端にたくさんの小説を読むようになったことは、以前にもお知らせしたとおりですが、ある評論家によれば、生きているのがせいっぱいの人には小説を書くことも読むこともできないそうで、それができるのは「余裕」のある人だけだそうです。ようやく私にも「余裕」ができて「文化人」の仲間入りをしたということでしょうか。

かつては東大全共闘のシンパ、つまり左寄りの学生だった私が、今では三島由紀夫の作品をおもしろがって読んでいます。彼は、今時の民族主義的で単純な右翼ではありませんね。もっとも、彼が自衛隊の市ヶ谷駐屯地に突撃して割腹自殺した事件は今思い出してもけっして同情できませんが、その行動原理はだんだん分かってきました。

良家のお坊ちゃん東大出身のエリート、女の性よりも男の性を愛したナルシストは、男らしくかっこよく死なねばならなかったのではないのでしょうか。彼は丸山明宏（今の美輪明宏）を愛していたそうですが、私は学生時代に新宿のディスコで丸山明宏を目の当たりにした時、その美しさに息をのんだことをよく覚えています。私は今に至るまで、あ那时的の彼（彼女）より美しい人を見たことがありません。美輪明宏は今まで生きながらえて、年齢に相応しい美のカリスマ（見方によっては仙人か妖怪）になって魅力を維持していますが、三島にはそういう生き方が絶対にできなかったのでしょうか。

それにしても、赤裸々に男性へのあこがれを綴った『仮面の告白』や、自分を見捨てて他の女に走った夫がチフスにかかって死ぬのを冷たく看取った後、夫の父（つまり舅）の愛人になりながら若い下男に心を奪われていく『愛の渇き』から、吉永小百合や山口百恵が演じた純情物語の古典のような『潮騒』ま

でのその驚くべき幅の広さと、新聞の三面記事から『金閣寺』や『宴のあと』を紡ぎ出した才能には呆れるばかりです。もっとも小説ですから、その主人公の心理描写が100パーセント当たっているはずはなく、その必要もないわけですが、『金閣寺』に火を付けた青年僧の心理には、出身地である我が故郷に近い日本海沿岸の、すなわち「裏日本」の暗い風土が影響しているかのような書き方には東京人の思い上がりを感じました。平清盛を出すまでもなく、つい150年前までは日本海側こそが「表日本」だったのであります。一方、『宴のあと』の主人公である東京の高級料亭の女将が、風采の上がらない老政治家に惚れていく物語は未だに私には謎ですので、どなたか臆長けた熟女の方に教えてもらいたいと思います。とはいえ、随所に見える奥深い和服の描写は、もはや芸者遊びさえできなくなった我々庶民にはじゅうぶん理解できませんでした。

大学生時代に同級生達の刺激を受けて三島由紀夫の戯曲『近代能楽集』を読んで感心した記憶はかすかに残っているのですが、やはり自分は歴史家であるらしく、これまで読んだ中でもっともすごいと思ったのは、戯曲である『サド侯爵夫人』と『わが友ヒットラー』が合冊されている新潮文庫に入っている7編の「自作解題」でした。明治維新後に日本に入ってきて独自の発展を遂げた「西洋演劇」（いわゆる新劇）なるものの本質が、ものの見事に凝縮されています。三島は「日本には、悪名高い翻訳劇演技というものがある」と皮肉りつつも、日本的な努力を積み重ねてきた結果、今や日本の翻訳劇演技が「世界に冠たる珍品的文化財になった」と述べて一定の理解を示すばかりか、自分もその流れに乗って新しい脚本作りに挑戦したわけですが、私には漢文を輸入した日本人が努力して「訓読」というとんでもない「珍品的文化財」を生み出した事実と二重写しになって見えました。異文化輸入もここまで来ればもはや物真似とは言えず、立派な天才であって、十分に誇っていいと思います。日本人の面目躍如です。民族主義も、こういう所で発揮する分には、誰にも迷惑をかけなくていいですね。

男性の象徴としてのサド侯爵の対局に貞淑なサド侯爵夫人を置き、上流階級に特権的な性風俗も織り交ぜながら、最後にどんでん返しを食らわせる『サド侯爵夫人』が、フランス革命時の左翼とか民衆の幼稚さを揶揄する一方、『わが友ヒットラー』は、その本性をなかなか見せない独裁者を見抜く眼を持つように観客に呼びかけたものでしょうか。現在の日本の政局と重ねて読むと、薄ら寒いものを感じます。最後のヒットラーの決め台詞、「そうです、政治は中

道を行かなければなりません。」で幕となります。極右と極左の両方を切り捨て「中道」のふりをして人気取りをする政治家に、無垢で幼稚な庶民はだまされてはいけないと警告しているかのようです。これこそ今、日本中の高校の演劇部で上演して欲しいと思います。でもそんなことを高校教員が勧めたりしたら、教育委員会とか「良識ある親」とかマスコミに何を言われるかわかりませんが、私が勝手に意見を言うくらいは許されるでしょう。そこが、日本がまだ本当に民主国家である証しなのです。こういう自由な発言を許さなくなるような人が政権を取ることを恐れています。

不具 2012年8月14日 森安孝夫

~~~~~

2012年7月16日配信分

森安通信 読者 各位

週末の2日間、東京に行っていました。土曜朝はひどい雨のため羽田空港が混み合っており、伊丹発の飛行機が30分以上も遅れたのに、着いてみれば東京は晴れ上がっており、その後、ものすごい猛暑になりました。いつもは東京から大阪に来る人が、大阪の夏は信じられないくらい暑いと言うのに、今回は逆に感じた次第です。

土曜は、帝国劇場とくつついている出光美術館を見に行きましたが、祇園祭や歌舞伎絵の金屏風などが展示されていてタイムリーでした。その夜は、先の森安通信で45年以上前の「幻の卒論」のことを紹介した加藤修弘先輩、ならびに朝倉泰子夫人と早稲田駅で待ち合わせ、3人で飲みました。本当に久しぶりで、愉快でした。加藤さんは例の第二次大戦中の性暴力被害女性たちの支援・調査活動のため、山西省にはもう40回近くも足を運んだそうです。私は2007年に拙著『シルクロードと唐帝国』を出版して、中国史における漢民族の比重を過大評価してはいけないと主張して以来、中国には行きにくくなりました。ウイグル族やチベット族やモンゴル族の自主性を純粋に歴史的に強調すると、虚構の「中華民族」を作り上げようとしている政府筋からは「分裂主義者」というレッテルを貼られ、公安の眼が光るようになるからです。でもまあ、言ってみれば、インド亡命中のダライラマと同じ身分になったと考えれば気が楽です。

とつくに還暦を越して、現地で何か新しい文物を発見してやろうという大きな「野望」は、今はもうないからです。

日曜は四谷で近畿大学の仕事でした。私の所属する近畿大学の国際人文科学研究所のスタッフには、東京在住の人の方が多いからです。近畿大学内部の人でさえ不思議がっていました。

以前に吉川英治『三国志』8巻を通読して、英雄の中でも善玉の劉備・玄德と悪役の曹操が、立場や見方によっては容易に逆転する危うさも感じた、と書きましたが、実際にはむしろ悪役の曹操の方に人間的魅力があるのではと言いたかったのです。そうしたら、昨日の新聞で、ある女性漫画家が同じようなことを言っていました。最近では、あの清朝の西太后の評価も変わってきたと思いますが、実は唐朝の則天武后（＝武則天）についても同じようなことが言えるのではないのでしょうか。私は、彼女は本当は楊貴妃よりも美人で、しかも頭の中身はそれと比較にならないほどの才媛だったのではないかと密かに思っています。謂わば東洋のクレオパトラです。私も学生時代は、則天武后や韋后のことを「武韋の女禍」と呼ぶ先行の研究書や概説書に倣って、則天武后は悪女だったと単純に信じていたのですが、それをそうではないと注意してくれたのも、先に加藤先輩でした。拙著『シルクロードと唐帝国』では、それなりに則天武后の評価を変えたつもりですが、今度は阪大の教え子の中田美絵さんが、それを一步も二歩も進める学術論文を発表してくれましたので、紹介しておきます：中田美絵「長安・洛陽における仏典翻訳と中央アジア出身者——武則天・中宗期を中心に——」，森部豊／橋寺知子編『アジアにおける文化システムの展開と交流』吹田，関西大学出版部，2012，pp. 93-127. この論文でも、唐帝国は決して漢民族中心の国家でないという我々の主張が、よりいっそう明らかになっています。なお、同書の編者である森部豊教授は、同書掲載分も含めて安史の乱やソグド人に関わる研究を3本立て続けに発表しています。やはり、唐帝国の見方が変わるでしょう。

ところで日曜（7月15日の）の朝、ホテルのロビーで、普段は決して読むことのない日本経済新聞に目を通したところ、東京駒込の東洋文庫のことが紹介されていました。その骨子は次のようなものです。

「本来は東洋学の専門研究者向け図書館であるが、一般向けのミュージアムを併設する施設に建て替えられた。旧三菱財閥の第3代当主、岩崎久弥が設立したもので、今も三菱系の企業30社が支援している。建て替えにあたって支援

企業から「幅広い人々に来てもらえる施設に」という要望があった。その根底には「東洋やアジアの歴史研究者が減っているという問題意識もある」と牧野主幹研究員は話す。より多くの人に幼いころから歴史資料に触れてもらえる場が必要だと考えて、今は11月4日まで「ア！教科書で見たゾ」という企画展が開催中である。高校の社会科教科書できっと見たことのある原本・原図が展示されているので、夏休みを利用して来場していただきたい。」

特に高校の先生方は、どうぞ誘い合って行ってみてください。火曜が休館です。東洋文庫は東大・東洋史における私の複数の恩師が精力を傾けて育ててきた研究機関であり、私自身もその客員研究員でありますので、9月には必ず行くつもりです。

不具 2012年7月16日

森安孝夫

~~~~~

2012年5月31日配信分

森安通信 読者 各位

前回（2012.5.19）の通信で紹介した加藤修弘「遼朝北面の支配機構について——著帳官と節度使を中心に——」（『九州大学東洋史論集』40, 2012, pp. 7-84）を読むのは、高校教員や一般読書人には難しいかも知れませんが、今は大阪・天王寺公園で、今後は東京で開催される「契丹」展を見てもらえれば、誰でも容易に契丹国＝遼朝が中国史よりもむしろ中央ユーラシア史（または内陸アジア史）の中に位置付けられことは理解できると思います。山川出版社の世界各国史シリーズに含まれる『中央ユーラシア史』（2000年）に「契丹」が入っていないことが、今さらながら不自然に感じられることでしょう。因みに、同じ大阪で開かれているツタンカーメン展が高額の入場料を取るにもかかわらず、かんじんの黄金マスクは来ていないという「まやかし」があるのに比べて、入場料の安い契丹展の方は何倍も価値があります。しかもマイナーゆえに客はがらがらでじっくり鑑賞できますから、社会科教員ならば是非とも行ってきてください。

本展は、金銀器や仏教文化に興味のお持ちの方には特に推奨できますが、私個人が注目したのは、イスラム世界から運ばれてきたガラス器とアラビア文字

銘のある金属製大盆でした。私はこれを、海路ではなく陸のシルクロード経由で、10～11世紀の遼帝国までやってきたものと考えます。つまり隣国の西ウイグル国もしくは西夏国経由で、たぶん当時のウイグル商人が持ち込んだものと考えます。もちろん、その原産地はさらにその向こう側のイスラム諸国（カラハン朝・サーマーン朝・ブワイフ朝・アッバース朝・セルジューク朝など）のどこかであり、そのうちのいくつかを経由した上で、西ウイグル国もしくは西夏国に届いたものでしょう。しかし、その中継貿易の商人となった当時のウイグル人はマニ教徒か仏教徒（少数のネストリウス派キリスト教徒も）であり、決してイスラム教徒ではなかったことに注意してください。

一方、高校世界史教科書として評価の高い帝国書院の『新詳世界史B』の71頁に「イスラーム=ネットワークと8世紀の世界」という地図があります。それを見るとムスリム商人（イスラム教徒の商人）が、ソグドのサマルカンドから東トルキスタンを越えて唐都・長安まで活動範囲を拡大していたことになっています。しかし、それは余りに「行き過ぎ」です。8世紀にサマルカンドと長安の間で活躍したのは突厥、次いでウイグルと結び付いてその後援を受けたソグド商人であり、当時のソグド商人はゾロアスター教徒・マニ教徒・仏教徒もしくはネストリウス派キリスト教徒のいずれかであって、決してイスラム教徒ではありません。10～11世紀のシルクロード東部世界を牛耳ったウイグル商人さえまだムスリム（イスラム教徒）ではないのですから、8世紀という早い段階でムスリム商人がシルクロード東部世界の中枢であるサマルカンド～長安を牛耳っていたはずはないのです。私は拙稿「内陸アジア史研究の潮流と世界史教育現場への提言」（『内陸アジア史研究』26, 2011/3, pp. 3-34；電子ファイル配信可）の26-27頁で、高校教科書における西欧中心主義・中華主義と並ぶイスラム中心主義に警鐘を鳴らしましたが、ここにもその一端が見えています。

ところで今、京都の龍谷ミュージアム（西本願寺前）で開催されている「仏教の来た道」展には、この数年間に日本で発見されたマニ教絵画も出品されています。これまでは吉田豊・京大教授の取り上げた大和文華館所蔵のマニ教説法図（旧称：六道図）と私が取り上げたマニ教のイエス像（旧称：虚空蔵菩薩像）が展示されていましたが、まもなくそれが「宇宙図（天地創造図）」と交代します。これらのマニ教絵画全般に関する吉田豊教授の講演が、今度の6月10日（日）にありますが、既に定員を超えて、申し込みは断ったそうです。残念ですが、できれば展示だけでも鑑賞しに来ていただければと思います。

実はこのマニ教「宇宙図（天地創造図）」の発見は、学界では世界的大発見といえるのですが、世間への新聞発表には紆余曲折がありました。本来なら吉田教授並びに私とコンタクトのあった朝日新聞の渡邊延志記者が担当するはずだったのですが、ある事情でそれが立ち消えとなった時、余りに惜しいので、阪大・東洋史出身で共同通信社の記者になっている大森圭一郎君にその情報を伝えたのです。その結果、毎日新聞や東京新聞ほかの地方紙に掲載されました。その際、大森君がマニ教と関係の深いグノーシス主義の研究者として名高い大貫隆教授にコメントを求めました。マニ教の宇宙には「十天八地」があると文献からは分かっていたのですが、その「十の天」の形状が、大貫教授が文献記載から予想した図とよく似ていたのです（大貫隆『グノーシスの神話』岩波人文書セレクション、2011年、284頁）。でも、欧米ではマニ教はたいへんな関心がありますが、日本ではそうではありませんから、現在は関西のある骨董商の所蔵である本図は、恐らくは海外（例えばメトロポリタンとかルーブル）に高額で売却されるのではないのでしょうか。そういう意味でも、一見の価値あるものです。

不具 2012年5月31日

森安孝夫

~~~~~

2012年5月19日配信分

森安通信 読者 各位

私が大阪大学から近畿大学に移動してから初めての森安通信です。新しい環境には比較的早く慣れましたが、阪大時代はドア to ドアで徒歩5分だった通勤が、3つの電車を乗り継いで往復3時間半あまりに変化したための疲れはおおいがたく、あれこれの症状が出てしまいました。でもまあ、今はそれなりに元気にやっています。所属は国際人文科学研究所ですが、実際には文芸学部で2コマ、同大学院で2コマを教えています。そのために火・水・木曜の3日間は近畿大学に行き、月曜は阪大で非常勤講師として古代トルコ語を教え、金曜は科研Cの仕事をするために、そして土曜は各種研究会参加のためにやはり阪大にやっています。従ってメアドは2つになりましたが、阪大時代のものもそのまま有効です。

長い通勤をするようになって、いいこともあります。阪大時代はほとんど小説を読む時間などありませんでしたが、今は近大への行き帰りの車中で小説が読めるようになりました。東京にいた十数年間は、通学の往復の車中でも勉強していましたが、とっくに還暦をすぎた今は、もうそういう気分にはなりません。4月初旬以来何冊か読破した後、今は例の吉川英治『三国志』の文庫本8冊までできました。もちろんストーリー展開は面白く、小説としては文句ないのですが、細部をみると、今の知的に退化したとしか思えないアメリカ映画の宇宙人襲来物にも似て、超人的な戦闘能力のオンパレードであり、いささか空しくなります。まさに「一将功成りて万骨枯る」の世界で、ゴミ芥のように切り捨てられていく下士官・雑兵（つまり庶民）の目から見た歴史ではなく、英雄とかエリートからみた歴史物語ですね。ちなみに貴族とか名門というのは、多くは人殺しに巧みだった人たちの後裔ですから、我ら庶民は、なにも羨ましがることはないのです。逆に、英雄の中でも善玉の劉備玄德と悪役の曹操が、立場や見方によっては容易に逆転する危うさも感じました。

確かに私自身が常日頃強調しているごとく、歴史は「勝てば官軍、負ければ賊軍」の世界ですから、軍事力を高めて領土拡大（国取り物語）、もしくは少なくとも領土保全に努めないと、周辺勢力から侵略を受けてしまうのかもしれませんが、でも国家の軍隊なり国家中枢の権力者が自分を犠牲にして庶民を保護した例など、これまでの世界史にあったのでしょうか。国家は庶民のために存在するものでなく、あくまで支配階級と軍隊のためにあることは、まさに北朝鮮が目前で世界中に示してくれている通りではないですか。日本国がなくなれば平和憲法も無意味になるのだから軍備増強は当たり前だという主張に対して、もう一度また悲惨な戦争をして夫や息子を死なせることを拒否し、理想的な（それ故に確かにあぶなっかしい）平和憲法を護持しようとする人々がいても、それを平和ボケと揶揄するのはあまりに不遜なのではないでしょうか。外国からのスパイ行動に対抗するための諜報機関は必要でしょうが、内向きの監視をする公安関係が強くなりすぎると、恐ろしいことになります。人間の闘争本能のぶつけ合いは、オリンピックなどのスポーツの世界だけにとどめたいものです。

さて、これ以下の内容の主な対象は東洋史研究者、特に中央ユーラシアの騎馬遊牧民族史研究者と、中国史の北朝・隋唐・五代・遼金元清朝の国家構造に興味を持つ方々です。実は昨日、私の長年の悲願がようやく実現したのです。

それは、私の東大・東洋史の先輩である加藤修弘氏がもう半世紀近く前に書いた「幻の卒論」を、遂に出版する事ができたのです。

加藤修弘「遼朝北面の支配機構について——著帳官と節度使を中心に——」『九州大学東洋史論集』40, 2012, pp. 7-84. (この前後に序文・補注・解題あり総103頁)

この卒論の主題は、契丹帝国（遼朝）の「著帳官（ちゃくちょうかん）」ですが、要するにネケル・ケシクのことです。ネケル・ケシクというのは、私と加藤さん、そしてもう一人の先輩である志茂（しも）碩敏氏の3人の共通の恩師である護（もり）雅夫先生が、中央ユーラシア史あるいは遊牧民族史を理解するためのキー概念として若い時分から注目してこられたものです。国家でも会社でも、成功の秘訣は人材にあるはずですが、ネケル・ケシクというのは遊牧民に特徴的な人材リクルートの方法だったのです。ネケルの元の意味は「友人・同僚」で、それが遊牧民集団の発展に従って部族・氏族の枠を越えた「腹心の部下」の意味になり、国家機構の枢要な位置を占める側近集団や譜代の大名になっていくのです。一方のケシクの方は、遊牧集団が国家の段階にまで発展した時点で「輪番」で君主に使える側近集団のことであり、ネケルとケシクは複雑に交叉します。

詳しいことは、なぜ九州大学なのかも含め出版にいたる経緯をまとめた私の序文に書いておきましたので、興味のある方は是非とも御覧ください。本来ならば、関係者には抜刷をお送りすべきなのですが、残念ながら本誌には抜刷がありません。ただ、九州大学の定期刊行物ですから、どの大学にもあるはずですので、少しだけ手間をかけていただき、コピーを取っていただければ幸いです。

将来の東大教授と囑望された加藤先輩が自ら大学を離れたのは、修士課程在学中に「東大闘争」、すなわち世に言う「東大紛争」が起こり、「全共闘」の中に身を置いたからです。以後は、高校の歴史教員として、定時制高校を皮切りに多様な学校現場を歴任するかたわら、戦後補償運動、特に中国の性暴力被害女性たちの支援・調査活動に関わってこられました。私が阪大に残った理由の1つに、加藤さんの影響がなかったとは言えません。その意味でも、節目の年に念願がかなったのは嬉しい限りです。

なお、この森安通信は、私が個人的にメアドを把握している方々に不定期に送信するものですが、最大の目的は世界史教育に関わる情報発信であり、その

ついでに雑感や近況の報告をしています。決して他人を「折伏」しようとするものではありませんので、御迷惑な場合はお知らせください。以後、一斉メアドから削除します。

不具 2012年5月19日

森安孝夫

~~~~~  
2012年3月5日配信分

各位

3ヶ月ぶりです今年初めての森安通信です。今月で私は大阪大学を定年退職しますが、4月からは近畿大学国際人文科学研究所の特任教授として赴任することになりました。実際の授業は、東大阪市にある文芸学部でおこないます。残念ながら阪大全体の経済事情から私の後任をすぐには採用できませんので、私が阪大の非常勤講師として古代トルコ語を教え続けますし、高大連携の大阪大学歴史教育研究会にもできる限り参加しますので、今後とも宜しく願いいたします。ありがたいことに、阪大の名誉教授としては、現役の時に使っていたメアドをそのまま維持できるようになりましたので、しばらくはこのままのメアドをお願いします。ただし、自宅ではメールをやりませんので、今後のメールチェックは、場合によっては2～3日に一度ということになる恐れがありますので、その点のみ御容赦ください。

さて、先日は大阪大学での最後の大きな仕事である入試の採点をしました。文学部では日本史・世界史・地理の選択ですが、外国語学部は世界史のみになってしまったので、出題側としては世界史を従来よりも易しくしたつもりです。幸い、駿台予備校さんの評価もそのようでした。しかしながら採点をして驚いたのは、一種のシルクロード商業指南書とも言うべき『エリュトゥラー海案内記』（ギリシア語）が書かれた頃（1世紀）に、現在のアフガニスタンから西北インドにかけて発展した王朝国家名を問うたところ、「クシャン朝（クシャーナ朝）という正解が34パーセントしかなく、半分以上がパルティアと誤答したことでした。どうやら、親切のつもりで本文に「イラン系」と書いたのが、かえって仇をなしたようでした。

さて、自分ではまだ定年という実感が湧かないのですが、雛祭りの日に大阪大学東洋史研究室のOB・院生・学生諸君が、私がかつてはバドミントンの練習帰りに週1回のペースで通っていた焼き肉屋さんの「一力」で、お別れ会をしてくれました。私が派手なセレモニーやパーティー付きの最終講義を固辞したので、その代わりです。教授会のメンバーには3月下旬の最後の懇親会で別れの挨拶をすることになっています。

ところで、最近の高校生の歴史離れに逆行して年配の方々の間でちょっとした歴史ブームが起こっているように見受けられますが、日本の政治の混迷とも絡んで、なにやら危なっかしいものを感じる次第です。確かに現中国政府がチベットやウイグルに対して行なっている圧政は、不条理なものであって許されるべきものではありません。しかしながら、中国にだって悪いところがたくさんあるだけでなく、南京事件を含め、戦前の日本軍が中国大陸で殺傷した人の数が十万・百万単位であるのに対して、毛沢東が新中国になってから殺した中国人同胞の数は千万単位であるのだから、日本はたいして悪くないというふうに話をもっていくのは、筋違いです。まして、それなりに名のある歴史学者が、時流に乗って中国や韓国などの歴史を否定したり、日本に都合のいい方向に解釈しようとするのは、いかに中国政府公認の歴史教科書に「ウソ」が多いとはいえ、やはり世界の歴史学界をリードしようとする日本の歴史学界が取るべき態度ではありません。

なお、この森安通信は当初から個人的に御縁のある方々だけへの配信だったのですが、いつのまにか私の知らないところでインターネットに出るようになってしまいました。そこで、今後は、私のホームページにアップしてもらうようにする予定です。もちろん自分ではできませんので、院生にやってもらいます。因みに、いわゆる「シルクロード史観論争」について、インターネット上では誤解が横行しているようですので、同じくホームページにリンクを張って、私の公式見解が読めるようにするつもりです。

まもなく東日本大震災から1年で、内外共に辛くてくらい世情ですが、個人が明るく楽しくならなければ、何も変わりません。桜が咲いたらみんなで盛大にお花見をして遊びましょう。

不具 2012年3月5日 森安孝夫

~~~~~

2011年12月16日配信分

森安通信 読者 各位

今回も久しぶりの森安通信です。今週初めの日曜日に九州大学で、かつてインターカレッジの学生・院生・純若手研究者を集めて活動していたアジア文化研究会（関東）と若手ユーラシア研究会（関西）の「合同慰霊祭」がありました。もうこれで、この40年近くにわたって日本の北・中央・西アジア史学界を刺激・牽引してきた我々世代も第一線から身を引こうという会合であり、懇親会や翌日の呼子へのエクスカッションも含めて、おおいに盛り上がりました。そして昨日の阪大文学部教授会では、同僚の荒川正晴教授が、私を名誉教授に推薦するための「功績調書」を披露してくれました。これでとうとう私も名誉教授の仲間入りです。

今年は3月11日の東日本大震災、北アフリカの政治的大変革、欧州ユーロ圏の経済危機、タイの大洪水を挙げるまでもなく、日本にとっても世界にとってもあまりにもいろいろなことがありました。かたや私個人としても、春の奈良・京都仏像巡り、夏のモンゴル調査旅行、初秋のパリ旅行、故郷である福井県の高校社会科教員を対象とする講演会、そして自分の複数の論文に加えて45年前に東大・東洋史の先輩・加藤修弘氏が書いた「幻の卒論」の出版、さらに私が代表として数年間活動した新シルクロード科研のメンバーによる学術書『ソグドからウイグルへ』（汲古書院、2011年12月15日刊）の出版など、いずれもこれまでとはひと味もふた味も違う濃密な体験をしました。おまけに、最終講義というのはその後に儀式があって、ああいうのはとても面はゆいので絶対にやらないと宣言していたところ、阪大文学部の名誉教授も参加する教員研究会で講演してほしいという要望があり、教授会メンバーへの御挨拶替わりと思って引き受けました。一方、カラオケ・クラブで新しく知り合った人たちとの楽しい交流もありました。40年以上続けているバドミントンの実力は衰えるばかりですが、歌は少しだけうまくなりました。

福井での講演と九州の学会では、羽田正・東大教授が出したばかりの岩波新書『新しい世界史へ——地球市民のための構想』にも言及しました。第一章「世界史の歴史をたどる」と第二章「いまの世界史のどこが問題か？」は、我々が進めてきた高大連携の「阪大史学の挑戦」の大会や大阪大学歴史教育研究会の月例会などで同僚の桃木至朗教授が常々言ってきたことと共通する点も多く、

阪大の事業に関われなかった全国の世界史教員には是非一読を薦めたいものです。でも第三章以降の「新しい世界史」の提唱は、故フレッチャー教授の影響もあるのか、いささか現実離れすぎているきらいがあります。「世界はひとつ」という視点の重要性は、私も阪大の講義で毎年言ってきたことで総論的には大賛成ですが、国別の世界史を乗り越えて、国の枠を越えた世界史を構想せねばならないという理想論には、即座には賛成できません。そんなことを言う前に、東大・東洋文化研究所所長の立場を生かして東大入試の世界史問題を変えて欲しいというのが私の率直な感想で、同じことは九州の学会に参加していた後輩の小松久男・東大教授（前・文学研究科長兼文学部長）にも言いました。今年6月の森安通信で、昨秋の内陸アジア史学会50周年記念シンポにおける基調講演を増補した拙稿「内陸アジア史研究の新潮流と世界史教育現場への提言」（『内陸アジア史研究』26, 2011, pp. 3-34）の電子版を添付しましたが、そこに引用した高校現場の先生方の生の声は、大学入試問題が変わらない限りユーロセントリズム（ヨーロッパ中心主義）に塗り固められた高校世界史教育は変えようがないという切実なものでした。それを阪大では変えたのですが、肝腎の東大が変えてくれなければ、我々の理想は実現できません。私は東大行きを拒否しましたが、東大教授になることを受け入れた人には、そういう責任があるのです。なお、桃木教授によりますと、羽田・新書版については来年4月に阪大歴史教育研究会特別例会で合評会をおこなうそうです。因みに上記の拙稿は、シルクロード史観論争における間野英二・京大名誉教授の私に対する批判への間接的な反批判にもなっています。

私は自分が編集・執筆した『ソグドからウイグルへ』の宣伝はしませんが、旧友の林俊雄・創価大学教授らのグループが出したばかりの本を紹介します。かなり最近までの高校世界史では、内陸アジアと東ヨーロッパにまたがる中央ユーラシア全域に亘って活動した騎馬遊牧民（遊牧騎馬民族）の文化の淵源は西方のスキタイであって、東方の匈奴などは西方から伝わったスキタイ文化を受け入れたものという、これまたユーロセントリズムが幅を利かせていましたが、今やその誤解は打破されつつあります。日本で、スキタイ文化（スキト・シベリア文化）の源流はむしろ東方にあると主張してきた草原考古研究会のメンバーが、その主張の根拠になるものとして注目する「鍔（ふく）」の総合的な研究書が出版されました：草原考古研究会（編）『鍔の研究——ユーラシア草原の祭器・什器——』（雄山閣，2011）。「鍔（ふく）」とは、中央ユーラシ

ア全域に亘って活動した騎馬遊牧民が使用した金属器であり、多くは青銅製で時に鉄製の、羊や牛などの家畜の肉を塩ゆでするために使用したやや大型の釜ないし大鍋のようなもので、恐らくはたくさんの人が集まって会食する儀式・宴会用、あるいは地域によっては日常的に用いられたものです。林俊雄教授が担当するフン型鍔は、その出土・分布状況により、匈奴フン同族論の物的証拠としても使われるものです。

ところで、やはり古くからの友人で、今やブータン国王夫妻の来日で有名になった国民総幸福度をずっと前から紹介してきた今枝由郎氏が、昨年のフレデリック・ルノワール『仏教と西洋の出会い』に続いて、同じ著者の『人類の宗教の歴史 9 大潮流の誕生・本質・将来』（ISBN978-4-7987-0120-2）を出版しました。以下は御本人からの公開用メールの内容です。

「マドンナの大ヒット曲の一つ *Like a Prayer*（祈りにも似て）は、*Life is a mystery, everyone must stand alone*「人生は神秘であり、誰しも一人で直面しなければならない」という歌詞で始まります。ルノワール氏は、人類の歴史の始まりから、現在に至るまで、そして将来に於いても、宗教が人類の歴史と不可分であり、その必須かつ中枢的要素である理由を、「科学知識の瞠目するような進歩にもかかわらず、人生は依然として謎である」から、と述べています。人生は実に不条理にして、不可解な謎であり神秘であることは、この先もけっして変わらないでしょう。その人生で、人（あるいは人間社会）は、いつも宗教に、その存在理由、意味、さらには救済を求めてきましたし、求め続けることでしょう。その足取り、そして今後の展望を、ただ個人的レベルに留まらず、鳥瞰的に眺めること、それは逆説的ですが、「誰しも一人で直面」せざるを得ない人生にとって、けっして無意味なことはなく、むしろ必要なことでしょう。その観点からすると、この本はまさに一読に値すると思います。」

今枝さんは、現代日本の仏教界、とりわけ葬式や法事を形式的に行なうだけになってしまった宗派を真っ向から批判しており、今後さらに注目されるでしょう。私自身も、戒名や葬式や本山納骨のみならず、場合によってはお墓さえ不要だと思っています。

今年10月1日にパリより帰国したときは、大阪の方が涼しくてびっくりしました。久しぶりに訪れたフランス国立図書館では、ライフワークであるウイグル手紙文書集成のため、敦煌出土のウイグル文書を再調査してきましたが、これまでのパリ訪問と違ったのは、ルーブルにも通い詰めたことでした。ルネサ

ンス以降の絵画をじっくり見ましたが、こんなのは我が人生でも初めてです。最後にはオリエント・エジプト部門にも行きました。また、エッフェル塔のすぐ近くにある日本文化会館で開催されていた浮世絵八人衆の展覧会も見てきました。葛飾北斎の富嶽三十六景を6～7点まとめて見たのも初めてで、他に広重・豊国・写楽・喜多川歌麿などもたくさん見ることができました。近代ヨーロッパ文化に於けるシノワズリ（支那趣味）・ジャポニスム（日本趣味）の影響は、これまでの想像以上だということを確認できた旅でもありました。マイセン・KPM・セーブル・ジノリ・フローラダニカなど西洋の有名な磁器はすべて中国の磁器と日本の有田焼などを真似したものに過ぎません。また、ちょうど9月にルーブルで始まっていた特別展は、康熙帝・雍正帝・乾隆帝時代の清朝とルイ14世以下のブルボン朝とをいろいろな面（例えば紫禁城とルーブル宮）から比較して見せる企画であり、東洋の中国と西洋のフランスが、相互に影響し合ったことを強調する意図で構成されていました。もちろん、フランス人の企画者たちは、その中でも西欧で文化的に発展していたフランスが上だと言いたいわけですが、私の目からは当時の世界最高の富と国力を誇った満洲人統治下の中国のすごさがきわだって見えました。

NHKドラマでも江姫のことにはコメントしませんが、司馬遼太郎原作の『坂の上の雲』の放映には、昨年分よりかなり危ういものを感じています。ちょうど別の局では映画「二百三高地」を放映していましたが、どちらにもお国のために死ぬことを美德とする風潮への回帰が見られます。司馬遼太郎のソフトな語り口もあって、いわゆる司馬史観は一般民衆に受け入れられやすいのですが、マスメディアはもっと慎重であるべきです。それは大阪知事から市長に転身した人物への過度の期待感をあおる報道にも言えることです。選挙結果を金科玉条に、「民意」を振りかざして好き放題を始めたら恐ろしいことになります。でも右傾化ばかりを非難しては不公平ですから、濱嘉之（はま・よしゆき）『警視庁情報官 ハニートラップ』（講談社文庫、2011年4月）も紹介しておきます。これは、スパイ天国日本への警鐘を鳴らすもので、小説とはいえ「さもありません」と感じさせる内容でした。その「解説」を書いた姉崎明二・共同通信社政治部次長は、かつてマスコミにたたかれた外務省の佐藤優氏が、本当は日本の国益を守る国土だったのだということを述べ、諜報活動の重要性を指摘しています。ただし、日本に対する中国側の諜報活動の活発さを喧伝しすぎると、日本の高校生の中で中国嫌いが増大し、大学生の東洋史離れが進行しているとい

う憂うべき状況に歯止めがかかりません。日本経済もアメリカ経済ももはや中国抜きで成り立たないという現実を踏まえ、且つ羽田正教授が強調する「世界はひとつ」という視点を拡大しつつ、民衆だけを苦しめる戦争だけは絶対に起こしてはならないという信念のもと、高校世界史教員の皆様には、日本文化の大きな源流である中国の歴史と文化を冷静に学ぶ生徒を産み出して欲しいと切望する次第です。

来年が今年より少しでもよい年になりますよう、祈っております。

不具 2011年12月16日 森安孝夫

~~~~~

2011年8月20日発信の「狭義の森安通信」

元・新シルクロード科研班の皆さん

阪大東洋史・内陸アジア組 諸君

ほか関連研究者・高校教員 諸氏

学問的に嬉しい知らせがいくつか届きました。まず、阪大東洋史からベルリンに留学した笠井幸代さんの博士論文が *Berliner Turfantexte* シリーズの1冊として2008年に出版されましたが、その書 *Die uigurischen buddhistischen Kolophone* が、ラウト・レーンボルン両教授の推薦により、本年のゲッティンゲンアカデミーの学術賞を受賞したそうです。

それから荒川科研の一環である武内紹人班のメンバーとして中国調査（新疆、ミラン、敦煌）から帰国した坂尻彰宏君が、白玉冬君（中国から阪大東洋史への留学経験者、現内蒙古大学講師）の抜刷3篇を持参してくれました。1つは『東洋学報』に掲載された「九姓タタル国」の論文です。モンゴル民族によるモンゴル高原支配の歴史について画期的業績となった前田直典の「九族韃靼」の論文を、一歩も二歩も前進させる内容です。

次に山下将司君（日本女子大学准教授）の最新論文「唐のテュルク人蕃兵」（『歴史学研究』881, 2011-7, pp. 1-11）の抜刷が届きました。題名は今ひとつですが、内容は期待通りでした。もちろん、石見清裕・早大教授をはじめ我が新シルクロード科研メンバーには既に共通認識になりつつある内容ですが、見事にまとまっているので、今後は唐代史研究者のみならず、中国史・内陸アジア

史双方の研究者にしばしば引用される重要論文となることでしょう。要点は、唐帝国の軍事力の中核は、決して府兵制などで集められた兵士（大部分は農民兵）の軍団などではなく、羈縻州にいた遊牧民の軍団にあるということです。かつて杉山正明氏の「拓跋国家」論によって高校世界史の唐朝理解が大きな地殻変動を蒙ったわけですが、それと同じ程度の衝撃を今回の山下論文は与えることになるでしょう。

白論文・山下論文に共通しているのは、漢文史料に載っていないからそういう事実や実態がないとは言えないことを、うまく実証して見せた点です。零細な史料から大きな歴史像を復原するには、大きな歴史の流れを捉える史観なりセンスが大事ということです。

最後は本日、吉田豊・京大教授から送ってもらった畢波・シムズウイリアムス共著の論文（アメリカの JAOS に掲載）です。これまでも西域南道のコータン地方からソグド語文書の出土はありましたが、いずれも断簡零墨でした。ところが遂に、ある程度まとまって、8～9世紀に紀年づけられるソグド語の商業文書（棉布販売などの帳簿）と手紙がコータンから出土したというわけです。それは十分に予想されていたわけですが、やはり本当に発見された意義はきわめて大きいのです。

私は来週火曜（22日）から30日まで、荒川正晴・吉田豊両教授と共に、久方ぶりにモンゴルへ行ってきます。昨年、妹尾達彦・中大教授（阪大出身）からいただいたカラバルガスン遺跡の写真に刺激を受けた結果です。私が責任者となったかつてのピチェース科研の時にカラバルガスン遺跡・碑文はさんざん調査したのですが、新たにドイツ・モンゴル合同調査隊がカラバルガスン遺跡を発掘を始めたのです。もしかしたら、遂にかつての東ウイグル帝国の首都から、マニ教寺院遺跡が発見されるかも知れません。

以上 森安孝夫

~~~~~

2011年6月18日送信分

添付ファイル1件あり

各位

本日の大阪大学歴史教育研究会には、私の40年来の世界史教育の同志とも言うべき小林克則君が来てくれて、発表してくれました。彼とは、東大文指という東大生が運営していた受験用添削機構で一緒にやっていた時からの仲です。彼も3年前に神奈川県の高校教員を定年になり、今は専修大学の非常勤講師であり、私も今年でいよいよ阪大の定年を迎えます。こういうタイミングで阪大の研究会に来てくれたのも、なにかの因縁でしょうか。ましてや、まさに偶然ながら、本日の研究会にはNHKの「クローズアップ現代」の取材が入りました。これは現在の阪大側の代表である桃木至朗教授の関係のようです。思い起こせば、私が阪大・文学部の入試委員長をしていたとき、センター試験の地歴にとんでもない点数差が出て、それを調整すべきか否かで世論が沸騰した時、私が「クローズアップ現代」に出て、センター入試の不備を訴えるという話があったのですが、上からの指示でつぶされたことがありました。私は東大全共闘以来、いつも権威に刃向かってきたようです。損ばかりしてきましたが、それでも、途中でぶれなかった点だけは自己評価していいのではないかと考えています。

本日の小林君の発表は、いわゆるトップレベルの大学ではないところで、高校世界史教員を目指す学生たちに、どのような自覚を持って歴史を教えるかという心構えを説くもので、具体的なシラバスの内容まで紹介してくれて、たいへんに有意義なものでした。特に高校世界史Aのように近代史からやればよいという考え方には与せず、どんなに短くてもまずは古代史から教えるべきという見方には、我が意を得たりの感がありました。もちろん、古代・中世に重点を置きすぎて近現代史軽視というのは、絶対に駄目です。歴史はロマンを教えるものではありませんから。

私は27年間、大阪大学で研究と教育をしてきたこと、その間に東大に戻るチャンスがあったのも断ったことにはいささかの後悔もありますが、先週の阪大・総長選挙に負けてしまったことだけは心残りです。もちろん私が総長候補になったわけではなく、友人の元医学部長を推して負けたのですが、もしこの総長選挙に勝利したら、阪大における世界史教育をかなりドラスティックに変えることも可能ではないかと目論んでいたからです。私が同僚の桃木至朗教授と語らって開始した高大連携の世界史教育改革は、今や全国にかなりの影響力を持つようになりましたが、大学の教養課程における世界史教育、つまり1/2年生だけでなく3/4年生までも含む高度教養教育、さらには社会人

となり、それなりに国際的・国内的に責任ある立場になった社会人に対する世界史リカレント教育が、これからは必ずや求められることでしょう。そういう本当の意味でグローバル時代に答えられる人材を育成しなければ、これからの日本はたちゆかないからです。そこまで踏み込んだプランを考えていたのですが、負けてしまえば全ては烏有に帰します。残念ですが、これも運命でしょう。私の阪大における役割は終わりました。

これからの世界史教育において、内陸アジア史、ないしは中央ユーラシア史をどうアピールしていくかについては、昨秋の内陸アジア史学会50周年記念シンプオの基調講演で大枠を述べました。その時の発表原稿の増補版が、『内陸アジア史研究』26号に掲載されました。ここにその抜刷にかわる電子版を添付しますので、御覧いただければ幸いです。

今夏は阪大の歴史教育研究会関係の行事はありませんので、私は荒川正晴教授代表の科研費で久しぶりにモンゴルのカラバルガスン遺跡見学に行ってきます。ドイツ隊が発掘しているのですが、もしかしたら、遂にマニ教寺院が出現するのではないかという期待もあります。それは8月ですが、その後、9月にはパリの国立図書館にウイグル手紙文書の再調査に行きます。

不具 2011年6月18日 森安孝夫

~~~~~

2011年5月31日配信分

森安通信 読者 各位

例年は5月には終わる私の花粉症が、今年はいつまでも続くなあと思っていたら、今日まではまだ5月でした。関西でははや梅雨入りし、台風まで来てしまったので、もう6月の気分だったのです。皆さんのところでは、いかがでしょうか。

ところで現在、6月19日（日）まで、奈良の大和文華館で、モンゴル時代の中国・江南地方で製作されたマニ教絵画の展覧会が開催されています。一時は仏教・キリスト教と競うほどの影響力を持ちながらもこの世から消えてしまったマニ教には、布教のためにたくさんの絵画を用いたことが文献からはよく知られていますが、絵画そのものはほとんど地上から姿を消していたのです。わず

かに100年ほど前の中央アジア探検によって発見された断片類だけが、原型をしのぶよすがでした。

ところがこの数年間に、しかもこの日本において、完全な姿のマニ教絵画がいくつも発見されたのです。いずれも江南仏画とか寧波仏画と称される範疇に属するものです。マニ教は日本では認知度が極めて低いのですが、キリスト教にとっては最大のライバルでしたから、欧米での関心は高く、発見のニュースを聞いてすぐニューヨークのメトロポリタン・ミュージアムが反応して、すでにそちらの展覧会には日本から2点が出品されました。1点は大和文華館所蔵のマニ教説法図（個人救済）、もう1点は山梨県栖雲寺所蔵のマニ教のイエス像です。

今回の展覧会では、この2点に加えて、昨年秋に新聞紙上を賑わした新発見のマニ教宇宙図（天地創造図）ほか、現時点で判明しているマニ教絹絵7点が公開されています。イエス像については私とアメリカのグラーチ女史が競って論文を書き、今やそれが景教のイエスではなくマニ教のイエス像であることは学界で認知されていますが、私自身本物を見るのは今回が初めてです。ましてや初公開の宇宙図は関西の画商の個人蔵ですから、今度いつ実物が公開されるか分からないどころか、海外に売られてしまう恐れさえ高いのです。もし心ある財界人が大金を拠出していただければ、この人類文化史上の宝は日本に残りますが、私は今回が見納めと覚悟しています。これほどに価値の高い展覧会ですので、1人でも多くの方に大和文華館に足を運ぶことをお勧めいたします。

なお、今度の日曜（6月5日）には、大和文華館で、マニ教絵画をテーマとする公開講演会が開催されます。特に長年の研究仲間である吉田豊・京都大学教授の講演は、内容の濃いものです。私自身はこれには参加せず、翌6日（月）の休館日に行われる専門家だけのワークショップに参加します。

以上のようなモンゴル時代製作のマニ教絹絵についてもっと知りたい方は、吉田豊論文を含む『大和文華』119号・121号を御覧下さい。一方、これらの歴史的背景に興味のある方は、お知らせいただければ、森安孝夫「日本に現存するマニ教絵画の発見とその歴史的背景」（『内陸アジア史研究』25, 2010, pp. 1-29）の電子版をお送りいたします。

以上            2011年5月31日            森安孝夫

~~~~~

2011年4月12日配信分

各位

東大・東洋史で同じ護雅夫門下の先輩であり、お茶大教授・東大教授として日本のイスラム学を牽引してこられ、高校世界史の教科書も執筆された佐藤次高・早稲田大学教授が、昨日、お亡くなりになりました。享年68ですから、早すぎる御逝去です。御冥福をお祈りします。しかし、この桜の季節に行かれるなんて、いかにも華やかな人生を歩まれた佐藤さんらしいと思います。

学士院賞受賞者である佐藤さんは(財)東洋文庫の研究部長でもありました。東洋文庫は岩崎久弥以来、三菱グループのバックアップを受けて基礎を築いた日本の東洋学のメッカです。三菱商事から現在の理事長が来られる前まで東洋文庫の理事長として一緒にお仕事をされてきた斯波義信先生(阪大名誉教授・学士院会員)によりますと、佐藤さんは「1月半ばに中東から帰国してから歩行に不自由があり、2月末から2・3度入院治療を繰り返していました。昨年は学士院賞の受賞行事の100周年にあたり、佐藤さんが東洋学からインタビューの対象に選ばれて、小生佐藤さんを担当したばかりです。」ということでした。

なお、『東方学』次号に数氏による追悼文が掲載されるはずです。

不具 森安孝夫

~~~~~

2011年2月28日配信分

添付ファイル2件あり

「森安通信：付録1」「付録2：森安基調講演」

世界史教育・研究関係者 各位

マスコミ・出版関係者 各位

現代中国に関心のある皆様

約3ヶ月ぶりの森安通信です。今冬、福井県は久方ぶりの大雪でしたが、私の故郷は海岸に近い旧三国町(今は坂井市)ですので、北陸本線で特急列車が雪に埋もれた日でさえ、ほとんど影響はなかったようです。私が中学生だった昭和38年豪雪の時は、三国町でも、道路は屋根から降ろした雪で完全に埋まり、

2階の窓から出入りしたものでした。大阪に来て4半世紀を超えますが、こちらでは今冬が一番寒かったように感じました。

それでも数日前からは急に暖かくなり、例年、入試と採点は寒い時期という印象しかないのに、今年は違いました。昨日で、無事に阪大文学部と外国語学部の地歴科の採点作業が終了して、ほっとしているところです。他大学と違って阪大では土・日でも採点業務をやります。丸2日かかりましたが、来年度から外国語学部では地歴科のうち選択できるのは世界史だけになるので、もっと大変になりそうです。ただし、外国語学部の受験生が日本史や地理を選択できなくなるのは、大学の世界史教員にとっても高校現場にとっても決してプラスではないと考え、一刻も早く元に戻すよう当事者側にお勧めしております。私が直接関わるのは世界史だけですが、今年もあれこれ頑張った出題だったと思いますので、今後の高校・予備校での定期考査や模試などで、参考にさせていただければ幸いです。

入試では過去問と同じものを出题してはいけないという風潮がありますが、文章題の場合は、過去20年間に出题された文章題を全てこなしてくれたなら十分なのではないでしょうか。そこに各大学のアドミッション＝ポリシーが含まれているのですから。文章題の答えを正しく暗記しているなら、もう立派なものです。それを基礎にして、いくらでも応用できるでしょう。漢文の素読と同じです。困るのは、応用力のない硬直した頭の方です。1つは、私がこれまでやってきたような活動（この通信も含む）を、「入試の公正さ」を損なうという建前で阻止、あるいは罰しようとする大学側の人。実際には、そういう原則主義は東大を利するだけなのです。東大以外は何らかのアクションを起こさなければ、東大を越えることはできません。もう1つは、高校・予備校側の教員や生徒。従来もいろいろありましたが、例えば今回驚愕したのは次のような事例です。これまで地歴の入試問題では、7大学（旧七帝）の中で阪大だけが縦書きとしていたのを、高校・予備校側の意向を汲んで今年初めて横書きにしたところ、問題冊子が横書きであり、解答用紙もそうなっているにもかかわらず、答えは縦書きですか横書きですかと質問した受験生がおり、さらに実際に縦書きで提出した受験生がいたのです。阪大対策の模擬試験がそうになっていたからのようなのですが、あまりの頭の固さに呆れかえってしまいました。もう1つは、解答に使うべき術語の中に「ブルガール人（ブルガリア人）」とあり、当然ながら「ブルガール人」か「ブルガリア人」のどちらかを使えばいいのですが、

「ブルガール人（ブルガリア人）」と書かねばならないのですかという質問が入試本部にまで上がってきました。そんなことさえ自分で判断できない者は阪大に入って欲しくないと言ってやりたかったのですが、そうもいかず、「自分で判断してください」と無難な回答をしておきました。

今年はセンター入試でソグド人などが出題され、阪大・世界史でトルコ系諸民族の大移動が取り上げられたのはまったくの偶然ですが、中央ユーラシアの重要性を訴えるよい機会になったと思います。また、いくら言っても高校生が混同する言語と文字の区別については、去年に引き続いた出題になっていますが、それは高校教員の皆様に、今後の教え方に工夫を御願いたいという意図があつてのことです。カラハン朝・セルジューク朝やオスマン朝の支配層であつたトルコ人たちはアラビア文字を使うようになりましたが、言語までアラビア語に変わったわけではありません。ケマル＝アタテュルクの文字改革を「アラビア語からローマ字への変更」と答えた生徒が少なからずいて、相変わらず言語と文字の区別が付いていない状況を見ると、昨年の出題の意図が生かされなかつたのかと悲しくなります。

一方、高校世界史における西欧中心史観と中華主義とイスラム中心主義を私はこれまで機会ある毎に批判してきており、昨年秋に早稲田大学で開催された内陸アジア史学会50周年記念公開シンポジウムにおける私の基調講演もその趣旨に添っていたことは、先の森安通信でお知らせしました。その時の私の基調講演とほかの発表に対し、いつも勉強熱心な桐生高校の安達淳教諭が、レポートを提出してくださいました。我々も大変勉強になると思いますので、御本人の許可を得て紹介いたします。添付ファイル「森安通信：付録1」を御覧下さい。ちなみに、私の基調講演の大幅な増補修正版がまもなく『内陸アジア史研究』第26号に掲載されますので、その主要部分を別ファイル「付録2」として添付します。安達レポートを御覧になるときの便宜も考えてのことです。なお、本文中には、大阪大学歴史教育研究会に参加された高校教員数名の方の御意見を、御本人の諒解を得て引用させていただきました。

私の阪大の教養課程の講義に関しては、半期分終了後、成績評価の一環として拙著『シルクロードと唐帝国』に対する書評的レポートを持参させた面接を行なうのですが、先日、後期分の面接をしました。その中に、興味深いレポートが二つありましたので、そこから引用して紹介いたします。学生本人からの許可は取っております。どうして高校で、これほど重要な中央ユーラシア史の

ことを教えてくれなかったのだ、という抗議の声でもあります。これも、安達教諭のレポートと同じ添付ファイルに入れます。

ところで、阪大・東洋史ではこの10年間、私が最長老でしたが、その前は濱島敦俊教授でした。この方は、明代史では世界的な方で、学士院賞に値するような大きな仕事をいくつもされています。阪大定年後は、台湾に招聘され、むこうの複数の大学で中国語を使って講義やゼミをなさっています。中国本土での現地調査も頻繁に行なって来られました。その濱島先生と先日飲む機会があったのですが、今の阪大は中央ユーラシア史と東南アジア史ばかりが目立っていて、中国史がないかのようで不満であると叱られました。そこで、それはたまたま濱島先生が退任された後に、私と桃木至朗教授が中心となって高大連携の歴史教育の研修会や研究会を開催してきたからであって、中国史の先生方がそこに参加されることを拒否したつもりはありませんとお答えしました。今、研究科長をしている後輩の片山剛教授は、アドミニストレーションに忙殺されて、それどころではなかったからです。確かにこれまで私と桃木教授は、西欧中心史観と中華主義をことあるごとに厳しく非難してきました。しかし、それは中国史の重要性を認めないこととイコールではありません。中国史が大事であることは、世界史にとってのみならず、我々日本人にとっては当たり前なのです。ですから、私の中国史批判の言動は全て、我が国の中国史研究の伝統が盤石であるという前提に立つものでした。ところが、濱島先生によれば、昨今の日中関係の影響もあって、今や中国史をやりたいという若者が減少しており、このままではいけないとの危機意識をお持ちなのだそうです。先生は、これからは日本に本拠を移すので、要請があればいつでもどこでも、中国史の魅力を話す講演会や研修会を喜んで引き受けるとおっしゃっておられます。阪大でまた夏の研究会を開くときは当然ながら呼びますが、各地方の教員研修会とか高校での講演会などにお声をかけていただければ幸いです。往復の交通費と薄謝だけで結構だそうです。話は抜群にお上手です。ただし、私もそうですが、東大全共闘を支持していた若い時よりはだんだん右寄りになってきております。

濱島先生の近年の最大の業績は、中国史の一方の主人公である漢民族の基層社会にあるのは、決して公的な儒教などではなく、実はシャーマニズムであることを、世界で初めて明らかにしたことでしょう。私もきちんとした論証抜きながら、道教などというのは、インドから体系的宗教である仏教が中国に伝来した後に、シャーマニズムをはじめとする土俗的宗教が対抗してできあがった

もの、神道というのは仏教が日本に伝来した後にやはり日本にあったシャーマニズムなどが習合してできあがったものと考えていましたから、阪大時代の濱島先生から最初にお話を伺った時は、やはりそうかと首肯した記憶があります。しかし、そうすると、今年の阪大の世界史問題で、秦漢時代に始まってその後長らく「中華帝国」を支える「仕組み」とか根本原理になったものの1つとして「儒家」を提示したことに、大きな疑問を抱かれる方がおられるでしょう。しかしながら、そこに矛盾はないのです。中華帝国を支えた官僚や士大夫たちの「公的な」規範はやはり「儒家」の思想だったのであり、知識人が書いた漢籍史料の中にシャーマニズムの痕跡はほとんど残らなかった、あるいは当初は残っていても編纂過程でほとんど抹消されたのです。濱島先生はそれをえぐり出し、その裏付けを現代中国におけるフィールドワークから集めたわけです。

因みに、「儒家」の思想をある方々は「儒教」といい、別の方々は「儒学」というのはどうしてか御存知ですか。それは要するに、「儒家」の思想を宗教とみなすかどうかに関わっているのです。私が直接質問した中国学の大家のうち、ある方は儒教はもちろん宗教であると回答され、別の方は儒教を宗教というなんて冗談としか思えない、儒教が宗教ならマルクス主義や毛沢東思想も宗教だ、とおっしゃいました。儒教という認識の強い人は、儒教は前漢の武帝の時代に董仲舒の献策で「国教」になったと言い、儒学という認識の強い人は、武帝の時に「官学」になったというのです。

いずれにせよ、中国においては古代から近現代まで、儒家の思想とシャーマニズムは、共存してきたのです。中国というのは、今も昔も「建前」と「本音」が同居するところですから。それを理解しないと、我々は中国人と平和的につきあうことが難しくなるのです。将来の日中外交や経済交流に携わる若者たちを送り出す高校において、世界史教員の責任は実に重いのです。グローバル時代とかで幅をきかす英語の教員に日陰者扱いされないように、自己主張を御願います。次第です。頑張ってください。

以上            2011年2月28日            森安孝夫

~~~~~

2010年11月30日配信分

昨日の森安通信でニューヨークのメトロポリタン博物館で開催中の大展覧会「The World of Khubilai Khan」の電子カタログの案内をしましたが、さっそくに幾人もの方々から反応がありました。異口同音にそのすごさと便利さを激賞していますが、高級美術雑誌『國華』編集担当の大塚芳正氏（東大・駒場の同級生）からは、「画像へのアクセスが容易になると、日本では作品所蔵先の社寺によっては掲載許可条件を厳しくするところが増えてきそうな気がします」というコメントがありました。確かに私もこんなに便利になっていいのかと思ったのですが、高校教員の皆様方には、この際、せっかくですからどんどん画像をダウンロードしておいて、授業に活用されることをお勧めします。私のようなアナログ人間でも、簡単にできました。

まず昨日もお知らせしたアドレス

(http://www.metmuseum.org/special/khubilai-khan.aspx?&HomePageLink=special_c2b)

にアクセスすれば、あっという間に「The World of Khubilai Khan Chinese Art in the Yuan Dynasty」というトップページが出ます。その画面の右側に、Daily Life; Religious Life; Paintings and Calligraphy; Decorative Arts and Textiles; Making Connections という5項目の見出しがありますから、そのどれかをクリックします。例えば Daily Life をクリックすると、その項目の展示品の小さい画像が20個くらい現れます。ただしそれは4頁分の第1頁のみですから、右端の>印をクリックすると、第2～4頁に進みます。つまり Daily Life という項目だけで、70～80件くらいの出品があるということです。（左端の<印をクリックすれば、もとに戻ります。）第1頁にはクビライ汗の肖像と、ボクタクというモンゴル特有の背の高い帽子をかぶった皇后の肖像、車に乗せたゲル（テント）とラクダと馬のミニチュア、第4頁にはモンゴルの駅伝に使ったパイザ（円牌と長方形の牌子）などがあります。そのどれかをクリックすると、英文解説付きのやや大きな画像になり、その画像をさらにクリックするともっと大きな画像になります。そして右下に Download Full Size という指示が出ますので、そこをクリックするとさらに大きな画像になります。そして、カーソルを画像上にもっていき、ワン・クリックしたままデスクトップ上にドラッグしていけば、pdfファイルのできあがりです。これで、どこにでも持参できますし、メール送信もできます。また、画像によって条件が違いますが、Download Full Size という指示の前か後のいずれかの段階で拡大機能を使えば、さらなる拡大ができま

す。特に織物（綾，錦，刻糸，金襴，ナシシらしいメタリック金糸織物，ランパ，その他）は相当に細部まで鮮明に見られます。ただし，2つのマニ教絹絵だけは，なぜか解像度が高くありませんでした。

話は全く変わりますが，以前に紹介した通り，「四大文明」の命名者が江上波夫であつたらしいと金沢大学の村井教授が論じました。ところがしばらく前に京都大学の杉山正明教授と雑談していたら，彼はかつて江上波夫先生と面談した時に，直接御本人からそうであると伺ったそうです。

昨日の通信に1つ訂正があります。紹介した青木健『マニ教』は東方書店発行ではなく，講談社選書メチエであるという注意が，三重県立南伊勢高等学校の新田康二教諭からありました。実は本書を私の研究室に持ってきてくれたのが東方書店の人だった上に，東方選書と講談社選書メチエの体裁が似ているためと，昨日は本書を自宅に置いてきていて確認できなかつたので，誤った次第です。

以上 2010年11月30日 森安孝夫

~~~~~

2010年11月29日配信分

各位

昨日，京都の紅葉を見ようと，三十三間堂で1001体の千手千眼観音様に久しぶりの対面をした後，タクシーで將軍塚に上り，京都の夕暮れを見た後，南禅寺から永観堂に回ったのですが，あまりの行列のすごさに圧倒されて，すごすごと退散しました。報道ステーションでライトアップの様子が放映された直後だったので，いやな予感があったのですが，これほどとは思いませんでした。外からほんのちょっと，ライトアップされた美しい紅葉を垣間見ただけで，後は，当初の予定通り，先斗町の知り合いの高級レストランに向かいました。ところが京都中が紅葉見物で渋滞ゆえノロノロ運転で，たまたま知恩院前を通りかかったら，そこでもライトアップしていたので急遽下車し，見物することにしました。初めて見る国宝の山門は素晴らしく，庭園の紅葉もかなりきれいでしたので，それなりに満足した次第です。その後の食事が素晴らしかったのは，言うまでもありません。

さて本題です。現在、アメリカのメトロポリタン美術館で「クビライ汗の世界」と題する展覧会をやっているそうですが、それを見た中見立夫・東京外大教授から以下のようなメールが届きました。指示されたところになにげなくアクセスしてみたのですが、日本から出品中の例の2つのマニ教絹絵（大和文華館所蔵のマニ僧説教図、栖雲寺所蔵のマニ教イエス像）のみならず、たくさんの文物が簡単に見られ、全てダウンロードできるのですね。これなら、ニューヨークまで行かなくても概要は分かりますし、カタログを買わなくても済みそうです。私のようなアナログ人間は、これまでこういうアクセスをしたことがなかったので、その便利さに驚きました。興味のある方は、やってみてください。

ちなみに、その電子カタログでは栖雲寺所蔵のイエス像を景教のものとして見なす説は排斥され、私の主張通りにマニ教のものとしています。一方、つい先日出版されたばかりの青木健『マニ教』（東方書店）という概説書には、日本のマニ教研究の水準は高いと評価し、吉田豊・京大教授と私の論著を引用していますが、例のマニ教絹絵の製作地であった江南（南中国）へのマニ教の伝播ルートは未だに不明としています。つまり、その点を明確にして今や欧米の学界でも受け入れられている私の説を見落としています。それは日本語では、「ウイグル文書筋記(その二)』『内陸アジア言語の研究』5(1989), 1990, pp. 69-89 に、英語では1997年にベルリンの第4回国際マニ教学会で発表し、2000年にその報告集に収載（On the Uighur chxshapt ay and the Spreading of Manichaeism into South China. In: R. E. Emmerick / W. Sundermann / P. Zieme (eds.), *Studia Manichaica*, Berlin: Akademie Verlag, 2000, pp. 430-440）されたもので、仮にもマニ教研究者を名乗るならば知っていて当然のもので、著者は東大の出身だそうですが、ちょっとがっかりしました。

なお、「森安通信」の配信先は、毎回、細かく選んでいるわけではありません。私のパソコンに構築してある一斉メアドは、高校社会科教員関係10組程度、中央ユーラシア学研究会関係10組程度、モンゴル時代史研究者1組、藤島高校の同級生+東大駒場の同級生1組、東大バドミントン部OB1組、阪大東洋史関係4組などと分けてあって、そこから話題に応じて選んでいるのです。ただ、出版マスコミ関係者と中央ユーラシア史以外の東洋史関係者は、毎回、個別に配信先を選んでいきます。本通信が御迷惑な場合は、お知らせ下さい。即刻、一斉メアドから削除いたします。

不具 森安孝夫

=====

森安孝夫様：

拝啓。先日はシンポジウムに同席でき、お元気な森安節を拝聴できて、とても嬉しく存じます。さて実は所用があつて昨日からアメリカにおりますが、今日はメトロポリタン美術館で開催中の「The World of Khubilai Khan」という展覧会をみてきました、下記のホームページを御覧ください：

[http://www.metmuseum.org/special/khubilai-khan.aspx?&HomePageLink=special\\_c2b](http://www.metmuseum.org/special/khubilai-khan.aspx?&HomePageLink=special_c2b)

米国で元朝に関する大展覧会が開催されるのは40年ぶりとのこと。 「元朝下の諸宗教」というコーナーでは、山梨県の寺院に所蔵されるマニ教系仏画も出品されており、とくに最近、日本で発見され注目をあびていると解説されておりました。

とりあえず 中見立夫

~~~~~

2010年11月17日配信分

大阪大学 COE&歴史教育研究会関連 全国高校社会科教員 各位

中央アジア学フォーラム参加者 各位

大阪大学東洋史卒業生 各位

先週の土曜（13日）に早稲田大学・小野講堂で開催された内陸アジア史学会50周年記念公開シンポジウムは、成功裡に終わりました。全会員数は260名程度であり、例年の参加者は50～70名程度なのですが、今回は50周年記念とあつて、150名近くに上りました。高校側や出版・報道関係からも参加していただきましたこと、ここに改めて御礼申し上げます。

私の基調講演につきましては、時間の関係もあつて、当初準備した長い原稿をかなり短縮せざるをえませんでした。そこで、言い残した点も少なくありませんでしたし、当日の議論を踏まえた追加もありますので、ここに本番とはいささか違う原稿のファイルを関係者に配信いたします。特に若手の研究者の卵と、現場の高校教員の方々に、我々の本来の意図を知っていただければ幸いです。

なお、本講演の完全原稿（節略部分を元に戻し、さらに学問的なレファラン
スを附したもの）は来年の『内陸アジア史研究』第26号に掲載されることにな
りました。その締め切りである年末までに、忌憚のない御意見をいただければ、
検討させていただく所存ですので、なにとぞ宜しく御願い申し上げます。

余談ですが、本講演はあと1年数ヶ月後に迫った退職に先駆けて、私の最終
講義のつもりで準備したものだとして卒業生たちに予告しておいたところ、予想外
の諸君が来場してくれました。私は、涙もろく、晴れがましいセレモニー付き
の最終講義はしませんので、その点、御諒解下さい。

不具 2010年11月17日 森安孝夫

~~~~~  
森安孝夫21世紀COE & 阪大歴史教育研究会関係

高校歴史教員 各位

先日、今週土曜13日の午後に早稲田大学・小野講堂で開催される内陸アジア  
史学会50周年記念公開シンポジウム「内陸アジア史研究の課題と展望」のポス  
ターをお送りすると共に、それが公開であって参加費も無料であることをお伝  
えしましたが、その時の案内ポスターに会場の地図が掲載されていませんでし  
た。ここに改めて会場案内図付きのものを送信いたします。

当日は、私が「モンゴル時代までの東部内陸アジア史：実証研究から世界史  
教育の現場へ」、堀川徹教授が「モンゴル時代以降の西部内陸アジア史：実証  
研究の深化と展開の可能性」という基調講演を行います。他の5人のパネル報  
告者にも、できるかぎり高校世界史との関わる発言をしていただくよう御願  
いしてあります。さらに分野外からお招きした総合コメンテーターは、うちの桃  
木至朗教授です。目下のところ、7～8名の高校教員と数名の教科書会社関係  
者の参加希望を伺っておりますが、1人でも多く参加していただければ幸い  
です。

不具 2010年11月9日 森安孝夫

2010年11月 7 日配信分

大阪大学 COE&歴史教育研究会関連

全国高校社会科教員 各位

今年 8 月に 3 日間開催された大阪大学歴史教育研究会大会「阪大史学の挑戦 2」に多くの方々の参加をいただきましたこと、改めて御礼申し上げます。主催者側としては、確かに準備が大変でしたが、それに見合う反響をいただきましたので、大変満足しております。また、共同通信から配信された記事が、あちこちの新聞に掲載されました。

参加された高校の先生方から提出されたレポートは、全て拝読しました（ただ、唯一の義務としたレポートを提出されなかった方がおられたのは残念でした）。そこに様々の質問もあったのですが、とても難しくて答えられないもの、あるいは誤解の上に誤解をされていたので、答えられないものも散見されました。しばし考え込んでいたのですが、以下に、なんとか回答できるものだけをピックアップしてお知らせする次第です。

私は昨年度から、今夏の講演の準備と並行して、今週土曜（13日）の午後に早稲田大学・小野講堂で開催される内陸アジア史学会 50 周年記念公開シンポジウム（参加自由、参加費無料）の基調講演の原稿も準備して参りました。本日、ようやくその発表レジюме案ができあがりしましたので、ここにファイルを添付して配信致します。特に御願いたいのは、今夏の大会以前の月例会の時に小川幸司教諭（長野県）よりいただいたメールと、今夏の大会後に別所浩司教諭（滋賀県）、毛戸祐司教諭（京都府）、佐久間孝之教諭（広島県）よりいただいたレポートより、御意見の一部を引用させていただいておりますので、それが適当かどうか御判断をいただきたい点です。もし、不適當ということであれば、即刻、削除致します。ただし、私のレジюме提出の期限が、明後日の 9 日（火）ですので、できましたら折り返し御返事をいただきましたら幸甚です。

実は私の手元の一斉送信用メアドでは、以上の先生方の個人メアドを判別できません。それ故に、こういう形でお伺いをする次第ですので、なにとぞ御海容のほど、伏して御願申し上げます。

不具 2010 年 11 月 7 日（日） 森安孝夫

=====

安達教諭（群馬県）から：クシャーナ朝もまた遊牧国家・中央ユーラシア型国家に含めてもよいのではないか。

森安回答：私の中央ユーラシア型国家の定義は「長い10世紀」以後を想定しており、それよりはるかに時代を遡るクシャーナ朝は、北魏と同じような範疇で考えています。ただそれをどう定義したらよいかは、まだ迷っています。

松尾教諭（大阪府）から：なぜソグド人・ウイグル人の手紙に時候の挨拶がなく、漢文の手紙にそれがあるのかの説明をもう一度。

森安回答：奢侈品を扱うシルクロード貿易が栄えた地域における手紙普及の起源は、商品を包んだ荷物に付随する送り状に求められるのであり、その送り状が発展して次第に個人的な消息の伝達も行なうようになり、シルクロードを往来した馬とラクダのキャラヴァンは郵便制度の担い手になっていったと考えられる。中央ユーラシア世界では手紙が遠距離移動することを前提とし、気候が違ふのは当たり前という状況、あるいは数週間とか1ヶ月以上という手紙の移動にかかる日数のずれにより、季節を同時に体感することが最初から前提となっていなかったからではなかろうか。それゆえに、季節毎の御機嫌伺いから発達したと思われる漢文の手紙が時候の挨拶を主体とするのに反して、シルクロード地域での手紙にそれがなかったのではないかと考察した。

浅野教諭（大阪府）：10世紀中国の五代を沙陀政権として中央ユーラシア型国家に位置づけているようですが、後唐など明らかに支配者は沙陀族ですが、北方のほとんど（燕雲十六州さえ）契丹に支配された後晋以後、草原に軸足を残した政権と言えるかどうか。支配者一族の出自によつての判断なのか、疑問です。

森安回答：これは私の説明不足です。従来の情報だけでは、おっしゃるような疑問が出るのは当然です。最近の五代史研究の深化によって、五代の諸王朝を支えた軍事力の中心が、沙陀突厥だけでなく、ソグド系突厥などの遊牧系軍事集団であることが分かってきているのです。確かに「草原に足場を残した」という条件は、一見したところ五代諸王朝は満たしていませんが、私のいうところの「農牧接壤地帯」をも草原地帯と理解していただければと思います。

~~~~~

2010年9月11日配信分

大阪大学 COE&歴史教育研究会関連

全国高校社会科教員 各位

今回は高校の先生方への御願いを中心としますので、他の分野の方々には配信しません。まずは、先月の3日間の「阪大史学の挑戦2」の直後にロンドンとベルリンに出張し、中央アジア出土文書調査を終えて、今週無事に帰国したことを御報告いたします。

しかしベルリンはもう気温15度前後の世界であり、帰国した日本とはまったく違います。これはもう、この季節に何度も調査に行ったことのあるモンゴル高原と同じ感覚です。8月前半までは夏、9月に入るとあっという間に秋を越えて冬も一緒にやってくる（つまり初雪や霜が降る）感じでした。今回、ベルリンの有名な博物館島でペルガモン博物館と並ぶ古代史博物館において、8世紀前後のフランク王国の貴人女性の服装復元を見てきましたが、これまた本当に同時期の突厥・ウイグル貴人女性とそっくり、つまりまるで騎馬遊牧民族の服装でした。いまさらながら、大興安嶺東麓から始まる大草原地帯が、モンゴル・ジュンガル・カザフ・ウクライナ・カルパチア草原を越えて中央ヨーロッパにまで繋がっていることを再確認した思いでした。洋服とは騎馬遊牧民族の服装であり、エルメスをはじめとする超一流ブランド物屋さんのルーツは、たいていどこも馬具屋なのです。さらに欧州はどこに行ってもジャガイモがおいしく、逆に言えば、ジャガイモとトウモロコシ・トマトという寒冷地に適応する新大陸由来の作物がなかった時代のヨーロッパの貧しさが、思いやられました。要するに前近代は南欧以外のヨーロッパは、ユーラシア大陸の「僻地」なのです。

さて、先月の「阪大史学の挑戦2」に3日間とも参加された大森圭一郎・共同通信社記者から、次のような記事を書いたという報告がありました。まもなく配信されるそうですが、毎日新聞や地方新聞などでは、ここからピックアップされた記事が掲載されるようです。

●面白く役立つ歴史の授業を 大学と高校の教員が討議

面白くて役立つ歴史の授業を―。専門の教員の間で今、学生の《歴史離れ》が課題になっている。「歴史は暗記」というイメージから敬遠されるという。そんな中、最前線の歴史学を高校教員に解説し、授業に生かす取り組みが注目

されている。8月に大阪大が開いた研究大会には大学や高校の教員ら約200人が集まり、熱心に議論した。

▽世界史と日本史

「内陸アジアの遊牧民は、豊かな農耕社会の中国などを侵略し、財貨や穀物を好き勝手に略奪した悪玉、という偏見が今もある」。森安孝夫（もりやす・たかお）阪大教授（中央ユーラシア史）の講演に、会場を埋めた教員たちが熱心にメモを取った。

森安教授は続いて遊牧民からの見方をこう説明した。遊牧民が暮らす北方の草原は冷害が多く生産力が低いため、人口が安定しない。家畜も不足しがちで補充が必要だった。だから略奪の狙いは財宝や食料ではなく人間と家畜だった。その上で、森安教授は遊牧民の略奪を歴史の中で善悪の価値判断を超えてとらえるべきだと訴えた。

大学や高校の教員らが3日間で20人以上講演。テーマは多彩で、アイヌの北方交易の研究や、鹿児島県・徳之島の歴史を世界史の授業に取り込んだ報告も。キーワードは「世界史と日本史の関連付け」だ。高校の学習指導要領でこの点が重視された影響が大きい。配布した用紙には次々に質問が書き込まれ、講演者が丁寧に回答した。

▽危機感

こうした阪大の取り組みは7年前にさかのぼる。年号を暗記するような学習から脱し、流れを重視する本来の歴史教育を目指そうと、高校教員に声を掛けて研究会を開いてきた。2006年には、必修でも受験に必要な場合に多くの高校で世界史などの授業をしなかった「未履修問題」が発覚、危機感が広がった。

大会事務局長を務めた桃木至朗（ももき・しろう）阪大教授（東南アジア史）は、問題の背景として、◎「歴史は暗記」というイメージで学生が敬遠、◎新しい研究成果が指導要領や教科書に盛り込まれても、教員が忙しく理解が不十分、◎大学も教育を高校に任せきり—といった点を指摘。「歴史は、現在や未来を考える上で不可欠な教科」とした上で「高校の授業の改善だけでなく、大学も入試を改め、歴史全体を見据えた講義をする必要がある」と話す。

今回、参加した高校教員の反応は「最新の研究に触れられ、授業に新しい視点を持ち込める」「高校の教員だけでは得られない新鮮な資料を入手できた」と上々だ。

▽ドラゴンボール

一方で「今の生徒は孫悟空と言えばアニメのドラゴンボールで、西遊記も知らない。基礎知識がなく、興味を引くのは難しい」（北海道の公立高男性教諭）と嘆きも。兵庫県の私立高の男性教諭も「授業に生かすには、こちらにも相当な力量が求められる。歴史の流れは重視したいが、暗記型の大学入試への対応も必要で悩ましい」と本音を打ち明けた。

大会で「近代ヨーロッパの誕生」をテーマに発表した京都産業大の玉木俊明（たまき・としあき）教授（近世経済史）は「古い学説を教える高校教員もいるし、専門分野に特化して視野が狭い大学教員もいる。こういう場で互いに意見を出し合い、課題を克服したい」と話している。

ところで昨日、私のところの博士課程の大学院生から残念な報告がありました。今年も大阪の高校教員採用試験を受験したが、合格しなかったばかりか、成績開示では昨年の40番台より50番台に下がっていたと言うのです。能力も人柄も水準以上なので訝しく思い、どうして君が2年連続で落ちるのだと少し詳しく聞くと、1年間の受験勉強の成果もあり、ペーパーテストの出来は昨年よりはるかに良かったのに、面接点が極端に悪かったためだと言うのです。その面接とは5～6人毎のグループ面接であり、1人数分の持ち時間しかなく、そのグループ全体に対する最初の質問の内容によって大きく左右されるものらしいのです。昨年場合は、学問内容に関わる質問だったので、ペーパーテストの成績は悪かったのも関わらず面接点がよかったのに、今年グループには大阪府公立高校以外の現役の高校教員と非常勤教員が半分以上混じっており、高校の現場でどのように積極的な取り組みを行ってきたかという点に話題が集中し、自分にはアピールの場がなかったと言うのです。ペーパー試験の結果がほとんど反映されていない、あのようなやり方で落とされたのは、自分としてはとても納得がいかないと言うことです。一方、同時に受験したうちの学部4年生は合格しました。私の目から見るまでもなく、二人の学問水準は現時点ではまったく違います。かたや、阪大文学部のなかで優秀な方のグループに入るとはいえしよせん学部生であり、かたや私のもとで修行して、英・仏・ロシア語をこなし、史料言語としてアラビア語・ギリシア語・古代トルコ語までできるばかりでなく、長く院生として発表を担当してきていますから、知識の広さも比べようがありません。専門はハザル王国史と、アラブ世界に入ったトルコ人

マムルークの動向です。人柄は両方とも全く問題ありませんが、高校の地歴科の専門教員を採用するのに、ペーパー試験の結果というか、専門性が重視されないというのは、一体どういうことなのでしょう。公立高校教員採用試験でも、一般企業と同じく学部卒業生が優遇されるのでしょうか。本人はもう30代であり、結婚を控えて研究者の道を諦め、早く就職したくて方向転換したので、すっかりしょげています。来年もう1回だけ挑戦するといっていますが、これでは合格する見込みは低く、私としてもアドバイスのしようがありません。どなたか、こういう人材を生かしていただける方法を御教示いただけないでしょうか。

これは御願いと同時に、こういう採用試験を実施している方への抗議でもあります。これでは、大学院大学を全国に作った意味がまったくありません。未確認情報ですが、秋田県や東京都などでは高校教員は大学院修了者を優先しているやに伺いますので、その違いが際立ちます。ますます広い知識が求められるようになってきている高校の歴史担当教員には、今後は大学院修了者しか採用しないというふうにすべきというのが、私の以前からの考えで、阪大ではそのように指導してきました。

今日は例の9月11日ですが、マニ教史をやった立場からは、兄弟宗教といていいキリスト教+ユダヤ教とイスラム教の対立は、近親憎悪にしか見えません。どっちもどっちですが、それが分からなければ無闇に片方に与するしかなく、歴史を学ぶ重要性は今後ますます増大するはずで。

以上 2010年9月11日 森安孝夫

~~~~~

2010年7月25日配信分

サルスベリ（百日紅）の木にピンクの花が盛りとなると子供の頃の夏休みを思い出しますが、今は我々はまだ学期の最中です。日本中暑いようですが、やはり猛暑の大阪から、3ヶ月ぶりの森安通信をお届けします。今時、いささか無理をして出す理由は後で書きます。

まずは、前回通信の誤記の訂正です。「懐徳堂で学んだ福沢諭吉」と書いてしまいましたが、正しくは「適塾で学んだ福沢諭吉」です。適塾は一般には大

阪大学医学部の源流といわれますが、私は、適塾も懐徳堂も共に大阪大学とくに文学部の源流と思っていますので、混同してしまいました。すみません。

次は、パリ近郊のテニウと愛知県の小牧を往復して生活している友人でチベットの学者の今枝由郎氏が、フレデリック・ルノワールがフランス語で仏教と西洋の出会いを描いた書物を翻訳し、それが今月出版されるはずですが、その「訳者あとがき」からの引用です。

=====

「本書のテーマはその題名どおり、仏教と西洋の出会いの歴史である。西洋人は、ほぼ二千年も前から、旅行者や宣教師たちがもたらした、断片的かつ断続的な報告——必ずしも正確なものではなく、往々にして誤った歪曲されたもの——によって仏教の存在を知っており、好奇心を抱きはしたが、仏教の正しい理解には及ばず、むしろ誤解と偏見を抱き続けたというのが実情である。

十九世紀以後、実証的仏教研究が進み、二十世紀には生きた仏教僧、ラマとの直接の接触が可能になるにつれ、偏見・誤謬は少なくなりつつあり、仏教入信者も増加していることは、本書が明らかにするところである。

(中略)

こうして見ると、本書は、仏教というプリズムを介して「斜視」したキリスト教西洋の精神史であり、正面からの「正視」では見えないものを、はっきりと浮かび上がらせているところがあり、ユニークである。「知性の新大陸の発見と、自らのユダヤ・キリスト教的基盤の崩壊という漠然とした自覚とが、同時に起ったことにより、ヨーロッパは神殺し、滅亡、消滅という、自らがもつとも怖れていた事柄を仏教に投影した」(同前)わけで、仏教はまさに西洋「自らを映す鏡」の役割を果たしてきた。キリスト教、西洋哲学に興味のある人にも、ぜひ本書をお勧めする所以である。

(中略)

交通・通信手段の発達により実現した、そして直面せざるを得ないグローバル化の時代は、人類史上前代未聞であり、未曾有の可能性が展開すると同時に、解決していかなければならない新たな課題が待ち構えている。その最大の課題の一つが、異文化・異宗教・異民族間の対話・調和であることはまちがいないであろう。本書の著者は、異宗教間の対話・理解に関して、仏教の「根

本的に平和的で、合理的、かつプラグマティックな性格」を高く評価し、それによって一神教の「本来的に、排他的・非妥協的な面」が弱まり、調和が保たれることを期待している。訳者もこの意見に賛同するが、この問題の根本的な解決には、キリスト教対仏教、キリスト教対イスラム教、といった既成の宗教形態を出発点とする思考・行動ではなく、いっそう深いレベルでの準備が必要であろう。」

「訳者あとがき」の全文に興味のある人はお知らせ下さい。電子ファイルをお送りします。

=====

次は、8月9～11日に開催される大阪大学歴史教育研究会大会「阪大史学の挑戦2」についてです。すでに外部からの正式申し込みが140名となり、内部参加の院生などと合わせると170名くらいになりそうで、200名しか入らない大阪大学中之島センターの佐治敬三メモリアルホールは一杯になりそうな勢いです。2日目の10日（火）は私のオルガナイズする中央ユーラシア特集ですが、それに向けて発表者一同（教授から院生まで）は、周到的準備を重ねてきており、今週土曜にはその約半分が、中央アジア学フォーラム（海域アジア史研究会と合同）で、プレ発表を行ないます。

私自身はそこで時間を割いてもらうわけにはいきませんので、2つの発表の予行演習は、今年前期の講義の中で行なってきました。1つは、シルクロードの手紙文の代表ともいべき古代ウイグル語手紙文を取り上げるもので、昨年秋の京都大学・東洋史研究会での講演とテーマは同じですが、中味は全く違います。京大では、研究史的背景と書式を中心にしましたが、今度はキャラヴァンによってやりとりされた手紙の実態をお伝えすべく、私の未発表の論著から生の史料を多数引用いたします。ある意味で企業秘密の公開です。先日の講義で予行演習をしましたが、90分でも終わりませんでした。それを今度は35分に圧縮すべく、工夫中です。

私のもう一方の発表は85分を使う長いもので、高校の先生方に遊牧国家とはなにかを分かっていたいただくことを主眼にしています。私の後に続く堤一昭准教授と杉山清彦准教授の発表に繋げるために、匈奴や突厥の国家構造を無理矢理

にでも単純に凶解すべく、これまた奮闘中です。私の言う理科系的歴史学では、史料のないところで無理に推測を積み重ねることを極力避けてきたのですが、それではごく一部の専門家以外には具体的なイメージを持ってもらえず、結果として高校教員に敬遠され、世界史教科書に遊牧国家の記載があっても授業ではしばしば端折ってしまわれがちだったように思われます。それだけはやめていただきたいのです。世界史の授業の中で中央ユーラシア史は必須であることを、高校教員が生徒に簡潔に説明できる材料というか、考え方をお伝えしたいと願いつつ、あれこれレジュメ案を練っています。

しかしながら、話すべき内容が余りに盛りだくさんで、どうやっても時間が足りません。そこで、その一部を本通信で先に発表したいと思う次第です。実は、これがこの忙しい時期に本通信を出す本当の目的です。以下は、主に高校歴史教員及び大学で歴史の研究と教育に携わる方へのメッセージですので、興味のない方は、ここまでで止めていただいて結構です。

=====

さて、その一部とは、高橋徹・山形県教諭の最新論文「「拓跋国家」批判」『山形県立山形南高等学校研究紀要』第49号, 2010, pp. 1-13 の紹介と、それに対する反論です。

そもそも「拓跋国家」とは、隋唐王朝が典型的な漢民族の王朝と見なされてきた「常識」に対する強烈なアンチテーゼとして、私の古くからの友人である杉山正明・京大教授が作り出した術語です。その意図は、中国史を中華王朝史観から脱却させることにありました。長い中国の歴史で、純粋に漢民族の王朝と言えるのはせいぜい漢（前漢・後漢）・宋（北宋・南宋）・明だけであり、それ以外はすべて、もともと北中国内部にいたか新たに北方から南下してきた遊牧騎馬民族（正確には遊牧騎馬軍団を内部に取り込んだ金や清を含む）と、農耕漢民族とが合同して作ったものなのです。そのことは、何も杉山教授の発案ではなく、我々専門家の間では「常識」に近かったのですが、高校世界史ひいてはそれのみを学んで社会人となった一般知識人の「常識」とは大きくかけ離れていました。それ故に杉山氏は敢えて「拓跋国家」という、初めて聞く人がぎょっとする言葉遣いをしたのです。彼の考えはその著書『遊牧民から見た世界史』（日本経済新聞社）などで知ることができますが、杉山正明「拓跋国

家とはなにか」『世界史のしおり』（帝国書院）1998.2, p. 21 を見るのが簡便です。そして、彼の意図はそれなりにうまく行きました。さらに、私も彼に賛同して、拙著『シルクロードと唐帝国』（講談社）の中で援護射撃をしました。古代トルコ語で隋・唐などの中国王朝を「タブガチ」（拓跋＝タクバツの音訛）と呼んでいる事実を、原史料に基づいてよく知っている私にしてみれば、拓跋氏が王族である北魏・東魏・西魏のみならず、それに続いて拓跋部族集団が支配層を形成した北齊・北周・隋・唐王朝をひとくくりにして「拓跋国家」と総称する杉山案はいわば当然だったからです。

これに対して、北朝史の専門家でもある高橋徹教諭は、北魏・東魏・西魏を「拓跋国家」と呼ぶのはいいが、高氏が王族の北齊、宇文氏が王族の北周、楊氏が王族の隋、李氏が王族の唐までも含めて「拓跋国家」というのは妥当性に欠けると主張されたのです。それに対する反論は、私の責任ではなく、杉山正明教授にやっていただくのが筋ですから、先日、彼と会談してその回答をもらってきましたので、以下にそれを紹介します。

=====

#### 高橋徹氏による「拓跋国家」批判への回答（杉山正明教授より）

全ての鮮卑族が統合したわけではなく、鮮卑の一部である拓跋氏を中核とする連合体であるゆえに「拓跋国家」という。北周の王族・宇文氏にも北齊の王族・高氏にも隋の王族・楊氏にも唐の王族・李氏にも、それ以前からの通婚関係を通して、北魏時代からの拓跋王家の血が混じっている。つまりそれによって神聖なる一族に連なっている。しかも北魏王朝から唐王朝までの連続性がある。それゆえ、これら全体を鮮卑国家とか鮮卑王朝とは呼ばずに、拓跋国家ないし拓跋王朝と呼ぶのである。

以上の事実に関する優れた先行研究として、次の3冊を是非とも熟読して欲しい。(1)田余慶『拓跋史探』（三聯書店）（田余慶は北京大学名誉教授、現代中国でもまれに見る碩学、ただし寡作、実は杉山自身に大きな影響を与えた）；(2)劉学鈔（台湾人）『鮮卑史論』；(3)姚薇元『北朝胡姓考』

=====

もちろん、以上の点に加えて、森安と同じく、出身地である北方草原世界の後裔たるトルコ人たちが、隋唐をタブガチと呼んでいる点を重視していることは彼の論著にある通りです。高橋氏は論文の「おわりに」で、石見清裕・早大教授の見方を推奨する形で、「もっとも筆者は、隋の煬氏や唐の李氏の胡族的ないし鮮卑的性格までも否定はしない。「拓跋」だけにとどまらぬ様々な非漢族的要素を総合し、かつ中華王朝の伝統を継受して新たに創造したものとして唐を捉えることが、歴史研究ならびに歴史教育において必要であると考え。」と結んでおられます。実は私と石見教授とは同じ科研費の研究仲間であり、以前から親しく、私は彼の理論にも精通しており、北朝・隋唐がいずれも雑多な民族から構成される国家であることも熟知しています。その上で、私は杉山説に賛成したのです。結論としては、高橋教諭と我々の間に、さほど大きな懸隔はないように思われます。

私は、相変わらず西欧中心主義（ユーロセントリズム）や中華主義の強い高校世界史教科書の中に、アジア史ないし内陸アジア史（中央ユーラシア史）を正當に位置づけてもらうための基本戦略として、次のように考えています。すなわち、いわゆる「四大文明」とか「シルクロード」とか「拓跋国家」とか、すでに人口に膾炙しているか、インパクトが強くて受け入れやすい用語は、たとえ学問的に多少の批判があっても、積極的に活用したい。「シルクロード」も「中央ユーラシア」も「征服王朝」も、提唱者の意図が研究の進歩に追いつかなくなったら、再定義していけばいい。「タラス河畔の戦いで製紙法が西伝した」という説も、実は正確ではないが、大きな流れをとらえているのだから目をつぶればいい。細かいことをあげつらうと、製紙法が中国の発明でそれが唐代に西方に伝播したという事実が、高校教科書から抹消されてしまう。タラス河畔の戦いと製紙法西伝が結びつかないと、教科書にただでさえ少ない内陸アジアの項目が、また1つ消え去ってしまう恐れが大きいのです。ネーミングは大事です。唐は純粹で最高の漢民族国家であるという誤った見方を打破するために、「拓跋国家」という名称を今後もっともっと広めていっていいのではないでしょうか。高橋先生の御理解をいただければ、幸いです。

=====

最後は、神奈川県石橋功教諭による桃木至朗『わかる歴史 面白い歴史 役に立つ歴史』の書評全文です。今夏の大会には残念ながら、阪大史学の「顔」である桃木至朗教授が報告者としては登場しませんので、これをお読みいただければと思います。

=====

この本の著者である桃木至朗教授に初めてお会いしたのは、2003年8月から大阪で行われた第1回全国高等学校歴史教育研究会の席上であった。それ以来さまざまなお世話になってきた。今回、先生が書かれた『わかる歴史 面白い歴史 役に立つ歴史』の書評を書く機会が与えられたことは、私にとって光栄なことと考えている。この本を「東南アジア史を学ぶ本」「世界史の危機を学ぶ本」「今後の行動の指針としての本」という3つの観点から読んで、私が感じ考えさせられたことを書いていきたい。

◎東南アジア史を学ぶ本として：

この本の書評をかくことになったのは、昨年3月に著者と同じような問題意識で『世界史をどう教えるか』（山川出版社）を神奈川県社会科部会の仲間と出版し、そこで私が東南アジアの部分を書いたからである。なぜ東南アジアの部分を書いたのかというと、神奈川社会科部会の世界史の教員のなかで東南アジアを専攻したものは誰もおらず、この部分を書ける人間がいなかったからである。私が引き受けた理由は、数年前に教科書用指導書の東南アジア部分を執筆したことがあったからである。私に執筆依頼がきたのは高校教員で東南アジアの部分を書ける人がいないという理由からであった。私は執筆料で東南アジアに行きたい、アンコールワットに行きたいと思い、無謀にも仕事を引き受け、なんとか書き上げた。

東南アジアは、この本が指摘しているようにほとんどの教員がきちんと学ぶことがなかった場所であり、それゆえ自分がわからないから教えない場所であった。私も例外ではなく、インド文化の延長上（ベトナムは中国文化の延長上）でのみ捉えており、イスラムの広がり、大航海時代のゴールとして、その段階で教える箇所であった。次に、欧米の植民地化で扱い、戦後の民族解放闘争で扱うけれども、全部で2時間程度しか教えず、ヨーロッパ史、中国史の周辺としてふれる部分であった。

こういった東南アジアの取り扱いの背景には、学習指導要領で東南アジアが独自の文明圏として扱われておらず、インド文明の伝播した場所と位置づけられてきたことがある。そして指導要領に依拠した教科書が作られてきたため、その結果、東南アジアはあまり取り上げられてこなかったのである。今回の指導要領の改訂では、東南アジアは独自の文明圏に位置づけられており、そのことは指導要領の一つの大きな変化であった。

さてこうした状況の中、高校教員にとって東南アジア史の簡単なガイドブックはあまりなかった。内容的に詳しく解説している本は多いが、そのどこをけずってよいのか、どこが重要なのかを教えてくれる本がなかった。この本はまさにそこをみたしてくれる著作である。東南アジア史を16の語句で教えるという指摘は、まさに世界史の教員が待ち望んでいたものであり、世界史の他の地域にも専門家からこうしたサジェションがあればと思う。

#### ◎高校世界史の危機を学ぶ本：

この本の第一部に「深刻な歴史離れ」が語られているが、高校現場で世界史教育に携わる者としての危機感を述べたい。現在の私の職場は、普通程度の学力の高校である。私が世界史の授業で最初にやることは、世界の各国の地図の確認である。東アジアは7割程度の生徒が国と地図上の位置を一致させられるが、ヨーロッパは5割程度、東南アジアにいたってはベトナム、タイでようやく一割程度しか国の場所がわかっていない。否、存在もわかっていない。この傾向は上位校でも同じようであり、ここに世界史が受験科目として嫌われ、日本史が好かれる原因がある。

地理的常識が欠如している理由はどこにあるのか？ 私は1977年に世界史教師として神奈川県教壇に立った。赴任した先は横浜の中程度の普通の高校であった。その頃のカリキュラムは1年次に地理を週に3時間学び、2年生で世界史を3時間、倫理を2時間、3年で日本史を3時間、政経を2時間全員必修で学んだ。そのため当時は、社会科の必修は13時間あった。この時代土曜日は半日授業であり、一週間にロングホームルームを除いて32時間、高校での履修総単位数は96単位であった。現在は、現代社会と世界史が必修で各2時間、日本史か地理が必修で2時間で計6時間が社会科（現在は地歴科、公民科に分離）の必修時間である。土曜日が休日となり週の授業時間数が28時間に減少し、卒業単位は74単位以上になっている。要するに社会科の必修は半分以下に減らされたわけである。少なくとも地理を1年で学習してきた以前の生

徒は、中程度の学校でも8割程度の生徒は国の場所がわかっており、地図学習をあえてとりあげなくてもスムーズに世界史の授業をはじめることができた。このごろの生徒が世界の国の位置がわかっていないもう一つの原因は、中学での学習にある。以前は世界の国と首都については主要国はなにしろ憶えさせられたものである。しかし現在は、主要な5つの国しか学ばない。この5つは教科書によって違うが中国、韓国、アメリカ、オーストラリア、ドイツなどが多く、これらの国の位置だけは正確にいえる生徒が多い。中学校の教科書の発想では、調べ学習を中心に5つの国を学習すれば他の国は自分で調べる力がついたので自分で調べるだろうということなのであろう。しかし習った以外の国を調べるのはほんの一部の生徒のみで圧倒的多くの生徒は5つ以外の国を知らずに中学を終わる。高校に入るとこの状態でいきなり必修の世界史を学ぶ場合が多い。中学で学んだ日本史の延長上にある高校日本史のほうが、生徒にとって圧倒的になじみが深いのである。

私の見方からの危機を述べたが、この本には高校を超え、大学、社会での歴史離れを具体的に書かれている。歴史に関わるべき人間は読むことにせまられている内容である。

◎今後の行動の指針としての本：

私が東南アジアをきちんと教えるようになったきっかけは、全国高等学校歴史教育研究会で桃木教授の授業を受けたことである。ここで学問的な部分の説明を受けたが、これだけでは現場で使えないなと思っていた。そこで桃木先生に、私が当時勤務していた神奈川県立外語短大附属高校の受験生向けの夏期講習の講師として東南アジアの授業をしていただいた。この授業は神奈川県の世界史の高校教員が多く参観し、非常に好評を得た。もちろん受けた生徒も同様であった。このことから桃木教授には毎年神奈川で受験生に対しての授業をしていただき、それを世界史の教員が参観するスタイルを神奈川県高等学校社会科部会で続けている。毎年100人ちかくの世界史の教員が桃木先生の授業を受けている。『わかる歴史 面白い歴史 役に立つ歴史』が類似している他の本と決定的に異なっているのは、こうした実践が積み重なっていることにある。研究だけでなく研究の成果を授業に反映していくべきであるとするこの本のすすめを、自らが実践されている。指導要領をはじめとして、世界史に関してのさまざまな本は現実の教室と離れすぎている。その原因は書いている人間

が実践していないからである。世界史の教科書執筆した大学の先生は一度は桃木教授のように高校生に教えてみたらと思う。

またこの本で示された提案を高校の世界史教員は、しっかりと受け取める必要がある。「世界史の教科書を全部教えてみる」「新しい歴史研究をすべき」という当たり前のことである。当たり前だがほとんどなされていないという耳の痛いことを、この本がきちんと指摘していることには頭が下がる。高校と大学とが本当に今後一層協力する必要があることを教えてくれた本であった。

~~~~~

2010年4月22日配信分 (添付ファイルあり)

江戸時代の大坂にあった自由な学問所の懐徳堂は、大阪大学文学部・文学研究科の源流ということになっていますが、たまたま出たばかりの懐徳堂『記念会だより』No. 86 は、片面がこの4月から研究科長になった同僚の片山剛教授の文章で、もう片面が私が依頼されて寄稿したものになっており、あたかも東洋史特集のようになっていて驚きました。片山さんは、以前の森安通信でも紹介した原宗子・流通経済大教授の中国史の見方に言及されつつ、いわゆる四大文明のうち現在にまで連続しているのが中国文明だけであるカラクリを謎解きしています。面白いですよ。拙文の方は、ここにファイルを添付します。対象となるマニ教絵画である「イエス像」の図版は、東大駒場の同級生であった大塚芳正氏が編集実務を担当している豪華美術雑誌『國華』に数年前に掲載されたものです。

新刊の樺山紘一編著『新・現代歴史学の名著』（中公新書2050）は、読みやすく役に立つ本です。阪大関係者では川北稔名誉教授がウォーラーステインを、秋田茂教授がオブライエンの本を解説しています。同書では、三浦徹・お茶の水大教授がサイドの『オリエンタリズム』を解説していますが、このオリエンタリズムとは要するに近代西欧が、遅れた東洋を支配し威圧するための西洋の様式（スタイル）であり、近代的学問のあり方、知のあり方と表裏一体のものであります。適塾で学んだ福沢諭吉が「脱亜入欧」を唱えたのもオリエンタリズムを助長したことになるのですが、私や桃木至朗教授は、今回の新刊『新・現代歴史学の名著』を立派なものですねと思う一方で、ああ、これもまた現代

日本でオリエンタリズムを助長するのだなあと慨嘆するのです。というのは、本書で紹介されている書物の大部分（18人中の15人）がやはり西洋人の書いたものなのです。これではやはり優れた歴史家は欧米にいるのだなあと、日本人一般は信じてしまうわけです。こういうことが続くから、それに妙に反発して、新自由主義史観のような民族史観が台頭してくるのです。どちらも、いい加減にして欲しいと思います。なお、編者でもある樺山教授は、梅棹忠夫の『文明の生態史観』を取り上げています。18人中たった3人だけの日本人の1冊ですが、以前の森安通信で紹介したように、小林道憲『文明の交流史観——日本文明のなかの世界文明——』（ミネルヴァ書房、2006年、3500円）によれば、西欧文明と日本文明だけを特別視する「文明の生態史観」は、一種のユーロセントリズムと喝破されるのです。大学に籍を置く歴史家が責任を持ってこの「文明の生態史観」をきちんと批判しなければ、社会科学である文化人類学・社会学などに対抗する人文科学としての歴史学の復権はないと言われた山形県の高橋徹教諭の御意見に、私も大いに賛同しました。

さて最後になりますが、前回と前々回の通信で予告しておりました今夏の世界史研究大会の概要が決定しました。既にしかるべきルートで案内を開始しておりますが、森安通信ルートでもお知らせする次第です。今にして思えば、経済界の大バブル崩壊後にあった教育界のミニ＝バブルともいうべきCOEでしたが、あれがあったおかげで全国から交通費・宿泊費付きで高校教員を大阪にお招きするという破格の大会が開催できたのです。あれがなければ、今のように高大連携で高校歴史教育を考えるという輪が全国規模に拡大することはなかったでしょう。なお、今夏に参加を希望される方は、事務局に正式申し込みされると同時に、私にも個人的にお知らせ下さい。まさか定員を超えることはないでしょうけれど、万一の場合に備えて、私からプッシュできる体制を作っておきます。

不具 2010年4月22日 森安孝夫

~~~~~

2010年3月20日配信分

本日は今年最後の教授会で、その後、送別会があります。つい今し方言われて気が付いたのですが、これからの2年間は、私が文学研究科の教授陣の最長老となります。慣例に従って、今後の本研究科に関わる公式の席の乾杯の音頭は、私の役目になるそうです。

3月上旬まで様々な公務があり、ようやく春休みで自分の勉強ができると思ったのもつかの間、もう半分が過ぎて、残りは10日ほどとなってしまいました。でも、もう私は還暦を過ぎてから、たくさんの業績を残そうという気持ちが薄れ、人生を謳歌（今、昭和の歌謡曲を復習中）することに決めましたので、それほど焦ってはいません。日本学術振興会に申請中の出版助成が通った時に備えて、拙稿「中央アジア出土古ウイグル手紙文書の書式」の補訂作業を少しだけやりました。また、高校世界史教育と関わる仕事としては、2月以来、帝国書院『タペストリー』の中央ユーラシア関係部分の修訂作業をやりましたが、相変わらずの西欧中心主義・中華主義のみならず奇妙なイスラム中心主義まで目に付きましたので、できるだけ改めるように申し入れました。

もちろん、前回通信でお知らせした今夏8月9日（月）～11日（水）に大阪大学中之島センターで開催する全国高校教員を対象とした研究集会の中央ユーラシア＝セッションの準備は着々と進めています。新指導要領では、これまでより少しは内陸アジア（中央ユーラシアとほぼ同義）の歴史を重視する方向が示されたそうですので、頑張ります。

ちなみに、今月13日に開催された大阪大学歴史教育研究会は、今年5月に予定される日本西洋史学会の大シンポジウムの準備会を兼ねていたのですが、そこで西洋史のある長老教授が、世界史は近代ドイツのランケと、その弟子で東京帝大に来て教えたリースから始まるのだから、もっと勉強して欲しいと注文をつけられたのには啞然としました。同じ研究会で先に、うちの桃木至朗・東洋史教授が報告をして、大学入試が西欧中心主義から脱皮できない元凶は高校教員や予備校側にあるのではなく、むしろ西洋史しか出題できない多くの大学教授の方にあるのだと強調し、さらに大学ではかつてのような「西洋思想史でない史学概論」をやるようにしなければならないと主張されたのが、まったく理解できなかったようです。多くの近代的学問が西欧直輸入だった明治時代ならいざ知らず、今でもこういう人が日本の大学教授にいることに愕然とした次第です。

一方、同じ研究会で、鶴島博和・熊本大学教育学部教授が、現今の高校世界史 B の教科書に使われている約 4000 の用語を、半分の 2000 くらいに縮減すべきだと仰ったのは、1 年以上前から私が言ってきたところ（昨年夏の北海道高等学校世界史研究会第 40 回大会でも発言）と同じでしたから、我が意を得たり之感がありました。どうも高校の歴史教員には暗記が得意な人が多いため、教科書会社が用語を削るとクレームをつけ、最新研究を新しく勉強すると新たな用語を教科書に載せるよう出版社に要求してくるそうで、その繰り返しが膨大な用語集を生み出したようです。今後は、高大連携して、少ない専門用語だけ使って、面白い歴史を語れる工夫をする必要がありますね。

中央ユーラシアに展開した遊牧民族史を要領よく理解するには、モンゴルを例に取るのが最適です。そのガイドラインになるような本が、つい最近出版されました。白石典之編『チンギス・カンの戒め—モンゴル草原と地球環境問題—』（同成社、2010 年 2 月、2300 円）

本書は、文理融合の現地調査の報告でもあり、今後の環境問題にも関わるもので、推奨します。ただ瑕瑾を指摘させていただきますと、拙著『シルクロードと唐帝国』を引用した論文の 186 頁に誤解がありました。その点は既に編者と著者に指摘済みで、正誤表も出されるそうですので、そこだけはカットしてください。それを差し引いても、たいへん興味深く、私にも勉強になる本でした。

以下は、敦煌文書などの研究会のお知らせと、ラピスラズリの話ですので、関係の薄いと思われる方には、ここまでで終了させていただきます。

まず 4 月 19 日（月）～24 日（土）に大阪・十三（じゅうそう）の杏雨書屋（きょうう しょおく；武田薬品がスポンサーである貴重書図書館）で、「敦煌の典籍と古文書」という特別展示会があります。日本で本物の敦煌文書がたくさん見られるチャンスですので、興味のある方にお奨めします。時間は午前 10 時から午後 4 時までですが、最終日のみ午後 5 時までです。なお、最終日には、リーガロイヤルホテル大阪の方で、私の恩師の 1 人である池田温・東大名誉教授らによる講演会もあります。ただし、こちらは電話（06-6300-6815）やメール（[kyou@takeda-sci.or.jp](mailto:kyou@takeda-sci.or.jp)）などによる予約が必要です。阪大からは森安・荒川主宰の西域出土文書ゼミの院生などを引率して参加します。

次回の中央アジア学フォーラムは、既にご案内の通り 3 月 27 日（土）ですが、その翌々日に、かつて大谷探検隊が中央アジアから将来した文書に関する旅順

博物館蔵仏教写本国際研討会があります。ここにその案内ポスターを添付します。

ところで、以前に森安通信で原宗子 (Hara, Motoko) 教授の『環境から解く古代中国』を紹介しましたが、それをお読みになったある高校教員から、次のような質問が届きました。それに対して、原教授から御回答を頂きました。せっかくですので、ここにその質問と回答の主要部分を紹介します。もちろん、それはあくまで未完で非公式の見解ですが、特別に森安通信の読者の範囲への配信を御承諾頂きました。ただし、化学式をはじめ複雑な説明など一切省略しましたので、もし誤解があれば私の責任です。

=====

高校教員よりの質問：

原宗子『環境から解く古代中国』（大修館書店，2009年）の「第六話 合従連衡は、異文化同盟？」に興味を覚える記述がありました。以下に引用します。

桓公が管子に尋ねていった。「私が聞いているところでは、海内の玉や幣に、七策—媒介機能を持つモノが七つ—あるという。聞かせてもらえるか」と。管子がこたえていった。「陰山で採れる白地に赤い縞模様の入った石（サードニックス）が、ひとつです。燕の紫山で採れる白金（銀の意）が一つ。発や朝鮮で採れる綺麗な模様の毛皮が一つ。汝水・漢水の右岸で採れる黄金が一つ。長江の北岸で採れる真珠が一つ。秦の明山のラピスラズリが一つ。禹氏の支配地域の山奥で採れる玉が一つ。これらは産出量の少ないことを以って価値が高くとされ、狭い地域でしか産出しないからこそ広く流通するのです。天下の政策の奥義は、このような軽重の原理に尽きるのです。」（同書 104 頁）

原先生は『管子』のこの記事を毛皮・魚・塩・棗・栗のみならず鉱産資源も燕の所産であったことを示すために紹介されましたが、わたくしの興味は燕に関してではなく、「秦の明山のラピスラズリ」にあります。なぜならこの記事は、かねてから気がかりであった宮崎市定『中国史 上』（岩波全書，1977年，122～123頁）の中の、秦が強盛におもむいた理由として、西方と「交通を開き、

その進歩した文化を摂取する機会に恵まれ、また珍奇なる産物を輸入し、これを中原諸国に転売して利益を得ることも出来た」とする見解を補うものと思われます。

ラピスラズリはアフガニスタンが名産地として知られますから、「秦の明山のラピスラズリ」とは、秦の領域で採掘されていたものではなく、秦が西域から輸入したものではないかと想像し、ラピスラズリが、秦が中原に転売していた「珍奇なる産物」の一例ではないかとも期待しました。しかし、諸橋の『大漢和』や従来の注釈書・参考書（引用文は省略）ではどれひとつ「曾青」をラピスラズリと解釈するものは確認できませんでした。

=====

原宗子 (Hara, Motoko) 教授よりの返信：

お尋ねの曾青の件ですが、これは実は、私にとっても、かなり難問で、拙著を出す段階でも、かなり迷いました。教員の方が引用しておいで諸橋の説（及び遠藤先生の御解釈も）は、ほぼ全面的に、『神農本草経』の記述によるものでしょう。（引用史料など省略）

日本の漢方医学界では、曾青については、平行層状になった孔雀石 (malachite、マラカイト) 説が、現在は有力のようです。化学的には、炭酸水酸化銅になります。問題なのは、色が概ね緑色になることで、曾青という名に相応しいかどうか、問題になりましょう。が、これも以前は、藍銅鉱 (azurite、アズライト) 説が、有力であったようです。これはマウンテンブルーという西洋名もある通り、青い顔料として用いられるという点では、名前に相応しく、ありうる説です。どちらも、『神農本草経』が、銅に変化させられる、としている点でも、可能性はあります。

が、孔雀石も藍銅鉱も、銅を含む鉱物である以上、いくら、『神農本草経』が、古代（おそらく後漢頃）の文献とは言え、薬として用いるのは、かなり危険なものになります。事実、古来の伝えを真に受けて神仙になる修行をして死んだ、という話は、後を絶ちませんから、一定の時期から、孔雀石ないし藍銅鉱が、曾青だと思われたことは事実だろうと考えます。これは、おそらく、中

国各地で、この両者は、鉱石として発掘しうるものであることが知られていたから、誤解が発生したかと思われます。

が、近年、敦煌壁画などについても、その青色彩色の材料がラピスラズリであることは、化学的に確認されています。ラピスラズリは、たとえば、その組成は、主に4種の鉱物、即ち、青金石 (lazurite、ラズライト)、方ソーダ石 (方曹達石、sodalite、ソーダライト)、藍方石 (hauyne、アウイン)、黝方石 (nosean、ノゼアン、ノーゼライト) の混合物でして、こちらは、有毒な要素がありません。『管子』の文意に照らして、貴重品であるはずですが、この点でも、孔雀石や藍銅鉱に比して、無論、遜色はないわけです。

問題なのは、中国で使われるようになった際、その原産地ないし流通経路がどうなのか、否、まず、西域との交流以前に利用されていたのかどうか、という点でした。ただ、中国でも「瑠璃」とか「青金石」とか「青石」とか、呼称が一定せず、発掘報告を読むにも慎重さが必要でした。必ずしも、化学記号が記されていないので……。 (中略)

近年、まず、三星堆から、ビーズが出、また、湖南省里耶遺跡に近い麦茶遺跡から、象嵌した戦国鏡が8面でているようで、原板は紺色です。陝西省宝鶏からも、戦国期の簪に象嵌されたものが出ています。また、洛陽西工区の2197号戦国遺跡からも、9組のラピスラズリを含むビーズの簪が出ています。

さらに、山西博物館に05年に参りました時、ビーズで作った覆面 (西周期とされています) の中に、ラピスラズリがあるのを知りました。図録で黒く見えるヒゲの部分の4つの曲がったビーズがラピスラズリです。実物は紺色でした。

つまり、秦漢期以前から、貴重品としての利用は、戦国でいえば、燕のみならず、三晋でも巴蜀でもあったことになります。原産地がどこかは判りませんが、流通経路として秦だと思われていた可能性は高いと思われます。巴蜀は早くから秦の領域になりました。また、山西 (三晋) の場合、経路は秦からとは限りません。北方の草原が、中央アジアと直結する交通路でもあったようです。

殷代の遺物の中から、孔雀石の龍が出てくるなど、続々、新たな発掘があつて、以前の通説を改める必要が、あちこちに出てきていますので、この問題も、本当は、もう少し、今後の発掘を見守らないと、正確な判断はできないのかもしれないかもしれません。ラピスラズリが、アフガニスタンにしか算出しない、という点も

近年異論が出ていて、チベット自治区の東端でも採れる、という見解もあります。これですと、すぐ巴蜀です。

以上のような点から、敢えて、漢方医学界の通説に異を唱えてみたわけです。利用されていたことは確実なものの中から、より貴重と思われるものを選んだ、ということです。

~~~~~

2010年1月30日配信分

我々大学人にとって一年で最も忙しい時期なのですが、正月に北海道で高校教員対象に二回の講演をし、大阪大学で共通教育（旧教養部）に携わる教員対象のミニ講演や東洋史進学予定者へのガイダンスをしたこと、そして極めつきは友人が三菱商事の社長になったと聞いたのと、今夏に再び阪大主催の世界史研究会をやると決まったために、それらに関して今年最初の森安通信を出す気になりました。他の材料は次回以降にまわします。年々、年賀状を出す枚数を減らしていることもあって、失礼の段は本通信を以てお赦し下さい。

還暦を過ぎると、小学校から大学までの同期生達が次々に定年退職していき、寂しい思いがつのる中、しばらく前には駿台予備校時代に船橋寮で同室だった瀧野欣彌君が官房副長官になり、今度は東大バドミントン部の同期キャプテンの小林健君が三菱商事の社長になったという嬉しいニュースが届きました。私が30代半ばに大学教員となって、ある理不尽な理由から文部省の科研費がもらえず困っていた時、初めて中国へ現地調査に行けたのは三菱財団の人文科学助成金をいただいたからでした。その時、三菱商事本社ビルでの授賞式の前に、小林君を訪ねたのが、つい数年前のような気がします。本人は、これからが大変でしょうが、日本経済のためにも頑張ってください。

ところで私の定年は1年延びたため、あと2年で退職ですが、今夏にはまた、数年前にCOEの一環としてやったような、全国の高校教員を対象としたやや大がかりな研究集会を開くことになりました。日程は8月9日（月）～11日（水）で、初日がグローバル・ヒストリー（秋田茂主宰）、中日が丸一日を使って中央ユーラシア史（森安主宰）、最終日が日本史関係（未定）です。開会挨拶と趣旨説明は、COEの時からずっと大阪大学歴史教育研究会を率いてきた桃木至

朗教授です。今から予告をしますので、興味を持っていただけそうな方には宣伝を御願ひします（公募は4月に入ってからです）。ただし、COEの時にようにお金がありませんから、残念ながら今回は遠方から来ていただいても、交通・宿泊費は個人負担です。こんなことになるなら、三菱財団に申請しておけばよかったと悔やまれますが、時すでに遅しです。

今や世界に冠たる我が国の東洋学と三菱グループとは、古くから御縁があります。東京・駒込にある（財）東洋文庫は、そもそも三菱第三代当主・岩崎久彌の援助で設立されたもので、東洋学分野での日本最大の研究図書館であり、今では世界の5大東洋学研究図書館に数えられています。私の恩師の1人である榎一雄・東大教授が東洋文庫のトップであった時期が長かったのですが、当時、榎先生は財界人に東洋学の重要性を訴えるべく、確か金曜会とかいう三菱グループの社長会でもよく講義をされていました。東洋文庫理事長の職は榎先生の後、チベット学の北村甫教授、その次は私を大阪大学に呼んでくださった斯波義信教授と続きましたが、機構改革で三菱から財務関係の理事が見えるようになったのは、榎時代からでした。そして斯波先生の時の財務理事が、東大バドミントン部の先輩である平松由紀夫・三菱製紙販売社長の親友であると同った時は、本当に驚いたものでした。その後、斯波先生に代わって理事長になられたのは槇原稔という人ですが、この方はもしかしてかつての三菱商事の社長ではないですか？もしそうなら、いつか小林君が理事長になるのかしら。何とも不思議な感じがします。

もう1つ、三菱と東洋学との関わりは静嘉堂文庫です。これはもともと岩崎家の私設文庫だったそうですが、『大漢和辞典』で世界的に有名な諸橋徹次は、岩崎小彌太に招かれて静嘉堂で研究し、あの大辞典を作ったとか。そういえば、諸橋徹次の息子さんかお孫さんである諸橋晋六氏も三菱商事の社長でしたね。

ところで榎先生や斯波先生の時代は、なぜ東洋学が社会にとって必要なのかを訴える必要はあっても、歴史学自体の存在意義までは問われることはなかったと思うのですが、今や歴史学にどんな価値があるのかと尋ねられる時代です。その説明がうまくできなければ「事業仕分け」にさらされるのです。私は、当面のライバルは、文化人類学や社会学をはじめとする社会科学であると想定していますが、経済学や政治学・法学などのいわゆる「実学」に比べても、歴史学の重要性は決して劣るどころか、すべての基礎になるものと信じています。

でも、歴史学の意義としてもっとも分かりやすい説明は、世界中にはびこるありとあらゆる「差別」に正当な歴史的根拠はないことを示し、誰にも差別されず、逆に誰も差別しない自信に満ちた人格を生み出すことです。人間は民度（教育水準）が低いと、弱い者を差別し、強い者にこびへつらうものです。どちらもしないようにするために、古代からの歴史を学ぶ必要があるのです。歴史学は長い時間軸でものを考える態度を養います。

現代の日本人の多くが、欧米人に対しては劣等感を持ち、アジア人に対しては優越感を持っているのは、明治維新以後に欧米から入ってきた西欧中心史観が、「脱亜入欧論」を唱えた福沢諭吉のような明治の啓蒙家たちや、中学・高校の歴史教科書によって喧伝された上に、日清戦争での勝利と台湾領有、日露戦争での勝利と日韓併合、そして第二次世界大戦での敗北という歴史的イベントが重なって生み出された「負の遺産」です。理系全学部や文系でも法学部・経済学部・人間科学部など社会科学系学部の学生の世界史理解は、まずは高校で終わってしまいますから、彼らはほとんど無意識に西欧中心主義に陥っています。なぜなら本業の自然科学や社会科学が近代西欧で生み出されたものであるという大前提に加えて、高校で習った世界史がいまだに明治維新の時に直輸入された西欧中心史観を色濃く残しているからです。

20世紀までの近現代人に示された世界史の見方というのは、近代以降（とりわけ19世紀）に世界の覇者となったユーラシア西部の西欧列強が作り上げたもの（万国史）と、ユーラシア中部のイスラム世界に残されたアラブ・ペルシア語文献によるイスラム中心史観と、ユーラシア東部に残された大量の漢籍による中華史観の3つであって、いずれも自地域中心主義に陥っているのです。もちろん、ユダヤ・キリスト教の聖書の世界史やインド起源の仏教史もありますが、前者は西洋世界とイスラム世界に受け継がれ、後者は漢籍やチベット・モンゴル語の典籍に受け継がれましたので、おおまかに3つとっていいでしょう。そして、以上3つの地域以外の世界中の諸国・諸民族はたいがい、現代世界で最強となった欧米を見習うべく西欧中心史観を取り入れたため、中国とイスラム世界を除いた世界中の人々が持っている世界史の見方は西欧中心主義に染まったのです。我が日本も、明治維新以来、その潮流に乗ったままなのです。いつも言うことですが、人間の歴史は、「勝てば官軍」という言葉に象徴されるように、軍事力中心で動いてきました。現在でさえ国連常任理事国として、

核兵器所有を合法的に許されている軍事大国は、要するに第二次世界大戦の勝利者です。

古代から中世まで、すなわち前近代の人類は長らく暴風・洪水・地震・疫病などの自然災害を神の摂理とみなして恐れてきました。しかし錬金術・魔術が化学・物理学に変わって合理的な自然科学が発達したことにより、自然災害は神の摂理ではなくなり、天動説も地動説に取って代わられました。その点はよかったです。ダーウィンの進化論は、たとえ本人がそう思っていなかったとしても実際には、コーカソイドの西洋人が最も優れていたから最後に勝ち残ったという見方を助長させました。逆に言えば、新大陸のモンゴロイド原住民は鉄砲どころか鉄器さえ知らない遅れた人々だったから簡単に大量虐殺され、ニグロイドのアフリカ黒人は劣っていたから組織的に奴隷にされ、モンゴロイドとコーカソイドの混在するアジアも半分劣っていたから植民地になるところが多かったのであり、それは歴史の必然であるとする見方が蔓延したのです。

日清・日露戦争の勝利を描く司馬遼太郎の『坂の上の雲』は、幕末から明治にかけて私利私欲を捨てて西欧列強に対抗し、日本国家建設に邁進した大小の英雄たちのかっこよさを描いて魅力的です。しかしそこに、勝利者となった日本のかげで、その犠牲になったアジアの近隣諸国に対する配慮は欠けています。繰り返しになりますが、近現代文明を作ったとして欧米人を崇拜し、アジア人を蔑視するという現代日本人に多く見られる悪い傾向は、明治維新の成功と日清・日露戦争勝利による「負の遺産」です。それを打破する世界史教育だけが、誰にも卑屈にならず、逆に誰も差別もしない自信に満ちた日本人を生み出すのです。そうすれば狭量な民族主義に陥る恐れがなくなり、「坂の上の雲」に見られる司馬史観が不十分であることもおのずと分かるはずなのです。余談ですが、NHK でやっている龍馬伝における岩崎彌太郎の描き方はかなりひどいですね。彼のスケールの大きさはおそらく学問に支えられていたのでしょうかから、根性ももっと広がったように推測しますが、・・・

日本の大学における学問の大部分が近代西欧発（特に理系では圧倒的）であり、その上に西欧中心主義的な世界史を高校で習ってきているために、頭から爪先まで西欧中心主義になっています。そういう人間には、西欧人的な優越感があって、アジア人、アフリカ人を馬鹿にする発想にしかありません。そこにあらゆる差別は胚胎するのです。桃木教授の言葉を借りれば、「この歪んだ西洋中心主義が、アジアとのビジネスや外交の現場、押し寄せるアジア人労働者

をさばく行政や司法の現場に、少数かつ低学力の人間しか配置できない現状を生んでいる。これは日本をアジアとの戦争や経済・社会崩壊に追い込む道」なのです。いくら ODA に巨額のお金をつぎ込んでも、それを現地で運用する日本人が、高校卒業後に西欧中心史観を越えた世界史を学んだことのない法学部・経済学部・国際学部出身者だけでは、絶対に駄目なのです。今はまだ日本における西欧中心主義の打破に意味があるのであり、阪大・世界史が中央ユーラシア史と海域アジア史に重点を置いている理由もそこにあるわけです。もちろん、近代のグローバル・ヒストリーも海からだけでは駄目で、いずれは陸からも構想するようになるでしょう。ただしその担い手はロシア史やオスマン史や中央アジア近現代史の専門家たちであるべきで、阪大のスタッフではカバーしきれず、他大学の方にお任せします。

最後にお知らせですが、2月16日(月)午前10時から、私が受け入れた中国からの留学生・白玉冬君の博士論文「8～10世紀における三十姓タタル＝室韋史研究―モンゴル民族勃興前史として―」の公開審査があります。白君はモンゴル族ですので、いわば先祖の歴史です。もともとはトルコ人の土地であった現在のモンゴル高原がいつからモンゴル人の世界になったのか、そして北中国という場の主人公が、決して漢人だけではないという当たり前のことが、より明らかになります。どなたでも出席していただいて結構です。

というわけで、2月15日(月)に学士会館である小林健君のお祝いの会には参加できません。残念ですが、陰ながら盛会をお祈りします。

不具 2010年1月30日 森安孝夫

~~~~~

2009年11月1日配信分 (添付ファイルあり)

10月は、週に10コマ(高校ベースで20コマ)の授業があり、とても森安通信など出せる状況ではありませんでした。ようやく外国人留学生向けの英語の授業が終わり、週9コマの通常ペースに戻り、息がつけました。英語の授業は、秋田茂教授が主宰し、私と桃木至朗教授もそれぞれ3回づつ担当するもので、英会話の苦手な私は四苦八苦でした。それでも、ヨーロッパからの留学生には、昔からヨーロッパが世界の中心ではなかったという事実を、少しは分かっても

らえたと思います。とはいえ、中国に西域文化の強い影響があると説明する時、西域を **West Land** とか **West Region** と訳しますと、それはヨーロッパのことだと誤解する学生も最後までいましたが・・・

さて、今回はまず、山内晋次『日宋貿易と「硫黄の道」』（山川出版社、日本史リブレット、2009年、800円）の紹介です。

本書の骨格部分は、桃木至朗教授主宰の夏の大阪大学歴史教育研究会で、当時はまだうちの助教であった山内晋次君（今は神戸女子大学の准教授）が初めて皆さんに披露し、私も初めて聞いた講演の内容を、より詳しくまとめなおしたものです。あの時の新鮮さがよみがえりましたが、さらなる発展があり、嬉しく拝読しました。西欧諸勢力が世界に雄飛するきっかけになったのは16世紀のいわゆる「火薬革命 **Revolution of Gunpowder**」であることは、拙著『シルクロードと唐帝国』の「世界史の8段階」論でも繰り返している通りですが、西欧がモンゴル帝国時代にアジアから火薬を学び、百年戦争などの戦乱の時代を経てアジア時代より強力な殺人兵器である鉄砲・大砲を作り上げていったと言っても、これまでの歴史家（特に西洋史家）はあまり信じていないようでした。いわば、北京オリンピック開会式の時に印刷術を中国の発明として紹介したら無知な西欧人から反発されたのと似たようなもので、火薬の源流などギリシア・ローマの古典古代からのヨーロッパのどこかにきっとあるはずで、「遅れた」アジアなんぞから習うはずはなかろうという気分です。

しかるに山内晋次准教授の新論によって、火薬の主原料である硫黄のユーラシアにおける動向に目を向けると、強い殺傷力を生み出す兵器のもととしての火薬の源流が、中国でしかありえないことが、ものの見事に浮かび上がってくるのです。宋元時代には中国は「硫黄の道」によってユーラシア中から「硫黄をほぼ独占的に、いわばブラックホールのように吸い寄せていた」（山内氏）のであり、その原因を本人は「中国における火薬の発明とその後の火薬兵器の発達」に求めているのです。

宋元時代にシルクロードは「陸の道」の時代から「海の道」の時代へと完全に移行します。そしてその「海の道」によって中国が全ユーラシアから集めた硫黄によって鉄砲の元を開発したわけですが、後にはそれがヨーロッパに伝わってさらにパワーアップされ、今度はその「海の道」によってアジアが西欧列強の侵略を蒙ることになるのは歴史の皮肉でしょうか。

もう一つ紹介させていただくのは、拙稿「唐代における胡と仏教的世界地理」に対する安達淳・桐生高校教諭による書評論文です。これはかなりの長文ですので、ワードのファイルの本メールに添付します。この書評では、私自身も気付かなかった視点を示されています。これをお読みになって「蕃漢対照東洋地図」に興味を持たれた方がおられましたら、御連絡ください。まだ少し拙稿抜刷が残っています。

明後日の文化の日に京都大学・文学部で開催される東洋史研究会では私がトリの発表を勤めます。古代ウイグル語の手紙に関する研究発表で、シルクロードの実態に深く関わるものです。もしかしたら運命の対決が起きるかも知れませんが、なるべく問題のシルクロード論には言及せず、淡々とした文献学的発表にしようと考えています。

2009年11月1日 森安孝夫

~~~~~

2009年8月16日配信分 (添付ファイルあり)

函館高専の中村和之教授より、添付のポスターを皆様方に回覧するよう依頼されましたので、転送いたします。間宮林蔵の探検旅行からちょうど200年たったということのようです。

なお、私は、長い間、夏休みは決まって中国・モンゴルでの現地調査かヨーロッパでの文献調査が定番だったのですが、還暦を越えた昨年から様子が変わりました。今年も、8月6日～11日に北海道に旅行しただけで、あとはずっと研究室で頑張っています。北海道旅行のメインの目的は、札幌での北海道高校世界史研究会への参加だったのですが、旭川へも回って旭山動物園、富良野の「風のガーデン」などにも行ってきました。帰りの旭川から関西空港への機上からは、下北半島と津軽半島に囲まれた実にきれいな内海と、さらには青森市と弘前市と十和田湖を一望することができるという幸運にも恵まれました。

札幌では初めてお目にかかる北海道の高校の先生方と懇談できただけでなく、神奈川県で長らく世界史教育に携わってこられた旧知の小林克則先生や松木謙一先生とも、現状についてゆっくりお話ができました。さらに旭川西高を訪ね

たところ、教頭先生が世界的に有名な北大インド哲学の藤田宏達・今西順吉両先生の門下で、倫理のみならず社会科全般を教えてこられたそうで、現在の大学入試の問題点について率直な御意見を伺うことができました。

大学の日本史や考古学の教員はとかく高校でも日本史必修をとおっしゃいますが、多くの方々は、中学・高校での歴史教育の現在の実態を知らないようです。それゆえ下手をすると、日本人が先ず日本史をやってどこが悪いと主張する右翼的ポピュリストに加担する危険があることも、今回、いろいろな先生方との会談で初めて認識しました。高校での世界史必修と日本史必修はまったく意味が違うということです。大学教授というのは、研究は優れていても、必ずしも世間の常識に通じているわけではありませんので、高校の先生方は遠慮なく直言していただきたいと思います。

北海道の研究会での冒頭挨拶（約 20 分）では、かなり過激なことも発言しました。その一部は次の通りです。

「今から 5 年前になりますが、『史学雑誌』の「歴史の風」というコラム欄で、私は次のように書きました：『今ほど歴史学が「役に立つ」学問であると実感したことはない。医学がどれだけ進歩しようと、病気をしない人には役立たない。だからといって、医学が不要であると考える人はいないはずである。（中略）人類の歴史は単純ではなく、言語・文化・宗教・風俗は実に多様である。民族とか国家というものはいずれも歴史的所産であって、複雑な背景を持って現在に至っているのである。知識が少ない人ほど物事を単純に考える。たとえば有史以来日本民族は単一民族であったなどというふうにある。東洋史を知らない馬鹿者に日本の政治は任せられない。世界史を知らない馬鹿者に人類の未来は託せない。今こそ非常時である。歴史学が役に立たねばならない。』以上ですが、ここで敢えて馬鹿者という言葉を使ったのは、ちょうど養老某の「バカの壁」という本がはやっていたからであり、他意はありません。しかし、この 5 年前の文章は、衆議院総選挙を目前に控えた今もなお有効なのではないでしょうか。これまでの繁栄の時代は、それほど先見の明が必要とされず、二世議員でも三世議員でもよかったが、これからの不況の時代に日本の舵取りを任せられるのは、本当に賢い人のみ。賢いとは、東大に合格するというのではなく、視野が広くて、時代の最先端で起こっていることを察知する能力があ

るということです。世界史を知らない人間に、それを求めるのは無理というものです。」

もし、全文を御覧になりたい方は、お知らせ下さい。電子ファイルをお送りします。なお、『史学雑誌』の最新号のコラム「歴史の風」に、例の学術会議の油井大三郎教授が高校世界史問題について書いておられますので、そちらも御覧下さい。

不具 森安孝夫

~~~~~  
2009年7月22日配信分

皆既日食の日に、約1ヶ月ぶりの森安通信です。大阪北部では薄曇りのため、肉眼で8割程度の日食が見られました。

さて今回は2冊の本の紹介を中心として、歴史学の意義と効用（歴史は役に立つか）を考えます。今回の衆議院選挙は、官僚政治からの脱却も争点の1つですが、東大出身の官僚候補を輩出する進学校の先生方にも、エリート意識だけ強くて視野の狭い高級官僚を生まない高校教育を真剣に考えていただきたいと思います。2冊とも、高校歴史教員はもとより、歴史に興味をお持ちの方にとって真に刺激的な本です。そのうちの1冊は次のもので、これはたとえ歴史に興味が薄くても、中国に関心のある方や、環境問題に興味のある理科系の方にもお奨めできます。

原宗子『環境から解く古代中国』（あじあブックス 065、大修館書店、2009年7月、1800円）

この筆者は、かつて専門書で「黄土は肥沃である」という高校世界史教科書の常識をぶち破って、一大議論をまき起こした原宗子（はら もとこ）教授です。しかもこれは、彼女が初めて執筆した一般書で、読みやすさも抜群です。原さん、今度は何をおっしゃるのかと興味津々で拝読したところ、面白くて止まりませんでした。農業と儒教を中心とする中華思想ないし中華主義的歴史観が、決して「中国本来の姿」ではないことを、自然環境と農業技術に対する確かな知識の上に立つ漢文文献の読解から、見事に解き明かされているのです。

拙著『シルクロードと唐帝国』では、中国、特に北中国の歴史の主役は決して農耕漢民族だけでなく、遊牧民・牧畜民ももう一方の主役であったことを、中央ユーラシア全体の歴史の流れの中から強調したのですが、原先生はそれとは全く異なる視点から、ほぼ同じことを論証されたのです。現代中国が多種多様な民族から構成されていること、その多くが明代ではなく清代に版図に入った地域、すなわち現在の内モンゴル自治区・新疆ウイグル自治区・チベット自治区などに居住していることは、周知の通りです（詳しくは前回の森安通信で紹介した岡田英弘編『清朝とは何か』、別冊『環』16、藤原書店、2009年5月刊を参照）。そういうところが漢民族の世界とは異なっていることは、誰でもうすうすは知っているでしょう。しかし、私や原先生が強調しているのは、中国本土の北半分さえも元来は純粋農耕漢人の世界ではなかったということなのです。そもそも「純粋漢人」などというものは、「純粋日本人」と同じく、まったくの虚構であり、歴史上存在したことはないのです。そういうものは民族主義者や権力者の「願望」です。虚構が言い過ぎであれば、歴史的所産と言い換えましょう。繰り返しますが、現代に存在するあらゆる民族・言語・文化はすべて混淆してできあがったものであり、純粋なものなど1つもないということです。

必修である高校世界史の未履修問題が発覚して以来、近現代史さえ教えればよい（だから必然的に世界史は西欧ないし欧米中心となる）という風潮が強まったように感じられますが、冗談じゃありません！人類の「知」の地平を縦軸（時間軸）で考察する能力を涵養するのは歴史学だけなのです。そうでなくても人文学の中で歴史学は社会学や文化人類学などに押されて影が薄くなっているのに、歴史学に携わる者が近現代史中心でいいなどと言い出したら、まさに自殺行為です。2年前に出した拙著の隠れた目的は、実は近現代史だけでは現代世界の成り立ちは決して分からないということを示すことだったのです。漢民族とか中華民族という政治的な虚構を暴露することに中心があったにもかかわらず、民族とは歴史的所産であることを示す分かりやすい実例として（新ウイグルは20世紀前半に政治的に採択された名称だから）「現代のウイグル民族は偽ウイグルである」と述べたところ、ネット上では逆にそちらだけが悪意を持って取り上げられました。今の中国政府がほくそ笑むような反応です。近400年の範囲ではウイグルはみなイスラム教徒で同源のように見えますが、1000年前まで遡れば、ウイグルと呼ばれる集団はマニ教徒か仏教徒が中心であり、同

時期に西隣にいたイスラム教徒トルコ人はウイグルとは呼ばれていません。近現代史だけでは駄目なのです。今回の原先生の著書も、中国の近現代史だけ見ただけでは決して現代中国も中国史も（ひいては日本史も）分からないことを、この上なく見事に実証してくれています。今後、高校世界史が生き残るためには、世界史Bの教科書に現れる歴史用語の分量を半減させるべき（ただし丁寧に記述するため分量は半減しません）であるという私の主張は、絶対に、近現代史中心にしろという意見と相容れるものではありません。やはり農業という人類史上最大の発明（伊東俊太郎説の農業革命）と、いわゆる四大文明の成立（伊東俊太郎説の都市革命）から説き起こすべきなのです。

ところで何ヶ月か前に、山形県の高校で世界史を教えておられる高橋徹教諭より、大学に籍を置く歴史家が責任を持って梅棹忠夫の「文明の生態史観」をきちんと批判しなければ、社会科学である文化人類学・社会学などに対抗する人文科学としての歴史学の復権はないという厳しいお叱りを受け、気になっていたのですが、実はもう3年前にいい本が出ていることに、つい最近気付きました。それは次のもので、なんとその第1章がまるごと梅棹批判に当てられています。

小林道憲『文明の交流史観——日本文明のなかの世界文明——』（ミネルヴァ書房、2006年、3500円）

小林氏は、西欧文明と日本文明だけを特別視する文明の生態史観は、一種のユーロセントリズムであると喝破しておられるようです。本書は、ごくおおまかに言えば、日本史も世界史の一環であることと、中央ユーラシア史と東アジア海域～東南アジア～インド洋の海域史が人類史にとっていかに重要であるかを主張しています。そして細分化していく歴史学を立て直すためには、敢えて歴史学の分野を越えて世界史を大枠で把握する総合理論（文明理論）を打ち立てる必要があるとして、人類史をネットワークの発展史と捉え、中心文明とか周辺文明がアプリアリにあるのではなく、全ての文明は他文明の「媒体文明」と見なし、従って諸文明を媒介する遊牧民や交易民や海洋民などが世界史形成に果たした役割を大きく評価しているのです。ある文明圏（例えば中央アジア）が「独立した世界」を形成しているなどという見方とは対極に立つものです。

ところで、もうかなり前のことになりますが、一部の方々との間でいわゆる「四大文明」という用語の成り立ちについてメールで議論したことがあります。

した。一般に日本で世界の古代文明はどこから始まるかと質問しますと多くは四大文明と答えますが、欧米ではそうではなく、ほとんどの人はギリシア・ローマ文明と答えるようです。いわゆる「四大文明」という術語も概念も欧米では誰も知らないということに二年ほど前に初めて気付いて以来、その提唱者は一体誰なのかと追い求めてきましたが、それがなんと東大・東洋史の大先輩に当たる江上波夫先生であったことが、ほぼ確実にになりました。その根拠となる村井淳志・金沢大学教授の小論「『四大文明』は江上波夫氏が発案した造語だった！」（明治図書発行『社会科教育』46巻4号、2009年4月号、pp.116-121）のコピーを、桐生高校の安達淳教諭より送っていただいた結果です。

江上先生は御存知の通り、戦後すぐに「日本民族騎馬民族説」を唱えました。それは今では学問的には完全に否定されていますが、敗戦に打ちひしがれた当時の日本人に大きな夢を与えたという点では、大きな貢献をしました。どうやら江上先生はほぼ同時期、すなわち日本で初めて西洋史と東洋史を統合した高校「世界史」が生まれた時に、それまでのユーロセントリズムを打破する目的で「四大文明」という概念を作り出したようなのです。そしてそれは見事に成功し、今や我々世代であれば誰でもこの「四大文明」を知っています。ところが近年の高校教育界では、いわゆる文化相対主義の台頭により、これら4つを特別視するのはおかしいということで、その術語が教科書からほぼ消えました。しかし、これは私には悪平等の典型のように思われます。

実は今年の五月、阪大の秋田茂・西洋史教授と桃木至朗・東洋史教授らが中心となって第1回アジア世界史学会の創立大会を丸3日の日程で大阪で開催しました。その時、有名な西洋史や近代史の先生方が講演や発表をしたのですが、口ではユーロセントリズムからの脱却を唱えているものの、実際には全くそうではない（我が国のインテリの大部分と同レベル）ということが暴露され、私はいささか愕然としました。そこには東大名誉教授も現役教授も含まれます。欧米人が書く世界史がユーロセントリズムであり続けるのは半ば当然で仕方ありませんが、日本で日本人に教えるべき世界史がそうであってはなりません。私は以前から、世界史はギリシア・ローマに始まるというユーロセントリズム的な歴史観に対抗できる強力なアンチ＝テーゼとして「四大文明」は実に有効であると考えてきました。2年前に出版した拙著『シルクロードと唐帝国』で、私は世界史の大きな流れを次のように説明しました。

## 世界史の八段階

- |                    |            |
|--------------------|------------|
| ①農業革命（第一次農業革命）     | 約一一〇〇〇年前より |
| ②四大文明の登場（第二次農業革命）  | 約 五五〇〇年前より |
| ③鉄器革命（遅れて第三次農業革命）  | 約 四〇〇〇年前より |
| ④遊牧騎馬民族の登場         | 約 三〇〇〇年前より |
| ⑤中央ユーラシア型国家優勢時代    | 約 一〇〇〇年前より |
| ⑥火薬革命と海路によるグローバル化  | 約 五〇〇年前より  |
| ⑦産業革命と鉄道・蒸気船（外燃機関） | 約 二〇〇年前より  |
| ⑧自動車と航空機（内燃機関）     | 約 一〇〇年前より  |

その趣旨は、各地域・時代の細かい実証研究の成果を高校世界史に反映させることはもはや限界であるだけでなく、むしろ罪悪であり（統計によれば受験生の約2割、進学校の一部の生徒しか本気で世界史をやっていない）、これからの世界史教育は人類史はどういう契機や動因で展開してきたのかという大枠を中心に教える方向にシフトすべきだとの思いがあつてのことでした。今やヘーゲル・マルクス・トインビーらいずれもユーロセントリズムによる「単線的」歴史発展史観は打破されていますから、もはや役に立たず、むしろ明治以来の我が国の東洋史家が中心になって構築してきた世界史の見方と、近年の湯浅赳男・伊東俊太郎らといった文明史家の考えを合体させ、さらに⑤に私独自の見解を加えて構築したものです。拙著よりちょうど一年前に出版されていた小林道憲『文明の交流史観』を見逃していたのは残念でした。

いずれにせよ、このたび「四大文明」の提唱者が江上波夫であると判明して、心底から共感した次第です。以上のような次第で、私は今、ユーロセントリズム打開の方策としてもっと称揚すべき歴史概念として「四大文明」の復権をねらっているのです。ただし、これまで「四大文明」はすべて「乾燥地帯の大河流域」に発生したと言われてきましたが、原宗子教授の新著により、黄河文明のみは「乾燥地帯」ではなく、従って大規模灌漑を必要とはしなかったということになりましたので、その点のみ注意が必要です。

8月上旬に札幌で開催される北海道高等学校世界史研究会40周年大会シンポジウムでの冒頭挨拶（約20分）でも、このようなことを話すつもりです。

以上                      2009年7月22日                      森安孝夫

~~~~~  
2009年6月19日配信分

今回は主に高校世界史教育に関わる内容です。後半からはモンゴルが本当の世界史を作ったという学問的な話に関わります。

5月末に丸3日間の日程で、「アジア世界史学会」の創立大会が大阪で開催されました。日本だけでなく、アジア各国における世界史教科書を、今の時代にマッチするものに書き換えること、具体的には西欧中心主義（ユーロセントリズム）や中華主義からの脱却をめざして、研究者と教育者が協力していこうというものです。新型インフルエンザの影響もあって海外からの参加者は40名程度だったそうですが、かなり盛会だったと言えましょう。日本国内の高校の先生方に参加していただいたのが、従来の学会と異なるところでした。ただ理想は高いのですが、現実とのギャップの大きさにしばし暗澹たる気持ちにもなりました。

中国や韓国の世界史教育の一端も紹介されましたが、中国では日本人としては麻原彰晃しか出てこない世界史教科書もあったと聞いて、仰天しました。もちろんそれは極端な例です。日本では高校世界史が必修であるにもかかわらず、多くの高校（とりわけ受験校）でそれが未履修であったという実態が3年前に暴露されましたが、我々団塊の世代が学生だった頃に比べて、覚えるべき歴史用語が倍増（単純には2000語から4000語へ）した現今の教科書を根本的に変えない限り、高校生の世界史離れは決して止まりません。インターネットとメールの普及で若者は国際的になっていくものと思込んでいたら、実際は逆で、ますます内向きになりつつあると多くの高校教員が口を揃えます。このままでは、ただでさえ国際感覚が薄い日本の将来が思いやられます。どうしたらいいのでしょうか。

私の答えは簡単です。教科書を半分に減らせばいいのです。歴史用語は2000語くらいに戻すのです。その際、もう必要なくなった西洋史の部分を大幅に削減し、肥大化した近現代史も他の社会科に譲る方向で削減し、逆にこれまで不十分であった中央ユーラシア史と東南アジア史、アフリカ史を少しだけ追加します。どの程度追加するかというと、大きな人類史の流れが分かるようになれば十分です。

もちろん、このように言うと、必ずや「既得権」を手放したくない西洋史研究者並びに中国史研究者から猛反発をくらうでしょう。また、本気でこれを実現しようとするれば、「指導要領」が大きな障害になるでしょう。しかしながら、近代西欧が世界の目標だった時代は終わったのです。古代ギリシア「市民」社会は奴隷制に基づき、近代西欧「市民」社会は、アフリカから新大陸への膨大な数の黒人奴隷貿易という、人類史上最大の犯罪行為に支えられて成長してきたのです。今の日本の高校生に、ギリシア・ローマ史のこまかい戦争名や人名を覚えさせたり、フランス革命を月日単位で教える意味がどこにあるのですか。アレクサンドロス帝国は正義の帝国であるが、モンゴル帝国は野蛮な遊牧騎馬民族の帝国だという19世紀西欧流の見方は、もうとっくに過去の遺産なのに、いまだに多くの日本人の脳裏に「刷り込」まれているのは、なぜなのでしょう。明治以来の日本はひたすら脱亜入欧（入米）を目指してきましたが、今となつてはそれは功罪相半ばするものです。今回の「アジア世界史学会」でも、講演者の多くがユーロセントリズムからの脱却を唱えるものの、現代世界は西欧近代から始まるのだからやはり西欧史と近代史が最重要で、それ以外のアジア史などは適当にどうぞという「上から目線」をひしひしと感じました。

ところで「本当の世界史は13世紀のモンゴルから始まる」という言い方は、上原専祿氏からあるようですが、この点を広めたのは東大東洋史の大先輩である岡田英弘・東京外大名誉教授と、古くからの友人である杉山正明・京都大学教授でしょう。実は私の教え子で現在は弘前大学の准教授をしている松井太君が、先の「アジア世界史学会」で、モンゴル時代からユーラシア世界は連動していることを実証した重要な発表をしたのですが、西洋史や近代史の専門の方々は誰一人聴講に来ませんでした。そんなものかとただ残念に思っていたところ、数日前に黒田明伸・東大教授から極めて刺激的な英語の論文が送られてきました。その結論は、13世紀後半～14世紀半ばを世界「最初の銀の世紀」と名付けて、日本と新大陸からの銀で世界中が沸き返った16世紀後半～17世紀前半の「第二の銀の世紀」と対置させつつ、元朝において（ヨーロッパ人には考えもつかなかった）紙幣が本当に通用したからこそ大量の中国産の銀がどんどん西方（西アジア～ヨーロッパ）に流れていったのであり、まさしくモンゴル帝国によって人類史上初の世界経済の一体化が実現したというものです。先の松井発表ではモンゴル時代にユーラシア規模で度量衡と貨幣単位が統一されたことが実証されているのですが、その内容と黒田論文の内容とは見事に一致す

るのです。こういう事実を、西欧近代からしか世界史は始まらないとか、歴史学というのは西欧で始まったのだから西洋史が中心となるのは仕方ないのです、などといつまでも平気です。そぶく「西洋かぶれ」に見せてやりたいものです。

以上に関連して、最近目にした刺激的な論著と、黒田論文へのアクセス先を以下に紹介しておきます。

不具 2009年6月19日 森安孝夫

- 『人類はどこへ行くのか』（興亡の世界史，第20巻，講談社，2009年4月）

本書に収載される杉山正明論文はいつもの調子ですが、応地利明「人類にとって海はなんであったか」と松田素二「「アフリカ」から何がみえるか」は絶対にお奨めです。

- 桃木至朗『分かる歴史・おもしろい歴史・役に立つ歴史』（大阪大学出版会，2009年4月）

世界史教育を駄目にした元凶が暗記入試であるということは誰でも指摘しますが、桃木教授は「入試問題に暗記中心の出題しかできない大学教員がたくさんいる」ことを初めて明言して断罪しています。

- 『歴史科学』197号《特集 歴史学と歴史教育のあいだ》桃木至朗，中村武司，後藤敦史，向正樹・・・桃木教授

- 岡田英弘編『清朝とは何か』（別冊『環』16，藤原書店，2009年5月）

巻頭の岡田教授と編集長の対談がお奨めです。

- 黒田論文のハードコピーは7月発行です，下記のようにケンブリッジ大学出版会のホームページには掲載されていて，すでに公刊済みだそうです。

<http://journals.cambridge.org/action/displayIssue?jid=JGH&volumeId=4&issueId=02&id=5810332>

- 松井 太「モンゴル時代の度量衡」『東方學』107, 2004, pp. 166–153（逆頁）。

5月のアジア世界史学会での発表の元になった本論文は東方学会賞に選ばれたものであり，まさに今回の黒田論文の pp. 254, 259, 261 の記述と見事に対応します。

- 森安孝夫論文の配布

5月のアジア世界史学会での私の発表は，これまでまったくの未発表の内容で，日本で発見されたマニ教絵画の世界史的背景と意義に論及したものです。幾人かの高校教員からは，世界史の教材として利用できるとの御意見を伺いました。

発表は英語でしたが、日本語版のフル＝ペーパーを用意していますので、御希望の方はお知らせください。

~~~~~

2009年4月16日配信分の前文

送付先は駒羽会、東大 LIII6 組同級生、藤島同級生が中心

大阪大学の森安孝夫です。最近、国立大学の多くでは耐震補強工事が至上命令になっており、とうとう、阪大・文学部にも順番が回ってきました。元の建物を半年明け渡すことになり、春休み中に大学内部で引っ越し、ようやく落ち着きました。これに伴い、私のパソコン環境が Mac の OS09 から OS10 に大転換したため、先月までの一斉メアドは全て無効となりました。目下、少しずつ、各種の一斉メアドを構築中であります。

ところで私は既に大阪大学・東洋史に4半世紀以上いますが（40歳の時に東大から戻ってこいと誘われましたが断りました）、50歳前後から自分の研究のみならず、歴史教育、とりわけ高校世界史教育にも発言・発信をしています。大阪大学・東洋史全体としてもその方向に動いており、今は日本でもっとも先進的な活動をしているところとなっています。そして、自分が大阪大学21世紀 COE「インターフェイスの人文学」の一環として「世界史とシルクロード」をオルガナイズし、全国の高校の社会科の先生方と密接なコンタクトを持つようになって以来、大学の研究者と高校現場の教員との橋渡しが重要との認識から、折に触れて学問的な情報を発信してきました。それを昨年後半からは「森安通信」として配信しています。時には現地調査や海外旅行の経験をエッセイや雑感として発信することもあります。

今回、「東アジアと日本」というテーマで考えるところがあり、直接にこの内容に御関心がない方もいらっしゃるはずですが、とりあえずテスト＝メールとして送らせていただきます。

まずは、本メールが無事に届いたかどうかのお返事だけいただければ幸いです。さらにもし万一、今後も以下のような森安通信に興味のある方は、できればそのようにお知らせくだされば、ありがたい次第です。逆に、私からのメールは

今後一切不要と思われる方があれば、そのようにお知らせください。即座にメアドを消去します。

昨日は阪大・東洋史の新規進学生歓迎遠足で大阪の朝日新聞本社の見学と造幣局の桜の通り抜けをしてきました。活字で作っていた新聞の時代とのあまりの違いに、今更ながら驚いた次第です。

不具 2009年4月17日 森安孝夫

=====

2009年4月16日配信分の前文

送付先は[高校社会科教員と中央アジア学フォーラム参加者](#)など

春休み中に阪大内部で引っ越し、ようやく落ち着きました。本日は東洋史の新規進学生歓迎遠足で大阪の朝日新聞本社の見学と造幣局の桜の通り抜けをした後、コンパでした。久しぶりに森安通信をお送りしますが、私のパソコン環境がMacのOS9からOS10に大転換したため、先月までの一斉メアドは全て無効となりました。新しい一斉メアドの構築もまだ不十分ですので、このメールがどこまで届くのか心配ですが、明後日に大阪大学歴史教育研究会の月例会が迫ってしまいましたので、とりあえず配信します。今後もこの通信に興味のある方は、できれば受け取ったというお返事だけでもしていただければ幸いです。

(これ以下は共通)

東アジアと日本

森安通信 2009.4.16

2009年3月21日の大阪大学歴史教育研究会(桃木至朗主宰)での発表は、今野日出晴氏による「『東アジア史』で考える」というものでした。発表自体はこれまでの実践と経験を踏まえてこれからの日韓中の歴史教育をどうするかというまことに意義深いものでしたが、最後に「東アジア」という枠組みの捉え方が日本史・中国史・中央ユーラシア史・海域アジア史それぞれの立場によってかなり大きく異なるのではないかという点が浮き彫りになりました。桃木教授もことあるごとに主張していますように(本文の末尾で紹介する最新著でも強調)、日本史は東洋史ないしは世界史の一部であって独立して存在するもので

はないわけで、日本史側からのリアクションとして日本史を東アジア史に位置づけようとの動きは東洋史側にとっても真に歓迎すべきことです。しかし、日本史側の人々が抱く東アジアの範囲はどうやら我々から見るとかなり狭く、それが混乱の原因のひとつになっているのではと懸念する次第です。一部の方々には研究会翌日の3月22日付でメールをお送りしましたが、その後さらに情報を追加しつつ私自身の意見を整理しましたので、ここに「森安通信」として配信する次第です。

つい最近、廣瀬憲雄「古代東アジア地域対外関係の研究動向——『冊封体制』論・『東アジア世界』論と『東夷の小帝国』論を中心に——」（『歴史の理論と教育』129・130合併号，2008，pp. 3-15）が発表され、かつての西嶋定生氏（東大東洋史教授，故人）の冊封体制論・東アジア世界論とその批判が紹介されています。若手の日本史研究者である廣瀬氏自身は、西嶋説があまりに中国中心であったという批判の上に立って、東アジアを複数の国際秩序が併存する多元的な地域として考えたいとしています。それはおおいに結構なのですが、廣瀬論文の補注で拙著『シルクロードと唐帝国』（興亡の世界史，第5巻，講談社）にも言及し、その意義を認めながらも、「（森安の）試みは冊封体制論・東アジア世界論では中国王朝のみであった東アジア地域の「中心」を組み替えるに止まっており、「周辺」である朝鮮・日本などの位置付けを大きく改めるものではない」と批判しています。しかしこの私に対する批判は的外れです。中央ユーラシアからモンゴル時代以前の中国史を、ひいてはユーラシア世界史を見直そうとしている私にとって、ほとんど史料に現れない朝鮮・日本は問題外なだけなのです。だからといって朝鮮史や日本史に意味がないと思っているわけでは決してなく、朝鮮史や日本史の側から自らを東アジア史の中に位置づける試みをしてください、ただしその際に使う東アジアという枠組みにはじゅうぶんな定義をしてください、そうしないと議論がかみ合わなくなりますよ、と申し上げたいのです。私も日本人であり、日本に主眼を置いて世界史を考える際に東アジアという枠組みが有効になることを否定していませんが、例えば私が自ら提唱する中央ユーラシア史観（注：中央ユーラシアが世界史の中心だと主張するのではなく、行きすぎた西欧中心主義と中華主義に警鐘を鳴らすため敢えて提唱したもの）において「東アジア」という術語を使う場合は、それは「ユーラシア東部」と同義語であり、農業中国プラスその周辺の朝鮮・日本・安南とは一致しません。しかしながら、8世紀のユーラシア世界の宗教・文字事情

に注目して、西欧文化圏・東欧文化圏・西アジア文化圏・南アジア文化圏・東アジア文化圏と分ける時の東アジア文化圏は、確かに中国仏教＋儒教・漢字・律令制を共有する農業中国・渤海・朝鮮・日本・安南のことです。これらの地域は私の感覚では東アジアと言うよりむしろ極東アジア、あるいはユーラシア極東部なのです。それゆえ今後は、上記の東アジア文化圏は「極東アジア文化圏」と呼ぶ方が、私自身の中で整合性があるのかもしれない。

何うところでは朝鮮史専門家の李成市氏（早大教授）は、東アジアという枠組みを地理的概念としてではなく、「主体的な歴史認識としての東アジア」として把握するよう主張しているそうですが、それは彼流に朝鮮・韓国を中心として世界史を見るならばと言うことではないでしょうか。それならば、私の考えとも通底します。私は、東アジアという術語は使う人の立場によって異なるを得ない性格のものであり、従って各自がその定義を明確にした上で使えばよいと考えているからです。別の類似例を挙げれば、奴隸とか封建制と同じです。ただし、東アジアを古代・中世・近代・現代と時代が変わる毎に変化すると想定しているのであれば、その見方には従えず、やはり地理的概念としてある程度まとまったものとしてとらえるべきでしょう。

語弊を恐れずに言いますと、中央ユーラシアから世界史を見るという立場で中国史ないしは「東アジア史」を見る時、満洲・朝鮮半島までは視野に入りますが、日本はどうでもいいというか、まったく重要ではないのです。それは日本史自体に意味がないということではなく、少なくともモンゴル帝国時代まで、日本が大陸側にある程度以上のインパクトを与えたことはなかったということです。匈奴や突厥・吐蕃は漢・唐の敵国（匹敵する国、つまり対等の国）でしたが、日本はいつでも「蕃域」のさらに外側の「絶域」、つまり地の果てだったわけですから。

渤海を日本史研究者は、20世紀における満洲帝国の記憶もあって、日本に引きつけて考えがちですが、「渤海から契丹へ——征服王朝の成立——」（『東アジア世界における日本古代史講座 7』学生社、1982）という論文を書いた私に言わせれば、渤海史の主流は中央ユーラシア史と連動するのであって、日本史とはありません。日本と経済的・文化的交流はありましたが、日本が渤海に政治的・社会的影響を与えたわけではなく、むしろ逆でしょう。本論文は私の院生時代に、東大教授であった西嶋先生から東アジアの中の日本を論じるあるシリーズの中で課題を与えられて執筆したもので、恐らく先生は冊封体制論の

中に渤海がうまく位置付けられることを期待されたのですが、私の結論はそうはなりませんでした。因みに、私は西嶋教授の直系の弟子ではなく、榎一雄・護雅夫両教授の弟子で、池田温教授からも学恩を蒙っています。

廣瀬氏からは拙著『シルクロードと唐帝国』には中央ユーラシアから日本をどう見るかという視点が欠けていると批判されましたが、実は当初の拙著には、すぐ後に単行論文「唐代における胡と仏教的世界地理」(『東洋史研究』66-3, 2007, pp. 1-33) として発表することになる一章が含まれていたのです。しかしあまりに本が分厚くなってよくないとの講談社の判断で削除しました。この論文で私は、唐代に空海か円珍のいずれかによって日本に将来された漢文チベット語バイリンガルの「東洋世界地図」を取り上げ、その意義を論じたのですが、その序文に次のように書いておきました。

「ところで、戦後日本の歴史学は「東アジアの中の日本」という観点を共有して豊かな歴史像を描き出してきた。それは当然ながら評価すべき点であるが、日本が重要な舞台となる「東アジア史」を作り上げるという方向で、東方に偏った唐王朝像を強調しすぎたように感じられる。私は『シルクロードと唐帝国』において、このような「東アジア史の唐王朝」という見方に対するアンチテーゼとして、本来あるべき「ユーラシア大陸の唐王朝」像を復元すべきことを提唱し、その描写を試みた。本稿は拙著で論じきれなかったところを補うものである。すなわち、本稿の第二の目的は、唐代の知識人が、アジアを中心とするユーラシア世界の地理をどのように認識していたかを追究して、唐がユーラシア大陸東部の帝国であり、陸のシルクロードを通じた中央ユーラシアとの関係が最重要であったという拙著の主張を補強し、同時に「東アジアの中の日本」という枠を越えて「ユーラシア世界と日本」という方向にまで視野を広げていくための材料を提供することである。」

ところで、大きな注目点は、この「東洋世界地図」には朝鮮も日本も現れていないことです。つまり無視されているのです。そしてこれと同じような事実が、別の出土史料(銀の舍利容器の銘文)からも指摘されるのです。それを論じたのが、赤羽目匡由「都管七国六瓣銀盒銘文の一考察——唐後期の渤海認識にふれて——」(『人文学報』346, 2004, pp. 127-155)です。西安で出土した9世紀制作の銀盒(銀の舍利容器)の上に、唐皇帝が東南アジアの崑崙国から献上さ

れた仏舎利をインドの舎利八分の故事に擬えて周辺の主要な仏教国に下賜するという銘文が刻まれていたのですが、その国々とは高麗国（実際は渤海）・烏菴国（南詔）・土蕃国（チベットの吐蕃）・疏勒国（西域のオアシス国家カシュガル）と不明の白拓◆国であって、そこにも朝鮮・日本は現れないのです。仏教国日本の面目は丸つぶれではありませんか。しかし、それが当時の現実なのです。その一方で、漢文チベット語バイリンガルの「東洋世界地図」は日本に将来されたわけで、その事実の持つ意味を過小評価してはいけません。さらに拙稿でも言及した通り、平安時代には『梵語雑名』などのインド語漢語辞書はもちろん、『波斯国字様』一卷・『突厥語』一卷・『翻胡語』七巻というペルシア語・突厥語（古トルコ語）・ソグド語の辞書ないし文法書さえも輸入されていたのであり、平安時代の日本人がいかに広く、唐の向こう側の西域などにも目を向けていたかが伺われるのです。

以上でもまだ言葉は尽くせませんが、「東アジア」という枠組みを使う時は、それぞれが定義をはっきりさせて使うしか、誤解やかみ合わない議論を防ぐ方法はないのではないのでしょうか。日本史専門の方々に申し上げますが、日韓中のみを東アジアとするのは、いささか視野が狭すぎます。

ところで、私が赤羽目氏に抜刷をいただいた御礼のメールで、「東洋世界地図と同じく、日本が現れていないことには、大きな理由があるように推測されます。つまり、唐側にとっての日本の存在意義の低さを物語るのです」と書いたところ、同氏からも賛同するとの返事を頂きました。そのお返事は引用に値すると思うのですが、残念ながら現時点までに引用の諒承メールが届いておりませんので、割愛します。

東アジアと日本については以上ですが、先週、桃木至朗教授がまたまたセンセーショナルな本を出版しましたので、お知らせします。

桃木至朗『分かる歴史・面白い歴史・役に立つ歴史』大阪大学出版会、2009、2000円。

振り返ってみれば、我々が学生であった時代、すなわち高校生の多くがきちんと世界史の授業を受け、マルクス主義的唯物史観の有効性が未だ信じられており、歴史学の存在意義がほとんど疑われていなかった時代でさえ、よく歴史学は何の役に立つのかと揶揄されました。それに対して我々は、「過去に学んで、現代に生かし、明るい未来を切り開くため」といった紋切り型の模範解答

以外に、個人個人で答えを探す努力をしてきました。ところが今や、数年前(2006年秋)に高校世界史未履修問題が発覚して大騒ぎになったような状況はますます悪化し、大学受験で世界史をやる生徒、言い換えれば高校で世界史Bを取る学生は本当に激減しつつあります。2008年度のセンター入試受験者504,000人のうち世界史受験者は96,000人ですから、2割を切ったのです。このまま世界史離れが進めば、近い将来には歴史学の社会的存在意義が疑われる恐れがますます大きくなってきたのです。具体的には、学生の人気を失った大学における史学科の縮小、人員削減、ないしひどい場合は廃止が現実味を帯びてきたのです。これでは史学科の大学院にまで進み、博士号を取ったとしても、就職先がなくなるわけで、悪循環に陥ってしまいます。今や歴史学界は立ち上がって、その存在意義を社会に訴えかけねばならない最後の局面に来ているのです。

では、どうしたらいいか。それに答えようとしたのが、桃木教授の本なのです。我々、阪大世界史グループは、21世紀に入ってから他大学に先駆けてあれこれと工夫をしてきましたが、その中心にいるのが桃木教授です。現在の我が国の歴史学界が置かれている状況と、今後の戦略が示されていますから、歴史の研究や教育に携わる方々の間で広く読まれ、受験界のみならず大学側にも大きなインパクトを与えることを心から希望します。ただ、叙述にやや難しいところや、言いたいことが多すぎるため論旨がややぼやけたところもあるように感じられました。ベストセラーになるためには、それがネックにならないかと懸念する次第です。杞憂であればよいのですが・・・

以上 2009.4.16 森安孝夫

~~~~~

2009年2月21日配信分

(添付ファイルあり)

約2ヶ月ぶりの森安通信です。一斉送信リストで配信していますので、御迷惑な方はお知らせください。即座にこちらのリストから削除いたします。

昨年末に初めて台湾に行ってきました。故宮博物院での調査と講義が主目的でした。台湾の故宮は北京の故宮と張り合っており、台湾独立派の陳政権時代に中華主義から一歩抜けだし、アジア全域にまで目を広げ、それに相応しいものを収集して南分院を建設する計画がスタートしました。そのために世界中か

ら学者を招請して見識を広めているところだそうです。私は日本伝来のマニ教絵画とその歴史的背景について講義（この内容は今年5月に大阪で開催されるアジア世界史学会創立記念大会で発表予定）をしてきましたが、招待者の特権で特別に貴重な収蔵品の一部を見せてもらいました。

ただし、数日前の新聞報道にありましたように、親中国派の馬政権に替わって、この計画の先行きは怪しいようです。どうして去年の総統選挙で独立派が負けたのか伺ったところ、独立派が引き続いて勝利すると本当に対岸からミサイルが4分で飛んでくるという恐怖感からだと言ってくれました。だれも中国に飲み込まれることは望んでいないのに、ネガティブ＝チョイスで親中国派を選び、なんとか現状維持を願ったそうですが、それが裏目に出たそうです。いずれにせよ、現地調査に行く毎に1～2度は必ず嫌な思いをさせられる中国本土と違い、台湾の人々はどこでも親切で、実に快適な旅でした。我々が学生だった時代には、中国に行くのが進歩的左派で、台湾に行くなど反動的右翼だなどという雰囲気がありました。聞くと見るのとは大違いでした。なお、阪大退職後に台湾の大学で8年間も教鞭を執られている濱島敦俊教授は、相変わらずお元気そのものでした。何より同僚や院生の信頼が厚いのに感動しました。また台北では馴染みのクラブに連れて行っていただき、カラオケを「たしなむ」程度に楽しむことができました。

2月中旬になって、今年度後期の共通教育（かつての一般教養）の1つとして担当したユーラシア史関係講義の成績をつけ終えました。毎回の講義内容に関するミニ＝レポートと、拙著『シルクロードと唐帝国』の書評レポートを持参させての面接が基準です。面接して驚いたのは、東洋史学に進学予定で、きわめてまじめで優秀な学生の1人が、あの田母神論文のどこがいけないか分からないと言ったことです。読書は好きで、拙著も分かるが、田母神氏の主張も納得できるので、どこに自分の判断基準を置いたらいいかが分からないと悩みを打ち明けるのです。その学生には塩野七生と私との違いも分からないようでした。私は（特に理科系的な）歴史論文と歴史小説には、社会的・文化的な優劣はないが、全く性格が違うものだと言いき、それを進学後に学んでくださいと告げました。発表した途端にあつと言う間に反証を挙げて反論されるレベルの文章は、歴史小説・歴史思潮ではあっても学問的歴史論文ではありません。法学部や経済学部の学生ならいざ知らず、文学部の史学専攻希望者で、しかも優秀な子がこのようなものかとショックを受けました。

今の50代以上の人が学生だった頃は、まさか中華人民共和国が日本を侵略することはあり得ないという前提で平和憲法護持が普通で、まともな学生の大多数は「やや左」でした。ところが天安門事件以後、人民解放軍が人民に銃口を向け、中国漢民族政府がチベット自治区や新疆ウイグル自治区で弾圧を行なった実態が喧伝され、香港も台湾も絶対に自己の領土であると主張しつつ大型空母まで持つようになった今、普通の学生は中国の軍事的脅威を肌で感じるようになり、やはり日本も軍隊を持たねばならないと右傾化していくのでしょうかね。

こういう現実を前にして、歴史学の使命は何でしょう。それはやはり感情（個人感情や国民感情）の産物である歴史小説や歴史思潮と、理性の産物である歴史学はまったく違うものであって、徹底的に証拠を集めて真理に近づこうと努力する態度が尊いことを教え込むことではないでしょうか。ただし真理が分かっても軍事的脅威はなくならないわけで、あとは個人の覚悟とセンスの問題でしょう。私は憲兵と公安警察が身の毛のよだつほど嫌いですから、外国の侵略よりも同じ日本人による支配の方を嫌います（もちろん侵略されたくもありませんから国連を使つての全方位外交を支持します）。よく台湾の人は、国民党がやって来た後よりもかつての日本植民地時代の方がよかったと言っている、というふうに日本の右派が宣伝しますが、あれは外国人の日本に支配されたのは仕方ないと諦められたが、解放者と信じた同じ中国人の支配がひどかったのは我慢できないという感情の裏返しだと、今回伺いました。

若者の間に歴史離れが進み、特に東洋史学の衰退が懸念される今、『史学雑誌』の最新号に同僚の桃木至朗教授が、非常に刺激的な文章を書きました。そこで御本人諒解のもと、ここに配信します。この通信にでも、あるいは桃木先生の文章にでも、遠慮ない御意見をいただければ幸いです。

なお、次回の中央アジア学フォーラムの日程ですが、阪大・東洋史のキャンパス内部での引っ越しのため、当初の予定である3月28日（土）を延期せざるをえなくなりました。会場も龍谷大学に移して連休中の5月2日（土）に行います。発表予定者は以下の通りです。この通信を受け取られる方なら、参加は自由です。

森部 豊（関西大学・准教授）：「唐末・五代・宋初の華北東部地域における吐谷渾とソグド系突厥—河北省定州市博物館所蔵の宋代石函の紹介と考察—」

八木春樹（龍谷大学・博士後期課程）：「カローシュティ文書中に見える
称号 Cozbo に関する再考察（仮題）」

宮本亮一（龍谷大学・博士後期課程）：「バクトリア語文書から見た4～7世
紀北部アフガニスタンの様相—N. Sims-Williams 氏の最近の研究紹介と解説—」

白 玉冬（大阪大学・博士後期課程）：「烏六渾氏墓誌銘について（仮題）」

最後になりましたが、先日久しぶりに東大・京大バドミントン部 OB 会に出席
しました。金丸先輩（三菱商事 OB）が全日本大会にさえ出場されるなどお元気
な様子を伺い、私も 70 歳まで頑張ろうかなどと思った次第です。後輩の佐藤君
（塩野義製菓）は大阪実業団の幹部役員として活躍中で、しかも昨年全日本
シニアでは準優勝だったそうです。嬉しい限りです。

以上 2009 年 2 月 21 日 森安孝夫

~~~~~

2009 年 1 月 22 日配信分 (添付ファイルあり)

先週土曜のセンター入試当日に、大阪大学歴史教育研究会が開かれましたが、  
韓国の教育事情に関する堀江嘉明先生（京都府立加悦谷高等学校）と西本光孝  
先生（山口県立岩国商業高校）の現地調査体験を踏まえた御報告は、我が国の  
世界史教育を考える上でもいろいろな示唆に富む興味深いものでした。私には、  
現中国が抱えるウイグル・モンゴル・チベット問題の起源に関わってくる研究  
論文がありますが、実は渤海に関する概説論文も 1 本あるのです。高句麗・渤  
海が朝鮮史に入るのか中国史に入るのかは、歴史的且つ極めて現代的なテーマ  
です。

ところで、先月の「森安通信」で配信した『阪大史学の挑戦』をめぐっての  
桃木至朗教授と安達淳先生（群馬県桐生高校）のやりとりに対するコメント的  
なメールを、吉嶺茂樹先生（札幌北高等学校）からいただいていたのですが、それ  
も是非、皆さんに御紹介したいと思っていたのですが、メールの不具合で本人  
の御諒解が得られず、諦めていましたところ、先週の大阪大学歴史教育研究会  
に出席された吉嶺先生から御諒解を得ました。ここに配信する次第です。

2009年1月22日

森安孝夫

=====

2008年12月16日配信分

(添付ファイルあり)

世界史の教育に関わる問題で時々メールでやりとりをしている群馬県・桐生高校の安達淳先生から、この度、本年6月に桃木至朗（東洋史）・平雅行（日本史）両教授の編集により出版された『阪大史学の挑戦』（和泉書院）の書評が送付されてきました。いつもながら、鋭い指摘や疑問が満載です。私はできる限り、高校の先生方との通信には返事をするようにしていますが、今回はボリュームがありすぎるのと、今週土曜に中央アジア学フォーラムでの発表、さらに来週からの台湾出張で2つの英語での講演を控えており、とても安達先生のお仕事にコメントする余裕がありません。しかし、安達先生はこの土曜の第29回大阪大学歴史教育研究会にわざわざ参加されますので、そこでお会いする方々にとっては彼の紹介にもなりますし、世界史教育に関心のある方全員にとっても有益な内容だと思いますので、その書評をメールで流します（本人の諒承済みです）。なお、もともと私宛の文体で書かれており、「御高著」とは拙著『シルクロードと唐帝国』のことです。さらに今回の書評冒頭では、昨年の拙著に対する安達先生の書評も関わっていますので、ついでながらそれも添付します。他の方々に下駄を預けるような形になって、いささか恐縮なのですが、大いに議論していただければ幸いです。

なお、先のメールでもお知らせしましたように、実は阪大史学という点では、つい先頃に秋田茂（西洋史）・桃木至朗両教授編集の『歴史学のフロンティア』（大阪大学出版会）という続編があり、とりわけその序章（秋田・桃木執筆）は必読です。

不具 森安孝夫

~~~~~

2008年11月1日配信分

(添付ファイルあり)

各位

先日、いろいろな一斉メール=アドレスを整理したのを機会に、「森安通信」なるものを始めました。万一、御不快ないし御不要の場合は、お知らせください。すぐにメール=アドレスから削除いたします。

これまでの数回のうち2回は、ブータンを含むチベット文化圏に関するテレビ番組のお知らせや時事に関する意見でしたが、ここに添付するものは、長年の友人であるチベット学者の武内紹人教授が、岩波書店発行の『図書』2008—10号に執筆したものです。彼は京大出身で現在は神戸市外大の教授で、言語学が専門ですが、敦煌出土文書を扱う関係から歴史学の分野でも活躍しています。今回の文章は、短文ながらも、彼自身によって切り開かれた学問の最先端の知見を含みつつ、現在のチベット問題を考える上で重要な視点を提供するものです。本人から電子情報をいただき、添付ファイルの形で紹介する次第です。

以上 森安孝夫

~~~~~